第28回 全国棚田（千枚田）サミット in 那智勝浦町

棚田を囲む暮らしを共に ～ここにしかない縁（えん）がある 来たれ耕す人～

2023年 11月18日（土）19日（日）

報告書

第28回
全国棚田（千枚田）サミット in 那智勝浦町

目次

開催風景 …… 2

共同宣言 …… 10

大会概要・参加者数 …… 11

大会日程 …… 12

後援団体・来賓紹介 …… 13

開会式典 …… 14

事例発表 …… 20

基調講演 …… 27

第１分科会 …… 48

第２分科会 …… 64

第３分科会 …… 80

特別分科会 …… 103

閉会式典 …… 125

開催風景

開会式典

主催者挨拶 **福井 正明**

全国棚田(千枚田) 連絡協議会 会長
滋賀県高島市長

開催地挨拶 **堀 順一郎**

全国棚田(千枚田) サミット
那智勝浦町実行委員会 会長
和歌山県那智勝浦町長

開催県挨拶 **下 宏**

和歌山県副知事

来賓祝辞 **市川 篤志 様**

内閣府地方創生推進事務局 局長

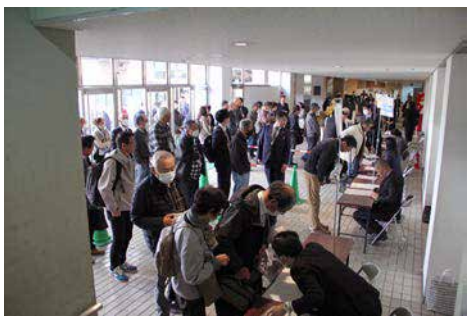
来賓祝辞 **鶴保 庸介 様**

棚田振興議員連盟 会長
参議院議員

来賓祝辞 **浮島 とも子 様**

衆議院議員

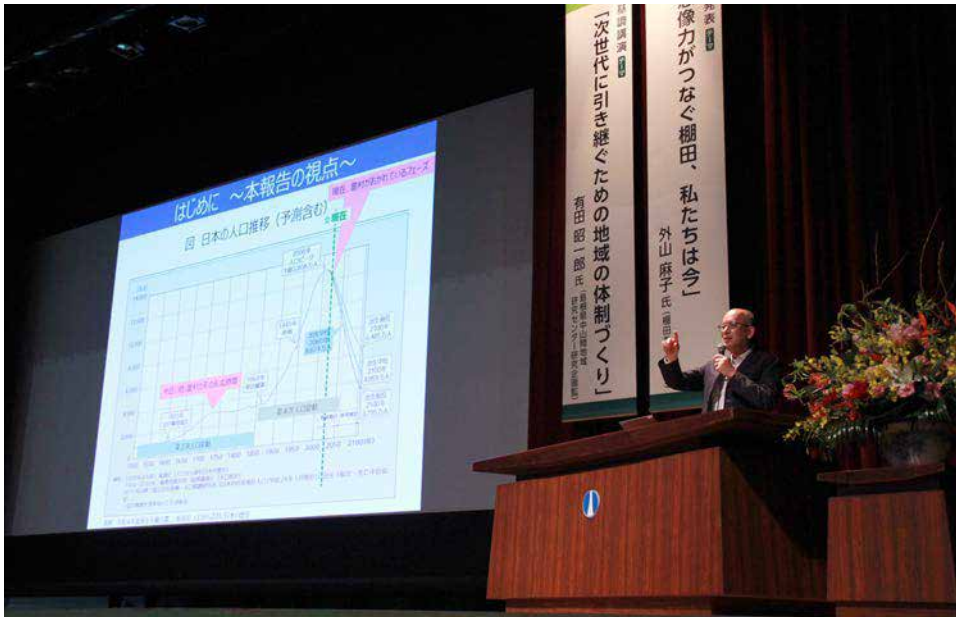
当日の会場の様子



オープニング　わかば保育園

事例発表　テーマ「想像力がつなぐ棚田、私たちは今」外山 麻子 氏 棚田を守ろう会

基調講演　テーマ「次世代に引き継ぐための地域の体制づくり」有田 昭一郎 氏 島根県中山間地域研究センター・研究企画監



開催風景

第1分科会 関係人口の承継 コーディネーター 八島 雄士 氏 和歌山大学観光学部教授

コーディネーター
和歌山大学観光学部教授
八島　雄士 氏

パネリスト／
和歌山大学観光学部教授
大浦　由美 氏

パネリスト／
棚田を守ろう会 農場長
松木　繁明 氏

パネリスト／
らくだ舎 代表
千葉　智史 氏

パネリスト／
紀美野町役場
まちづくり課 職員
中西　円香 氏

パネリスト／
色川クラフトビールプロジェクト
共同代表
藤本　多敬 氏

第 1 分科会会場

第 2 分科会会場

第2分科会 集落空間の継承 コーディネーター 佐久間 康富 氏 和歌山大学システム工学部准教授

コーディネーター
和歌山大学システム工学部
准教授
佐久間　康富 氏

パネリスト／
紀伊半島価値共創基幹
食農総合研究教育センター
センター長・教授
岸上　光克 氏

パネリスト／
色川地域振興推進委員会
会長
新宅　伸一 氏

パネリスト／色川地域振興推進委員会
副会長／浦　勝良 氏
副会長／原　和男 氏
定住促進班長／大久保　通 氏
役　員／大東　利吉 氏
事務局／大西　俊介 氏

第3分科会 災害教訓の承継と継承

コーディネーター 此松 昌彦 氏 和歌山大学教育学部教授

コーディネーター
和歌山大学教育学部教授
此松 昌彦 氏

パネリスト／
棚田を守ろう会 代表
峯 茂喜 氏

パネリスト／
那智勝浦町 色川 田垣内区長
鳥羽山 誠一 氏

パネリスト／
和歌山大学システム工学部教授
中島 敦司 氏

パネリスト／
和歌山県土砂災害啓発センター所長
稲田 健二 氏

第３分科会会場

特別分科会会場

特別分科会 地域振興下の棚田保全

コーディネーター 中島 峰広 氏 早稲田大学名誉教授・棚田ネットワーク名誉代表

コーディネーター
棚田ネットワーク
名誉代表
中島 峰広 氏

パネリスト／
元農林水産省農村振興局
地域振興課長
松本 雅夫 氏

パネリスト／
川代柿ノ木代棚田
川代集落代表
庄司 祐輔 氏

パネリスト／
新潟県十日町市
地域おこし協力隊
星 裕方 氏

開催風景

現地見学会・観光エクスカーション

閉会式典

共同宣言 **浦 勝良** 氏
色川棚田地域振興協議会 会長

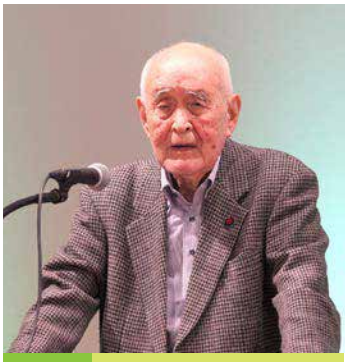
次期開催地挨拶 **小相澤 隆幸** 氏
長野県上田市　副市長

御礼の言葉 **堀 順一郎**
全国棚田(千枚田) サミット那智勝浦町実行委員会 会長
和歌山県那智勝浦町長

第１分科会 **八島 雄士** 氏
和歌山大学観光学部教授

第２分科会 **佐久間 康富** 氏
和歌山大学システム工学部　准教授

第３分科会 **此松 昌彦** 氏
和歌山大学教育学部　教授



特別分科会 **中島 峰広** 氏
早稲田大学名誉教授
棚田ネットワーク名誉代表

大会旗引継

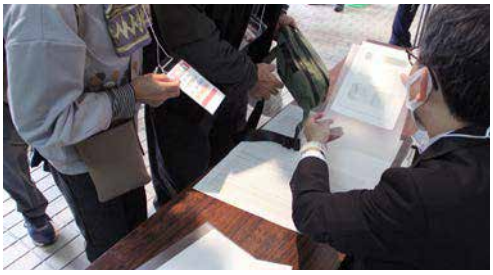
開催風景

スナップ

第28回
全国棚田（千枚田）サミット会場

第28回
全国棚田（千枚田）サミット

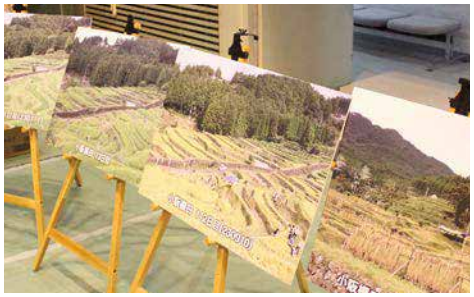
メイン会場
会期
2023年
11月
18日（土）
～
19日（日）
会場
那智勝浦町体育文化会館
第28回
全国棚田（千枚田）サミット



第28回 全国棚田（千枚田）サミット in 那智勝浦町

★県内の棚田・中山間地域等での活動団体の紹介

スナップ



棚田(千枚田)サミット
18日(土)～19日(日)

メイン会場

クローク

クローク

メイン会場

全国棚田(千枚田)サミット
一般
駐車場

第28回 全国棚田(千枚田)サミット in
里山を暮む暮らしを共に ～ここにしかない絆がある 来だれ那智人～

全国棚田(千枚田)サミット
来賓
駐車場

第28回全国棚田（千枚田）サミット　共同宣言

本日、ここ和歌山県那智勝浦町に集まった棚田を守る人、愛する人、棚田と共に暮らす人達と「棚田を囲む暮らしを共に～ここにしかない縁がある　来たれ耕す人～」のテーマのもと多くの課題を共有し、話し合い、理解を深め合う事で課題解決の糸口としたサミットを開催しました。

棚田地域における諸課題の解決・振興について基本理念を定めた「棚田地域振興法」が令和元年に施行され、棚田に光があたり全国各地で棚田再生の取り組みが進んでいます。

令和７年３月末で期限を迎える「棚田地域振興法」の期限延長は棚田地域の農業の継続・発展に向けては必要不可欠です。

今回のサミットでは棚田を守り暮らす「私たちの今」を改めて認識し、関係人口、集落空間、災害教訓の「承継と継承」について議論を深め「次世代に引き継ぐ」ことを確認しました。

ここに、今後の棚田地域の発展を期待し共同で宣言します。

一　私たちは、地域の担い手の高齢化・減少という課題に直面している中で、棚田地域の活性化のため都市住民等との交流を図り、地方への移住・定住の促進や特定の地域において継続的かつ多様な形で関わる関係人口の創出を目指し地域での関係人口構築の環境を整えます。

一　私たちは、棚田地域において人と自然が関わり合う中で形成されてきた文化的景観、また、伝統文化の継承の場であることを踏まえ、今後さらに棚田地域の振興を通じ、集落を維持し、棚田を保全することにより我が国の多様な伝統文化の保存・継承を図ります。

一　私たちは、棚田を守り、棚田を愛し、棚田と共に暮らし棚田を保全することにより、傾斜地の崩壊が防止・抑制され、また畦に囲まれた田は、集中豪雨の際には一時的に貯留されるなど洪水の発生を防止する役割を果たしています。これからも私たちが培った経験を継承し国土の保全、水源涵養機能の維持に努めます。

令和５年（2023年）11月19日

第28回全国棚田（千枚田）サミット参加者一同

開催日程 令和５年11月18日（土）～19日（日）

開 催 地 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

主　　催 全国棚田（千枚田）連絡協議会

主　　賓 第28回全国棚田（千枚田）サミット実行委員会

テ ー マ 棚田を囲む暮らしを共に ～ここにしかない縁がある 来たれ耕す人～

開催趣旨

棚田地域での農作業は効率が悪く、収穫量も少ないと言われており、その中で農業経営を維持することは難しい状態になっています。また高齢化や人口減少により地域を維持することも困難となっています。

全国の棚田保全団体や中山間地農業関係者と先進事例について意見交換を行うことで、棚田地域の魅力を再発見し、また地域の発展に繋げるため、第２８回全国棚田（千枚田）サミットを開催します。

参加者数 445人 一般参加者

【都道府県別参加者数】

東北				関東					
青森	秋田	山形	福島	茨城	栃木	埼玉	千葉	東京	神奈川
2	2	15	1	1	1	3	24	12	2

中部							近畿						
新潟	富山	山梨	岐阜	愛知	長野	静岡	三重	京都	大阪	滋賀	奈良	兵庫	和歌山
10	1	3	21	9	49	17	23	2	3	21	3	5	83

中国			四国				九州						
岡山	島根	山口	徳島	愛媛	高知	香川	福岡	大分	長崎	宮崎	熊本	佐賀	鹿児島
3	2	4	6	10	3	8	20	4	33	3	7	27	2

来賓等関係者	78人
わかば保育園児	17人
団体数	151団体

大会日程

令和5年11月18日(土)

時　間	内　容	場　所
9:30～	オープニングアトラクション	那智勝浦町 体育文化会館
10:00～	開会式典	
10:30～	事例発表「想像力がつなぐ棚田、私たちは今」	
11:00～	基調講演「次世代に引き継ぐための地域の体制づくり」	
14:30～	第1分科会「関係人口の承継」	ホテル浦島　3階 鳳凰
	第2分科会「集落空間の継承」	ホテル浦島　4階 亀宝
	第3分科会「災害教訓の承継と継承」	サンライズ勝浦
	特別分科会「地域振興下の棚田保全」	ホテルなぎさや
18:00～	交流会	ホテル浦島 6階 万清
	「懐かしい未来・色川コース」	口色川会館

令和5年11月19日 (日)

時　間	内　容	場　所
8:30～	現地見学会「色川の棚田群」 観光エクスカーション 世界遺産コース 吉野熊野国立公園・ジオサイト弁天島コース 生まぐろの水揚げ日本一勝浦漁港周辺コース	町内各所
11:30～	閉会式典	那智勝浦町 体育文化会館

後援団体

内閣府、総務省、農林水産省、国土交通省、環境省、文化庁、全国知事会、全国都道府県議会議長会、全国市長会、全国市議会議長会、全国町村会、全国町村議会議長会、一般社団法人全国農業会議所、一般社団法人全国農業協同組合中央会、一般社団法人全国消費者団体連絡会、日本生活協同組合連合会、全国土地改良事業団体連合会、一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構、全国農業新聞、公益社団法人全国農業共済協会、株式会社日本農業新聞、和歌山県、和歌山県市長会、和歌山県町村会、和歌山県市議会議長会、和歌山県町村議会議長会、和歌山県農業協同組合中央会、全国農業協同組合連合会和歌山県本部、一般社団法人和歌山県農業会議、和歌山県農業共済組合、和歌山県土地改良事業団体連合会、株式会社朝日新聞社、株式会社読売新聞社、株式会社毎日新聞社、株式会社紀南新聞社、株式会社熊野新聞社、一般社団法人共同通信社、株式会社時事通信社、日本放送協会(NHK)、テレビ和歌山

来賓紹介

- 衆議院議員　二階 俊博 様(代理　秘書　二階 伸康 様)
- 参議院議員　世耕 弘成 様(代理　秘書　江川 大二郎 様)
- 棚田振興議員連盟OB　西 博義 様
- 農林水産省 農村振興局 農村政策部 地域振興課 課長　山本 恵太 様
- 農林水産省近畿農政局 局長　安東 隆 様
- 和歌山県議会議員 議長　濱口 太史 様
- 和歌山県議会議員 農林水産委員会 委員長　玉木 久登 様
- 和歌山県議会議員 農林水産委員会 副委員長　谷 洋一 様
- 和歌山県議会議員 議員　佐藤 武治 様
- 和歌山県 農林水産部　部長　山本 佳之 様
- 紀美野町 町長　小川 裕康 様
- 有田川町 町長　中山 正隆 様
- 那智勝浦町議会 議長　曽根 和仁 様
- 那智勝浦町議会 副議長　城本 和男 様
- 那智勝浦町議会 議員　引地 稔治 様
- 那智勝浦町議会 議員　吾妻 正崇 様
- 那智勝浦町議会 議員　藤社 和美 様
- 那智勝浦町議会 議員　西 太吉 様
- 那智勝浦町議会 議員　加藤 康高 様
- 那智勝浦町議会 議員　東 信介 様
- 那智勝浦町議会 議員　松本 和彦 様
- 那智勝浦町議会 議員　津本 芳光 様
- 那智勝浦町議会 議員　勝山 則子 様

【主催者挨拶】

全国棚田（千枚田）連絡協議会 会長

滋賀県高島市長　**福井　正明**

改めましておはようございます。ただいま御紹介いただきました、全国棚田連絡協議会の会長の職をお預かりしております、滋賀県の高島市長の福井でございます。僭越ではございますけれども、開会に当たりまして一言御挨拶を申し上げます。まずは第２８回の全国棚田（千枚田）サミットが本当に風光明媚なここ那智勝浦町で開催をされますことを心からお喜びを申し上げますとともに、第２８回を数えます、この大会にも全国各地から５００名を超える関係者、あるいは参加者の皆さんをお迎えして盛大に開催をされますことを本当に心からお喜びを申し上げる次第でもございます。また、あわせまして、今日は公務と本当に何かとお忙しい中にもかかわらず、国会議員の先生方をはじめ、多くの御来賓の方にもご臨席を賜り、誠にありがとうございます。

さて、昨年第２７回のこのサミットは私ども滋賀県の高島市で開催をさせていただきました。毎年、全国各地でこのサミットの開催をさせていただいております。日本の原風景とも言われます、農業農村の文化を次の世代にしっかりと引き継いでいくため、とりわけ本当に我が国の農業の基盤となります、あるいは歴史となります、さらには文化となります、棚田の保存保全をしっかりと次の世代につないでいくのが私どもの責務であろうというふうにも考えているところでもあります。そのような中で、今回の今日明日開催をいただきます、第２８回のサミットは「棚田を囲む暮らしを共に」というテーマで開催をいただきます。

私が申し上げるまでもなく、我が国の農業農政は高齢化の問題、あるいは後継者の課題、さらには米の消費の問題、あるいは農業の多面的な特性と言われております地域のコミュニティ、あるいは防災さまざまな多面的な特性があるわけでもあります。そうしたものをしっかりと認識をしなければならない立場ではあると自分でも考えているところであります。私ども地元におきましても中山間とりわけ棚田地域の荒廃状況は目に余る状況でもあります。

おそらく全国には棚田地域と指定された箇所が７００カ所を超えると言われてございます。どうしても次の世代にしっかりと保全をし、そして農業農村の文化の多面的な特性もあわせながら、次の世代にしっかりとバトンタッチをしていかなければならないと考えているところでもあります。

そういう思いをお持ちいただきながら、今日明日のさまざまなイベントなり講演なり、あるいは意見交換に参加をいただき、そしてこの棚田を保全するあるいは我が国農業をしっかりと支えるというお気持ちを一人でも多くの国民の皆様にお伝えをいただければ、幸いに存じます。結びになりましたけれども、本日と明日の２日間、このサミットを開催していただくに当たりまして地元和歌山県那智勝浦町の堀町長様はじめ実行委員会各位に心から敬意と感謝を申し上げ、そしてこの第２８回のサミットが成功裏に開催されますことを御祈念申し上げ、そして本日ご参会の皆様の御健勝ならびに御活躍を心からご祈念を申し上げまして、開会に当たりましてのご挨拶とさせていただきます。本日もご成功誠におめでとうございます。

【開催地挨拶】

全国棚田（千枚田）サミット那智勝浦町実行委員会 会長
和歌山県那智勝浦町長　**堀　順一郎**

皆様、おはようございます。本サミットの実行委員会長、那智勝浦町長、堀でございます。本日は全国各地から本当にたくさんの方のご参加のもと開催されますことを心から御礼を申し上げます。心から歓迎を申し上げたいと思います。本当に皆様方お会いする方々は遠いな遠かったなっておっしゃいました。皆様方もそう実感されているかもしれません。そんな中で、本当に多くの関係者も含めて５００名を超える皆様方にご参加をいただいたことをうれしく思います。本当にありがとうございます。改めて御礼を申し上げたいと思います。本日のサミットにつきましては、全国棚田連絡協議会の皆様方の御協力のもと開催する運びとなりました。そしてまた本日は公私とも大変御多忙の中、棚田振興議員連盟の会長、鶴保庸介参議院議員、それと衆議院議員の浮島とも子先生、そして内閣府地方創生推進事務局長の市川篤志様始め、来賓各位の皆様方には御出席を賜りまして、本当にありがとうございます。

今回で２８回目を迎えるサミットでございますが、少しプログラムについて御説明をさせていただきたいと思います。先ほどのオープニングでは那智勝浦町のわかば保育園の皆さん方が鼓笛隊で皆さん方をお迎えいたしました。この後は事例発表ということで棚田を守ろう会、これを那智勝浦町の色川地区の棚田を守ろう会の外山麻子さんから事例発表していただきます。外山さんはＩターンの方で、環境負荷のない生活をしたいということで、今まさに実践をされていて、以前もお宅にお邪魔したのですが、ガス台がございません。薪で料理をします、風呂は薪ストーブでもちろん五右衛門風呂ですから、電気代は全く要らないという生活をされています。自然負荷のない生活をしたいということで、この色川に住まれている方です。後ほど、いろいろな貴重なお話を聞けるんじゃないかなというふうに思います。その後基調講演としまして、島根県の中山間地域研究センターの有田昭一郎様から、次世代に引き継ぐための地域の体制づくりということで御講演をいただきます。その後４つの分科会に分かれて皆さん方がいろいろ御論議をいただくというスケジュールでございます。

夕方には、交流会で町内とあるいは色川の方に分かれて交流会をされて明日は、現地見学会色川の棚田、それと那智勝浦町の観光をぜひ見ていただきたいということで、世界遺産コース、あるいはジオサイト、それと生まぐろの市場も見学できるようなコースも設定をしてございます。明日の色川の棚田群でございますが、色川というのは大きく言いますと、５つの谷で構成されていまして、５つの集落を全部合わせて色川地区と言います。明日皆様が行っていただくのは小阪地区というところで、こちらではＩターンの方も含めてこの棚田を守るさまざまなイベントを行っています。もちろん、地元の方もそうですが、Ｉターンの方も含めて地域の外から、いろんなことを呼び込んでいろんなイベントもしているというようなことでございます。ちなみにこの色川地区は、現在３０７人の人口がございまして、３０７人の内、Ｉターンの方々が１８２名。ですから３分の２近いＩターンの方々が今までのところを担っていただいているというようなところでございます。本日のメインテーマが「棚田を囲む暮らしを共に～ここにしかない縁がある　来たれ耕す人～」これはまさにＩターンの方々がこういった目的で来られて、ぜひこれからも続けていきたい。そういうメッセージ性を持ったテーマにしてございます。そういった意味で、この色川はＩターンの先進地と言われているんですけども、そういったこともお知りおきいただきまして、今は本当に耕作放棄地や、高齢化で大変な中で皆様方と意見交換をしながら、次に進んで地域振興、あるいは各地域の棚田の活性化のために皆さん方と情報を共有できたらというふうに思います。

那智勝浦町は世界遺産と生まぐろと温泉の町でございます。もちろん、今日は分科会でいろいろ論議されますけれども、那智勝浦町の観光名所や、温泉に入っていただいて、マグロもご賞味をいただいたらというふうに思います。今日、実は皆さん方を歓迎する意味もございまして、８時に花火を打ち上げる予定にしてます。８時から１５分程度ですけれども、強風注意報が出なければ、予定どおり歓迎の花火が打ち上がると思いますので、そういったことも含めてお楽しみいただきたいと思います。結びに本日開催に当たりまして、関係の皆様方に御尽力を賜りまして、改めてこの場をお借りして御礼を申し上げるとともに、ご参会の皆様方がこのサミットが本当に素晴らしいサミットとなることを御祈念申し上げまして、そしてご参会の皆さん方のご健勝ご多幸をご祈念申し上げまして、歓迎と御礼の挨拶をさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

【開催県挨拶】

和歌山県副知事　下　宏

皆様、おはようございます御紹介にあずかりました。和歌山県副知事の下でございます。

第28回全国棚田サミットin那智勝浦町に全国から多くの皆さんにお越しをいただきました。心から歓迎を申し上げます。そして、県内からも多くの皆さんにご参加をいただいて、こうして多くの皆さんのご参加のもと、棚田サミットが盛大に開催されますことを、まずはお喜び御礼を申し上げたいと思います。

全国棚田連絡協議会の福井会長さんを始め、棚田地域の振興活動に御尽力をいただいております多くの皆さん、また御来賓の鶴保棚田振興議員連盟会長をはじめ、国会議員や関係者の皆さん、平素より棚田振興の取り組みに力強いご支援を賜っておりますことに深く感謝を申し上げますとともに、皆さんのご来県を心から歓迎を申し上げたいと思います。

和歌山県は比較的温暖な気候と山間部の傾斜地が非常に多いといった地形条件から長い年月をかけて切り開いた農地に稲作とともにミカンやウメなどの果樹栽培を展開しているところも多くございます。これらは地域の人々が苦労して耕作を続けてきた、歴史の積み重ねにより、形づくられたものではあります。その棚田や段々畑は農業生産の場としてのみならず、洪水、土砂崩れなどの山地災害や生物多様性の確保など、多面的な役割を発揮して、私たちの生活を支え、さらには歴史文化の継承や都市農村交流の場としても注目をされています。

また、棚田や段々畑は、自然や四季折々の美しい景観が人々に潤いと安らぎを与えていることから、農林水産省によるつなぐ棚田遺産に県内では８つの棚田と棚田群が認定をされています。平成２６年からは、和歌山県として独自に棚田への意識向上を図り、保全活動を通じて中山間地域の活性化にもつなげるために和歌山の棚田段々畑としてこれまで１４地区を認定しています。中でも、色川の棚田群を有する那智勝浦町色川地域では、４０年以上も前から移住者の受け入れを推進しており、地域産業地域農業の担い手を確保するために地元住民と移住してこられた方々が力を合わせて保全活動を行いながら、棚田による米づくりを通じて都市住民との交流も図っています。

今回のサミットを契機に、全国の志を同じくする方々との絆を深められることで、棚田地域への関心が高まり、保全活動が一層活発化することを期待しています。結びになりますが、全国棚田連絡協議会の益々の御発展と、本日お集まりの皆さんの御健康御活躍を御祈念申し上げご挨拶といたします。本日は皆様ありがとうございます。

【来賓祝辞】

棚田振興議員連盟 会長
参議院議員

鶴保 庸介 様

皆さん、こんにちは、ようこそこの那智勝浦町へお越しをいただきました。議連の会長としてのご挨拶というよりも、地元選出でもありますから、まずもってこの勝浦にこれだけのたくさんの方がお越しをいただいたことに感謝を申し上げたいと思います。

１０数年前に今日お越しの西博義衆議院議員から議連の事務局長をやらないかというお誘いをいただきまして、そこからその務めを果たし得てるのかなと、自分で問いながらこの棚田の活動に勤しんできた自負はございます。ただ、お気づきのとおり、その棚田振興議員連盟は、棚田のみを守るというよりも、棚田を中心とした原風景、日本の本当に心のふるさとをいかにして守っていくかということを、私たちは主眼にしてさまざまな活動をしてまいりました。私の知っている限りの中でも、中山間地における生産手段のさまざまな優遇措置や補助金を棚田地域にも、広く適用できるようなそんな仕組みをつくったり、それこそ観光や、その他の機能に着目をした仕組みを私たちから提案をし、そして現実にそれを使っていただいていると思いますが、そんなことをさせていただきながら、今日に至っております。

そうした営みの全てが、地域を守るためであると考えると、今日、お集まりの皆さんこそがそれぞれの地域のメインプレーヤーとなっていただく、そんなことを私たちは政治の世界で希望をしておりますし、志向しておるということを、ぜひおわかりをいただきたいと思います。だからこそ、ともに一緒になって働いていく、その同志のような気持ちで、サミットを通じて得た知見を、ぜひ政治の現場にも声を届けていただきたいというふうに思います。そう言いながら、大体議連のメンバーと、それぞれの地域サミットがある地域へ大挙して押し寄せてきておるのが通常ですが、今日に限ってはほとんど来ておりません。多分、堀町長に申し上げたように遠いからと言いますけれど、この遠いからというのは、先に申し上げておきますが、あと数年すれば高速道路はつながりますから、ぜひまたもう一回来てください。尚且つそんな何回もその議連のメンバーとやりとりをさせていただきながら、私たちも進めていきますから、ぜひ皆さんにもその冒頭申し上げたとおり、これからも御協力をいただきたいと思います。

最後にほんの少しだけ地元の宣伝をさせていただきます。この那智勝浦は町長からおっしゃられたとおり、周辺にもたくさんの見どころがございます。お隣は鯨の町、そして来年の春には今日、花火を上げると言っていましたけれど、もう一つ大きな花火、ロケットを民間の運搬ロケットの初飛行が来年の春ぐらいにはという話を聞いておりますから、この那智勝浦をぜひともまた訪れていただいて、この紀南の地にまた訪れていただいて、そして我々の地域の棚田にもこういうものをつくっていこうじゃないか、ともに仲間の一人として大いに語り、今年度のコネクションをつくっていただきたいというふうに思います。心から歓迎と、そして私たちの決意を申し上げて一言御挨拶に代えたいと思います。本日は本当にありがとうございました。

【来賓祝辞】

衆議院議員　**浮島　とも子**様

皆様、おはようございます。ただいま御紹介いただきました。公明党衆議院議員の浮島とも子でございます。本日は第２８回の全国棚田サミットの開催、本当におめでとうございます。また、先ほどからお話がありましたけれども、那智勝浦遠いなと思われた方もたくさんいらっしゃると思いますけれども、どうかこの那智勝浦の素晴らしい自然、そして美味しいお食事、そしてこの棚田を見て、そして皆さん最後は温泉に入ってゆっくりしていただきたいとお願いをさせていただきたいと思います。

また、今日の開催にあたり、ご尽力いただきました皆様方に心から感謝を申し上げさせていただきたいと思います。本当にありがとうございます。昨日うれしいことに８時４５分のニュースを見ていましたら、今日開催される、このサミットの報道がなされておりました。そこでもありましたけれども、移住をしてきて、こういうことをされているという取り組みの発表もなされていましたけれども、本当にうれしい誇らしい気持ちでいっぱいになりました。今日、改めてこのサミットの開催の概要を読ませていただいたときに、この棚田地域での農作農作業は効率が悪く、収穫量も少なくて、そしてまた少子高齢化により減少でとても大変だ。そこをしっかりと意見交換をしていこう。これが開催の概要の趣旨であるということを書かれておりましたけれども、本当に今、高齢化、そして人口減少でたくさん大変なことが起きていると思います。

でも、私も棚田に行かせていただき、風景を見せていただくと、何か心がほっとする。そして何か心に一つ宝がふえたような気持ちになります。この素晴らしい棚田、この全国にある棚田をどうか皆様のお力でこの２日間、さまざまな意見交換をしていただき、またこのチラシを見せていただくと先ほど町長からもありましたけど、明日、色川に入っていただくとありますけれども、つなぐ棚田遺産の認定もなされているところでもございます。

こうして、日本全国のすばらしい棚田をこの２日間でさまざまな皆様と意見交換をして深くいろんなことを学んでいただき、そしてそれぞれの棚田の活用保全、そして継承、これにつなげていただきたいと心からお願いをさせていただきたいと思います。私も鶴保さんとともに西先生がつくっていただいた、この議連しっかりと皆様とともにさまざまな話し合いをしながら、皆様の現場のお声をいただきながら、これからも全力で皆様とともに前進をしていくということをお約束させていただきたいと思います。どうか皆様、この２日間、那智勝浦で楽しんでください。本日は本当におめでとうございます。

【来賓祝辞】

内閣府
地方創生推進事務局 局長　**市川　篤志**様

おはようございます。ただいま御紹介いただきました、内閣府で地方創生推進事務局長をしております、市川篤志でございます。どうぞよろしくお願いいたします。はじめに本サミットの準備にご尽力いただきました、皆様方に深く敬意を表するとともに、全国棚田連絡協議会の皆様をはじめ、多くの方々がこうしてご出席され、本サミットが盛大に開催されますことを心よりお喜び申し上げます。

おかげさまで令和元年８月の棚田地域振興法の成立以来、法律に基づく指定棚田地域、それから認定棚田地域振興活動計画、着実に増えてございます。法律成立４年目。それぞれ４７道府県７２３地域の指定。それから３９道府県１９１計画の認定を確認させていただいております。

棚田地域の振興に御尽力されていらっしゃる皆様方に対して、この場を借りまして、改めて御礼を申し上げたいと思います。棚田はいうまでもございません。農産物の供給という役割を超えて、国土の保全、あるいは水源の涵養生物の多様性確保、それから景観良好な景観の形成、伝統文化の継承などなど、さまざまな機能を有してございます。後世にしっかりと引き継いでいかなければならないものでございます。内閣府におきましても、農林水産省をはじめ、関係省庁としっかりと手を携えながら棚田地域コンシェルジュ制度によります相談体制を確保したり、地方創生の関係の交付金、今現在はデジタル田園都市国家構想交付金というふうに名前が変わってございますが、これらによって棚田米のブランド化や、耕作放棄地の解消など、地域の創意あるさまざまな取り組みを御支援申し上げてきたところであります。

また、中山間地域におけます、人口減少高齢化が叫ばれて久しいわけでありますけれども、ここ那智勝浦町では先ほどお話がございましたとおり、５０年以上前から移住者を取り込んだまちづくりに御尽力されているものと承知しております。我々内閣府の地方創生事務局におきましても平成２８年以来、移住支援事業をやっておりますし、あるいは関係人口の創出や拡大に取り組んできてございます。今回、この機会にここ那智勝浦町のすぐれた取り組みを御参加の皆様とともに学ばせていただければと存じております。

さて、昨年12月になりますけれども、新しい地方創生の総合戦略5カ年計画といたしまして、デジタル田園都市国家構想総合戦略というものが閣議決定されております。その総合戦略におきましてはこの中山間地域棚田地域を含みます、中山間地域についてできるだけデジタルの力も借りながら、中山間地域の営農と生活。それから地域資源の磨き上げ、生活環境の向上を集中的に支援していこうということで、これも農林水産省を中心に、デジ活中山間地域というモデル地域ビジョンを掲げ、引き続き御支援申し上げていきたいと存じております。

棚田地域、それから中山間地域の活性化を進めるために、国と地方が双方で知恵を絞り、出し合いながらそれぞれの地域課題に沿った取り組みを後押ししてまいりたいと考えてございます。結びに当たりまして本サミットの御成功とご参加の皆様方の御健勝をご祈念申し上げまして、私のお祝いの御挨拶とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。

事例発表テーマ

「想像力がつなぐ棚田、私たちは今」

外山　麻子 氏 棚田を守ろう会

【事例発表】

これが私達の活動している棚田を守ろう会の棚田のドローンで撮った写真です。早速、中身に入りましょうか。守ろう会のメンバーは、この田んぼで黙って働くのはすごく得意なんですけど、人前でしゃべるのは向かないという人が慎み深い人が多かったもので、人前で図々しく喋れる私が発表者に選ばれまして、しばらくお付き合いください。今日の話の流れは、まず私たちの住んでいる色川っていう地域の紹介、それから守ろう会の概略を紹介した後で、私ばっかり喋ってもっていうことで色川内外で、この活動に関わる人の声を録音していますので、それを聞いていただきまして、この活動の意義と課題についてまとめ、最後に全部のまとめみたいな流れで参ります。まず色川はこんなところです。お手元に1枚もののA4、1枚の資料がありますんで、もし良かったら配付された資料の中にこんなのあるんでチラチラとご覧いただいたらと思うんですけど、この地図にちょうどかぶせて航空写真をしました。左上の数字がふってある10地区からなる地域です。那智勝浦町の山間部の10地区で色川地域と言われています。こんな感じで山の中です。何もないところとよく言われるんですけども、ちょっと年表を見ていただきますと646年がどこまで本当かはともかく、1000年以上前から人が暮らし続けてきた山の中の地区です。それで今、那智勝浦町の一部ですけど、70年ぐらい前、昭和の大合併までは色川村という10地区で一つのまとまった村でした。その色川村もさかのぼれば明治からの話で、江戸時代までの長い長い歴史の間はこの10個のそれぞれの地区が独立した一つの村だったというとこです。なので地区ごとにそれぞれお寺があって神社があって集会所があって、それぞれの独自の行事ごと、文化、雰囲気があるっていうようなところなんですけど、私達が守ろう会として関わらせてもらっているのは小阪っていうこの地区になります。農業には不向きな土地柄っていう風に書かせてもらっているんですけど、もうお手元の資料にも書いた通りですけども、まず非常に細かい圃場に傾斜地なんで分かれています。日本有数の多雨地帯で、今日も勝浦の町は晴れていましたけど、朝私は雨の降る中を車で降りてきたんですけど、車で30分ぐらい入ったとこなんですけど、もうそのぐらい気候が違って雨がとても多いところなので、もう土壌がどんどん流れていってしまって、とても土が痩せております。それに山間だとそもそも日照不足になりやすいところ、天気も悪いので、益々作物は育ちにくいっていうようなところで、何て言うんですかね、農業地域ではない、もう自給的に何とか耕しつつも、木材とか炭とかあと銅が取れたとこなので、特にこの小阪地区っていうところは銅鉱山がありましたし、あと唯一農作物でお茶には適した場所なので、そういうものを育てて皆さん暮らしてこられたというところでございます。これをお手元の資料にもある人口についての資料ですけど、一時期は人口3000人ぐらいいた頃もあるんですけども、今はもう大体10分の1,300人ぐらいになっていて、ただ特徴的なのがもう40年以上前から移住者を受け入れ続けてきたので、まあ今は6割ぐらいが移住者になっています。こっちの人口ピラミッドをご覧いただくと何て言うか、若い世代は大体こう色付いているのが移住者ですので、若い世代は大体移住者になってしまっているっていう状況がお分かりいただけるかと思います。こんな話をすると、どうしてこんなに移住者が増えたのって絶対聞かれるんですけど、それはもう全然話に時間が掛かってしょうがないので、よろしければこの本を読んでくださいってちょっと営業みたいなんですけど、お手元の資料にタイトルがありますので、お探しいただけると思いますという訳でですね。幾ら移住者が入ってきているって言っても、基本的には人口はどんどん減っているとこなので、数字はちょっと資料によってまちまちなんですけど、一つの資料によればですけど、色川にはかつて100ヘクタール棚田があったところ、今は10数ヘクタールまで減っている。減った分はどうなっているかって言ったら、こんな感じでぼうぼうに荒れていたり、あるいは段を作って、せっかく段になっている棚田に木が植わっているっていうそういうような状態になっています。今辛うじて耕作されているところも基本的には先ほどから言ったとおり自給的な耕作が中心でして、販売農家もいるにはいるんです。うちも販売農家ですし、移住者でちょっとだけいるんですけど、基本的には自給的な耕作を細々としているところでございますというところで活動している我々棚田を守ろう会なんですけど、年表もございます、こんな感じの場所なんですけど、ホームページもございますので、結構あちこちに情報はあると思うんですけど、実は2004年に小阪の耕作放棄地4反約80枚を復田というこの経緯については、あまり今まで語られてないので、この機会に特別ちょっとこの辺の話を少しさせてもらおうかなと思います。地域で棚田保全への機運が盛り上がって生まれた取り組みではないっていうところについてちょっと話します。そもそも発案者が一人いるんですけど、その発案者は移住者で、それも小阪区じゃない色川の別の区の移住者が仕掛け人がいるんですけど、凄く目立つ地域、目立つ棚田ですけども、当時30年来、耕作放棄されてて、こんな感じでこう藪みたいに木まで生えてきていた。昔、綺麗だったんだろうなとどうにかならんかなっていうところで当時、ちょうど緑の雇用事業って言って、国の緊急雇用対策っていうことで失業者を林業で雇用して担い手に育てるっていうのが始まったところで、この我が町那智勝浦町の森林組合にも都会から若い人が結構入ってきていたタイミングだったんで、それ農業でもできへんのっていうことで、県にだいぶ協力をお願いして単年度の緑の雇用農業版という事業として2004年に予算がついたと。それで6人をフルタイムで雇用できることになって、6人の作業員が草刈りする、石積みを直す、水路を直す、耕運するっていうような手順を経て、田んぼに使えるように戻したと2004年ですね。ところが戻した後、どうするのかっていうことが何かちゃんと考えられてなかったらしくて、その時点では誰か田んぼをすぐ使えるようになったら使いたい人が出てくるんちゃうぐらいの見込みだったらしいんですけど、そんな人は現れずかといって、せっかく田んぼにすぐ使えるようにしても使わないでいったら、またすぐ藪に戻ってしまうので、これどうするのってなった時にもう苦肉の策で田植えとか稲刈りとか人がたくさん必要なとこだけはよそからの人に来てもらって助けてもらおうってコメ作り体験イベントというのを苦肉の策で始めたのが2005年と。この時のイベント企画とか、イベント時以外の管理作業っていうのはその発案した移住者やその周辺のあくまでも移住者中心で、実はこの一連の経緯の中で、地元小阪の人は勿論、地権者と区長さんの許可は得ていたらしいんですけど、結構他の小阪区民の人は知らないうちに始まっていたぐらいの話だったみたいで、またその始めの2004年の復田で雇用されていた、6人も別に棚田の保全がしたくてじゃなくて、仕事としてあくまでもやってくれていたので、結局その後のイベントとかに関わっ

てくれる人は1名だけだったらしいんですけど、何とかかんとか1年やってく中で、地元小阪以外の色川の移住者の中にも協力してくれる人が何人か入ってやっていけそうかなっていうところで、2006年に正式に会として、移住者や地元小阪の人達で会が発足しました。何が言いたかったかって初めから凄い機運が盛り上がっていたというよりかは結構成り行きで始まったっていうことが言いたかったところです。でもその細かい話は、もうちょっと色々な場所に情報があるので、さらっと行こうと思います。守ろう会は今、正会員というその場所、地域、色川に住んで作業をする人と、主にお金で支援してくださっている、賛助会員オーナーたちによって構成されております。それで年に4回のイベント田植え、草取り、稲刈り、あと締めの餅つきっていう年に4回のイベントを行なっております。栽培方法についての特徴なんですけど、まず農薬化学肥料を使っていないっていうところと田植えは手植えなんですけど、更にこの水苗代っていって写真がございますけど、植える為の苗を苗代で育ててそれ1本1本苗取りといって、その先に苗を揃えるところに、実は苗田植え以上に時間が掛かるっていうような凄い昔ながらの作り方をしております。手刈り天日干しっていうようなことでやっています。それからここの会場には、実際に棚田を耕作されている人もいっぱいいらっしゃると思うんで、もうよく御存じとは思うんですけど、水をためるのがとても大変です、そもそもこれで畔そぎ、畔塗りっていうのは、この辺はその水を貯めることに関わる作業ですけど、これ御存じない方もいるんじゃないかと思って、ちょっと動画を、ほんの数秒間なんですけど、こんなぐるっと畔をこうぐるぐると一鍬一鍬畔掃除したり、畦塗りの方はこんな感じで一鍬一鍬はこういう風なことをやっていかないと水が溜まらないという、こういうことをみんなでやっています。それからこの合間に耕運機で土を起こしたり、練ったりっていうことするんですけど、この狭いし高さもある棚田でこういう機械を回したり、次から次に移していくっていうのは、熟練が必要な上にも危険が伴うとこういうことをやっていて、つまりは、まず田植えイベントにこぎ着けるまでに事前の準備がめちゃめちゃ大変ていう、その部分はちょっと人に任せにくいから、結構外部の人に助けてもらうってわけにもいかなくてっていう、その辺の大変さの話とあとちょっと思うのが散々こう多面的機能っていう棚田の話される中で、大雨降った時に一時的に水をためるダムみたいな機能っていうことを凄い期待されていると思うんですけど、一つには色川の棚田に関して言うと、もうこんな感じで水を溜めるようにするのが物凄く大変な上に、稲作っている4か月間溜まり続けるように維持するのもメチャメチャ大変でしょっちゅう水抜けるんですよ。何が言いたいかっていうと、実際、そのダムの機能を果たしているのかなって田んぼ作ってない間はもう水を排水するようになっているから、あんまりダムという機能はちょっと実は疑問だなとい。いろいろ話してきたんですけど、私ばっかりしゃべってもしょうがないので、どんな人たちがどんな思いでこの会に関わっているかっていうの動画で用意してくれているので、ここから10分ほど皆さんの声を聞いていただくということで、まずは正会員の実際に作業をしている人達の声をお聞きください。

【棚田を守ろう会　峯　茂喜】

私は棚田のある小阪地区に住んでいます。ちょうど棚田のある場所は、地区の人にとっては一番良く目につく場所に棚田があります。その棚田が昔ながらに耕作されていて、季節によって姿を変えていく。色変えていく。そういうのを見ることは非常に楽しいし、気分がいいし、何か元気付けられるような面があります。上に県道があるんですけども、多くの集落の人にとっても多分それはおんなじだと思うんです。だから棚田を維持していることのメリットというのはいろいろあるんですけども、私が感じている一番に思うメリットというか、効用は地域全体の人にとって喜ばれているんじゃないかなという思いがあります。

【棚田を守ろう会　松木　繁明】

70歳になった時に、なかなか自分個人でやる田んぼも、もうちょっと減らしていくかなと思うんでなかなか棚田もってなるとね。これからいつまでもよう続けていくかなということが一番思うことなんやけどね。まあ、今までね。10何年もやってきてほったらかしっていうのもあれやから。後ね、やってくれる人は引き続き、やっぱり地元の人がね、一番やってくれたらいいんやけど、なかなかそこがね若い人はね。仕事に行くからねなかなかね田んぼばかりっていう作業ができん。作業がね何時にします、草刈りしますって言うても、なかなかしてくれる人が少なくなってしもて、それが一番心配やね。もう目の前やから。

【棚田を守ろう会事務局長　吉田　創】

棚田を守ろう会で事務局をやらせてもらっています、吉田創といいます。事務局の方なんですけども、年に5回会員さんに案内を送付したりですね、イベントの案内を送付したりで、お米の発送の手配をしたりとか、そういうことをやらせてもらっていますけども、大変ではありますけども、楽しくやらせてもらっています。僕自身お米を作っていないので守ろう会で米作りに関わらせてもらっているのは非常にありがたいなと思っています。また、この色川というところはもう人数少ないので、色々役がかぶるということが多くあります。守ろう会以外も消防とかあと区のいろんな役をやらせてもらっていますけど、そういうところが田舎の特徴というか、忙しいところではありますけども、何とか頑張ってこれからもやっていきたいなと思ってます。

【棚田を守ろう会　酒井　泰幸】

酒井泰幸です。愛知県から移住して5年目です。棚田を守ろう会に参加したのは、ここに来ている地域の人達、地元の人や移住者と知り合いになれるからでした。元々、実家が農家で子供の頃に手作業でのコメ作りを体験したことがあったので、その頃を思い出しながら棚田の農作業をお手伝いしています。技術者としての会社勤めを退職して移住したのは食べられる森フォレストガーデンを作りたいと思ったからです。南平野のこの土地は、昔あった水脈が途絶えて土壌に水が足りていない状態で、以前のような水田には戻せません。それで棚田の地形は生かしながら食べられる色々な植物を一緒に植える食べられる森を作っています。今のところは、前の所有者がイチョウの木を植えて銀杏畑をやっていたので、それを引き継いで銀杏を育てています。

【棚田を守ろう会　千葉　貴子】

移住して8年になる千葉貴子です。守ろう会は、私が移住してすぐの2、3年ぐらい、本当に小阪区っていうこの区に入るのに、いろんな方地元の方、含めていろんな方に出会える場所になりましたし、守ろう会の活動で1年間の米作りの流れっていうのがすごくよく分かったなっていうところが助かったところです。最近は子供が生まれて4歳になるんですけど、なかなか思ったように作業に参加できないことも多くて申し訳ないなという思いがあるんですけど、たまに娘も一緒に参加させてもらって、とんぼを捕まえる専用の人みたいな感じで一緒にね守ろう会で参加したりしています。

【外山氏】

以上が正会員の声で続きましてですね、この会場にも結構来てくださっているんですけど、よそからの支援者結構皆さんオーナーだったり、賛助会員だったりもされるんですけど、についてもちょっと声を聞いてください。

【色川ビールプロジェクト共同代表　藤本　多敬】

私は今年で色川に関わり始めて6年目となります。私が色川に関わる

きっかけとなったのが、大学の地域インターンシッププログラムでした。その活動で色川に何度も通うことで、色川に魅了されてプライベートでも頻繁に通うようになりました。大学を卒業した今でもその関わりは続いています。私が色川へのサポートを継続している理由は2つあります。1つ目は色川に自分なりの関わり方で関わることができるからです。色川には自分のライフスタイルや興味関心に応じて様々な関わり方ができます。このある意味、ゆるいつながりが自分にとって心地良いと感じています。2つ目は色川でしか出会うことのできない縁があるからです。棚田のイベントに参加すると、いつも出会う顔なじみの方との再会、そして新たな出会いが毎回あります。その同志たちとの縁を求めてサポートを継続しています。

【自称・色川観光大使　高野　康】

NPOの友達に頼んで紹介してもらって初めて来たのがきっかけなんですね。よく自然がある所がいいとか、農業体験が新鮮だからあるんですけど、ここへ来て、ちょっと感動したことがこの色川の棚田の石垣あるじゃないですか、最初に来た時、実際、１，２００年前からあるんだよって聞かされて１，２００年前の人がこの石を積んだんだと思ったらなんだか涙が出てきたんですよ。１，２００年前、それこそ重機もない時代じゃないですか同然、手で積むわけですよね。１，２００年前、この山中でどんな思いでこれは積んだんだろうって考えたら、それは感動です。

【NPO法人　JUONNETWORK　徳田　一絵】

JUONNETWORKは全国で森づくりや援農体験イベントを行っている認定NPO法人です。色川での活動は2010年にスタートしました。東京から色川に移住した町の会員と一緒に農業体験プログラムを企画し、毎年棚田を守ろう会の年4回のイベントに合流せていただく形で、全国から参加者を募っています。昔ながらのコメ作り体験や地元の方との交流は現地でしか味わえない魅力にあふれています。いつも参加者の満足度が高く、色川での体験は多くのリピーターや地方移住のきっかけを生み出しています。私たちが活動理念に掲げるとした都市と農山漁村が支え合うネットワークづくりの大切なフィールドとして、これからも微力ながら色川の魅力を伝え、応援していきたいと思います。

【外山氏】

もうひとかた、音声でなく文章で声を寄せてくださっています。この人もオーナーをされている林さんなんですけど、読み上げさせていただきますね。

【元青年海外協力隊　林　俊行】

なぜ色川に時々お邪魔しているのか。それは色川で暮らしている人たちを放っておけないからです。色川で暮らしている人達の多くは、自分の暮らし方や生き方を実現したいと思って暮らしていると思います。色川の皆さんの暮らし方や生き方には共通点があるのではないかと思うのですが、そんな暮らし方生き方に私は共感をしていて、一緒にやっていけたらいいなといつも思っています。棚田を耕す暮らしに象徴される地に、足の着いた暮らし方、世の中の景気がどうなろうと自分たちは暮らしていけるというようなどっしりした安心感のようなものが色川にはあって、こんなどっしり感が色川の人たちの間で暗黙的に共有されていて、これは自分が住んでいる町にはない空気感でこの空気感に触れると色川にまた来たくなる。そしてこんな空気感こそがこれから日本人の本当の幸なのではないかと思っています。

【外山氏】

というコメントをいただいていますという色んな人の声を聞いていただいた上でですね、いろんな話があったんですが、簡単に活動の意義と課題についてまとめさせてもらおうかなと思います。意義、まずは景観、言うまでもなくこのために始めた活動だったわけですけども、活動を続けてくると結果としてというか、交流の場、かかわりしろみたいな機能がすごく大きかったということが分かってきたというとこだと思います。まずは、その地元の人と新しく引っ越して来た移住者は移住者が地元の人に田んぼを教わる、お互いのことを知ることができる場として。それから棚田を守ろう会のイベントもありますし、それ以外のいろんなイベント事でフィールドに使ってもらうみたいなこんな色々ありまして、こんな時によそから来た人と色川に今住んでいる人がまた交流するという機会にもなる。いずれにしても、こういう誰でもお米作りに関われる、誰でも棚田の風景に吹き込めるっていう場ができたことでかかわりしろというか参加できる場みたいなものになって、その機能が結構多かったなっていう風に思います。一方で、何かいい取り組みですねってきれいに終わらせるわけにはいかない厳しい現実もありまして、一つは水不足、これちょっとこの小阪区特有の事情もあるんですけど、まず鉱山開発で何か地下が坑道だらけらしくて何か水がそっちへ流れていっちゃうから、そもそも水がないとか。また恐らく裏の植林とか、あと2011年に紀伊半島大水害がありましたけど、あの水害の爪痕もありまして、何しろこの棚田を守ろう会のところに水引くのがめちゃめちゃ大変なのを何とか無理くり引いているので、非常に手間がかかるし、技術が要るっていう水管理の問題がまずあります。それから人手不足。そもそも作業に参加できる正会員が少ないっていうのはもうみんな移住当初はここで稲作りの仕方を教わっても何年かし、自分が田んぼを始めるとか仕事を始める。地域の役を持ってどんどん忙しくなってくるとなかなか気持ちはあっても参加できない。私も自分自身がそうなんですごく分かるんですけど、一方、よそからの人材に頼れるかっていうと、まず皆さんも遠かったと思うんですけど、遠いって理由で難しい、それで近くの町はそんなに人口多くないし、また結構お天気仕事もあるので、前から予定しといて、この日ってなかなかしにくい仕事もある上にやっぱりよそからぱっと来られた方にすっとやってもらえる仕事ばかりじゃないので、そうじゃないところにこそ人手が必要だったりするのでみたいなところで結局はですね、小阪区の正会員に負担が集中っていうのがこれ写真あるんですけど、左の3人がキーパーソンです。作業時間のグラフも作ったんですけど、この左の3人突出しています。作業時間がこう縦軸がでは横軸に10人ぐらいメンバーを書いています。今在籍している中で、前期高齢者って本人たちがおっしゃっているんですけど、この３人に集中していて、この人たちがいなかったらもう成り立たないよっていうところでぎりぎり保っている。この人たちの後継ぎ誰っていうのが正直まだ見えてないっていう、いつどうなっても不思議ないようなぎりぎりのところでやっているので、何とか田んぼを作ってはいるけども、長期的な目で見たメンテナンスまでは行き届いてないところがあります。あと資金不足って書いているんですけど、お手元にもこの線グラフ書かせてもらったんですけど、収入の柱は、賛助会費、オーナー費ということで、この左側の収入の青いのがそれなんですけど、半分くらいはそのお金なんですけど、やっぱりおんなじことずっと続けているし、似たような棚田はどこにでもあると思うので、ずっと継続的に支援してもらうってのはなかなか。というわけで何年か続けていくとガクんと減ったりとかっていうことが起きています。それで、支出の方はね、これは作業賃金、完全ボランティアだとやっぱりもうちょっと無理があるので、ささやかな作業賃をもらうんですけど、これがね、途中まではいくらって決めていたんですけど、最低賃金ぐらいでもうそれともうちょっと収支がもうあまりにも無理だったので、ちょっと詳しいことはお手元の資料に書いたんですが、なぜ会が赤字にならないように毎年その額を決めてみんな自分達

で今年はこのぐらいねっていうふうな作業賃金を決めるんですけど、大体600円ぐらいだと。でも私ら何かあんまり行けてないのでまあいいんですけど、年間100時間とか働いてる人達にはちょっと申し訳ないなっていう気持ちがありますという問題が色々ありつつですいね、もう時間も押し迫ってきてるんですけども、正直ですね、サミットを開くと、事例発表すると、それに何かどんだけ意味があるんだろうっていうことは、棚田を守ろう会でも議論になったし、自分でも大分考えまして、ここから先の話は会公式見解というよりかは会の皆様からお許しを得て、ちょっと私の個人的な意見を言わせてもらうというような時間になってしまうんですけど、そもそも棚田を守るってどういうことだったっけっていうことをちょっと話したいと思います。保全活動には特有の意義はもちろんありますが、なかなか難しいよねと、それも色川全体を見た時に守ろう会で耕作している面積っていったら数パーセント、今耕作している面積の中の数パーセントだし、住民の中で守ろう会に関わっている人も数パーセント。別にだから意味がないわけじゃないけども、色川の棚田で現に耕作されているほとんどは当たり前だけども、先ほどから言っている通りで、自給的に自分の食べる分を自分が作るっていうことで維持されているわけなんです。なのでそもそもこういうところで色川みたいな収量の低い、厳しい棚田で保全活動にしても、例えば販売用の何かを育てるにしても、それは自分の食べる分プラスアルファを作ることになっちゃうから、もうそれはそもそもプラスアルファの耕作は厳しいっていう当たり前のことなんですけど、逆に言うと単純な話で棚田を守るっていうのはここに住んで自分の分を作る人が十分にいれば、それだけで済む話、別に難しいことは何もないっていうことなんです。やっぱりこう棚田をどうするかってなると保全活動とか何かこうどんなビジネスをやって儲けるかっていうようなことが優良事例というふうに注目されてしまいがちだと思うんですけども、それも別にあってもいいけども、そういうのってどうしてもこう都会があって、そこの人たちに手助けをお願いするとか、もう寄付にしろの何か買ってもらうにしても、お金を出してもらうとか、支援をしてくれる都市があるっていう大前提と思うんです。その構図には私はちょっと気になる点が2つあって、一つは何かその外部支援ばかりが多くなって、現場で実際に作業する人がやっぱり少なくなりがちなんじゃないかと自分はそこに住まないけど、遠くから応援するよっていう応援団ばっかり増えてもプレイヤーがいなきゃちょっとやっていけないよっていうところが一つ気になるのともう1個、全国にいっぱい棚田がある中で、こうそういう応援してくれる人に選んでもらうために、棚田同士でお互い差別化を図って生き残り、競争みたいなことになってしまいかねない構図だなということも思います。成功した棚田だけ生き残ればいいっていう話じゃないと思うので、何せ言いたいのはあくまでも各地の棚田に自分のために儲からなくても耕す人っていうのがいればいいだけ、そこが本当本来の姿だし、本筋じゃないのという風に思うんですみたいなこと言うとお配りしているレジュメの最後の2行にちょっと私のと言ったら疑問がわいてくるよねっていうとこが書いてあるのがまあ一つとは言っても、そういう自らのために耕す人ってどう確保すればいいのかって言うか、そもそも今何で居なくなっちゃっているんだっけっていうところが疑問。これはですね、当たり前みたいにみんな過疎高齢化が進んで、こういうところには人がいなくなるって言っているけど、私としてはすごく不思議でしようがないというのは私、色川にいてそのまま飲めるきれいな水があって、薪があって、日々の食べ物さえ自分で耕して手に入れれば、とりあえず生きていけるっていうことですごく生きていきやすい場所だなって思っているんです。もちろん多少はお金もいるんですけど、その必要な額なんて、都会で普通に考えるのがもう桁違いに少ない額でいいし、私たち、実際に家ではそういうふうに暮らしていて楽しくもあり、幸せでもあり、こういうふうな暮らしできるなって思っているんですけど、それが世間ではほぼ認められてないというか、子供が学校出て自立しますってなったら、すぐどこに就職するの、どんな肩書でどんなふうにお金を稼いで生きていくのって考えちゃうじゃないですか。本当はお金を稼ぐことしかできないよりも、自分で食べ物を何か獲得できる方がよっぽど安定しているし、自立しているっていう風に考えることもできるはずなのに、今、世間はそうは捉えてくれない、ちゃんと務めないってなったら不安定だわ、大丈夫なのかってこうヤキモキしちゃうんですよね。なので何か地味にこう平凡にただ耕して生きるっていうことが可能だし、それもいいよねっていう風に認めてもらえたらいいなと私はすごく思っています。農業を目指す若い人自体は増えてきているとは思うんですけど、やっぱりまだ何かちょっと変わった子がわざわざ選ぶ選択肢っていうような特別感がある気がするし、あくまでも収入をちゃんと得ることが大前提みたいな農業法人に就職しようとか、ちゃんと儲かる営農をしようとか、6次産業展開して儲けようとかっていう話が多い印象、それはそれで別にあって素敵だし、もちろんいいとは思うんですけど、全国の荒廃しつつある棚田をカバーするっていうことを考えた時に、ちょっとそういう特別頑張っている事例みたいなのだけに期待するのは無理があるだろうと普通の学生さんが、欲を言えば本当普通に就職する感覚で普通の特別な取り組みとかしてない、田舎で普通に自給的な耕作をする。何もかも自給はするのは大変だけど、ちょっとぐらい稼ぐのは考えなきゃいけないかもしれないけど、そこは微々たる額でも済ませられるだろうから、暮らしの中心は稼ぐことじゃなくて、あくまでも自分が耕して生きるっていうようなそんな人生選択が社会に一般的に浸透するというようなことが、何をこんなこと言っているんだと思われるかもしれないけど、何でもっと一般化しないのかなって、そういう方向にちょっと動いたらいいのにというか、この辺もっと話をしたいんですが、時間が時間なので最後の話に行きたいと思います。さっきのそもそも棚田を守るとはって考えた時に耕す人が足りてないんだったら、じゃあなんでこう棚田が守られなきゃいけないのかという話になると、その先ほどからも多面的機能の話にどうしてもなるんですけど、もうそれは十分語られているし、正直ちょっと疑問点もさっきちょっと申し上げた他にも色々あるんで。ここでは違う話をさせてもらいます。棚田の存在意義は、耕す人がいるからこそだと、そういう棚田地域みたいなこんな田舎に耕す人が住み続けるっていうことそのものの意味っていう話をします。はい、もうこれで終わりです。今の日本だと食べ物は店にあり余っていてお金出せば買えて、いつでも蛇口をひねれば水でもお湯でも出るし、それが当たり前、電気もガスもスイッチひとつで、それしか知らずに大人になる人がほとんどじゃないかと思います。例えば災害が起きたら、そういうのって脆弱な暮らしだったんだって露呈するけども、ちょっとこう危機的な数日間を乗り切れさえすれば、また今までの日常が返ってくるよねとみんな普通に思っていると思うんですけど、例えば気候変動の影響がこれからもっと現れてくるんじゃないかとか、世界的に人口増加して食料を始めさまざまな資源も奪い合いになるかもしれないし、戦争に巻き込まれていくかもとか、この先どんな時代がやってくるか分からない中で、いつまでもこの今の大量の輸入に支えられた都市生活が続くのか、続けていいのかということを問わざるを得ないのではないかとそういう生活そのものが例えば気候変動を招いていたりするわけじゃないですか。一方で先ほどからの話の通りで色川みたいなこういう田舎の棚田の地域っていうのはそこにもう既にある自然の資源を使って結構生きて行きやすいところです。周りに

もあまり大きな環境に影響を与えずに、持続的にずっと人々は暮らしてきているし、その暮らしの名残が今の日本で辛うじて残っているっていうのはそういう場所こそだと思うんです。つまりそれってこれからの時代の参考になる場所で安全地帯みたいな場所、それを今みすみすこの国は失おうとしているという話だと私は思っています。棚田を守ろう会では棚田を一旦荒らすと復活するのは大変ということをすぐ思い知っています。色川でも、せっかく1000年前からこつこつと先人たちが作ってきてくださった棚田っていうのが言った通り、もう大部分がもう荒れたり、山に戻ったりっていう風になっているんですけども、せっかく今、田んぼとして使える生きた棚田があるんだったら、それらはこの先どんな時代が来てもいいようになるべく生かしておきたいし、それは形だけ守るって話じゃなくて、そこでの暮らしそのもの、そこにある資源で生きるっていう本来生き物として当たり前の暮らしにそのままじゃないけど、それに比較的近い形の暮らしっていうのをどうせいずれ必要とされるだろうと、それに備えて残しておこうというようなことが意味としてはあるのではないかなという風に思っております。このサミット、サブテーマに来たれ耕す人って入れていただいているんですけど、サミットやるにあたってすごく面白いが大変な労力を注いでされているわけじゃないですか、それがやった、いつも通りに無事に終わった良かったねでは済まないよねっていう風に思っています。守ろう会の棚田も先ほど御紹介した3人のもう大変な働きでぎりぎり支えられているとか、色川のその他の多くの棚田はみんなの自給的な耕作でぎりぎり持っているとか、今回サミットでたまたま注目されても来年以降、みんながここを忘れても地道な作業はずっと続いていくっていうことだし、それは色川に限らず全国の棚田がおんなじような状況だと思うんです。という時に、このサミット側は体裁をきちんと整えて遂行するのもすごい大変だったというのは、もう横で見ていて分かるんですけど、やって良かったねじゃなくて、意味あるように耕す人が増える方向に繋がって欲しいなっていう風に凄く思っておりますということで、時間をたくさんいただいてしまいましたが、私からの事例発表は終わらせていただきます。

和歌山県PRキャラクター「きいちゃん」

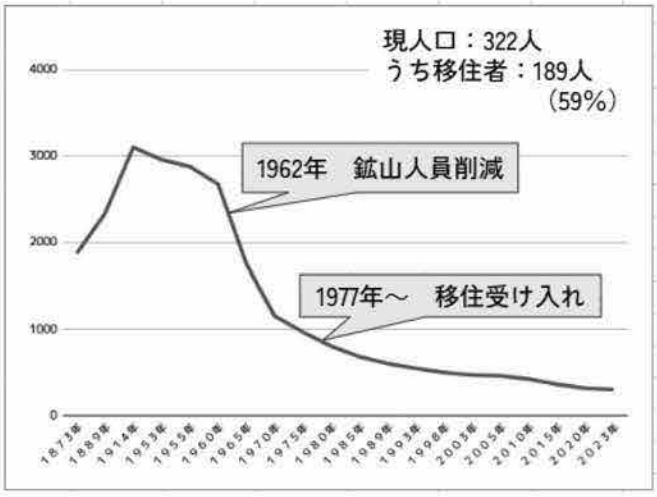
2023.11.18. 第28回全国棚田サミット 事例発表資料

棚田を守ろう会 外山麻子

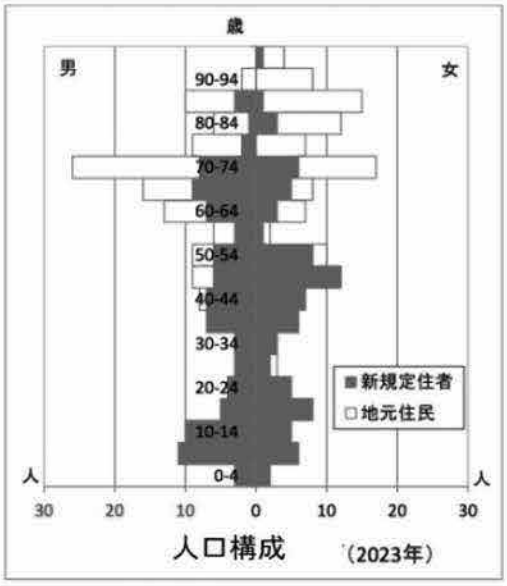
1. 色川はこんなとこ

・那智勝浦町の山間部10地区（うち1地区は廃村）
・千年以上、人が住み続けてきた
・70年前（昭和の大合併前）まで「色川村」
・江戸時代までは、各地区が独立した村
（それぞれに神社、寺、集会所、独自の文化…）
・「守ろう会」の棚田は、小阪区にある

・農業には不向きな土地
傾斜地、日本有数の多雨地帯
→細かい圃場で作業効率が悪い
→土壌が痩せている
→日照が少ない
→古来、自給的に棚田を耕作してきた



人口推移



※色川に移住者が増えた経緯や移住受け入れの仕組みについて、詳しくはこちら
→小田切徳美・筒井一伸編著『シリーズ田園回帰3 田園回帰の過去・現在・未来』農文協. 2016

2. 棚田を守ろう会について （詳しくは →https://www.irokawa-tanada.com/）

2004年 復田
・草刈り、水路補修、石積み補修、耕運などにより、30年来使われていなかった4反80枚を復田
・小阪以外の地区に住む移住者が企画
・単年度の緊急雇用対策「緑の雇用農業版」として、6人雇用
・復田後は、個人で耕作する人が現れることが期待されていた

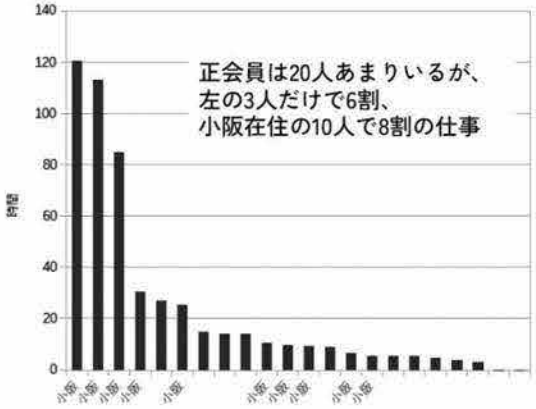
2005年 米づくり体験イベント開始
・復田後の耕作希望者はなく、苦肉の策でイベント化（田植え、草取り、稲刈り、しめ縄・餅つき）
・小阪住民にも、活動が徐々に浸透

2006年 「棚田を守ろう会」発足

守ろう会の構成：
・正会員（作業に参加する色川住民有志。20人程度。作業賃※を受け取る）
・賛助会員（1口1万円/年。かつて100口程度、最近は30数口。返礼品（米、色川産品）を受け取る）
・オーナー（1区画1万円/年。10区画程度。作業になるべく参加し、オーナー田の収穫全量を受け取る）

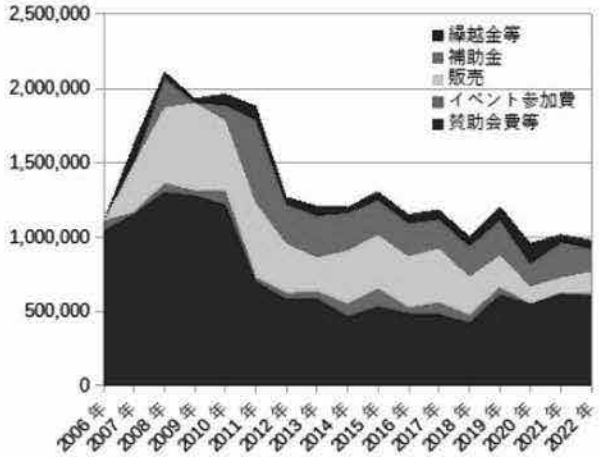
栽培方法：農薬・化学肥料不使用。水苗代・手植え・手刈り・天日干し。
あぜそぎ、あぜぬりを1クワずつ手作業で行い、耕運機をかける。田植え前の作業が非常に大変。

意義：景観、交流「かかわりしろ」
課題：水不足、人手不足、資金不足

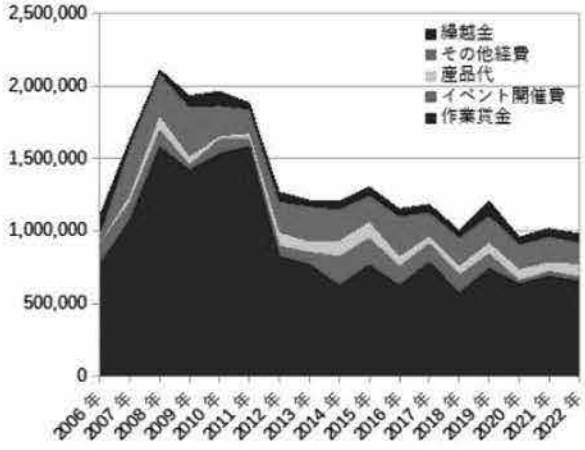


棚田作業時間2023

※作業賃について
当初は、最低賃金程度の作業賃を設定していたが、
収支悪化に伴い●年より、
会が赤字とならない計算方法を導入。
年度終了時に、その1年の
（総収入ー作業賃以外の総支出ー繰越額）÷総作業時間
という計算で、その年の作業賃（時間単価）を決め、
各自の作業時間に応じて1年分の作業賃を受け取る。
昨年度は、●円/h。



収入の推移



支出の推移

5．そもそも「棚田を守る」とは？（発表者の私見）

・保全活動に特有の価値はあるが、本来、色川の棚田で人の分まで耕作することは、非常に困難。
「守ろう会」で耕作する面積もメンバーも、色川全体で耕作する棚田の面積や人口の数%。
→「保全活動」が注目を集めがちだが、現に色川の棚田を守っているのは、自給用の耕作がほとんど。
自給のために耕作する人が十分にいさえすれば、棚田はおのずと守られる。

・お金を稼ごうと考えると難しいが、それでいい、それがいい。
生きるために必要なものはだいたい直接手に入る、自立して生きられる可能性がある、
こういう地域こそ、本来 人間が生きていきやすい場所。

基調講演テーマ

「次世代に引き継ぐための地域の体制づくり」

有田 昭一郎 氏　島根県中山間地域研究センター・研究企画監

【基調講演】

皆さん、こんにちは、今ご紹介あずかりました。島根県中山間地研究センターの有田と申します。本日はこの全国棚田サミットにお声かけいただきましてありがとうございました。また、こういうふうな場で話す機会をいただきましてありがとうございます。それでは今から１時間強ぐらいお時間いただいてお話を進めていきたいと思います。ちょっと打擲で少し後ろの方になるとお昼近づいてくるので、お昼をこすので、皆さんお腹空いているような感じになってくるかもしれないですけど、なるべく資料も含めて話していきたいと思いますので、よろしくお願いします。今日、お話しするテーマ「次世代に引き継ぐための地域の体制作り」というものです。日ごろお仕事をしている職場も含めて自己紹介しておきたいと思います。私いつも仕事しているのは、この島根県中山間地研究センターというところです。ちょうど島根県と広島県の県境にあります。設立されて２０年ぐらいの公設試ですね。特徴は自然科学と社会科学両方やっていることです。自然科学は本当、色々やっていて農業、畜産、キノコ、薬用植物、野生動物、育林製材で社会科学の方は地域づくり、人口対策スモールビジネスみたいなことをやっていて、スタッフが大体６０人ぐらいでお仕事をさせてもらっています。全国色んなところにお仕事とか調査でも行ったりもしますけれども、なかなか両方しているとこってなくて、それが我々の特徴かなと思っています。その中で私がいつも仕事しているのは地域研究科っていうところです。研究員が４名でサポートスタッフと一緒にやらせてもらっています。みんなプロパーなんです。基本異動がないです。地域づくりと言えば時間がかかるじゃないですか。だから一緒に伴走させてもらいながら、調査研究もやっているというとこです。どういうことをやっているかっていうと大きく言うと2つやっていて安心して暮らし続けるためのソフトと支え合いの仕組み作りと、それからあとは定住担い手対策っていうとこですね。仕事の軸はっていうと、一つは研究開発をやっていてコミュニティー生活機能若者定住とか少子化対策ですね。今、重要になっているテーマですね。もう一つの軸がその地域とか県とか市町村さんの技術的なサポートの方をやっています。それこそ政策とか事業設計する時に一緒に考えさせていただいたりとか、実際にいろんな地域でモデルを作っていく時に伴走して一緒にさせていただいたりとか、後は、実際に現場でやられている方とかね。それをサポートされている方のエンパワーみたいな感じでやらせていただいています。こんな感じでやらせていただいているんですけれども、今日のテーマからすると、中山間地域っていうとこでいうとね。もうものすごく重たくなってくるんですよね。農林業とかです。だけど、やっぱ少しそれぞれのところでやっているので今日はどういった視点でお話しようかなと思いまして、少し、まず今日お話しする視点についてお話をさせていただこうかなと思います。ここですね。今、お見せしているのは、何かというと厚労省の人口の推移の資料をちょっとお借りしています。最近、歴史地震工学ってありまして、人口の趨勢とか、その背景について精緻に整理をしているんですけれども、そこを見ていますと人口って緩やかに増えていって、今少し下がっているような状況じゃないんですね。要するに人口が増えて停滞して少し減って、それからまた増えて停滞して減ってっていうのを繰り返しながら、今に至っているというとこがあります。もう少し具体的に言うと、もしかしてお手元のやつには書いてないかも書いてないですけれども、これは4つぐらいですね。変動期があるって言われています。一つが第１次の人口変動って言われるもので、だいぶさかのぼりますけど、縄文時代ですね。縄文時代も前半暖かいんですよ、後半寒くなるんです。そうすると人口が少しそこで減るんですねで、次に第２次の人口変動がどこかっていうと弥生時代なんですね。皆さん、ご存知のように稲作が入ってきますよね。それで食料生産力が上がっていって、人口も増えていくと、それがずっと続いていくんですけれども、その律令制とかです。その生産のためのインフラとかきちんと水路とかも整備されていくんですけれども、平安時代になるとかなり各貴族が割拠するような状況になる。そういうふうな技術革新が止まっちゃうんですよね、そこで停滞すると、少し下がり始めると、第３次人口変動っていうのが１４，５世紀ぐらいなので、室町とか安土桃山ですよね、そのそれぞれの極衆が新田開発する。それから民間の手法も入ってくる。その中で新田開発をしていくので、生産量が上がっていくんですよねで、またそこで生産力が上がっていくと食料が増えていくので、人口が増えていく、それが江戸の前期ぐらいまで続いて後期になると、やっぱりもう技術は頭打ちになるというとこで停滞をして最後、飢饉とか起こって少し下がっていくんですよね。最後に第4次の人口変動っていうのがあって、明治以降伸びていっていますよね。最後の山ですね。何がこれ影響しているのかとまあざくっと言うと化石燃料ですよね。化石燃料が徐々に入っていって、まず人の住まいでいうと、暖房がすごく安定してきますよね。生活環境の中で安定してくると、今度は機械動力が入っていって、化成肥料が入っていって、それからハウスなんかでももう年間を通じて温度関係なくやっていけるようになるじゃないですかで、それで何が起こるのかっていうと、食料が安定して、生活環境は安定したら要するに乳児の死亡率が下がっていきますよね。なので最初は多産多死だったんだけれども、それが多産少子なんでずーっと上がっていく。それから少産少死になります。今下がってきているのはどういう状況になっているかって言うと少産多死になっているというような状況ですよね。今ずっと下がっていっていますよね。最後のところですね。ここからどうなるのかっていうとこありますけれども、まあ止めなくちゃいけないですよね。どっかでですね。下げ止めなくちゃいけないと、そのために我々こう仕事していると思っていますし、現場の人たちもそのために色んな試行錯誤しているというのが今の状況だというふうに思っていますけれども、例えば前の第３次人口変動の江戸のあたりのところで見ても最後停滞するんですけど、どうも停滞ってすごく重要なことらしいです。停滞っていうのは、そこでいろいろこう試行錯誤しているそうです。試行錯誤しているところに新しい技術とかも入ってきて、次のフェーズに移るんだそうです。今、我々はそういうふうな時代を生きているというふうに捉えるのがいいのかなと思っています。では、その中でですね。実際にその今のこの農村の形とかですね。棚田の風景も含めてどこら辺でできているのかというと、やっぱこの第３次人口変動の辺ですよね。古くは室町とかそれよりもちろん、もうちょっと前ぐらいからそういうふうなものが形成されているっていう話ですよね。島根なんかは結構遅いんですよ。関が原が終わって、その後にこの敗残兵みたいな形のものは、山の中に入っていってたたら製鉄をやるんです。もののけ姫の世界ですよね。たたら製鉄をやっていて、その時に開かれたところが田んぼになっていくんですで、その

中にも棚田があったりします。こちらの方がやっぱり歴史をお聞きしていますともっと前ですよね。いずれにしても、そういう風な流れの中で、そういう風なものが起こってくるとで、今農村が置かれている局面はどこかっていうと、この緑の点線のとこですよね。人口減少期のところにあるということですね。いろいろ試行錯誤しているというのが今の状況だというふうに思います。

そういうものを踏まえて、どういうテーマを置いたかっていうと、やはり我々考えていかないといけないのは、その人口減少期のこの局面において、農業とか農山村ですね。要は中山間地域をどう支えていくかということなんです。これ考えていくときに、例えば農業農山村を支えていくためには、私は２つ視点があると思っています。一つはすごくダイレクトなことで、農業を維持する方法とかの仕組みづくり。それから経済活動としての仕組み。担い手の確保、関係人口、今まで話されてきたことです。もう一つあります。それは何かというと担い手である住民が安心して暮らし続けるための地域の体制づくりなんですね。それを例えば共助とか支えの仕組みでもありますし、生活サービスの維持だったりするんです。これが車の両軸となりながら支えていくとでこの仕組みどう作っていくかということがすごく重要だと考えています。私、いつものお仕事の２番目の方ですので、今日はですね。２番目のことを中心にお話をしてみようかというふうに思います。実はこの２番目ってすごく大切で必ず１番の方にもしっかりしていくと、良い影響与えてきますということで、いつものサミットのこういうふうなお話だと１番目が中心かなと思いますので、今日はもう一つの視点でもう一つの物語として、お話を聞いていただければと思いますので、よろしくお願いします。

私、出雲島根県とか、中国地方の仕事をしていますので、ここら辺の事例データを出しながらお話をしていきたいと思います。今日のお話の流れです。最初に状況お話ししないといけないと思いますので、島根県の状況と我々その中山間振興。どういうふうな基本姿勢を持っているかっていうお話を１番目にします。それから２番目に若者定住と地域づくりで３番目が主題になります。より少ない人口で暮らしていくための地域の体制づくり。それから４番目で今後の地域の体制づくりの課題と、これからどういうふうにして、今行き詰まっているとことかもあったりするんですけど、ブレークスルーしてたらいいかみたいな話をしたいと思います。１番目が視点２番目と３番目が仕組み。３番目が実際の組織作りについて事例を含めてお話しするというような感じでやりたいと思います。

まず１番目のお話に入りたいというふうに思います。視点の話です。ちょっと島根県の状況を少しお話しておきたいというふうに思います。細かいグラフですけど、何を表しているかっていうと、島根県全体の人口と１９市町村の人口の１９６５年からの推移をグラフに表したものです。ただ、グラフの形を見てください。大体こう右肩下がりですよね。見ていただいて分かりますよね。こんな感じで右肩下がりです。何とかしているとこはどこかっていうと県庁が所在している。松江市とそれからあとは第2の都市である出雲市です。もう一つ面白いのがあって、何かというと下の方に緑の星印が付いているものがあります。これはあの海士町と知夫村で両方とも島なんですけれども、さっき今第４期の人口変動期に入ってどうやって下げ止めるかみたい話がありましたけど、ここ数年というか、５年ぐらい下げ止まってきているんですよ。人口は減っているけど止まるみたいな状況っていうのが生まれてきています。もしかしたらこういうふうなフェーズに入り始めたところがあるかもしれないというような状況であります。ただ人口のこの大きな動きで見ると、内訳はだいぶ変わっているんですね。で人口の増減って御存じのように転入から転出を引いた社会増減とそれから生まれてくる子供から亡くなる方を引いた自然増減を足したものです。これで人口増減と言われるものなんですけれども、島根県の場合、その人口増減がどうなっているのかって表わしているのがこの赤い線なんです。真ん中が０ですので、大体下がって減っているのは分かると思います。ただ内容がだいぶ変わっているのでこの水色の帯のところが社会減なんですね。こういう風帯がありますよね、そして、この緑水色の帯のとこを見ていていただけば分かるんですけれども、だんだんその幅がちっちゃくなっている。分かりますよね。では何かというと社会増減で転入者から転出した、引いたものの数が少なくなっているっていうことなんで良い傾向ではあるんですよ。外に出て行くのは誰かっていうと２０代とか３０代ですよね。２０代とか３０代の出ていく出入りのところっていうのがマイナスの幅が減っているっていうことですけれども、何が理由になっているのかで３つぐらいあるんですよ。一つは元々２０代３０代がどんどん減っているからですね。その数が減れば幅減りますよね。それからもう一つは転出。ここ数年というか、そんな傾向ですけれども、転出者の数が減ってきているというのはあります。それからあとは転入Ｕターンと書いているお話です。やっぱりそれぞれの自治体さんとか地域の御努力によって少しＵターンもＩターンも増えているんですよ。その結果として社会減の幅は減ってきているとで、片や赤色のところって増えていますよねで、これは何かって言うと自然減です。要は、少子化が片方で進むと、お年を召した方は数が多いので、その方がお亡くなりになられるとで、それで幅が広くなっているというところで言うと、人口対策ってこれから実は社会減に対する定住も重要だけど、実は少子化対策がすごく重要だということですね。２０代３０代の話をしたので、そこも少しその内実をお見せしてみたいと思います。

島根県の２０代の出入りを図にしたものです。２０１６年頭から２１年でどうなったかというとこなんですねで、これどういう区切りかというと、公民館エリアっていうとこで区切っています。小学校区とか言った方がいいですかね。それに近いもんですけど、色を見てください。青色が減っているところ、赤色が増えているとこです。殆ど真っ青ですよね。で赤いところって県内でも言うと、松江と出雲ぐらいなんですよね。どういうことかっていうと、大体高校を卒業したら進学とか就職で大体松江とか出雲に行くか県外に出て行くってことですね。

殆ど真っ青であると、これ次３０代を見てください。だいぶ色が変わっています。赤色増えていますよね、これどういうことかって言うと４割の大体公民館エリアで増加の傾向があるんです。実はずっとこの５年ぐらい作っていますけど、大体同じ傾向にあります。そういう風な傾向があると共に、この赤いところは松江出雲除くと結構山間部が多いんですよというような状況っていうのも片一方で出てきています。ただちょっと注意しなくちゃいけないのは２０代３０代って元々数が少ないので増えたら赤色になりますというようなところは注意しなくちゃ見えないけれども、ただそういう風な傾向はありますというとこです。ただですね。先程も言いましたように、要するに人口全体っていうのは、自然減を主流にしてきているので、大きなところで言うと人口っていうのは減っていきます、これは島根県の１９市町村について、２０２１年から２０３０年、人口はどうなるのかなっていうのをグラフで表したものです。縦軸が増減数で横軸が増減率なんですけれども、赤く点線しているところが増えるかなというとこです。これが海士町とか知夫村というとこです。青緑色の点線のところというのが松江市とか出雲市です。その他の市町村さんというのは、大体もうかなり減るというような状況というのがこのままで推移すると見えるところです。これを今度は２３５の公民館２９５の公民館

エリアでもう一回表したのがこれになります。２９５のうちこのまま推移すると、将来人口が増える町は２７エリアですね。もちろんこれは定住の努力によってもう少し増えるかもしれませんよ。ただ一つ言えることっていうのは、大部分の地域っていうのは定住の努力踏まえた上で、もう人口自体の規模ってのは縮小ということですね。で、これは踏まえておかなくちゃいけないというところになります。もう一つちょっとお見せしておきますね、これは何なのかというと、今お話の中で転出大分減っていますよねっていう話をしましたけれども、そうすると人口の移動という県内移動が中心になっているんです。これは２０１６年から２１年の人口の増減率を横軸にとって人数を縦軸にとった分布図です。これで何が見えるかっていうと、これ４つぐらいのグループに分けられるんですけれども、一つは高齢化率が４０％以上で人口が減少しているエリア。それからこっちが高齢化率４０％未満で人口減少している。真ん中から右が人口増加しているとこなんですよね。注目すべきはこのエのとこです。高齢化率40％未満で人口増加しているとこって結構あるんだっていう話だと思いますけれども、ここはどういうところだろうと追っていたんですね。追っていくと都市部の近郊エリアです。どういうことかっていうと、真ん中から左が中山間地域なんですけれども、若い人達がやっぱり出産とか結婚を機に、この都市部の近郊エリア。これは中心部じゃなくて、その近郊の宅地とかマンションですね。そういうところを買われる、そうする中で、こっちのエの部分というのが人口が増えていくような傾向っていうのが出てきているというところですねっていう風な構図が島根県内の中でもあります。じゃあそういう風な中で、今後、島根県中山間の中山間地域でその人口減少がさらに進むとどうなるかという話ですよねで、これまたあとで紹介しますけれども、地域の活動でいうと、やはり見守りとかご近所のちょっとした手伝いとか、それから災害対応ですね。道路の維持管理とか地域元気にしようみたいな取り組みというのは難しくなってくる。もう一つはもう農産物の生産もそうなんですけれども、深刻だなと思うのは所有権の流出だと思っています。例えば農地とかその家屋の所有権を持ったままの引き継ぎ権を持ったまんま子供さんが都市部の方にとか大都市部に出られます。その時に次に使えるように利用権設定とか空き家バンクに登録されていないとそのままここで使えなくなっていくんです。そのうち、こういうのは塩漬け状態と呼んでいますけれども、そうすると例えば新しくしチャレンジしたいっていう人が入ってきて、もう目の前に農地とか土地があっても使えないみたいな状況っていうのが結構生まれてくると、そうすると地域おこし協力隊が住みにくいような状態になってくる。こういう風な流れの先で何があるのかっていう話です。中山間地域の人口減とか、高齢化の現実の先にあるものというのをちょっとここに整理をしています。これまた人口の視点でちょっとお話をします。例えば島根県の若手の職員さんとか、市町村さんの若手の職員さんとかに同じ話をここ数年ずっとしています。何が起こるのかとで、これまでは県外流出だったんだけれども、今県内が主になってきているので、２０代３０代の方の若い人が中山間地域から県内の都市部の方へ動いていくと、もう少し細かい図で表したのがこの下の図です。で一番左が中山間地域の市町村で真ん中が松江とか出雲市です。右が大都市部なんですけれども、まず何が起こるのかっていうとその中山間地域の市町村さんの方でその縁辺部って言うか。周りのところと利便性の高い中心部があるんですけれども、様子を見ていると結婚とか出産を機に中心部の利便性のいいとこに家を建てたりすると、次には何が起こるかってその子供たちで、その子供たちが今度は進学とか就職を契機に松江とか出雲の近郊部とか都市部の方に出ていく、あわせて大都市部との東京とか大阪とか広島の方にも出ていくというような状況がある、これがこのまま続くとどうなるのかということですよね。まず起こるのはＢエリアのＡ化かなと思っています。要はこの中山間地域の市町村の方で、この中心部の人口っていうのは、実はその周りの人口からの人口供給によって支えられてきていたんですよね。ところが、それが難しくなってくると中心部のも難しくなってくる。次に何が起こるのかっていうと、エリアのＣ化なんですよね。実はその都市部の方の人口っていうのは、中山間地域の方の市町村さんからの人口の供給によって成り立っているんですよね。だから中山間地域の人口が厳しくなってくると、実は都市部のも最終的には厳しくなってくるんです。この下に書いてある図は何かっていうと合計特殊出生率です。こちらの少子化の研究もしているので、それで見ていくと、やっぱり全国のデータも集めてきても中山間地域なんか出生は高いんですよ。合わせて考えるとどうなるかっていうと、要するに中山間地域がしっかりと社会増減とか出生率で再安定化しておかないと、実は都市部は持たないというような状況になると、そういうところです。

もう一つですね。これは同じく中山間地域の人口高齢化、減少の先にあるものってことで、食料とか文化とか防災と書いてあります。ここら辺はですね。今までの皆さん、いろいろお話をされているので、繰り返しお話ししなくてもいいかなと思うんですけど、さっきこういうのを若手の方達にお話をしているって話しましたよね。素直な質問でこういうのが出てくるんですよ。山とか田んぼとかって木が生えている自然に戻っていくんで、何の問題もないんじゃないですかっていう話が出てくるんですよ。だからそんなことないですよね。例えば山の方だって杉が生えていて間伐しなければ、その下ガレ場になりますよね。そのうち土砂崩れが起こりますよね。農山村のものって全部そういうもので、人との関わりの中で維持されているので、その機能が失われていく。それを維持するための機能も失われていくっていうことが起こると、必ずそれって非平地とか都市部の方に影響を及ぼすということになります。しっかり連れていかないと伝えていかないと伝わらないんですよね。お話するとへぇそうなのかって言いますけれども、ああそういう認識はなかったんだっていうのがこちらの話です。

あとは文化って当たり前の話。文化の話も今日もたくさん出ていると思います。文化の中でも食文化はやっぱ重要だと思います。やっぱり食文化って言うと、どこから生まれるかっていうと、そこで採れたものっていうのを長年かけてそこに住んでいる人がおいしく食べられるように工夫していく、この食文化というのが生まれます。今、インバウンドとかいろいろ言われていますけれども、実はあの食文化のルーツってここにあって、ここがきちんとしてないとオリジナリティーを発揮できないんですよね。そういう意味でも実はすごい文化の発信地だと思っています。防災のところというのは先程言った話になります。こういう風なものですね。

踏まえて我々のそのスタンスから、じゃあ、その中山間地域の地域づくりに必要になる視点って何だろうっていうことで整理しますと３つ上がってきます。一つはやっぱり若者定住なんですね。ＵＩターンとか若者が暮らし続けられる条件をどう整備していくかという話ですね。それから、もう一つは、子育てしやすい社会環境づくり少子化対策になります。これ合わせて人口対策なんですけれども、ただどれだけこう人口対策をしても人口構造のところからいって人口はある程度縮小するということはどういうことかっていうとより少ない人口で対応した地域で暮らしていくための仕組みをしっかりしておかないと、それを支えられないっていうことになります。今日はここからの話はより少ない人口でっていうところを中心にしながら、少し若者定住のことも絡めながら話を進めていきたいと思います。というところで１点目視点の話は終わりました。それから２番目です。今度は

若者定住と地域づくりの話を少ししたいと思います。今日もみなさんの話を聞いてすごいなと思いました。あれだけですね。人口の３分の２ぐらいＩターンの状況であるっていうのはすごいことだなって思います。というのは、私もそのいろんなで定住とか定住施策とか定住の支援の方にお手伝いしているからです。島根県とか中国地方の定住の状況のこと、もっと少しこう緩やかなものかなとは思います。

重要なのは、やっぱり若い世代が増加している地域とそうでない地域、何が異なるのかっていうところで、我々中山間地研究センターは中国５県の方でも調査研究させてもらっていまして、２０１７年に整理したものがあるので、少しお話しておきます。それぞれのとこでどんな施策が打たれていて、その政策の実施状態はどうで民間の組織ってどういう枠割りを果たしていて、地域の受け入れ体制ってどうなってるかみたいなとこですね。ただですね。定住の話でいうと色んなやり方があるんですよ。少し話がそれるかもしれませんけど、せっかくなんで具体例も少し挙げてみますと、これは島根県の邑南町です、ここでやっているのはもう徹底的に子供さんが生まれてから高校卒業するまでのところのフォローをしっかりとされているというところですね。あと、一つは定住の方のコーディネーターのところですごい力入れられていて、入る前と入ってきたあとのアフターケアを丁寧にすごくやられているのとあと地域の受け入れがすごく重要になるので、そこに任命されてそれぞれのところに地域の定住促進支援員という方を置かれています。移住の希望者の方。まずそこで接点を持たれるんですよねというような仕組みをつくられています。

それからこれは、山口県の周防大島は結構いろんな本で紹介されているところかなと思います。ここは何しろ、いろんな方が入ってきて、起業されて地域活動を興されているＳＮＳで発信されて、それで関わってその新しく外から人が入ってきているっていうとこですけど、その象徴的なのがこのジャムズガーデンさんというところで、ここのみかんが作られているんですけど、みかんすごいばらつきがあるのを逆手に取られて、全部別の種類のジャムにして販売されるというようなことで、すごい成果を上げられていて、これが求心力になっている。これは岡山県の奈義町というところです。これも全然また違います。ここは、合計特殊出生率３．０なんですよ。すごいとこなんですけれども、何をやっているかっていうと親御さん。特にお母さんが社会復帰されて、その後またフルタイムで職業につかれるまでのところをすごく丁寧にサポートされているんです。それをされた結果、こんなところだっていうとこは広がりながらいろんな成果を上げられているというところです。それからこれは広島県の北広島町というとこですね。ここは民間でやっておられるとこです。このカフェがあってですね。大体移住される方は、まず盛んにここに訪れられていろいろ話をして次の段階で家探しみたいのになると、建設企業さんで相方の方がいらっしゃって、家のメンテナンスとか提供とかやられているので、そことやりとりしながら定住やられているというとこです。

最後にここは鳥取県の智頭町というとこです。子育ての分野では結構有名なとこですね。森の幼稚園というのをやられているので、要するに幼稚園と言いながら建物がないんですね。みんな広場に集まって朝、森の中に先生と子供が出掛けて行って１日過ごして帰ってくるみたいなことをやられているんですね。自然教育ですね。で重要なのは、こういう風なものっていうのが地域での協議会みたいなのがあって、そこで了解を得られながら協力を得ながら展開されているっていうところです。

他にもタルマーリーさんという、これも結構有名なところなんです。パンとかビールとかやられていて、外から色んな人がかかわっていますで、こういう風なシンボリックなものがありながら、周りにどんどんこのＩターンの方達が入ってきているという状況を作られているというとこです。ということで様々なんですけれども、ただやっぱりこう調査をしていくとその若者世代が増加する傾向の強いところってちょっと特徴があるかなと思っています。何点かあるので、ちょっと話をしますと、真ん中から左側ピンクのとこが増加しているところ、真ん中から右が減少傾向になるところですね。また、人の流れが、両方とも定住は頑張られているので、転入は増えるんです。だけど違うのは２０代から３０代の転出の方ですね。よく話を聞いて、ある共通項で上がってきたのは若者住宅でした。若い人ってみんな都市部に出るわけではないんです。実はやっぱり親の近くにいて、スープの冷めないところで子育てをして親からも手伝ってもらいたいみたいな層も結構いるんです。ところが、町内に家がないと、外にアパートを借りられると、そうするともその流れができちゃうとずっと流れていってしまうっていうところがあるみたいですね。それから後は４つの条件ぐらいで違うなというところです。何が違うかっていうと、その一つは役場で機動性の高い定住の体制ができているかっていうとこです。どういうことかっていうと、定住ってサービス業みたいなもんですよね。その定住支援は色んな取り組みの企画をしなくちゃいけないし、それから受け入れ先の職場とか、それから家の家主さんとかと人脈作ってないといけないし、それから手を変え、品を変えＰＲしていかないといけないと、やっぱり異動が前提とした役場の方達がやるのは難しいんですね。成果を挙げられているところは、専門の人材を配置されています。コーディネーターさんとか、あとはＮＰＯがそれを担っている場合もあります。

それから２番目は民間の定住推進力は育っているかと、要は増えているところって役場の人にお聞きすると、全員が入っている人は把握してないよって言われるんですよ。どういうことかって言うと、最初に入ってきた人達っていうのが起業をしたり、地域活動を起こしたりしてＳＮＳで発信すると、それをまた希望者の人達が検索して見つけてやり取りして民民の中で話付いて入ってくるみたいな話ですよね。だから、特に初動だと思いますけど、その地域のことをうまく発信できるようなＵＩターン者をどう獲得しておくかって言うことがすごくでかいというとこですね。

３番目は移住者とその地域を結ぶ者がいるか、先程の邑南町というとこの例でもこれでしたけれども、要は移住者の方と地域の方って当たり前感が違いますよねで。当たり前感が違うからハレーションが起きることがあって、それはハレーションが起きると、地域の人にとってアレルギーになる、入ってくれる希望者の人にとって、そういう悪いようなうわさが広がるみたいなとこがあるので、仲介する人が必要で、特に地域で相談があった時に受けて話を聞いていてああ、この人できそうだなっていうものを入れるみたいな感じの流れっていうのはすごく重要になってきているかなというふうに思います。地域の受け入れ体制です。

それから４番目です。これはどっちかっていうと上の３つが転入だったんですけれども、４番目は転出の話です。何かというと、そのＵＩターンが無理なく、関われるコミュニティーづくりが進んでいるかっていうとこですね。言ってしまえば、例えば新しく入ってこられても、その地域ですごく活動して、いろんなことやっていて負担が重いとか、ここのところ改善されたらいいのになという意見が出しにくくてずっとそのまま続いているとやっぱもう一回出ていくんですよね。もしくはそこに住んでいる人も出て行ったりという話もよく聞きます。なので要はその地域活動への若者の関わりやすさみたいなのがすごく影響してくるというところですね。という４つぐらい条件があるかなと思います。

今は条件で見ましたけれども、もう一つ実際に住んでいる方達で、かつ子育て世代の増加傾向の強い8つの市町村さんでアンケートをやっています。全数調査ですね。その傾向から2点ほど重要なことがあるので、合わせてお話をしておきたいと思います。1点目がその子育て世代が居住地を決定する際に重視したことは何なのかというところです。全若者層で共通しているのが何だったかっていうと、職場の近さとか家族の時間だったんです。本の中はよく定住とか言うと地域の魅力を発信してと言うじゃないですか。だけど、私の感触だともっと若い人達は現実的だと思います。実際的だと思います。要は、こういう棚田がかかわるとかいうことも含めてと思いますけれども、自分のやりたいことをやるための時間が欲しいからとか、家族一緒の時間が欲しいからっていうとこに理由があるんですね。そうすると職場の近さというのはすごく重要になるということです。もう一つはUターンで特に高い項目があります。それが何かというと相談をする人がいるからとか、同世代の付き合いなんです。何かって言うと、仕事や子育て環境っていうのが一つあるんですけれども、それプラスですね。やっぱり出ていった地域の元々の大人とか同世代と良好な関係があるかどうかなんですね。でもよく考えて言うと当たり前の話ですよね。そこで嫌な思いをした人が、あの地域の外に出て行って戻ってくるかっていうと、どんなに好条件でもなかなか戻ってこないですよねというようなところがあります。もう一つですけれども、視点をちょっとお話しします。それは子育て世代の実際に住まれている方のその満足度の話です。満足しているところがどこかの話です。治安の良さっていうのがあります。あと職場の近さっていうのがここでも出てきます。それから、あとは自然の豊かさというのが出てきます。この中にもちろん景観というのも含まれます。その満足度が低いとこはどこかっていうと、一つは生活の利便性っていうのが出てきます。これは買い物とか通院とか学校の近さとか、そういうとこですよね。それからやっぱりここでもう一つ出てくるのが、若者が意見を言いやすい環境というのがでてきます。さっきの地域活動で関わりやすいかどうかっていうとこと共通していますよね。それから、子供の学外での学習環境とかクラブ活動の環境みたいなのがあります。なので子育て世代が、地域に住み続けるという時に、大切な時には生活利便性プラスこの若者が意見を言いやすいとか地域の状況とか、それから子供の学外環境みたいなのが影響しているということですね。それをちょっと最後ポイントでまとめています。今後のその若者定住対策で必要な視点というようなとこです。5つあるという風に整理をしています。一つは住宅の供給体制で、2がその子育て世帯に必要なサービスとか生活機能です。3番目がその身近な職場の確保で4番目が先ほどもお話しした、子供の学外での学習環境で、5番目もこのうち若者世代が関わり易い地域づくりです。見ていただきたいのが、一番右のところの表の一番右です。何かっていうと定住する動機へどう作用しているのかっていうことですね。定住の時ってよく1番2番という話で言われますよね。1番2番が大切なんです。だけど、ここでできることっていうのは暮らすことができるっていうことなんですよね。じゃ3番目の職場のとこはどこかっていうと暮らしやすいなんですよ。4番目、5番目のとこはどうかっていうと、要するにこういう風なことっていうのが条件で揃っていると暮らし続けたいというとこにかかわってくることなんですよね。親がその暮らし続けたいと思えば、それって子供に良い影響を与えると思いますよね。

要するに、子供の将来の故郷との関係にも影響してくるっていうことです。それで、そこを担うのがどこかって言うと4番目のところ、学校と地域です。5番目はこれも地域になると思いますで、島根県の場合はこれ○○まちづくり協議会とか、そういうところがあって、地域運営組織って言われる公民館エリアで、取り組むようなとこが多いかなと思います。それを意識的に取り組んでいるか、それが取り組める状況というのは別なんですけれども、単位としてはこういうところが取り組むのかなと思います。今日、地域の体制づくりの話をしましたけれども、地域の体制づくりでも重要なところかなと思っております。

今までもたくさんお話をしましたので、少し中活して4番目3番目の話に行きたいと思います。1点目ですけど、我々4つ目の人口変動期の減少局面にいるというとこです。地域づくりとか実際地域に住んでいる人、その認識が必要かなと思います。もちろん、その人口の下げ止めは必ず必要だと思っています。

それから2つ目ですね。特に地方において、都市部はやっぱり中山間地域からの人口供給とその人中山間地域の農林業が維持するインフラで、社会経済と生活環境が成立していると思います。したがって、中山間地域の維持ともに必須なんです。その必要なことは今日もお話しした若者定住、少子化対策とより少ない人口で暮らしていくための仕組みづくりです。定住対策では、もちろん転入とその転出減少の視点で対策が必要なんですけれども、Uターンの促進とか、それから転出減少には、若い人がかかわりやすい地域の体制をどう作っていくかっていうのがすごく重要になってくるんですね。ここら辺のところというのを次の話でもう少し掘り込んでいきたいと思います。

3番目の話に移っていきたいと思います。もう少しだけデータでお話ししますので、お付き合いください。より少ない人口で暮らしていく為の地域の体制で何が重要なのか。少し整理が必要かなと思っています。今ここでお見せしているのは、世帯の形の変化です。よく自助共助公助って言われますけれども、共助って、その地域の人、ちょっとの支え合いって言われておりますけれども、共助の最小単位とは、僕は世帯だと思うんですよ。なぜかっていうと、何でもその問題が起こったら、まず家族の中で問題の解決を目指します。それができない時に、実は地域課題っていう形で発生するんです。支えていくっていうことでしょう。だから、世帯っていうのが実はアップベースなんですね。一緒に住んでいる家族で、その形がどう変わるのか。これ島根県の19市町村の世帯の形の変化を表わしたもんですけれども、2010年から20年ですね。緑色の帯グラフありますね、これが何なのかというと3世代世帯です。ものすごい勢いで減っているのが分かると思います。それから赤色のところがぐっと伸びていますね。これが何かって言うと、65歳以上のお一人世帯です、その隣にあるのが何かって言うと、65歳以上の夫婦のみ世帯です。ここから言えることは、その全ての自治体で3世代世帯は減少して、65歳以上の一人世帯が増加していると、要は世帯が小規模化しているっていうことですよね。我々の方で検証しているんですけれども、じゃ人口が増えるところってそれから解消できるのかっていうと、我々の結論ではそういうことはありません。人口が増えるところで、もう世帯はきっと小さくなっていくと考えられます。なぜかというと、それは価値観だからです。みんながそれをそういうふうに特に若い層とか望んでいるからです。要するにこう人口がふえるところでも、世帯は小規模化していくっていうことであれば、若者定住対策の成否にかかわらず、その見守りとか移動支援とか生活支援とかの地域課題っていうのを拡大していくということです。これを踏まえておかないといけないと思います。その上で、もう一つの大きな単位である集落とか自治会はどうなのかというとこです。島根県でいうと集落のことを集落って言ったり、自治会とよって呼んだりするんで、集落と自治会という書き方をしています。ここの表わしている表っていうのが島根県の集落のその戸数とか高齢化率の状態を表わしているんですけれども、集落自治会は令和3年

度でいうと３５９０ぐらいあるんですねで、そのうちに我々がいつもトレースをしているのは、緑の網掛けの部分です。これが何かって言うと、高齢化率５０％以上かつ世帯数が１９戸以下のところです。あの大野先生が限界集落って呼んだものをニュアンス近いというふうに捉えてもらったらいいと思います。要するに、これ以上高齢化率が上がったり、世帯数が下がると、なかなか地域で支えるのが、対応していくのが難しくなってくるっていう一つのボーダーかなと思っています。これが全体に占める割合がどういうふうに変化しているのかって表わしているのが下の表なのですけれども、要は平成２６年の時には全体に占める割合は１６％だったんですね。だけど、令和3年になると２３．２％に上がってきているので、確実に小規模高齢化は進んでいるんですね。その中で、それが集落の活動にどういうふうな影響を及ぼすのかというところですね。上のグラフは、平成３０年に集落活動どんなものがありますかって全数調査してこう把握しているもんですけれども、この右の凡例がその種類ですね。赤い点線で囲っているところが特に多いところですけれども、まあ実施率からいうと、7割から８割ぐらいで寄り合いとか道路のとか集会所の維持管理とかお祭りとか運動会ですね。我々これを集落の基本活動と呼んでおります。この集落の基本活動プラス下の緑色のところが大体実施率3割から5割ぐらいかな。見守りとか、それから除雪活動とか、それから鳥獣害対策とか必要に応じてやられているというところです。これが小規模高齢化していくとどうなるのか。ところが、下の方のグラフになります。結論から言うと集落の基本活動って言われるところも実施率は下がっていく傾向にありますね。それからもう一つ特異なのは、その赤丸のところ、これが何かというと鳥獣害対策です。御存じのように住む人が少なくなると、獣と人間の境界線が人間寄りに寄っていくので、そうするともちろん田畑にも山林でも鳥獣害が発生しやすくなります。なので対策をしなくちゃいけないので、実施率が上がっていくというような感じです。要はこの集落活動が弱くなっていくと、地域に起こる問題って何だろというところです。これを我々はすごく重視しているんですけれども、それを表したのがこれなんですけれども、一番左がさっき言った集落基本活動というもので、その寄り合いとか道路の草刈りとか集会の場の維持管理とか祭りとかイベントなんですけれど、これができなくなってくるとあとはできなくなってくるものって見守りなんですね。見守りって何なのかっていうと気がけるっていうことですよね。あそこのおばあちゃん大丈夫かなって気かけるとか、新しく入ってきたあの人あのこと知っているかなって気かけるとか、そういうことですよね。どうして見守りが弱くなるかっていうと、やっぱこういう活動を通じて顔を合わせているんですよね。ちょっと会話をすると、要は関係性を維持しているから気かけるっていうのが出てくるんです。だから活動が弱くなっても関係性維持するのがすごく重要なんです。この見守る、気かけるっていうのができなくなってくると、何が起こるのかっていうと、災害時にあそこのおばあちゃん大丈夫かなとか。１週間あのおじいちゃん見てないけど、ちょっと覗くかなとか。ちょっと困った時相談したいんだけど、相談するのかなっていうのができなくなるんですよ。これ結構問題ですよね。これが根本的な問題かなと思っています。これと共にもう一つあって、同じくアンケートを全集落にやっているんですけど、今後拡大する生活課題何ですかっていうアンケートをもらっていますで、これは後で図は複雑なので、興味のある方はしっかり読み解いていただければと思いますけど、要は継続を危惧しているのは鳥獣害対策と島根県よく雪降るんで、除雪活動ですね。それから今後構造の充実が必要な活動ってことで、買い物支援とか交通手段とかふるさと教育みたいなのが挙げられています。今もろもろデータも挙げながら少しお話をしてきたんですけれどもこういった世帯とか、集落の小規模化がもたらすものって何だろうかというところです。それを改めて整理したのはこれです。一番左ところですね。世帯の小規模化。これは世帯の問題で発生するものの自己解決力が弱くなっていくということです。もう一つ。今度は集落が小規模化していくと、この基本的な集落活動ができなくなってくると後出てくるんですけれども、合わせてそれって小規模化した世帯の見守りとか問題共有ができなくなったり、それから身近な地域での困り事とか助けるとか緊急時の支援というのができなくなってくるってのが起こります。合わせて生活課題が今さっき言った買い物通院とか除雪とか鳥獣被害対策で拡大をしてくる。ここの帰結は何なんだろうかというと、年を取ったら安心して暮らせないエリアの拡大だというふうに思います。年をとったらってお話ししましたけれども、実はそれって次世代が定住できにくいエリアでもあるんです。それはそうですよね。だって若い人だって年を取って困るんだったら、なかなかそう見づらいと思いますよね。だからそういうことなんですよね。それでじゃこれから安心して暮らし続けていくために必要なこと。その地域の体制づくりで何なんだろうかというとこですね。基本的には２つの仕組みが必要かなというふうに思っています。一番上がさっき言った集落とか自治会です。今、世帯の小規模化と小集落の小規模化が起こっていて見守りとか相談、つなぎとかちょっとした手伝いができにくくなっていると、元気なところは元気にやればいいんですよ。だけれども弱くなったところのやっぱ補完が必要で、何の補完が必要かっていうと、やっぱこの見守りの部分とか顔を合わせなくなっているので、その顔の見えるコミュニケーション交流をどう確保していくかとかは特に重要なんですね。こういうところってやっぱり集落自治会よりもう少し広い範囲で公民館とか小学校区ぐらいのエリアで仕組みをつくってやっていくと、島根県は地域運営組織ＲＭＯという形でやらせてもらっています。実際に見守りして相談していく中で困ったことの中で対応できるもの。例えば、住民の方たちの草刈りとか、軽作業の支援とか定住受け入れというか、関係人口づくりというのもそこから発生してくると思いますということが１点目で、公民館とか小学校区ぐらいのところで、対応体制を補完的につくっていくことが重要だと考えています。それと同時に、もう一つの重要なのは、このＢのとこなんですよねで、これは今日の話からだいぶ外れると思いますけれども、生涯安心して暮らしていける互いの生活サービスの仕組みです。ディマンドとか訪問移動販売とか訪問型の看護とかですね。そういう話です。

少し、このＡとＢについて深掘りした具体的にお話をした上で、次に事例の方に移っていきたいというふうに思います。地域運営組織とか○○まちづくり協議会と言われますけど、先程言いましたように公民館とか。小学校区のエリアをカバーしているんですけど、内容は今までお話しした通りです。一つは集落でできなくなったことの補完です。なので見守りとか相談、役場へのつなぎ交流の場とか災害対応です。プラス集落単位でこの難しい取り組み、草刈りなどの軽作業支援とか定住関係人口をふるさと教育という色々なファクターが、実は今日もお話を聞いていた。この関係人口みたいなこととか定住とか草刈りのこととか、実はファクターの中で入ってくるんです。こういうふうなことを内容としてやっていると。構成員は地域住民プラス事務局で、島根県の場合は自治体が活動拠点語を提供しながら活動の支援って立ち上げたりとか、新しい活動する時の活動費みたいなところっていうのを助成したりしている状況ですかね。この地域運営組織ですけれども、概要でいうと、こんな感じで複数の集落を含んでいます。それからそれぞれ部会制で活動していると、防災とか見守りとか交流とかね。それプラスアルファのとこですけど、部会制って重要だと思いま

す。なぜというと、それぞれ自治会とかでやっている場合で、持ち回りでやることが多くてある人の時はできるけど、ある人の時は停滞するみたいなことって起こりがちなんですよね。だけど、もう今それじゃ間に合わないですよね。やっぱ必要なことってきちっと継続的に議論して改善しながら活動していくっていうことがすごく重要になる、ただみんな忙しいのでサポートする人材が必要なので特に連絡調整とか取りまとめとか、そういうとこって集落支援員とか地域おこし協力隊とかの制度も使いながらやっているとこが多いかなという感じです。

それからもう一つ、さっきのお話ししていた町全体での生涯安心して暮らしていけるための生活サービスの仕組みの話ですね。これ横出しになるので話すのをどうしようかなと思ったんですけど、まあ今日のこうメーンテーマからすると、もう一つの視点ていう話なんで、ちょっとこれも少しだけ触れておきます。暮らしっていうことを支えるための生活サービスの仕組み。もう一回考え直してく必要があると思います。ポイントは何かというと、やっぱり身体の状態に合わせて、買い物とか通院福祉とか金融機関とか役場を安心して利用できたり、地域活動の参加ができるような環境をどう構築していくかです。重要になるのが、ご高齢者の方の状態なんですよね。今まで高齢者の方の状態って運転できるかできないかで大体分けていたじゃないですか。だけど、実際にこういうことを考えようと思ったら、もう少し細かく分けておかないといけないと、何かというと車を運転できるか、近距離だったら運転できるか運転はできないけど、公共交通機関を利用できるか。それからその生活はできるけれども、足が弱くて公共機関が利用困難かというところです。今のディマンドバスとか、その公共交通のとこって対応しているのって状態２とか状態３のとこなんですよね。だけど、私の身の回りを見てももう状態４の人って結構増えてきています。だけど、そこに暮らし続けたいという方は、やっぱりできる限りそこに暮らしていただいたらいいですよね。そうするとどういうことかというと、やっぱ移動販売とか訪問看護とかですね。そういうものってのは重要になってくるんですよ。こういうふうなものを組み合わせていくことによって、これから変容していく社会を支えていくっていうことはすごく重要です。先ほどと同じ話になりますけど、こういうふうにして安心して年を取れる地域を作っていくということが、実は若い人が安心して定住できる地域をつくっていくことでもあります。そういう意味でも、これもインフラとして必ず必要なことだというところです。

脇道にそれましたけれども、また本題に戻りながら４番目の話に移っていきたいと思います。そういうふうに今お話ししてきた実際のその地域の体制づくりの課題と、それをどういうふうに今後こう進めていくかみたいなとこを事例も踏まえながらです。お話をして終わりたいと思います。これ先程お示しした図です。さっきちょっと横出ししちゃったんで、今からお話ししますのは、ここを単位ですよと公民館エリア小学校区エリアでの支えるための仕組みです。この島根県地域運営組織って呼んでいるものの話です。島根県の地域運営組織、どのぐらいあるのかっていう話もちょっとしておいきますと定義にもよりますけれども、例えば公民館以上の範囲域で２つ以上の異なる分野で広域的活動を行う団体を地域運営組織ってした場合、大体４２７団体ぐらいあります。そのうちの６割が大体自治会がベースになったり、○○まちづくり協議会みたいなところですね。後、４割が農村ＲＭＯの要するに農業法人がベースになっているやつとか、あとは地域包括ケアがベースになっていて、地区社会福祉協議会でやっているやつとか色んなパターンあるんです。こういうふうな中で組織が立ち上がっているんですけれども、島根県でいうと大体他の中国５県も近いとこあるんです。平成１９年ぐらいからこういうものっていうのがかなり進められてきたっていうところはあるんですけれども、結構岐路に来ているのかなと思っています。どういうことかっていうと停滞しているところ、それから元気になっているところが出てきています。これがどこによるのかっていうと一つのポイントになるのは、今日ずっとお話ししています。その地域の若い層が参加を回避しているのか、それとも参加していっているのかっていうところに大きな違いがあるかなと思っています。地域の体制づくりの今日的な課題っていうのは、地域の若い世代の参加とその先にある世代交代なんですね。このパターンが、それぞれどういうふうな構造的なものかっていうのもちょっとお示ししておきたいと思います。パンパンパンパンと図で書いているので、こんなにきれいじゃないよという言われとこあるかもしれませんけども、あくまで理屈として整理すると、言葉として整理するとこんな感じになるということで、受け取っていただければと思います。

島根県内でもとか、他のところでも地域運営組織を立ち上げられている、実際に地域づくり組織があって見守りとか住民との交流、住民間での交流みたいなのを中心にやられている、そういうふうな中で担い手の方はって言うと、やっぱ企画とか実働の部分というのをボランティアでやられているんですよね。ボランティアは凄く尊いことだと思います。だけど、地域の課題はもっと大きくなっていくんです。大きくなっていくと、負担が大きくなってく、負担が大きくなっていくと担い手はやっぱ減ってくるんですよね。担い手が減ってくると、メンバーが固定してくる、メンバーが固定してくると意見が出しにくい状況点が出てくるんですよね。意見が出しにくい状況が出てくると、活動が硬直してくる、そこにこういう組織だと、役場の方からの補助とかがあるので、実際に依頼みたいのも増えていく、そうすると義務感が上昇するんだけど、我々こういうことやりたかったよねっていうようなとこの創造性みたいなのが低下していくんですよね。それを次の世代見ていてどう思うかというとこなんです。参加回避するっていうようなことっていうのが出てきているかなと思います。

逆に元気になっているパターンはどうかみたいなこと言うと、その初動のところとか途中から企画とか実働する人は仕事として携わる、賃金とか給与が出るような状況っていうのを色んな助成金と、色々なことやりながら作られています。そうすると地域課題は拡大するんだけれども、取り組みが効率化されると新しい課題に対しても、その新しい視点で挑戦をしていくと、そういう風に良いことをしていくと、実は同じこれだったらできるのかなっていうことで、新たな参加者が生まれていって、その担い手が拡大していき、色んな人材が出てくると、そうすると色んな人材が出てくると掛け算で今度は新しい活動とかってのは生み出し易くなるんですよね。そうするとその事業が出てくると、財源の自由度みたいなのが高まる。勿論役場からの依頼は拡大してくんだけど、やっぱりもう全体的に行動力は上がっていくという風なこのパターンかなと思いますで、今からお話しするのはその元気になっているパターンみたいなところについて、最後事例をお話しして終わりたいというふうに思います。

地域の体制づくりの事例の紹介です。まず事例のポイントですけれども、一つはお話ししたように活動の要は集落とかで弱くなっている見守りとか相談事とか交流とかちょっとした手伝いみたいなものの補完なんですね。仕掛ける側っていうのは企画とか準備とか活動のコーディネートを特に行っているのはボランティアじゃなくて仕事として行っている。若い世代が動きやすい環境がしっかり作らてると、今日は時間の制約があってお話できないですけど、実はその為の話し合いと言うか、会議の効率的に行うのがポイントなんですね。４

番目ですけれども、ここで今までお話ししてきているのは今からも事例でお話しするようなものっていうのは、地域住民の努力のみで、暮らしで支える仕組みというのは作るもんでもないです。合わせて並行して定住とか交流とか医療とか福祉で行政の方でも作っていくっていうことが必要だと、先ほどもちょっとお話ししましたけれども、そういうことは前提としているという話です。

事例の話に入っていきたいというふうに思います。一つは、島根県の川本町の美原地区というところで未来塾です。今から話す事例にも立ち上げの時から私、大体伴走していますので、ただつぶさにお話することができます。まあ風景で言うとこんな感じですね。また、ちょっとこちらとはだいぶ風景が違いますよね。あの島根県って大きな山があんまりたくさんないんですよ。どっちかというと、小さい山がたくさんあって、その間に田んぼと集落が散在しているというような状況です。人口は５４８人で高齢化率も５５％ぐらいなんでかなり厳しいですよね。ここで地域の体制づくりをしていかれるということになります。始まりが２０１２年でした。４つ自治会でやらてられたんですけれども、役場の方でもモデルみたいなものがここだったらうまく作れるのかなみたいな話で、そういうキーパーソンもいらっしゃって、実際そういう話もあったので、少しお手伝いをすることにしました。実際には自治会長さんとか副会長さんとか青年部長さんとかですね。集まっていただいて、私の方から将来的にこのままいくと、人口このぐらいになりますけど、実際地域どうですかっていう話をさせてもらって、そうすると今だと自治会それぞれのとこで支え合っていて高齢者の方とかも手伝ったりもしているんだけど、できなくなることもあと１０年すると出てくるよねみたいな話っていうのが出てきて、じゃあちょっと一緒にやれること、できることないかねみたいな話になりました。実際に２０１４年ですね。その４つの自治会と、それから役場の主催で６回ぐらいですかね。細々したのもいっぱいあるんですけれども、話し合いをしました。自治会から推薦されている方、参加したい人を一本釣りしてでも入ってもらいたい人みたいな感じで入っていくと、本当にやっていることはシンプルで、これから何が必要かとか心配とか何をやっていた方がいいか、何をやりたいか何ができそうかみたいなことについて話をしていて、そのうちの前半３回ですかね。もう最初は普通に地域のいいところ。困っているとこ地域の魅力みたいなところを意見出してもらうと、若い人と女性の方は意見出しやすいようにグルーピングを工夫するみたいなことをやっています。それから、２番目のとこでの中で重要なところっていうのはどこかっていうんで４つぐらい出して３番目で４つのテーマでテーブルを作ってぐるぐる意見しながら意見を出すというとこです。３番目、結構重要なんですよね。ちょっと微に入り細に言っちゃいますけれども、組織って大体こうすべからく縦割りになると思っています、なので横横に良い。組織っていうのは横に口出しができる組織で、そういう風にしようと思ったら、最初の段階で自分は農業なんだけど、福祉の方でもこう思うみたいなところっていうのが意見できるような気風を作っておくことが重要で、そういう風なことを３番目のとこでやってるみたいなとこです。

実際にこれを大体やること固まってきたので３年間助成金がついて「さみはらの里プロジェクト」っていうものを立ち上げられました。やっていることが高齢者の作業支援と、竹の活用とそれから歴史文化の継承みたいなとこです。まず作業支援みたいな応援隊を立ち上げたらどうだろうみたいな話になりました。何をやったらいいかなっていう話になったんで、２，３件ぐらい聞き取り調査したらどうだろうっていう話になりまして、聞き取り調査って良いですよね。聞いてみると、何が困っているのかとか、自分が将来どういうふうになるのかで何が必要なのかみたいなことが分かってくるので、やっぱり、私事化していくというとこがあって、ちょっと試みてやってみるかっていうことで、応援隊の活動を開始して、それこそ田畑とか家周りの草刈りの作業とか墓掃除とかっていうのを支援の仕組みを作ると、まあまあこれだったらこの時給でいけるかなというような目安が付いたので、２００７年から本格稼働していくと、今、家の中の軽作業みたいのも手伝っておられたりします。それから後は交流の場作りですよね。交流とか接点が弱くなるっていうとこうあったんで、こういうのもちょっと初めてなれたんですけれども、最初は１か月に一回、半日人を付けてお菓子を置いてっていうとこで少し催し物をして人を集めみたいなこと言われたんですけども、２年目から健康福祉課さんていうとこから介護予防のことをここでできないかとか、それから教育委員会さんの方から子供のふるさと教育このメンバーでできないかみたいな話があって、更に予算が付いて今年２４回以上やられてらっしゃいます。それからあと竹堆肥研究会ってあるんですよ。この場所竹がすごく跋扈しているんですね。この竹をチップ化して堆肥にできないかと景観も良くなるしというようなところで試験的にやられて元々有機農業をやられているとこだったので、試験した結果、使えるようになったので、お米とかエゴマの有機栽培を始められています。エゴマの方はですね。県の特産品のモデル実証実験にも乗って、高級エゴマオイルってのを開発して販売開始されて、その流れの中で農業の方を新規でやりたいという方がエゴマの関係でＩターンされてみたいな形になってきています。こういう風にやりながら３カ年で終了したんですね。

それでどうするかなというようなとこで続けるか続けないかみたいなところも話し合いをして中心メンバーで未来塾を立ち上げてやるかということになりました。やるにあたって相談をして指定管理っていうのを受けるようになって、プラス集落周囲の活動費ももらいながら。Ｉターンの世帯の就農されてきた子育て中のお母さん二人をスタッフとして雇用されました。この二人が凄くいい動きをしていくんです。元々こういう形で作業支援をされていたんですけれども、その他コーヒーを飲む日とか昼食会の日とか、それから色んなサロン活動の支援とか、食文化の伝承のためのパンフレットを作ったり、映画作られたりするんですよね。フリーマーケットやっていかれたりします。若い人がこういう風に企画の中心にあるとその若い人に声を掛けるんですよね。そうすると元々、ここ御高齢の方とかがサロンとかで集まっているので、いい具合に交じっていくんですね。外の方にも発信していくので、地域外の若い世代も参加するというのは関係人口化ですよね。こういう風なことも起こっていくと凄くいい動きになってきているんですけれども、それを実現しているのは何かって言うと大きく２つあると思います。一つは企画運営とか支援活動に携わるスタッフはみんな有償だということです。賃金だったり、給与を貰ったりしてやられています。もう一つ重要なのは、こういう仕事しているときかれるんですけれども、どうしたら若い人に参加してもらえるかっていうキーワードなんだけど、お返ししているのがどういうことかって言うと、自分の企画にどうしたら参加してくれるかではなくて、どう若い人が企画をして動きやすい環境ができるかっていうとこなんですね。そのスタンスと視点の違いがすごく重要なんじゃないですかっていうお話をしています。それが、まさしく周りの大人の人達がそういう風に若い人が企画して動くのを見守っていらっしゃるというような状況を作られていらっしゃいます。若い人は若い人で自分達のツールを持っているので、動きをしていくんです。この人は映画を作りたいとで、自分の技術も学んでおられたんで、こんな映画を作られました。住民の方たち一人一人インタビューして、色んな風景、家

の風景とか農作業風景とかも映されて、それを編集して放映会みたいなのされています。これすごい効果あるんですよね。なぜって言うと、その若いスタッフの方二人はこれで、もうみんなと顔をつなぎになる訳ですよね。それからもう一つは、こういう風に自分が出ている映画ってみんな見たいんですよね。だから凄い人が集まってくる、彼らは彼らの形でうまくやっていくというようなところで、新しい技術も導入しながらこういう風なことやられているというのが１つ目の事例でした。

それからもう一つですね。事例をちょっと御紹介しておきます。これは同じく島根県の大邑南町の口羽地区というところです。写真を見てもらったら分かりますように、左側は棚田ですね。お話ししたようにこちらかんなぼりみたいなのが行なわれていて、たたらがあるので、そこに棚田が形成されています。川沿いにあるので、そういう町場みたいなのもあって、これを活動拠点で支えているというようなところですで、人口は６６０人ぐらいで、もう高齢化率６割を過ぎていますね。ここ色んなことをやっておられるんですよ。さっき言った軽作業支援もやられているし、買い物支援、それからディマンドバスのオペレーターの指定管理も受けられていますし、あとは中山間の直接支払いの事務の代行もされておられます。それから、農業法人の事務の代行もされておられます。新聞販売事業みたいなのも手がけられていたりします。ただここですね。凄い人数少ないので部会制さっき良いと言いましけれども、もうちょっと少ない人数でのやり方じゃないと無理だなっていう話になって、ここは事務局３人体制プラス登録人材チームっていうやり方をされていらっしゃいます。要は、すごく顔の広い人柄のいい所長さんがいらっしゃって、色んなことこなせる事務員の方がいらっしゃって、企画とか仕掛け役である非常勤のマネージャーさんがいらっしゃって、３つで大体回しているとで、後はもう色んな特技を持っている人一本釣りをしていて、登録人材チームにして必要な課題に対してチームを作って対応しているみたいな感じでやられています。ここも同じように聞き取り調査から始められています。聞き取り調査すると困り事とか、今後のその農地の意向とかも聞いていくんですけれども、そうするとコミュニケーションになるんですよね。自分達でこういう支援活動をやりますって言った時にあの人達だってなるじゃないですかなんで聞き取り調査やっぱりすごく重要だなというとこです。

そこで立ち上がったのがこのでごぉする隊というものです。作業支援隊ということですね。てごぉと言うは手伝うという意味なんですね。その写真にあるように草刈りが厳しくなったとこの作業の手伝いとか、家周りの作業の支援みたいなところをする隊を作られてらっしゃいます。それからあとはサロンバスっていって。お一人で運転免許の持たれてない方とか特に女性の方、皆さんとワイワイガヤガヤしゃべりたいというのがあるので、買い物プラス史跡見学みたいなツアーをやってらっしゃいます。これ人気で満員御礼ですね。それから後は授業とか収入源の要になっているのは事務局業ですね。中山間の直払い制度とか多面的機能の事務やられているし、農業法人の会計やられているし、指定管理の管理とかね。会計とかいろんなことやってらっしゃいます。新聞販売事業もやられているって話しました。こういうのを立てるとこういうことがどうしても起こってくるんですけど、例えば新聞販売業というのは民間民業ではあるんですけど、かなり公共性があるじゃないですかで、こういうとこはご高齢でやめられるっていう時に地域に迷惑が掛かるなと思われていて、あんた達やってくれんかねみたいな話。この組織に来て７人で１日交代だったら配達できるのかなっていうのと。まあ、高齢の女性の方にチラシ折り込みしてもらったらできるかなというので、やられてらっしゃいます。でも、これもですね。６６０人ですけども、売り上げいうと１０００万ぐらいあるんですよ。こんなのって結構あるんです。実は受け入れるとそれはちゃんと事業になっていくんです。

この横芝会館というところに事務局業で、いつもの人がいらっしゃるというような形ができていて、そこに新聞折り込みでご高齢の方おられるので、ワイワイガヤガヤしていると、ここ路線バスとかサロンバスの発着場にもなっていて、コーヒーも飲めるようにしていてで、最近の新しい展開だと若い人達っていうのがとても話しますけど、色んなこう活動をくらしの保健室とかふるさと塾とか関係人口作りみたいなのをやられていて、そういった活動を進めていくとイベント参加をきっかけにですね。ここのこと知るようになって、例えば集落の方が助成金の相談来られたりとか、高齢者の方がご相談こられたりとか、空き家の相談来られたりとかっていうのが出てきています。こういう事になると、色んな相談とか企画とかですね。ここんとこをこういう風にしたいんだけど、困っているんだけどみたいなのが持ち込まれるんです。ここの中でこの解決が検討されていくっていうのが自転し始めるというとこなんですね。実は我々の目指すところなんですね。

今新しいことやっているんですよ。何かっていうと少しずれちゃいますけれども、一つは、子供の自習室を作られたんですで、子供にアンケートするでしょう。何が欲しいですかって聞くとコンビニが欲しいって答えるんすよ。だけどコンビニっていろんな言葉の意味を含んでいて好きなもの買いたいってのと他にみんなでワイワイガヤガヤガチャガチャしたいっていうのがあるんですね。勉強なんかも家じゃなくて、友達としたいというようなところがあって、机を置いたら中学生が来始めて今小学生も来て、隣でおばあちゃんたちがチラシの折り込みやっているので、それも手伝ってそのお隣でおじさんが仮払い機のメンテナンスをしていたら、それも見ていてみたいな状況っていうのが生まれています。それから、もう一つは、ここの横芝会館はスペースがあるので、若い人達っていうのがあそこでいろんな仕事を始めていて一人はディマンドバスのオペレーターをやられていて、ＳＮＳ等を使って関係人口みたいなことを発信してやられたりします。もう一人は療法士さんで、これも役場から受託して作業療法みたいなことというのをこうやられていたりし、健康体操とかですね。色々最後お話ししましたけれども、これからの地域の体制づくりっていうと、今まで１層目のところでいろいろなまちづくり団体を作って、その見守りとか住民交流をやっていたんですけれども、これからその中心メンバーは同じでいいと思うんですけれども、経済事業をやると別にですね。何か特産品を作って販売してっていうこともその中にもちろんあっていいですけれども、それ以外にも実は財源みたいなのって結構あって、その指定管理とか、特に中山間の直払いの事務代行とかあると思うんですけども、そういうふうなことっていうのを経済規模の大きいところを会計もあるので、扱うために法人とかを立ち上げて同じメンバーでやってられてで、そういうのを担う人達っていうのはお仕事として担うので、賃金とかパートタイムだけど、給料が出るというような形にされていらっしゃると。そうやっていくと、活動の効率がアップしてスピード感が出てくると。でも若い人が関わりやすくなるんですね。若い人が関わりやすくなると、実は上のこの地域のいろんなことにも関わりっていうのも必ず出てくるんですよね。でそういう風な形で次の展開を目指していくのがいいかなという風に思っているのとあとはもう一つ。これもポイントだけをお伝えしますけど、こうやって地域活動へ子育て世代とか、若い世代が関わっていくと、子供たちにも伝播していくなという風に思っています。そのＵターンの方が、どういう背景でいうターンしているのかっていうのをうちの貫

田研究員がずっと調べているんですけれども、要はですね。Uターンの方っていうのは冒頭でも話しましたけれども、こう出身地と良好な関係があるんですよね。色んな体験されているとその中に農作業体験とかふるさと体験はもちろんすごく重要なんです。それと共にもう一つ重要なのはここの部分で。その親の世代の人たちの関係なんですね。親の世代の人たちっていうのが地域と良好な関わりを持っていると、子供たちはそれを見ている。それもふるさととのつながりなんですね。そうすると子供たちの将来のそれっていうのは関係人口化とかUターンとかみたいなことにもつながりになるというようなことというのも出ております。

もう時間が来たので、終わりにしたいと思いますけれども、今日はですね。テーマとして、人口減少期においての農業農山村をどう支えていくかというお話をしました。今日はお話の中に丸の２番の方を中心にお話ししましたね。住民が安心して暮らし続けられる。その地域の体制をどうつくっていくかです。中に見守りとか交流とか作業支援とか定住の受け入れとか関係人口の窓口みたいな事例の中でも少しお話ししています。これをやっていくとお話の中でも何となくそのイメージとしては伝わったらいいなと思うんですけれども、実はその農業を維持するこの仕組みにも、維持するということにもかかわっていくんですね。それはその担い手の確保であったりとか、関係人口づくりだったりとかね。その販路みたいなところだったりも、実はかかわっていくところがあると、なので２のところっていうのも１のところと合わせてしっかりと取り組んでいくということが、実は全体的に言って次世代への継承のところにとってすごく重要じゃないかというところで、最後の帰結とさせていただきたいと思います。

こう書いてあるようにできれば地域運営組織みたいなものがあって、その中で若い世代が参画しやすいような条件をつくっていくと、それっていうのは２番もよくなるし、１番の方にも波及してくると考えています。最後にもうまとめをして終わりたいと思います。この報告ですけれども、人口減少の局面でその農業農山村等をどう支えていくかについて、住民の方が暮らし続けるためにはどんな地域の体制が必要かというようなことを中心にお話しました。冒頭申しましたけれども、人口対策ですね。成功したとしても、ほとんどの地域では今よりも人口とか世帯というのは縮小し、担い手も減ります。したがって、より少ない人口で安心して暮らすことができる体制づくりっていうのは我々が必ず取り組まなくてはいけない事柄だと思っています。こういった地域の体制づくりですけれども、お話ししたように定住条件づくりでもありますね。年をとって安心して暮らしていける地域っていうのは、若い人が安心して暮らし続けられる地域だからです。この体制づくりの中で重要なのってこの若い世代のやりづらさが解消されたりとか、若い人が参画しやすい場として開かれていくっていうことが重要になって、その実現の要っていうのは仕掛け役、企画をするその事務局、もしくはスタッフの体制づくりです。今日お話しした事例ですね。スタッフとして、子育て世代の若い女性とか男性が雇用されて色んな企画に挑戦する中で参加が広がってそのままいい雰囲気に引かれて、またＩターンとか関係人口誘引しているというとこです。この彼らの挑戦というのは、その周りの大人たちの挑戦しやすい環境を作るというスタンスで支えられているとこがあります。若い世代にとってこう安心して暮らして関わりやすいところに次の世代の農村とか、農村の景観とかを継承することに必ず繋がると考えています。

農業農村を支えるっていうことをもう一つの視点からお話ししました。いつもとちょっと角度が違うかもしれませんけど、これからの皆さんの活動ですね。何らかお役に立てればいいなという風に考えております。私もまた現場で頑張っていきます。それぞれの立場で頑張っていきましょう。本日はどうも長時間ご清聴ありがとうございました。お疲れ様でした。

《資料：基調講演／有田 昭一郎氏》

次世代に引き継ぐための地域の体制づくり

2023年11月18日

島根県中山間地域研究センター
地域研究科　有田 昭一郎

島根県中山間地域研究センター

Mountainous Region Research Center

中山間地域を総合的に研究する研究機関（1998年４月～）

【自然科学】農業　畜産　キノコ　薬用植物　野生動物　育林　木材
【社会科学】コミュニティの構築・運営　移住・人口対策　スモールビジネス

研究員 29名、スタッフ62名

＜地域研究科＞ 研究員４名＋サポートスタッフ

島根県中山間活性化計画（第５期）R2～6年度

小さな拠点づくり　定住・担い手対策　田園回帰

地域運営組織
○安心して暮らし続けられる支合いの仕組（防災、見守り、生活支援等）
○生活機能の維持
○若者定住
○出身者
○少子化対策
人口縮小
集落機能の低下
昭和一桁世代の引退
生活機能の撤退

研究開発

コミュニティ分野を中心に、各分野での中長期的視点に立った手法開発、仕組みの構築、データの蓄積

- コミュニティ運営
- 生活機能維持の仕組み
- 若者定住条件
- 出身者との連携
- 少子化対策

連動

地域、県、市町村の地域振興の取組の技術的支援

県内各地の地域運営の仕組みづくり・市町村推進体制づくり支援、現場・市町村で必要な研修開発、ノウハウ開発

政策・事業フレーム
地域振興や人口・担い手対策を進める県や市町村への提案、政策・事業づくりの技術的サポート

地域運営の仕組み
小さな拠点づくりに取り組む、地域住民組織ならびに市町村を技術的にサポート、ノウハウ開発

人材育成（スキルアップ研修会等）
地域のリーダー、市町村職員等の知識、ノウハウ習得を、研修等を通し支援

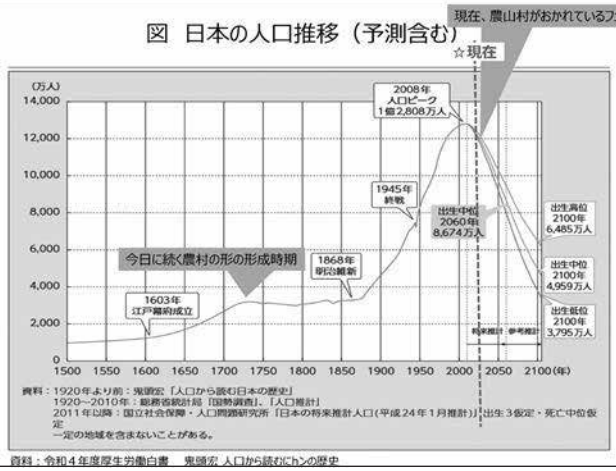
連携

県小さな拠点づくり地区担当、市町村担当、県関係機関担当等

はじめに
～日本の人口の動きと中山間地域～

はじめに　～本報告の視点～

図　日本の人口推移（予測含む）



資料：令和４年度厚生労働白書　鬼頭宏 人口から読むにhンの歴史

人口減少期において、農業・農山村（中山間地域）をどう支えていくか

棚田を守っていくこと

農業・農山村（中山間地域）を守っていくためには

①農業を維持する方法・仕組みづくり
・経済活動としての仕組み
・担い手の確保
・関係人口

②担い手（住民）が安心して暮らし続けるための地域の体制づくり
・共助(助け合い)の仕組み
・生活サービスの維持

島根県・中国地方

次世代への継承

話の流れ

1．島根県の状況と中山間地域振興の基本視点

2．若者定住と地域の体制

3．より少ない人口で暮らしていくための地域の体制みづくりの考え方

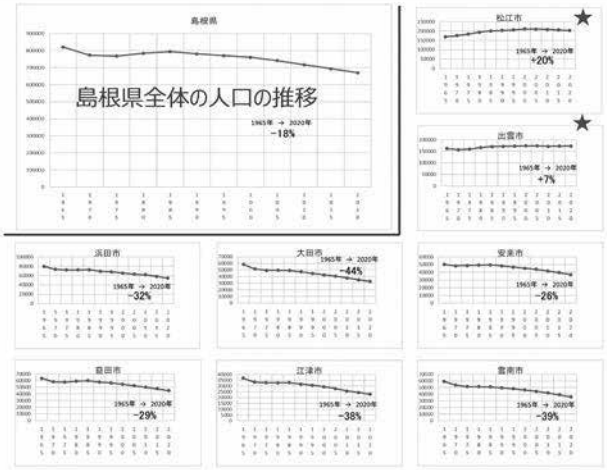
4．今日の地域づくりの課題とこれからの地域の体制づくり（事例）

5．おわりに

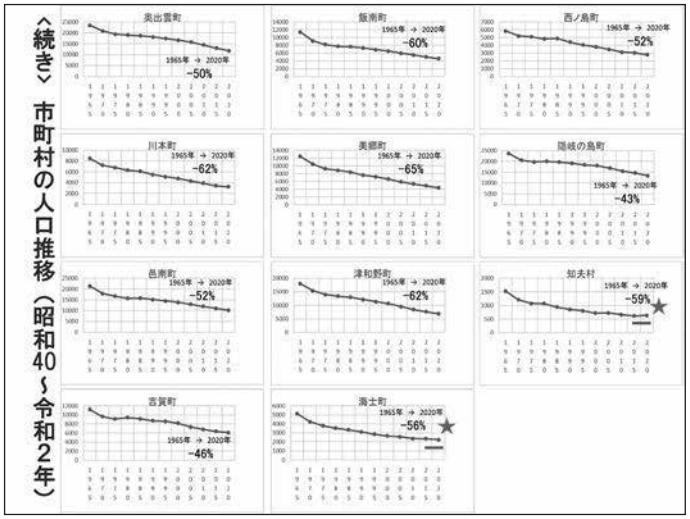
《資料：基調講演／有田 昭一郎氏》

1．島根県の状況と中山間地域振興の視点

①島根県の人口の状況



〈続き〉市町村の人口推移（昭和40～令和2年）

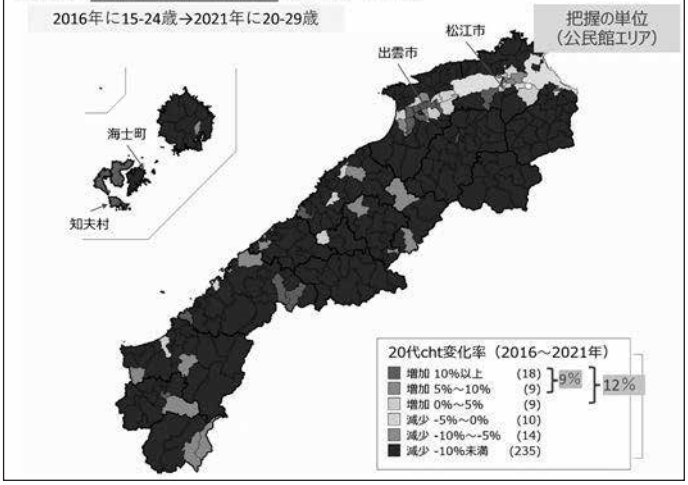


②島根県の人口増減の内訳（社会増減、自然増減）

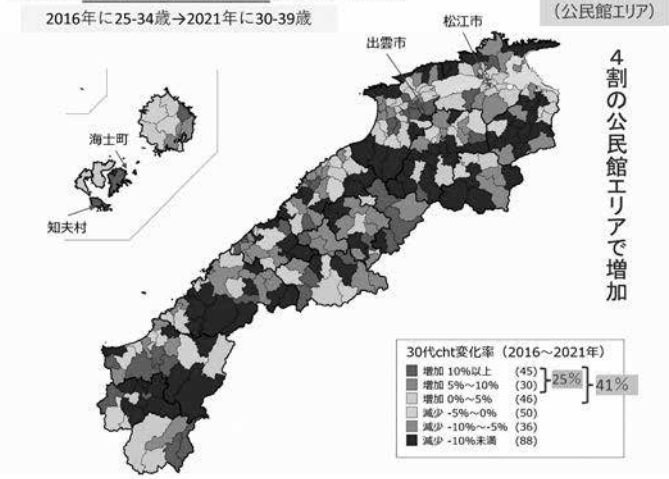
人口増減＝社会増減（転入者数−転出者数）＋自然増減（出生児数−死亡者数）

資料：島根県の人口動態

島根県：20歳代コーホート増減率（2016－2021）

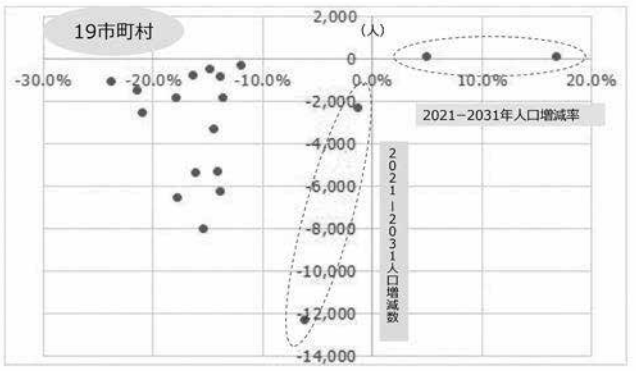


島根県 30歳代コーホート増減率（2016－2021）



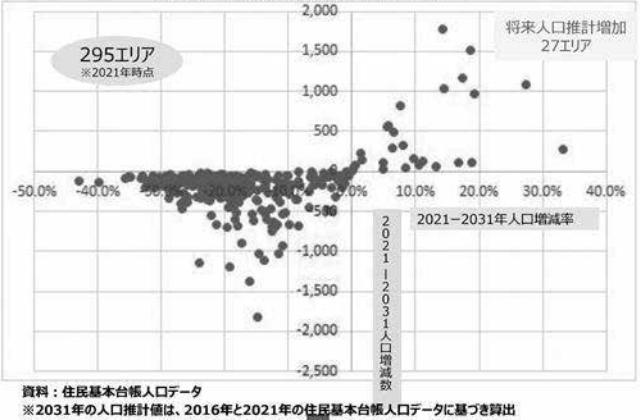
③今後の地域の人口増減の予測 2021年→2031年

県内19市町村：2021年から2031年へ：人口増減数、人口増減率の予測
※現在の人口動態がそのまま続いた場合



資料：住民基本台帳人口データ
※2031年の人口推計値は、2016年と2021年の住民基本台帳人口データに基づきセンサス変化率法で算出

295公民館エリア：2021年から2031年へ：人口増減数、人口増減率の予測
※現在の人口動態がそのまま続いた場合



資料：住民基本台帳人口データ
※2031年の人口推計値は、2016年と2021年の住民基本台帳人口データに基づき算出

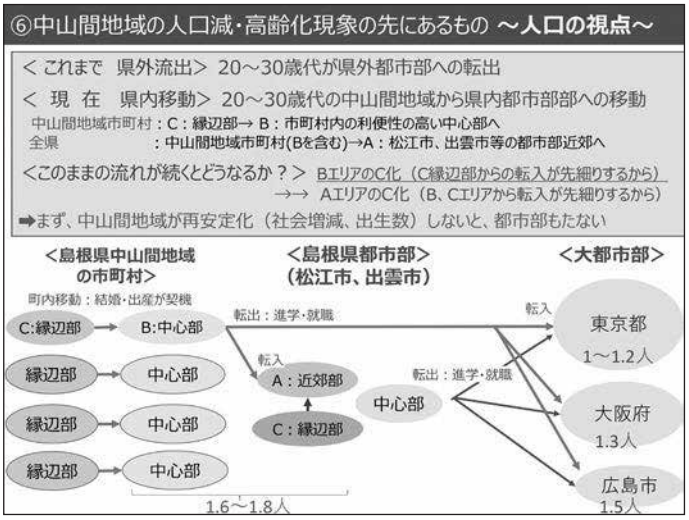
大部分の地域では人口は現在より縮小

《資料：基調講演／有田 昭一郎氏》

④島根県内の人口の動き（昭和旧村＝1950年単位）

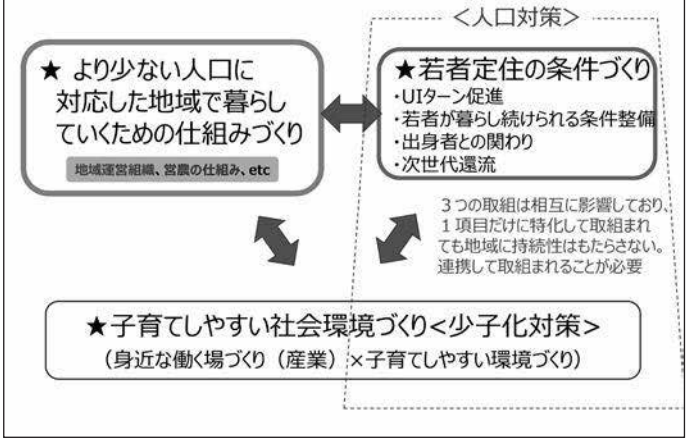
⑤今後、中山間地域で人口減少が更に進むと

⑥中山間地域の人口減・高齢化現象の先にあるもの ～人口の視点～



⑦中山間地域の人口減・高齢化現象の先にあるもの ～食料・文化・防災～

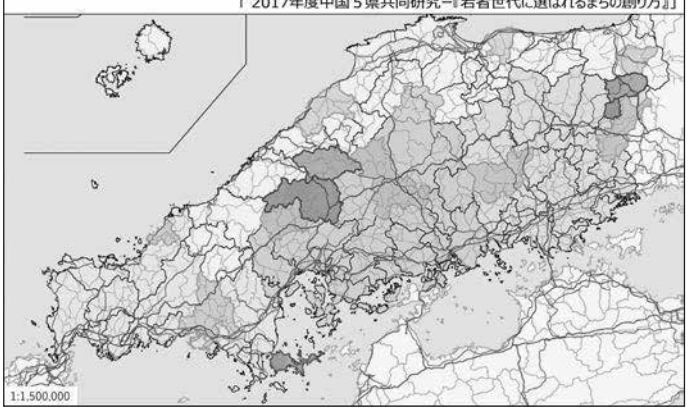
⑧今後、中山間地域（農山村）の地域づくりで必要になる３つの視点

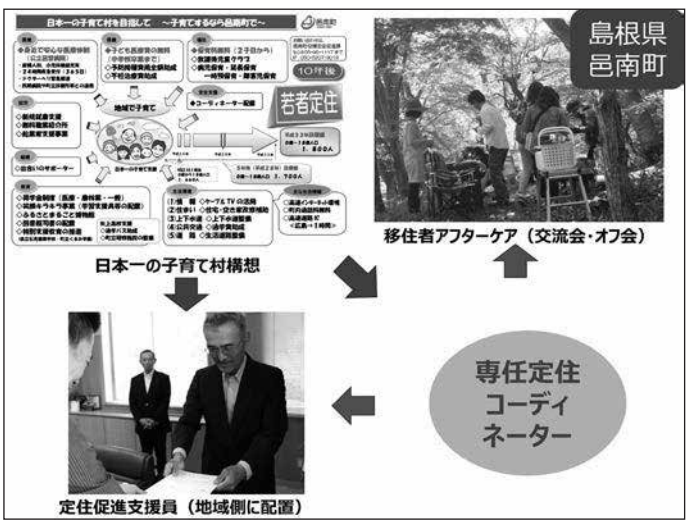


2．若者定住と地域の体制

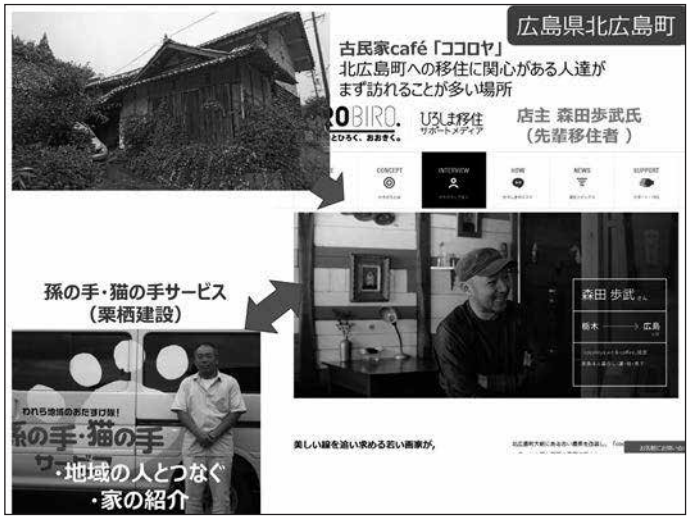
①若者世代が増加している自治体と減少する自治体で何が異なるか？

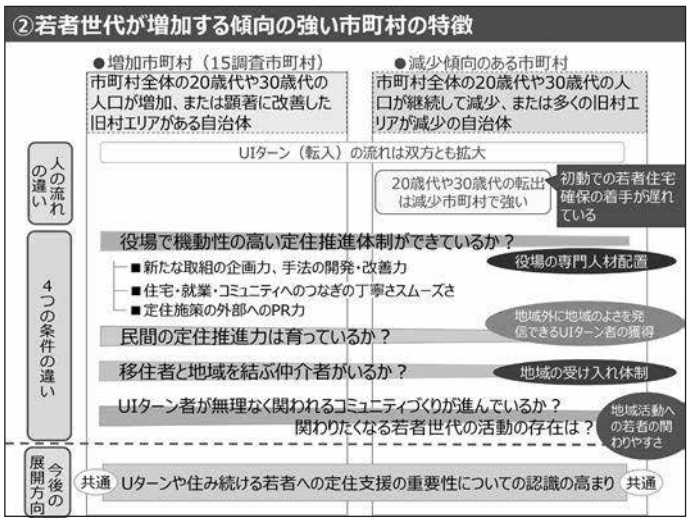
若者世代が増加している中山間地域市町村へのヒアリング調査（15市町村）
「定住施策」、「施策実施体制」、「企業・NPO等民間組織の役割」、「地域の受入体制」
「２０１７年度中国５県共同研究－『若者世代に選ばれるまちの創り方』」

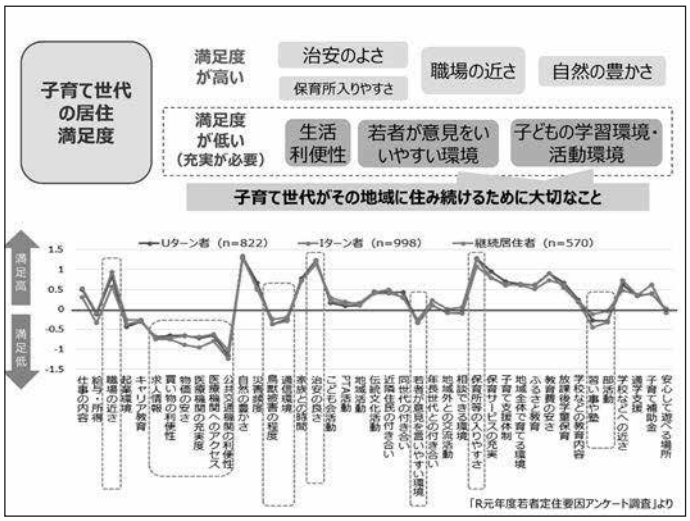




《資料：基調講演／有田 昭一郎氏》







《資料：基調講演／有田 昭一郎氏》

中括

○我々は、第４期つ目の人口変動期の減少局面期にいる。地域づくりに携わる者その認識が必要　※勿論、人口の下げ止めは必ず必要

○地方においては都市部は中山間地域からの人口供給、中山間地域の農林業が維持するインフラで、社会と生活環境で成立。
従って、中山間地域の維持が必須

○そのためにに必要な取組は、「若者定住対策」、「より少ない人口で暮らしていくための仕組みづくり」「少子化対策」

○定住対策では、転入増加（UIターン促進）、転出減少の視点で対策が必要。Uターンの促進や転出減少には、若者が関わりやすい地域の体制（地域運営組織）が不可欠。

３．より少ない人口で暮らしていくための地域の体制づくりの考え方

①世帯の変化　世帯・・・“共助”の最小単位～

【全県】 島根県19市町村の世帯構造の変化（2010～2020年）

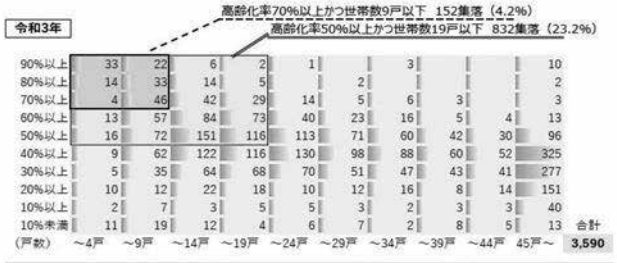
全ての自治体で３世代世帯減少、ほとんどの市町村で、65歳以上一人世帯が増加

将来的に人口が増えると予測されている地域でも、世帯は小規模化していく

若者定住対策の成否にかかわらず、見守り、移動支援、生活支援等の地域課題は拡大

②集落・自治会の変化 ・・・世帯の次に住民に身近な“共助”の単位

【全県】 集落（自治会）の戸数と高齢化率の推移

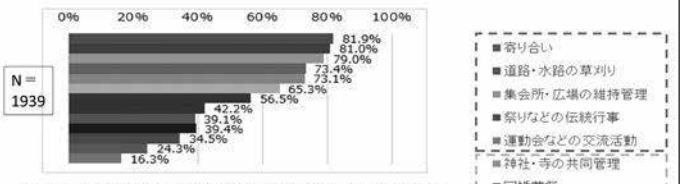


	H26	H30	R3
高齢化率50%かつ世帯数19戸以下（小規模高齢化集落）	536 集落 (16.0%)	739 集落 (21.4%)	832 集落 (23.2%)
高齢化率70%かつ世帯数9戸以下（超小規模高齢化集落）	77 集落 (2.3%)	118 集落 (3.4%)	152 集落 (4.2%)

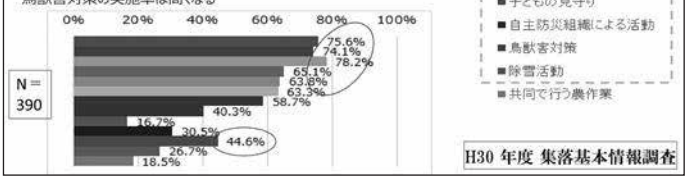
資料：2021年度島根県地域実態調査

ア．集落（自治会）の小規模高齢化は地域活動にどんな影響を及ぼすか

【県平均】
「寄り合い」「道路・水路の草刈り」「集会所・広場の維持管理」「祭りなどの伝統行事」「運動会などの交流活動」の実施率が高い　…集落の基本活動

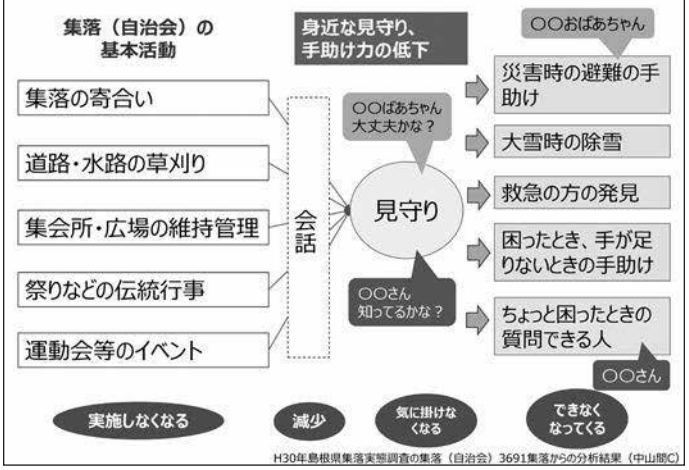


【小規模高齢化集落（高齢化率50%以上かつ世帯数19戸以下）
集落の基本活動の実施率は低くなる傾向
鳥獣害対策の実施率は高くなる



H30 年度 集落基本情報調査

イ．集落（自治会）の小規模高齢化により起こる根本的な問題



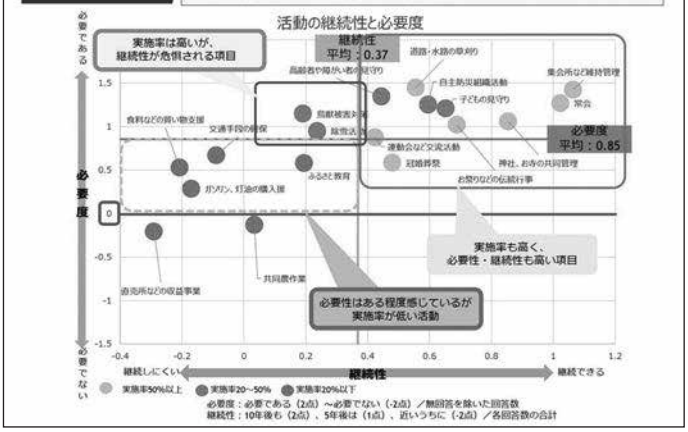
H30年島根県集落実態調査の集落（自治会）3691集落からの分析結果（中山間C）

ウ．集落(自治会)の小規模高齢化により拡大する生活課題

集落代表者アンケート 3,691 集落平均

今後実施が必要 ➡ 買物支援、交通手段確保、ふるさと教育等
今後継続を危惧 ➡ 鳥獣対策、除雪活動

活動の継続性と必要度



必要度：必要である（2点）～必要でない（-2点）／無回答を除いた回答数
継続性：10年後も（2点）、5年後は（1点）、近いうちに（-2点）／各回答数の合計

③世帯と集落（自治会）の小規模高齢化がもたらすもの

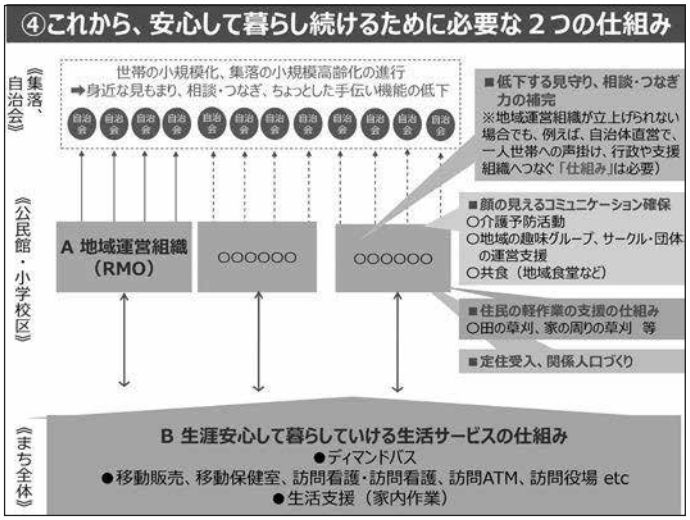
イ 集落（自治会）の小規模高齢化
↓
基本的な集落活動の弱体化
（常会、道路・水路草刈、祭り、集会所管理、イベント）
↓
ア 世帯の小規模化
（独居高齢世帯等の増加）
↓
世帯の自己解決力の低下

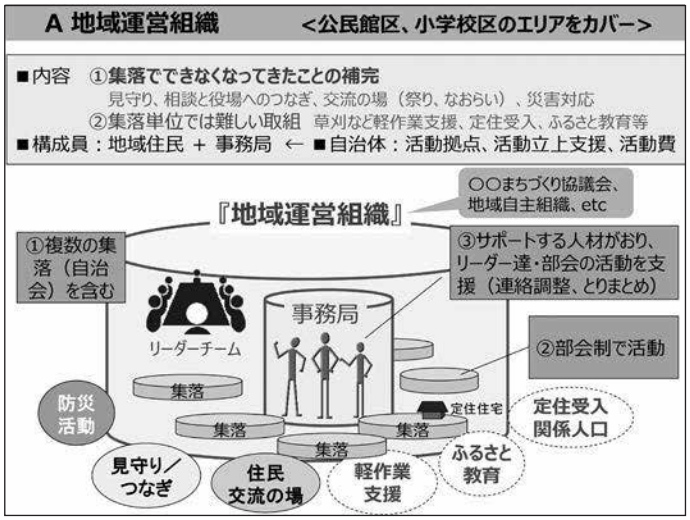
見守り力、問題共有力の低下
↓
身近な地域での困り事手助け力、緊急時支援力の低下

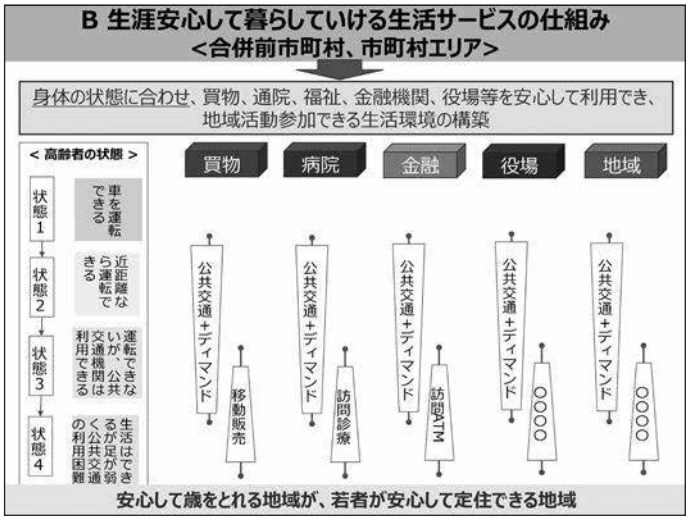
年をとったら安心して暮らせないエリアの拡大 ＝ 次世代が定住できないエリアの拡大

ウ 生活課題の拡大
↑
買物、通院困難者の拡大
除雪、鳥獣害対策等の困難地域の拡大

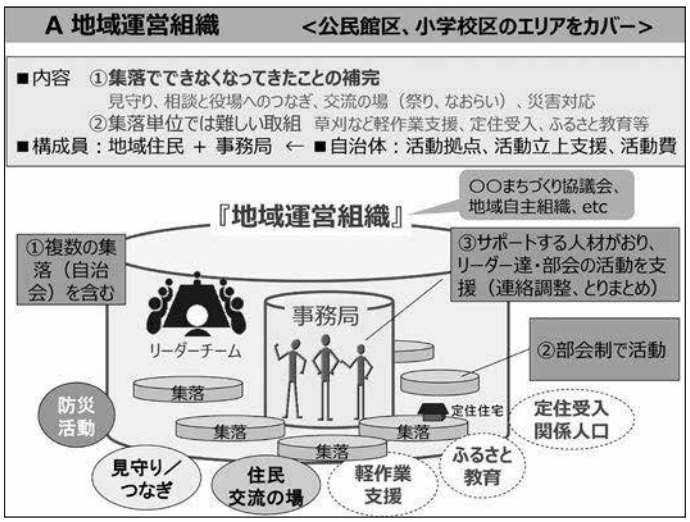
《資料：基調講演／有田 昭一郎氏》

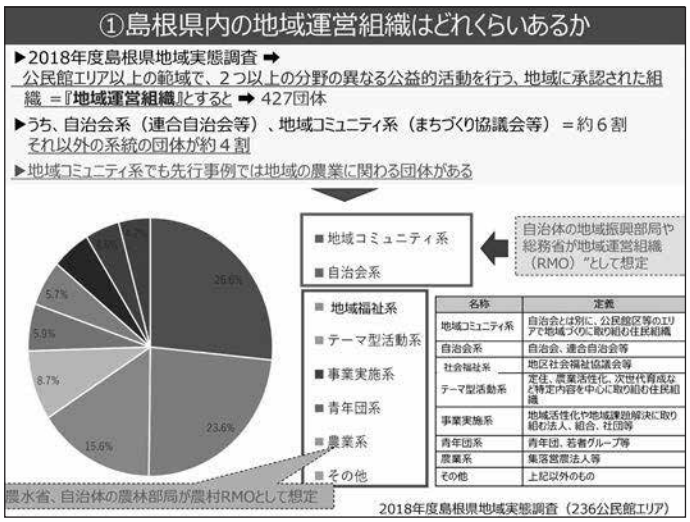




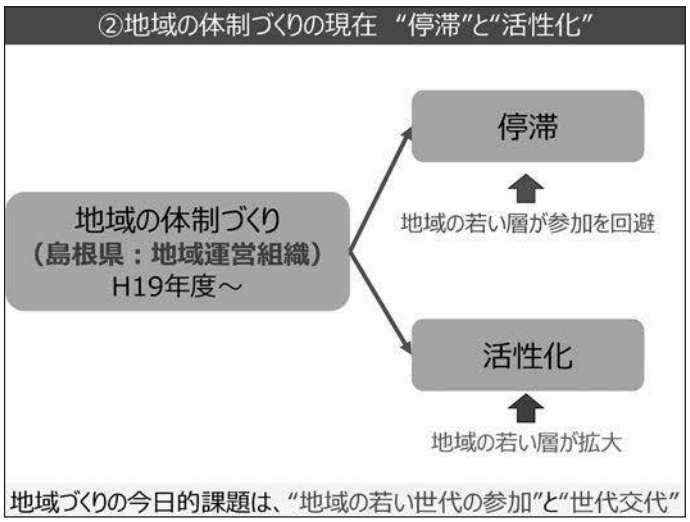


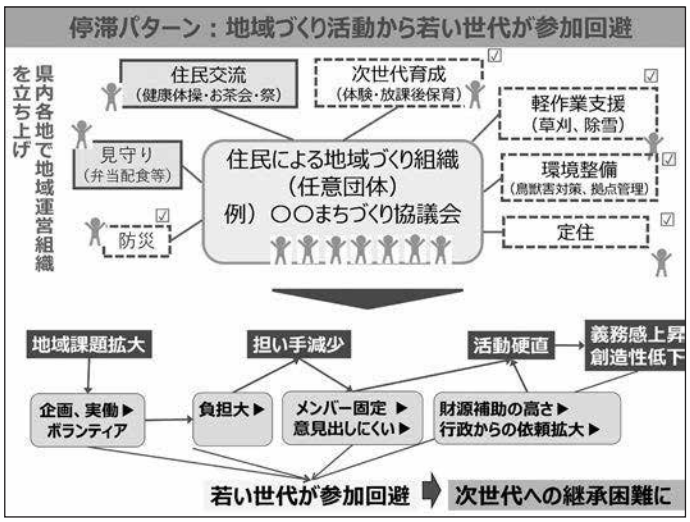
4．今日の地域づくりの課題とこれからの地域の体制づくり（事例）



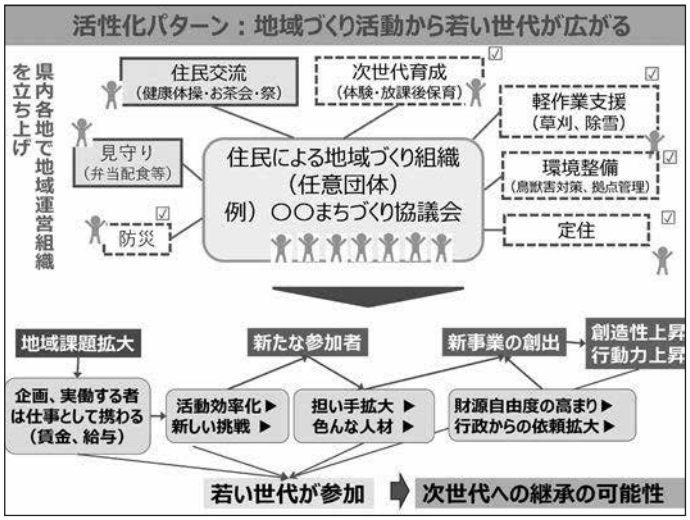


名称	定義
地域コミュニティ系	自治会とは別に、公民館区等のエリアで地域づくりに取り組む住民組織
自治会系	自治会、連合自治会等
社会福祉系	地区社会福祉協議会等
テーマ型活動系	定住、農業活性化、次世代育成など特定内容を中心に取り組む住民組織
事業実施系	地域活性化や地域課題解決に取り組む法人、組合、社団等
青年団系	青年団、若者グループ等
農業系	集落営農法人等
その他	上記以外のもの





《資料：基調講演／有田 昭一郎氏》



② 地域の体制づくりの事例紹介 ～次世代への地域の継承を目指して～

<事例のポイント>

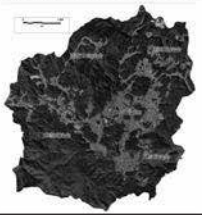
○"地域運営組織の活動の要"は、集落・自治会の単位で弱くなってくる「見守り」、「相談事・困り事の行政へのつなぎ」、「交流の機会（住民達が顔を合わせられる機会）」、「草刈など軽作業の活動」の補完

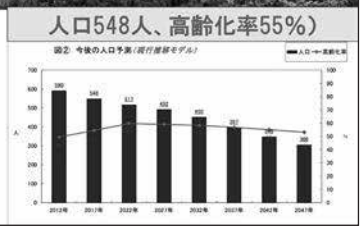
○仕掛ける側（企画、準備、活動のコーディネートを行う者）はボランティアではなく、仕事として行っている

○若い世代が動きやすい環境がしっかりつくられている
※実はそのためには、会議の効率化もポイント

○地域の努力のみで、暮らしを支える仕組みはつくれるものではなく、行政による定住、交通、医療、福祉等と併せて実現

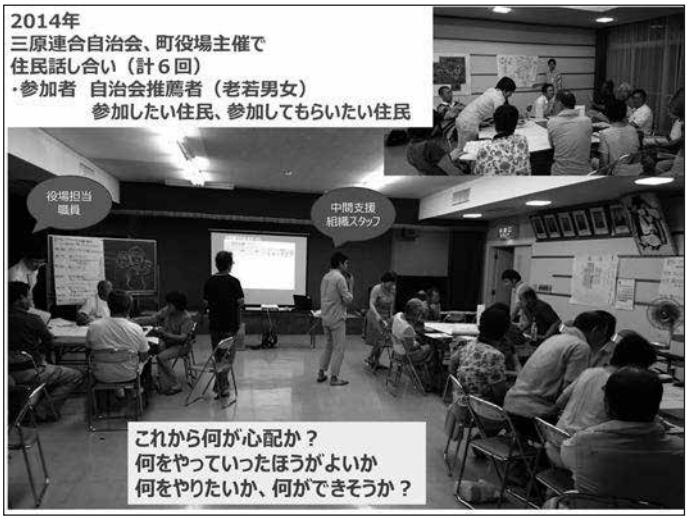
<事例１>島根県川本町三原地区 「未来塾」 ～立ち上げからの流れを含めて～

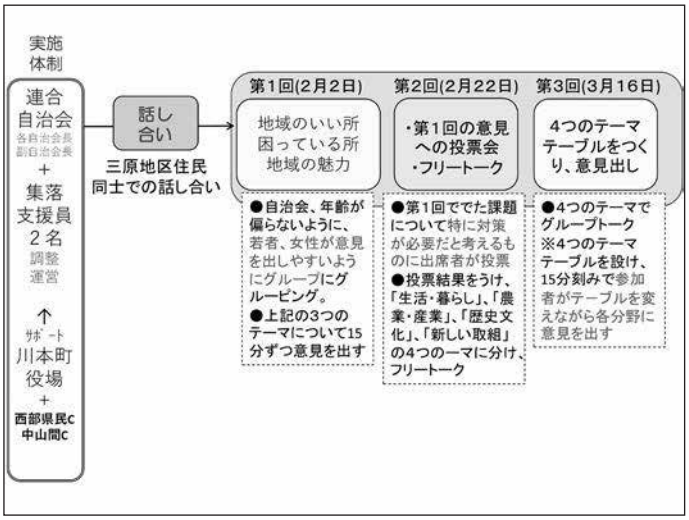


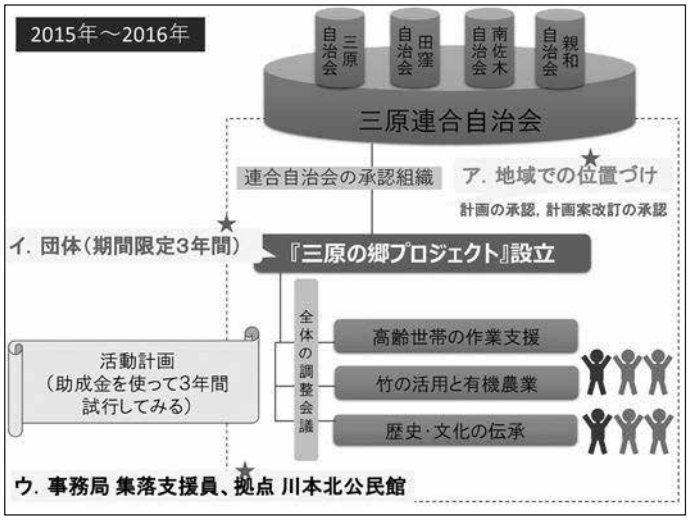


はじまり（2012年）
・三原連合自治会（４つの自治会から構成）
・各自治会の会長、副会長、青年部長でこれから地域の人口、自治会活動、農業のことがどうなりそうか、等を意見交換を皮切りに
→将来、自治会単位ではできなくなることが沢山でてくる

2014年
三原連合自治会、町役場主催で
住民話し合い（計６回）
・参加者　自治会推薦者（老若男女）
参加したい住民、参加してもらいたい住民







暮らし・生活

■応援隊（ほ場や家の周りの草刈、家庭内作業支援）
・2014年　（動機）それぞれ自治会でひとり暮らしのお年寄りを草刈等手助けしているが近い将来手が回らなくなる
・2015年1月　メンバーでひとり暮らし世帯聞き取り調査
・2015年8月　メンバーで暮らし応援隊試行開始
（田畑、家回り草刈り作業、墓掃除作業）
参加者拡大募る
・2017年度～　本格稼働
活動内容の広がり（家周囲樹木の剪定、窓ふき等家庭内支援）

画像：miharanosato.blog.spot.com

《資料：基調講演／有田 昭一郎氏》

■わいがやサロン（交流の場づくり）

・2015年4月　井戸端サロン試行開始（月１回程度）
・2015年9月　井戸端サロン定例化（月１回9～16時定例化）
・2016年4月　サロン月２回へ→教育委員会、社会福祉協議会との連携
　・健康福祉課→年６回 健康づくり、介護予防、健診、調理実習等
　・教育委員会→親子自然体験、子どもふるさと教育、歴史探訪等
・役場の予算化で事業継続

竹堆肥研究会

・2015～2016年　竹林の伐採と竹チップを使った堆肥製造試験
　土壌検査技術の導入と有機農業での栽培試験
・2016年～　竹堆肥を使用した米・農産物栽培実験、希望者の試用開始
　※川本町特産のエゴマ（有機栽培）での利用に注力
・2018年度現在
　竹堆肥を使用した有機米の栽培
　川本エゴマの会のエゴマ有機的栽培→県特産品モデル実証実験
　エゴマによる高級エゴマオイルの開発・販売開始
　川本エゴマの会で新規就農者の研修受入の取組開始→Iターン者

画像：miharanosato.blog.spot.com

■三原の郷プロジェクト終了 → 実践活動グループ『未来塾』立上

・2017年　活動拠点となる公民館の管理・運営を「未来塾」で受託
　Iターン世帯の子育て中の女性２名をスタッフ雇用　➡若い世代との繋がりの要

・2018年～　<生活支援> 草刈、家回り・家内作業支援（暮らし応援隊）

主な活動
　<交流> コーヒーの日、スープの日（昼食会）
　サロン活動やサークル活動支援
　<伝承> 食文化伝承、映画作成と鑑賞会等
　高齢者 ＋ 新規定住者、就農者を支える場に

重要なのは「どうしたら若い人に参加してもらえるか」でなく、「どう若い人が動きやすい環境をつくるか」

★賃金　企画運営、支援活動に携わるスタッフは全て有償（仕事として関わる）
★財源　主に公民館指定管理料、集落支援員制度、手数料

画像：miharanosato.blog.spot.com

活動拠点：川本北公民館
（旧三原小学校）

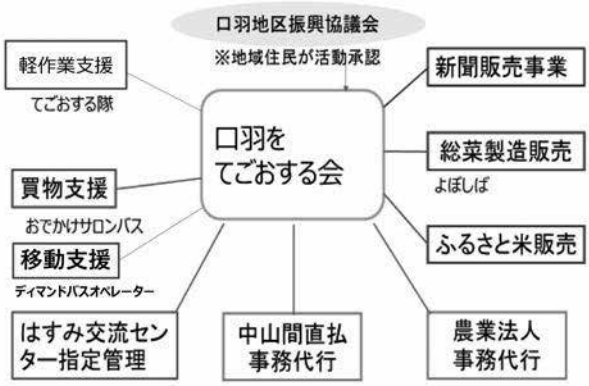
自主製作映画

＜事例２＞邑南町口羽地区「口羽をてごをする会」

口羽地区
人口656人、高齢化率57%）

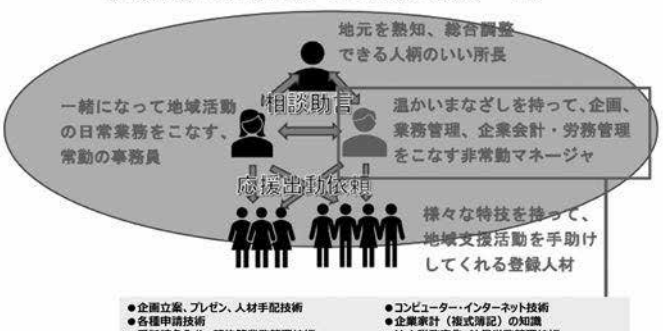
活動拠点：よぼしば会館

口羽をてごおする会の活動内容



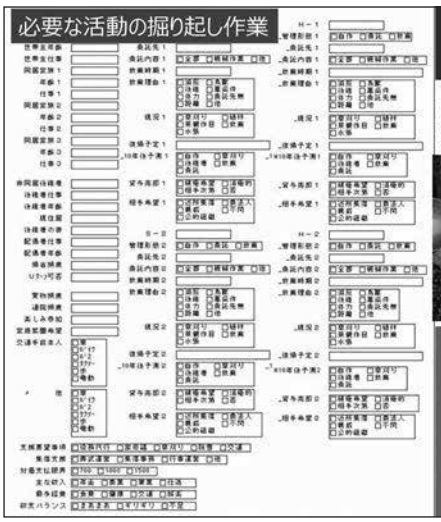
担い手が少ないため部会は立上げず以下の体制で活動

事務局３人体制＋登録人材チーム



資料：NPOひろしまね小田博之氏の資料より引用

必要な活動の掘り起し作業



０ 戸別聞き取り調査 ★活動の出発点

まずは住民の方々とのしっかりコミュニケーション！
会話できる関係づくりから！！

○生活での困りごと（支援ニーズ）
○家屋・農地の現状 今後の利用意向
○後継者の有無
○他出している子供さんの状況、つながり方

《資料：基調講演／有田 昭一郎氏》

①手ごぉする隊を組織
○窓口＝地区社協→単独
○対象年齢：制限なし
○利用料金
シルバー人材センター料金準拠

○てごぉ協力隊設立・登録募集（32名）
○てごぉ協力隊の支援活動開始
草刈り・田の荒起こし・墓掃除

てごぉ隊登録用紙

申込書　手ごぉする会支援隊員として、参加希望します。

氏名			住所	大字　番地	
生年月日	年 月 日（ 歳）		集落名		
自宅電話			作業従事可能時間（当てはまるものに全て○を）	・空いている時はいつでも ・平日のみ　・一日中 ・土日祭日のみ　・午前中 ・午後	
携帯電話					
通信環境	・ファックスもある ・インターネットもつながる				

■ どんな仕事ができますか。可能なものは全て○をして下さい。

・一般事務（書類作成等）	・屋根用補等修繕	・野菜の種袋詰め作業
・会計管理（帳簿、通帳管理）	・草刈り機作業	・竹刈り、間伐作業
・コンピュータ操作	・電気設置	・農機具運転
・アンケート調査訪問	・除雪作業	・重機の運転
・高齢者世帯訪問ご用聞き	・田畑合状見回り	・大型車運転
・配布物を配る	・墓式準備手伝い	・農産物直売運送
・家事手伝い	・祭典御神行手伝い	・牛の給餌等軽作業
・配食弁当づくり　その他（　　）		

■ その他ご意見ご要望

支援活動の実施は携帯メールアドレスに一斉案内したいと思いますので、
可能ならばメールアドレスを教えてください。
（　　@　　）

定期的実施（月1～2回）　②サロンバス運営

てごぉする会

お出かけサロンバスのご案内

「銀山街道を訪ねる旅①」

世界遺産を見物がてら…銀山に関する史跡をたずねる旅をしませんか。
楽しみながら、学びながら、また明日への元気を取り戻しましょう？！

- 運行日：7月19日（月祝）と　7月22日（木）
  都合にあわせて希望の日（第1希望、第2希望）をお申込み下さい。
  可能な限り皆さんが参加できるように人数調整させて頂きます。
- 行き先：大森銀山
  石見から大森銀山までいろいろな史跡を訪ねていきます。
- 参加費：1500円
  （旅行き先での入館料、昼食代等は各自でご負担下さい）
- 参加資格：65歳以上（口羽地区にお住まい方）
- 申込締切：7月15日　までにご連絡下さい。
- 申込・お問合せ：てごぉする会 事務局
  電話　87－0140　（中村まで）

※ 旅行日は、参加者の状況により、若くまでお迎えに参ります。遠りも同様に、お送りしますので、交通手段についてはご心配なく、お申し込み下さい。
（開始時刻：00くらいから順次お迎えに行き、夕方6時までには、全員をお送りできると思います。）
※参加費には当日の旅行保険加入料も含んでいますので、安心してご参加下さい。
※年に3回程度のお出かけサロンバスの運行を予定しています。
その折には、またご案内させて頂きますので、奮ってご参加下さい！

経済事業　事務局業
③中山間直接支払い制度、多面的機能
④農業法人会計
⑤指定管理施設管理・会計

⑥新聞販売事業　経済事業

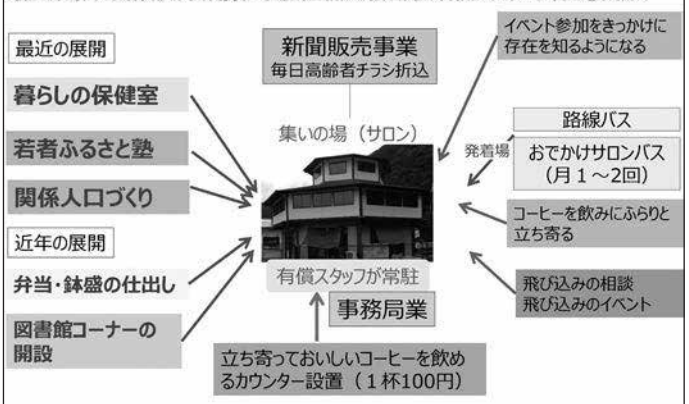
7名で1日交替で仕切り
○新聞折り込み・・・高齢女性、主婦さんに声かけして作業
○新聞配達 ・・・ 7名のうち担当の者が実施

閉店する地元新聞販売店を引き継いで地元住民（半分は自営業）7名で事業開始

新聞販売事業はじめ，様々な活動が集う場づくり

地域の様々な活動を支える事務局、地域の人達が交流する拠点

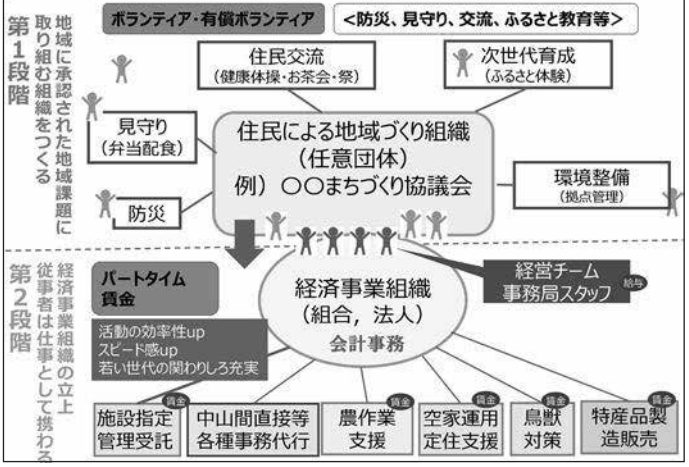
地区の団体や集落代表が資料持参で助成金相談、独居高齢者相談、Iターン者空き家相談



相談や企画が持ち込まれる→解決が検討される

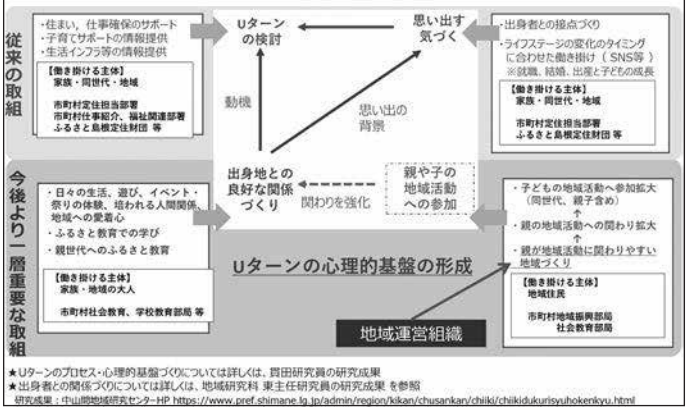
更に、若者の新しい仕事づくりへの挑戦の場、子ども達が地域と関わる場へ

⑤これからの地域の体制づくり　～ボランティアから仕事へ～



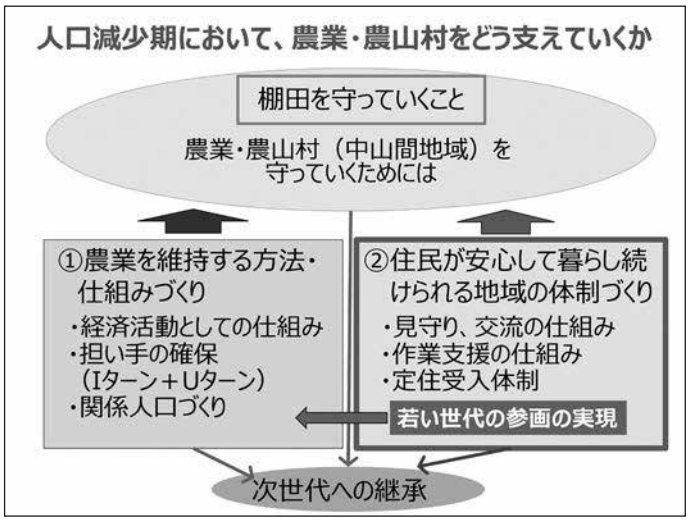
⑥地域活動への若い世代の関わりは、その子ども達へも伝播していく

●Uターンの心理的基盤の形成し、Uターンする動機を強化することがより重要



★Uターンのプロセス・心理的基盤づくりについては詳しくは、貝田研究員の研究成果
★出身者との関係づくりについては詳しくは、地域研究科 東主任研究員の研究成果 を参照
研究成果：中山間地域研究センターHP https://www.pref.shimane.lg.jp/admin/region/kikan/chusankan/chiiki/chiikidukurisyuhokenkyu.html

《資料：基調講演／有田 昭一郎氏》



おわりに

○本報告では、“人口減少の局面において、農業・農山村をどう支えていくか”について、“担い手＝住民が暮らし続けるためには、どんな地域の体制が必要か”を中心にお話しました。

○これから、たとえ定住対策が成功したとしても、ほとんどの地域では人口や世帯はより縮小しますし、担い手も減少します。従って、“より少ない人口で安心して暮らすことのできる体制みづくり（地域運営組織づくり）”は、我々が必ず取り組まなければならない事柄です。

○地域運営組織づくりは、定住条件づくりでもあります。“年をとっても安心して暮らしていける地域”とは、“若者が安心して暮し続けられる地域”だからです。
そして、体制づくりでは、地域での若い世代のやりずらさが解消され、地域が若い世代が参画しやすい場として開かれることが不可欠です。

○その実現の要は“仕掛け役となる事務（スタッフ体制）づくり”です。紹介した２つの事例では、スタッフとして、子育て世代の女性や男性が雇用され、様々な企画に挑戦するなかで、若い人達の参加が広がり、そのいい雰囲気にひかれIターンや関係人口を誘因しています。
そして、彼らの挑戦は、周りの大人達の“若い人が挑戦しやすい環境をつくる”のスタンスに支えられています。

○そうして地域を若い世代とって安心して暮らし、関わりやすい場としていくことが、次世代に農村を、農村の景観、棚田の景観を次世代に継承することに繋がると考えています

○本日の農村農業を支えるもう一つの視点からの話が、これからの皆さんの活動に何らかお役に立てれば幸甚です。それぞれの立場からがんばっていきましょう。

和歌山県PRキャラクター「きいちゃん」

第１分科会 関係人口の承継 コーディネーター 八島 雄士 氏 和歌山大学観光学部教授

【八島氏】
ご紹介ありがとうございます。改めて八島です。よろしくお願いします。本日は、関係人口の承継ということで、第２分科会が集落空間の継承っていうこの反対になっているんですけれども、この承継と継承っていうのは、ちょっと私が管理会計とかビジネスの方が専門なので、そちらで使う際のことをちょっと意識して使ったものです。承継っていう中に実は目に見えないものを含んでいるっていうところなんですね。形だけではなくて、棚田をこう続けていくっていう中に気持ちもちゃんと受け継いでいくっていうことなどの意味を込めまして、こういう承継とさせていただいております。今日の中身については、最初に棚田学会で、もともと和歌山県内の棚田サミットで前の全国棚田サミットなどにも関わられた大浦先生に少し解題というような形で、各パネラーの位置づけといったことも含めてご紹介いただく形にしたいと思っています。その後に松木さんですね。今日の最初の事例発表のあった外山さん。外山麻子さんからの事例発表にも出てまいりました松木さんに生の松木さんの声を聞いていただければと思います。続きまして、小阪に移住されている千葉さんに松木さんも含めて小阪の棚田と暮らしっていうようなところなんかをお話ししてもらいます。その後、中西さんに。あと大浦先生の紹介にも係わるんですけれども、実際には紀美野町役場の職員でもありながら、和歌山大学の観光学研究科博士後期課程の大学院生でもあるので、そういったところから研究という部分からもと実務の部分からお話をいただくと。あとは藤本君になるんですけど、彼も外山さんの事例に声で出てきましたけれども、生の声を今日はご紹介できればと思います。実は私のゼミのゼミ生です。そういう係わりもありまして、今日はパネラーをお願いしております。では、早速ですけれども、大浦先生よろしくお願いいたします。つなぐ間にちょっと資料の確認をしておきたいと思います。この色川マップっていうのが藤本君の活動の中で出来てきているものなので、これ後ほど紹介していきます。あと、この色川未来アイデアブック2023。これは千葉さんのところで紹介いただけると思いますので、その際にご覧ください。あとパワーポイントの４枚刷りの資料。これは中西さんの資料になっておりますので、その時にご参照いただければと思います。

【大浦氏】
はい。それでは改めまして、みなさんこんにちは。ありがとうございます。和歌山大学観光学部の大浦と申します。本日は、本当に遠い中、ようこそ和歌山県、そして那智勝浦町においでいただきました。私は観光学部でもともとは森林林業あたりがですね。専門の観光なのに何でって話があるかもしれませんけども、その辺が実は専門の研究者なんですけれども、この和歌山に和歌山大学に来たことが縁となりまして、前回ですね。10年前です。ちょうど10年前になりますけども、第19回の棚田サミット。有田川町で受け入れましたけども、その時にその準備段階から学生と一緒に関わるようになりました。なので、今日は那智勝浦なんですけども、ここにあらぎ島と沼の棚田という有田川町の写真を掲げておりますのは、私のルーツを示しております。そこから棚田の保全活動というものに学生と共に関わるようになりまして以来ですね。和歌山県内の棚田地域のそういった色々な取り組みですとか、あるいは後でご紹介いたしますけども、中西さんと一緒に全国のその棚田保全の今の現況やそこで取り組まれている中間支援機能のようなことを一緒に調査したりというふうなことをしております。今日は、ちょっと最初に今回のこの分科会の解題という形で、どのような各それぞれの皆さんがどのような位置づけになっているか。それから今、どういう背景があるかっていうふうなことを簡単にご紹介したいと思います。こんな形で和歌山だけではありませんけども棚田は90年代に再注目をされまして、特に景観面で再発見ということで、こういった連絡協議会が設立されたり、それから、棚田百選という形で顕彰事業が始められたりということで、その保全活動が開始されてまいりました。和歌山でもこのあらぎ島が、棚田百選に選定されたり、その色川でも2000年代の初めからそういう保全活動に取り組むなどというふうなことで、全国と軌を一にして取り組まれてまいりました。2010年代からは、先程申しましたように、和歌山で全国棚田サミットを受け入れるということもございまして、この2013年の取り組みに向けてさまざまな活動の活性化をいろいろと、県を中心に取り組んでまいりました。そういう中でこの棚田サミットの後、2013年2014年からは実は県版サミットという形で、全国棚田サミットを受け入れたそのレガシーをよりこう横展開して和歌山県の中でも、その棚田を振興し、棚田を保全するという機運をつくっていこうというふうなことで、5年間そういう県版サミットっていうふうな取り組みも行ってまいりました。その県版サミットでは、やっぱり和歌山県内ではありますけども、さまざまな棚田の地域が普段やっぱりなかなかお会いする機会がないところを一緒に事例発表を聞いたり、あるいはその懇談する中で、本当にいい意見交換になったという風なことで。5年でちょっと一回終了した時には、もっと続けてほしいというようなそういう声が沢山出たほどのそういう風な形でずっとやってまいりました。このことが、この棚田の取り組みがもう一回、ちょっと活性化してきたのが、皆さんも共通して恐らく取り組まれてきたかと思いますけども、この2019年に棚田地域振興法が議員立法という形で成立してきたという風なことで、また新たに棚田百選の次の取り組みを目指して再起動されたという風なことかなという風に思っております。皆さんにはもう自明のこととは思いますけども、この棚田地域振興法と申しますのは、やっぱり棚田を国民共有の財産であり、宝であるという風に法律の中で位置づけたという風なこと。それから棚田単体で顕彰とかを行うのではなくて、棚田が存在する地域の振興を通じて棚田の保全を図るというふうなことが明記されてきたことがやっぱり一つ画期的であったかなというふうに思っております。あと、もう一つはこの国等の責務というようなところでこの棚田の保全というのは、こうやって国の責務でもあると、国はこういうことをします、地方公共団体と一緒にこういう風にやりますという風なことも入ったということも大きかったかなというふうに思います。もう１点は、こういう指定棚田地域をまた指定して、そこでは活動計画を立てるという風になっておりますけども、この過程でちょっと取り組みがなかなか難しいよとか、もっとアイデアが欲しいという場合には、こういった棚田地域振興コンシェルジュのような形で人的な支援を行うということです。それから、人材の育成確保に必要な措置なんかも受けられるということが入ったのも大きかったのかなと思います。こうした棚田地域振興法の中でも、やはりその実現すべき目標として、この都市農村交流を通じた関係人口の創出拡大による地域振興というのがメニューに入っております。これは、まさにこれまでの棚田保全活動の多くが棚田オーナー制とかこういう交流活動を取り入れて、何とか棚田の価値を広く知ってもらって、支援してもらおうという取り組みを行っていきたいということで。当初から、この関係人口っていうものは意識されてその言葉はなかったですけども、意識されて取り組まれてきたのではないかなと思います。この関係人口なんですけど、これ本当に2016年ぐらいから使われるようになってきた新しい言葉であります。それまでは交流人口って言っていたんですね。観光とかで行き交う人を増やすことで地域の経済の規模を維持して人口減少の代わりに。人口減少はなかなか解決できないので、その代わりにこの交流人口を拡大しましょうという風なことをしてきましたけども、もう

ちょっとそれが踏み込んだ形で交流人口と定住人口の間みたいなものです。非常にざっくりとした定義で語られることが多いんですけども、やっぱりこの関係人口というのは、より足しげくその地域ある地域に愛着を感じて、そこに通って、そしてその地域のためになることを一緒に考えていくっていう、そういう特定の地域に継続的に関心を持って係わっていくよそ者というこんな風な定義が一番ぴったりするのかなと思います。よく考えてみると、こういう関係人口に相当する方というのはこれまでも出てきていますし、単なるリピーターとはまた違ってリピートのその先というんですかね。もう少しこう地域にかかわりたいというふうなことが期待されている。そんなような言葉かなというふうに思います。その関係人口も色んなグラデーションがあるよねということが最近指摘をされています。これもよく見る図かと思いますけども、関わりの階段という風な形で、まず、ふるさと納税みたいな形でものを買って応援しようみたいなようなところから入り、こういう棚田に実際訪れて一緒に作業をして、そこに継続的にオーナーになるとか、あるいは毎回作業に支援に訪れるとかっていう段階に入っていくと。その後、やっぱりそれをもう自分のライフスタイルの中にちゃんとこう位置づけたいと。あるいは、そこでもっと自分が貢献した働きたい。そういうとこで生きていきたいっていう風な思いを持って、最終的には生活の拠点まで移して定住人口になっていくこと。このようなことが期待をされているということです。そのためには、この階段を登ってもらう。その原動力になるものは、やっぱりその地域の関わりしろっていうのが確か外山さんもさっき発表の中で使っていたかと思うんですけども、地域の中で自分がどこに貢献できるか、自分がどこだったら関わっていけるのかっていう風なところを用意していく。意識的にそういうことも仕掛けていくことがより関係人口を地域主体へ地域を再生する主体にしていくために非常に重要だというふうなことが言われています。棚田の取り巻く状況を見てみますと、これ2019年のデータなのでちょっと古いんですけども、8割が認知しているけど、身近にいない人が約7割で、それから棚田保全をするために何かしたいというのはやっぱり7割ぐらいいらっしゃいますけども、実際に訪れて何かしたいという人は1割弱っていうことで、多くの皆さんがこの棚田に触れるのこの辺に3割ぐらいがちょっと関心がないっていう方と、それから結構な方からですね。このあと、もうあと一歩で関係人口になりますみたいなところにいらっしゃるっていう状況かと思います。逆に、この仕事に棚田に係わって、生活の拠点まで移して、就農もっていう風な方はまだまだやっぱり少ないです。大体１％とかそれぐらいの数になってしまっているっていうのが現状かなと思います。もう1点重要なのが関係人口。先程から関係人口を地域再生の主体にしていくということには、何かしらの取り組みが必要だっていう話をさせていただきましたけども、それだけじゃなくて、そのプロセスっていうのは、最初から完璧な関係人口って言うんですかね。そういう外から来て地域を救ってくれるようなスーパーマンってのはもちろんいない訳ですよね。最初、色々試行錯誤しながら関わる中で、地域の中でいろんな経験を積んでいく。あるいは、色んな人間関係を作っていくという。そして、地域にもっと関わりたいという風に成長していくということが一方で言われていますし、もう一つ重要なのがそのプロセスで地域の中でも変わっていく。元々地域にもう既に定住している人、あるいは地域でもちょっと近い地域ちょっと隣の町にいる人とか、そういう人たちもそういう関わりの中で、実はその住民といえる人たちも、このちゃんと棚田に当事者性を持って関わっていくっていう主体に例えばこうなるかもしれない。お互いに影響を与えたり、与えあったりしながら地域の地域づくりの主体となっていくという考え方が非常に重要だっていう風なことも最近言われてきています。そういう中で、一方で今日の外山さんの報告を本当に私もとても印象深くて素晴らしい報告だったなと思うんですけども、そういう関係人口をつくってきたという活動にもかかわらず、その一方で、やっぱり実際に現場で作業を担う耕作者の減少というのが非常に問題になっています。交流人口が増えても、関係人口も増えてもです。実際に日常的にその場所に住んで耕作をしていく人が非常に危機になっているということが言われています。これは先程色川の話もございましたけれども、色川だけじゃなくて、全国で実は進んでいっております。それに、コロナの世界的流行で交流事業がストップしてしまったということで、大きく影響を受けた地域もあるやに聞いています。でも、その一方でこういう例えば近場の観光地というんですか。近場の地域の魅力が再発見されたり、あるいは、この生き方を見直す機運になったりということで、こういう農的関係人口に対して関心を寄せる層が少し増えるとかそういうある意味ポジティブなんです。私たちにとってポジティブな変化も生まれているという状況にあります。それからもう一つ。これも世界的な動きでありますけども、家族農業ですとか、そういう小規模な農業に対する注目が非常に集まっている。今、実はその家族農業の10年という期間にあるわけなんですけども、世界的にもそういう非常に工業的な形での農業に頼っているとやっぱり持続可能性がないということで、世界の農業を支えているのは、大部分が実は小規模な農家なんだと。家族経営的な農業なんだということで、そういった小規模な農業、ある意味自給的な農業も含めてですけども、それを支えていこうと地域コミュニティーを支えていく農業を支えていこうという動きも機運も国際的な潮流となっております。先程の本当はちょっと急遽追加したスライドなんですけれども、外山さんの報告で本当にそもそも何の為に棚田を保全するのかって、非常にシンプルだけども強い問いが私達にも突き付けられたなという風に思ったんです。私、この棚田保全の話をする際にたまに使うこのスライドなんですけども、宇根豊さんという方がこの農の思想って言うんですかね。百姓という言葉を好んで使われるんですけども、そういうところから農を見直すって言うんですかね。農の価値を見直すっていうところで色々なエッセイを書いておられます。その中で書かれていたのが棚田保全というのは、農の価値百姓仕事の価値の深さに気づき、それをいかにして存続させようかという取り組みであるべきであるという風なそういうことが書かれている訳なんです。なので、結構その棚田保全も機能で語られること、それから景観の美しさで語られることが多いです。それはそれで確かに重要な点かと思うんですけども、もう一つが私達の中での食自然への関わり方。非常に本質的に深い問いが含まれているのではないかと思うわけです。この自給についても外山さんもおっしゃいましたけども、この農の暮らし自給の再評価です。食料自給率を上げるということは出来ても、それはイコールの農業の自給というものの再生にはならない訳です。もし食料の自給ってことだけ考えると、やっぱり多くのものが失われてしまうのではないかっていうのが先程の宇根さんの思想にあります。やっぱり農業という農という営みはその食料だけでなくその仕事の価値とか、あるいはそれを取り巻く会話の記憶、愛情の記憶、それからその思い出とかこういったようなものも生み出しているんだと。これが失われてしまうということ。自然に対するさまざまな私達の感情だとか、何によって我々は生きているかとか、そういう風なものも失われてしまうのではないかという危機感です。例えば、この自給の見直しの意味っていうところでささやかな田畑を守るということ。それは経済的には見合わないということが分かっていても、それをすることが家族や村の暮らしをこれ以上外部の経済に依存させないという気概の表れであるとか、その自然との付き合いを土台とする百姓仕事に

こそ、お金になる生産性というんです。これでみんな疲弊しているわけですけども、そこを越えていくような希望を見出した人たちの生き方の表れという風なこともおっしゃっています。つまり、この農業のあり方を問い直す。それから農の価値を問い直すというこの2つのことがこの自給を見直すっていうことに深く刻まれているんです。それが本質的なところで関わっているということなのではないかということなんです。それに対して色川の実践事例発表でもありましたように、共感から遠方だけども支援する。遠方からだけども通ってくるんですね。そういう形で色川と関わり続けている人たちもいるって。この点も非常に重要なことなのではないかなと。もちろん経済も大事なんですけども、こういった点も本当に大事なことかなと思っています。今日の第1分科会の皆さんの見取り図っていうことでちょっと示してみましたけども、まずは、和歌山の棚田保全の中でもかなり初期の段階から非常に御熱心に進められてきた棚田での農業。それは、この色川の地域の山村文化の象徴でもありますし、それから交流拠点として関係人口の入り口としても非常に機能してきましたし、アイデアがいろいろ発想される場。それから米作り体験農業のような形で、その地域に入ってきた若い人達がそこで米作りを学んで、その中で人間関係も作って、そして自立していくという、そういう場にもなってきたと。だけど、一方で非常に常に存続の危機にあるというふうなお話がありましたけども、それを松木繁明さんにもう一度この場でご自身の言葉で色々と今の思いを共有できればと思います。それから続きまして、千葉智史さんは、この色川にお住まいになって、もう10年くらいとお聞きしていますけども、その移住してきた千葉さんのお立場から、この小阪の暮らしと棚田の意味価値についてのお話。それから皆様のお手元にもあると思うんですけれども、色川の未来アイデアブックという色川の今と過去と現在と未来が非常にうまく表現された小冊子があるんですけども、これも先程の棚田振興法から協議会を作ってという形で今後の棚田を考える中で出てきた産物だそうです。村の中で行ったワークショップなどの経験からその思いについても語っていただけるんじゃないかなと思います。次の中西さんは、紀美野町の役場職員でありながら、その役場から和歌山大学の大学院の方に社会人短期履修生として派遣されたことをきっかけにずっと棚田保全の組織的な観点からの研究を進めてもらっています。その中西さんと県庁のご支援をいただきまして、全国的な棚田保全活動の現況ですとか、その中でのいろいろな担い手の創出というふうなところについて調査を3年間ぐらい続けてきております。その成果から、ここ以外の地域の事例を御紹介いただければと思っています。最後、藤本さんは、和歌山大学の観光学部のOBなんですけども、学生から関係人口として育ってきたんで、その階段を登っている最中の学生であります。そのことからそのプロセスについて、だから今でも地域に関わり続けているということを。後は、恐らく若者が本当にこういった地域に入って暮らせる条件みたいなことも、恐らく何か経験からお話ができるんじゃないかなと思いますので、その辺のお話をいただければというふうに思います。今回の分科会は、非常に色川の事例を中心にしてお話することになります。恐らく共通する悩みとか課題とかも多くの地域の方がお持ちだと思います。それについて色んな知見を積んでこられた方がこの場に集まっているんじゃないかなとも思うわけです。ですので、後の議論の場面では、是非皆様からその色川地区に対してのそういう経験の共有ですとかアドバイスですとかそういったようなものもいただければ幸いです。はい以上で私の報告を終わります。ありがとうございます。

【八島氏】

はいありがとうございます。それではですね。この後、松木さん、千葉さん、中西さんの順番で大体15分ぐらいずつでいろいろお話をしていただきます。その後大体3時半ぐらいめどでちょっと超えるかなと思うんですけれども、10分休憩させていただきまして、その10分休憩後に20分ぐらい皆さんと議論ができたらなと思っておりますので、休み時間に色々質問とか考えていただければありがたいかと思っております。後半の1時間ぐらいの間で藤本君の関係人口としての実践みたいなところを私も指導教員ですし、千葉さんが世話役なんですけれども、そういったところから振り返りをやって今どんな感じで関係人口が彼の活動が進んできたのかをちょっと御紹介できればと思っております。はい早速ですけれども、では、松木さんから、もうその場で行かれますかね。千葉さんが色々スライドを準備していただいているので、それもちょっと確認しながら松木さんのお話していただければと思うんですけれども、準備の間に松木さんから実際、棚田を管理されてきて、これまでの経緯とか御苦労されている点をちょっとお話しいただければと思うんですけれども、よろしくお願いいたします。

【松木氏】

小阪の棚田を守ろう会は、去年までは僕会長でやっていたんですけど、もう年齢も年齢なんで、一応今年から峯茂喜さんに会長を任せて、僕が一応農場長としてどれだけ頑張れるか分からんですけども続けていきたいなとは思っているんですけども。まあ、いつまでようやるかなという。そればかり思っているんですけどね。もうだんだん頭も禿げてしまって、もう寂しいやってきたんですけどね。棚田を守ろう会っていうのも初めてのきっかけは、Iターンの大野区で住んでいるんですけど、原和男さんていう人が代表で若い子を集めてね。荒らしている田んぼ草だらけの田んぼをね。草刈りして綺麗にあらけて、また田んぼを作れるようにしてやったんですよ。それで僕はその傍で自分の田んぼやっとったんですけども、なかなか若い子は集まってようやるなと思って、原さん偉いなと思ったんですよ。それで僕も横の田んぼでやっているんで、ちょっとでも一緒にやろうかいなということでやり始めて、それでその時はまだ棚田を守ろう会にはなってなかったんですけども、そしてまたそれからやり出している間に名前をたまたま守ろう会と付けて、そして、やっぱりそのIターンで来た人に一緒に何て言うんかな。田んぼのやり方って言うかそういう。こういう風にするんやでとかいうことをね。教えてくれんかと言われてね。ほいで一緒にやろうかっていうことで始めたんですけどね。ところがなかなかね。その最初のうちは、やっぱりやり始めて20人も30人も来ていたんですけどね。ほいでわいわい言うて、それが僕も楽しみやっていんけどね。だんだんだんだん年数経つたんびにもうやっぱりIターンの人がほとんどだったんですけどね。もうやっぱり色川地区へ住んでやっぱり我がの生活ってありますんで、まあさっきの外山麻子さんやないけども、やっぱり自分が自分らの生活というようなあるんで、そっちの方でばっかりいっていて、だんだんだんだん棚田守ろう会の作業をする人がだんだん減ってしもてね。ホンマに。もう15,6年になるんですけどね。守ろう会をやりだしてね。そしてまあ棚田作業場って言うんかな。会合とか、そういうのもね。僕はそういうつもり建ったんやないけども。機械作業の機械を入れるっていうことで小屋を建ったんですよ。機械入れる小屋としてね。それがね。今、もうそういう会合とか今回、そのサミットとかいう時に、そこで何かをこさえて。まあ明日もあるんですけどね。餅つきとか色々やることがあって、それがもう年に4回あるんですよ。棚田の。そのイベントって言うんかね。最初田植えしてそうして草取りして稲刈りして。それでそういうしめ縄作りとかね。ほいで、餅つきとか、そういうのを毎年4回やっているんですよ。ほいで結構集まってきているんですけどね。それもそれでいつまで続けるかなっていうとこなんやけども、それで田んぼ自体4反

40アールで大方80枚あるんですよ。枚数が。狭いんですよ。それがね。それで機械おおたりするのも大変やし、ほいでやっぱり水が一番大変なんですよ。雨降った時はどんどん流れ落ちるんですけどね。僕直接家から見えるんでね。雨降った時にはね。いっぱい流れてね。棚田大丈夫かなと思う時、いくらでもあるんですよ。ところが、雨の少ない時はもうほんまに毎日ぐらい田んぼへ見に行かな。どっかこっか漏れているとこもあるっていうことはあるしね。大方毎日行っているんですよ。ほいで今もう小阪区で住んでいる僕農業長と守ろう会長の峯茂喜さんとほいで橋爪くんっていうんですけど、その人も奈良の方で居たんですけど、小阪で昔、その小阪で鉱山あったんですよ。ほいでその鉱山へおやっさんらが鉱山に勤めよったんで、その橋爪くんっていうのもそこで育ってきたんだけど、小阪の方でおったんですよ。それで鉱山が閉鎖になって奈良の方へ移ったんですけどね。それで、たまたまその小阪で前におったんやから、また小阪に住みたいなていういうことで。ほいで僕の家の隣にあるんですけど、そこへ住んでもらってほいで棚田を一緒に今守ってくれているんですけどね。居てくれるんでね。うれしいんですよ。大体僕ももう70過ぎたんだけども、同じような年齢やもんでそういう人もね。まあ、先に奈良の方へ行くんやないかって思っいてるんですけどね。まあ、いつまでこれ続けていくかっていうのが一番問題なんや。殆どこの3人、麻子さんのも映っていたと思うんですけども、ほとんど3人が主になって言うんかな。そやもんでこんだけ続けてかなと思うんですけども、丁度僕の目の前やし、一番気になるんですけどね。それで僕は僕で個人で、また田んぼも、別にやっているんですけどね。それもまあ2反近くやっていたんですけども、もうだんだんだんだん減らしてもう1反去年ぐらい1反になって、来年はもう何畝減らしていかなと思っているんですけどね。うん。どれがもう一番これから続けてくっちゅうのが一番大変やなと思うんですけどね。うん。それでこういう若い人に来てもろて。藤本君みたいな。いつも作業のときも来てくれるしね。これからどれだけやっていくかなっていうのが一番心配なんですけどね。

【八島氏】

はい。ありがとうございます。松木さんのところにですね。我々も実は打ち合わせでお邪魔していて、その小屋っていうのがすごいいい小屋というか、そこで皆さんバーベキューされていたんです。明日見学に行かれる方は是非そこで餅つきとかもされるんで見てほしいんですけれども、そこに棚田の歴史をちゃんとパネルで貼ってあるんですよね。ああいうのが結構演出というか、外から行った時にはすごいいいなと思っているんですけども、そういう中でいろいろ話している中で出てきたのは、たしかあれですよね。本音としては弟子が欲しいって言うんですよね。

【松木氏】

本当にね。まぁ何て言うんかな。もう小阪へ住んでもらって、もう1年間棚田に関わってもらって、ほいで出来ることを僕は教えたいなと思っているんですけどね。最初から畦そりからね。色々機械を使うことも。そしてね。機械もその急なとこなんでね。今までも何回かこう僕もちょっとひっくり返したこともあるしね。堀もあるんですよ。明日行ってみたらわかるんですけどね。堀に落としたった人もおるんですよ。ただ、怪我した人ないんでね。あれなんですけどね。そこが僕はね。やってくれるのはありがたい。僕は慣れとっても恐ろしいっていう時あるんですよ。結構ね。ああいう田んぼで作業中に怪我とかああいう人も結構農協とか、そういう人聞いたことあるんですけどね。結構怪我する人もあるらしいんですよ。そういうもんでね。それが僕はやってもらうと思うんで、それついとかなあかんと思うんやけどね。見よらな。うん。怪我でもされたらね。ありがたいもんやけど、どうしてもこう坂で降りる場合とか、隣の田んぼへ入る時にギア入れ替えるでしょう。車でもそうやけど、この坂やもんでね。そのニュートラルになるでしょう。その時にガーっとくることあるんですよ。そういうことがあるもんでね。何回も今までもええっていう恐ろしいなと思ったことは何回も僕もあるんですけどね。今まで怪我したいとはないんで、あれなんですけどね。

【八島氏】

はい。ありがとうございます。何かこういう話をしていた時に、私が管理会計っていうのが企業で製造業の方の専門なんですよね。なんでそういう手伝ってもらうメニューみたいなやつをちょっと作業分解してって、ここだったら関係人口の人ができるとか、ここだったらやっぱ技術のある人ができるみたいにちょっと分けていったら面白いなって思っているんですけれども、そんなやつをマニュアルじゃないんですけど、作っていくのに是非皆さんにもご協力いただけたらそういうモデルみたいになったらいいなと思っていますので。はい。今後そういうね、弟子が来た時のプログラム作りなんかできたらいいなということで、この前は私はお酒飲まなかったんですけれども、松木さんお酒いっぱい飲まれて楽しく会話してきたので、明日は多分飲まれるのですかね。はい皆さんもお楽しみに今晩から行かれるとは思う人もいると思いますんで、よろしくお願いします。

【松木氏】

明日はまぁ来てもらって、ずっと棚田を上がってもらって、ずーっと上のこう行ってほいで、また降りてきててっていう感じなんですけど、急やもんでね。明日来られる人はその僕ら傍でおるんですけど、あの道がちょっと急なとこ狭いしね。それだけもちょっと気をつけてほしいなと。まあ、明日のことなんですけどね。来られる人はそれをよろしくお願いしますね。

【八島氏】

はいありがとうございます。それじゃそういう棚田のある暮らしをIターンで、移住された千葉さんからご紹介いただけたらなと思いますので。松木さん。また何か千葉さんの話の中で、ちょっとツッコミがあったら面白い部分はぜひお願いします。

【千葉氏】

はいじゃあ変わりましてお話しさせていただきます。らくだ舎代表、千葉智史と言います。なぜ僕がここに立っているかっていうのをまずご説明しなきゃと思うんですけど、棚田を守ろう会の一人のメンバーとして一応活動しています。プラス松木さんと同じ小阪区に住んでいます。後ほどご説明しますが、この冊子は色川棚田地域振興協議会という会が立ち上がったんですけれども、その会の地域事務局を勝手に無償でやっております。はいというあたりでこちらに選んでいただいたのかなと思います。正直、僕より素晴らしい活動をしている人たくさんいますし、色川に限らずですね。僕が話すことあんまないのかなと思いますし、さらに言うとここでお話しすると何か自分がすごいって自分で自分を褒めているような感じになるんですけど、それはちょっとご容赦いただきたいなと思いつつ、決して自分で自分をすごいとは思っていませんということだけ先に伝えたいなと思います。見ていただいいている写真が小阪の棚田です。これ上から見た景色ですね。先ほど写していたのが、これ下から見た景色です。さきほど松木さんから弟子が欲しいという話で、皆さんの頭の中になぜ千葉が弟子にならないのかって思っている方もいらっしゃると思うんですけれども、見ての通りですね。僕は体が弱くてですね。きつい農作業に適応できないというのがありまして、僕ができることをできる限り、頑張りたいということで事務局みたいなことをやっているわけなんですけど、正直人手が足りていないっていうのももちろんですけど、それは

やっぱり耕作している人だけではなくて、先程基調講演でもありましたけれども、その事務局的な立場みたいなところもとても足りてないと思っているんですね。かつ、そこが足りてないにもかかわらず、何で充足していかないのかっていうとやっぱり地味だし、日が当たりづらいし、もっと言うと何をやっているか分からない。しかも、うまくいっているとうまくいってればいっているほどそれが見えなくなるので、その活動が評価されづらいっていうのが、そこが進まない大きい点としてあるのかなと思うんですけれども。なので、僕の個人的なこの棚田サミットの野望はですね。事務局を有償化していくっていうのを色川でちょっと実現したいなと思って、ここでお話をしています。少しだけ自己紹介しますともうじき40になるんですが、北海道で生まれて大学から東京に出て行きまして、計12年ぐらい東京に行ったんですけど、そこから色川に来て今もうじき10年になります。こちらに来たきっかけは、地域おこし協力隊に呼んでいただいたというか、入らせてもらったことがきっかけなんですけど、ちょっとその辺は話していると長くなるので割愛しますが、この協力隊のときに結構とっぷりと色川の地区を知っていくというか、いろんな方と関係性を持たせていただいた期間ていうのがあって、それが間違いなく、その今やっている事務局のこととか、いろんな方との関係性に繋がっていると思っています。10年じゃむしろ足りないぐらいだなと思っているんですけど、やっぱり時間をかけて関係性を構築していくってことが何より大事でそこを何か残したまま、さっきね事務局の有償化とか言っていますけど、そこだけが走り過ぎてももしかすると仕組みだけ整って中が回っていかないみたいなことにもなるのかなと思うんですけど。それはさておき、この経験から今も色川で住まわせてもらっています。何して暮らしていんのってことが疑問に思われるかなと思うんですけど、元々東京で編集とかライティングの仕事をしていたので、それが一つ大きい仕事になっています。いわゆる外貨を稼いで中で回していく。プラスその中で回していくことに何をしているかっていうと、喫茶店を週3日やっているのと、そこに本屋さんもちょっと入れていまして、個人的にちょっと文化が続いてくためには本屋って必須だなと思ってやっているんですが、その辺りを地域の人と外の人と不特定多数の人が出会えるような場所があるといいのかなと思って運営を続けています。それがあのらくだ舎という名前です。ちなみにらくだ舎の名前の由来は、僕の顔がラクダに似ているからという非常にシンプルな理由です。本当です。プラス先程の守ろう会のメンバーとか季節労働とちょっと僕は言ってしまっているんですけれども、地域にはいろんな仕事がお金にいなるものもならないものもあるので、その辺を少しお手伝いさせてもらったりとか、事務局をやったりとか、いろんなことを掛け合わせながらなんとか暮らしているという感じです。これがあの小阪の区の写真なんですけど、小阪区は色川の中でも比較的地域行事が残っている地域で、そこにあの個人的にすごい魅力を感じているんですけれども、そのずっとやってきたことが引き続き残っているっていうのは、新参者にとってはとても新鮮に感じましたし、そこでこう住んでいる方と交流できるっていうのは何より得難い経験だったかなと思います。ただこれ何年前、5年前ぐらいの写真だと思うんですけど、この時から比べても繁明さん。何人が半分はいってないか3分の2ぐらいですかね。

【松木氏】

そうやね。半分もいってないかな。今年もあれやっていんけども、殆どはそう半分も行ってないな。少ないね。

【千葉氏】

ぐらいの人数になってしまっていて、10年僕の短い10年の間だけでもかなり亡くなられてしまったりとか、施設に入られてしまったりということが続いています。なんで、本当に午前中の話でもありましたとおり、人は確実に減っていて、それをどう継いでいくのかっていうのをまさに突きつけられている課題だなと思いつつ、個人的には何とか続いてほしいなと思って日々暮らしています。はい色んな行事があります。和歌山と言えば、餅をほるということらしいので、これも入れておきました。藤本君もそうなんですけど、学生に来てもらった時は大体こうみんなで食事会をして、この時はちょっと防災のことをやってもらおうと、簡易担架を作ってもらって実演したりとかっていうこともやっていたりして、この辺の何か事務局みたいなことを僕がやっています。色川の特色でよく言われるのが、その移住者が多いっていう話をよく言われて内心僕はすごい居心地が悪くて、やっぱりこう何が言いたいかっていうと、それを受け入れてくれている人たちがいるから、移住者はいるわけなんですよね。なんで、そこがセットになって褒められるっていうのはすごいありがたいんですけれども、何かその移住者が多い地域ですねっていうことだけ言われると、すごい居心地が悪くなるなと思っていて、特色としてはその地域住民と移住者が一緒になって地域づくりを進めているってことかなと思っています。午前中の外山さんの話でもありましたが、移住者受け入れの歴史が長いんですよね。45年ぐらいになるんですけど、やっぱその時も2年ぐらいかかって、その地元の方と最初に移住してきたグループの方がやりとりを重ねたと、地元の方もその人達が住んでいた東京に行ったし、その東京にいる人たちも何度も色川に通ってコミュニケーションを取ったから、最初が始まったっていう歴史があるんですけど、その何か細かいところが抜け落ちてしまうと、ちょっとこう説明が不十分かなと思ったんで、そこは付け加えたいなと思っていて、その2つが両輪であることが何より重要なのかな。それを特色というのが分からないんですけども話が出てこなかったんで、ちょっとだけ補足すると色川の中で牛を飼ってる方がいて、きょう午前中話されていた外山さんもそうなんですけれども、牛を使って牛耕をちょっと続けるって書いてしまっているんですけど、これは間違いで牛耕を試みようとしている方がいます。それは昔やっていたことを何とか元に戻したいというか、自分達でもやりたいっていうことでトライされている方がいて、できるだけこう昔ながらの暮らしを何とか風景だけでなく、技術とか暮らし方を残していけたらいいよねっていう方が多い山里かなと思います。上下水道は通ってないので、上水道は山の水。下水道は汲み取りという生活です。上水道に関しては松木さんから幾らでも苦労話が出てくると思うので、水道係をやってくださっているので、また後で聞いていただけたらと思います。これは交流のこう色んな人が来てくれていますねっていう写真です。よくなぜ色川に行ったんですかっていう話を聞かれるので、自分なりにちょっと考えてみて、どうしても堅苦しい言葉になってしまうんですけど、やっぱりこう紀南って凄いどこの都会からも離れているってことが一番大きいと思うんですけど、隣町の新宮とかも含めてチェーン店とか少ないんですよね。地元のお店とかも多いっていうところは、その都市的生活に対するそうならなければならないっていう同調圧力が比較的低いのかなと思います。特に山の中は。常々考えているんですけど、やっぱ何か僕たちって言うか日本とか世界とかそういうレベルだと思うんですけど、ちょっとずつ価値観を変えていかなきゃいけないんだろうなと思っているんですよね。その人口も減っているし、色んな状況が変わっている中で、僕らが考えなきゃいけないのは、今までの価値観ではいけないってことなのかなと思っていて、何かそういうことを考えたり、実践する場としてはやっぱり山の中とか都市から離れてるいうのはとてもいい環境かなと思うので、そんなこと考えたいなっていう人はいたら、恐らくもう皆さん、それぞれのふるさとを持っていらっしゃると

思います。是非色川に遊びに来てください。色川といえばということでいうと、お茶という方も一定数いらっしゃるので、ゴールデンウィークなんかは茶刈りの風景が結構見られる地域です。はい。ちょっとらくだ舎の話はもういいです。何か色んなことやっていますと興味ある方いたら、後で声を掛けてください。はい。こんな外観です。中は喫茶店になっていて本が今800冊ぐらいかな。新刊の本を置いています。あんま売れないんですけど、何とか続けたいなと思っています。ときたま出店なんかもしています。地域の産品も売っているので、今日体育文化会館で産品を販売していたりしているのもらくだ舎から持っていたものなんですが、地域のものを地域の中の人とか、外の人とかに知ってもらう機会としても運営をしています。はい。編集という意味では、色んな仕事をしていて、色川のものを外部の人に届けるためにおいしい手紙っていうのをやっていたり、幾つか雑誌とかウェブページとかに文章を書かせてもらったり。お茶のパッケージのデザインをさせてもらっていたり、これは最近、あの大学の先生と一緒に3地域の地域特性を一つにまとめたというか、色んな地域を比較することで見えてくることがあるのかなっていうので、作った冊子とか自分達で今年1冊本を出したんですけど、本を作ったりなどをしています。季節労働と先程言ったのは色んな仕事があるよと。その中でも一番大変なのは多分草刈りで、草刈りの大変さは僕がちょっと言えないんですけど、これも松木さんに聞いてください。小阪の殆どのところを松木さんが草刈りしていますっていう内側の労働があって区は成り立っています。すいません。時間があれなんですけど、棚田のアイデアブックの話を少しして終わろうと思います。これ、先程申し上げた会で作った体なんですけど、殆ど僕がやりました。ワークショップの企画計4回地域の中でワークショップをやったんですけれども、それが1ページ目に書いてあるんですが、このワークショップの企画とか、その運営とか含めて僕がやりつつ、この冊子の編集自体は奥さんが編集一緒にやっているのでやってもらって、デザイナーさんだけちょっと外の人にお願いしてやってもらっているんですが、これで何がやりたかったかっていうと、地域の議論ていうのが色川の中でも共有されていてないっていう印象があって45年、移住者を受け入れてきた中で、色んな人が色んなことやってきたんですけど、それが見えるようになってないので、同じことをチャレンジして同じように失敗するみたいなことは僕が見ているだけでも複数例起こっているっていうのがあったんですよね。なので、少なくとも現状を見えるようにするっていうのは一番大事かなと思ってこのワークショップを始めました。プラスじゃ皆さんがこれからどうしていきたいのかっていうことが分からないと、その色んな法律ができて補助金が下りてきて、何かやってくださいとかってなるんですけど、結局そのお金ありきで何か始まって、何の成果も残さずに消えていくみたいなお金の使われ方をずっとしてきたなという印象があるので、少なくともやってきたことがどうだったのかっていう検証と議論があった上で、その次の施策っていうのが行われるべきかなっていうので、一旦これを作らせてもらったと。これは本当にスタートで、ここから議論が積み上がっていくといいなと思っていて、例えばその2ページ目に年表を載っているんですけど、やっぱりこれを配ると色んな声が聞こえてくるんですよ。この年表と違うとか、ここはちょっとニュアンスおかしいとかっていう話が出てくるのがちょっと嫌だなって思う部分もあるんですけど、ありがたいなと思っていて、そこで今新しくやっぱり地域の年表必要だよねっていう動きが今始まっていたりとか、この冊子をまあ一つの土台にしながら何かを始めてみようみたいな人も少し現れたりしているので、何にせよ、こう一つ纏まったものがある。しかも、それが過去をきちんと整理して、今をちゃんと見た上で次どうしていくのかっていうことがわかるっていうことは、まあまあいいものができたのかなと手前味噌ながら思いましたし、周りの方が褒めてくださるので、せっかくなので、ここで配ろうと思って皆さんに配った次第です。恐らくこういうことをやってらっしゃる団体さんもたくさんあると思いますし、もう既に完了しているってところもあると思うんですけど、何かこの次のステップとしてはこういうものが色川だけじゃなくて、いろんな地域間で共有されたりとか、そこ参考になるよねみたいなことが起こって1段飛ばして話が進んでいくみたいなことっていうのは起こり得ることですし、大浦先生がおっしゃってた和歌山版棚田サミットとかの意義かなと思うので、正直、そのセレモニー的なとこはどうでもよくて、そういうそのソフトの部分を実際に頑張っている人たちが共有し合い励まし合うみたいなことがもうちょっとできればいいなと思うし、そこに事務局として何とかちょっとでも関われたらなと思って日々生活をしております。僕からは以上です。

【八島氏】

ありがとうございます。とても松木さんと千葉さんとこう何かリアルな状況が浮かぶような話だったかと思うんですけれども、やっぱりあの研究している立場からいってもですね。やっぱりこういう土台があって、いろんな方たちの努力がその上に乗っかって、それで発展していくっていう風に研究も考えるんですね。それで先行研究レビューみたいなことを必ずするんですね。そうしないと私たちは今、何の上に何か新しい価値を付け加えようとしているかっていうのが目に見えないよねってなるので、やっぱり発展するとか持続可能とかっていうのは、やっぱりこれまでのことと過去のことをしっかり整理して、今から何をやろうかっていうビジョンを作って、そこから何か足りないものはみたいに考えるのが一応セオリーとしてはあります。はいありがとうございます。では、そういった研究の立場から中西さんに実際に紀美野町では棚田の業務もされているので、実務と研究と両方されているっていう珍しいパターンなので、是非皆さん楽しみに聞いていただければと思います。中西さんの話が終わりましたら、10分休憩を取りたいと思いますので、もうトイレ行きたいっていう人は遠慮なく抜けていただいて大丈夫ですので。よろしいでしょうか。はい。ではよろしくお願いします。

【中西氏】

はい皆さんこんにちは。私は和歌山県の紀美野町役場まちづくり課というところで職員をしている中西といいます。目の前に直属の上司が座っておりまして。ちょっと緊張しています。はい。それではですね。私からの発表は、先程八島先生からもお話しにあったとおり、実務の方と調査の2種類の話をしていきたいと思います。ただ、ちょっと時間の都合上、私の実務の紀美野町の棚田での仕事の方はちょっと短めに作っておりますので、前に青い法被を着た二人がいますので、詳しく聞きたい場合はそちらのお二人をつついてください。はい。よろしくお願いします。では、本日の内容は先ほどからもお話ししておりますとおり、当町の活動のご紹介と調査の内容の2つとなっています。ちなみに、こちらの写真は一応私職員ですので、観光の紹介もしておきたいと思いますが、もうちょっとそろそろピークも過ぎましたが、有田川町っていうところと当町の紀美野町にまたがる生石高原というところが近畿でも有名なすすきの高原になっています。よろしかったら、また遊びに来てください。はい。それでは当町の棚田の紹介に参りたいと思います。まず、和歌山県の紀美野町というところがどこにあるかっていうことなんですけども、本日皆さんがいらっしゃるのはこのちょっと小さいですが、和歌山県の地図の下の方にあります那智勝浦町なんですが、私の住む紀美野町はもうかなり北部の方で、和歌山

市や海南市に隣接しています。周囲は市に囲まれていて、唯一町でとても中山間地域で急峻な山地になっています。大阪市内からは約1時間半程度なので、車で走ってきて、日帰りで遊びに帰っていったりするっていうような方々も多数いらっしゃいます。その中で先ほど紹介しました。写真にありました。生石高原の麓で中田の棚田っていうところで活動をしています。農地の全体の面積は約9ヘクタールで、そのうち約4分の3が耕作放棄地と言ってもいい状況でした。現在は畑と田んぼとあと草刈りで約5ヘクタール管理しています。それを管理しているのが、2020年に組織されました小川地域棚田振興協議会という組織です。実はこの組織は、棚田地域の例えば耕作者とか地権者の方々が集まって出来てきた従来の組織とちょっと異なりまして、棚田地域外の方々が主体となって組織された全国的に見ても珍しい組織なんじゃないかと思っています。次に棚田が人を繋げる。棚田が時を繋ぐという活動ビジョンを設けており、活動を通して様々な人が棚田に集まることによってイノベーションが起き、次世代に引き継いでいこうという意味を持っています。まず、本当に短いざっとの内容なんですが、この4年間の活動の状況は枠内の通りです。2020年に地域おこし協力隊の2名が来てくれました。この二人が来てくれたことによって、先ほどお話にもありました事務局的な業務を多数引き受けてくれたおかげで、活動のベースが整えられていった状況です。そして、翌年には棚田サポーターズというのを結成しています。これは登録制ボランティアです。現在では約100名の方が登録してくれています。そして、2022年からは一般の方も参加できる田植えのイベントを開始しました。その時には約3000平米で約1トンのお米を収穫できました。お米は全て無農薬無施肥の自然栽培で育てています。今年は大体4000平米ぐらいで約900キロが取れました。あと、収量としては多くないという判断になるかと思うんですが、単価としては1キロ1,000円で販売いたしますので、その辺はその自然栽培とか棚田とかいうそういう付加価値がそこに乗ってくるということになります。昨年はちなみに約1トンあったんですけど、全て完売しました。2023年には色々活動も拡大してきたところで、よりもっとフォーカスして活動していかないとあっちこっち行ってしまうということで、計画的な再水田化と人材の確保を目標に、3年間の計画を策定しました。他にも和歌山大学観光学部のローカルパートナーシップを受け入れたり、小中学校の体験活動とかイベントなどを随時実施しています。こちらが再度を復元させた水田棚田とあとは田植えのイベント。それから稲刈りの様子です。棚田でキャンプ。それからキャンプの下は収穫祭を行ないます。あと、残りの4枚は棚サポさんとの活動の様子なんですが、草刈機の使い方を1から教えて戦力になっていただいたり、農業機械の乗り方なんかも一緒に教えて動かしてもらったり、そういうことをしています。はい。ではちょっとすごく短いんですが、紀美野町の中田の棚田の活動の状況というのは、これ終わります。はい、それでは話題を一転しまして、次は全国調査の結果の一部をご報告し、未来に向けたお話ができればと思っています。ここにお集まりの皆さんは、もうとても強く実感されていると思いますが、棚田地域、つまり中山間地域での農業の継続というのは非常に厳しい状況にあります。そこで、全国さまざまに都市農村交流の活動が行われてからの参加者を募るということが実施されています。しかし、こうした全国的な動向っていうのは、今まであんまり調査されたことがなくて、現状を把握するためにも調査を実施しました。恐らくここにいらっしゃる方に、とても枚数の多いアンケート調査に答えていただいた方もいらっしゃるかと思います。ちょっと上からでございますが、その時はありがとうございました。感謝をお伝えいたします。アンケート調査自体はこの画像にもありますとおり、ＮＰＯ法人棚田ネットワークさんが発行された全国棚田ガイドという本に載っています。２１２人を対象に行いました。ありがたいことに１５０の行政や団体さんから回答いただいて、そのうち７９の団体では都市農村交流活動を行っているということがわかりました。大体半分ですので、私個人的な所感としては、もうちょっと知っているところが多いのかなと思っていたんですけども、回答してくれたところでは、半分半分だったっていうのをちょっと驚きました。でも、次に調査結果をご紹介していきます。先ほどお話しした７９を対象に、調査の結果をこれから表示していきます。まずは皆さん、棚田でどんなことをしているのかという内容です。こちらは複数回答になっていますが、最も多かったのが棚田オーナー制度で５１。それから次に多かったのが農業体系の４１でした。ですが、どの地域も複数の活動を組み合わせて取り組んでいる状況です。それから、いつから開始していますか、それをやりましたかっていう質問も付け加えて調査しました。そうすると２０００年から２００４年の間に活動を開始した棚田地域が最も多いということが分かりました。２０１５年以降は活動を終了するという地域が出始めているということも同時に分かりました。次に、活動を始めた理由と、これからも継続していく理由は何ですかということを聞きました。グラフの上が開始で下が継続です。関係人口というテーマなので、人に注目して見ていきたいと思います。まずは上から３つ目と４つ目なんですけど、耕作者の高齢化とか後継者の不足に対処していきたいっていう理由がそこにありますので、最初の活動開始の時と比べて活動継続をしていく理由の方の回答が減っているんですね。この2つが減少しているというのがちょっと興味深い点かなと思います。具体的になぜ減少したかっていうことは分かりませんが、もしかしたらもう自分たち棚田保全活動という活動を通して、それは対処することができないのではっていうことであんまり回答を選ばなかったのかなっていう風な予測はできますが、現実のところは今の状況ではちょっと分からないですけど一方で、増えているのは地域の人々の項目で交流人口の増加とか、新しい住民である移住者を増やしたいとか、あとは後継者になるであろう新規就農者を確保したいっていうのは回答が増えていました。棚田での活動がそういった地域への入り口と捉えていて、後継者の確保を考える団体が少しですけど増えてきたのかなというふうに見ることができます。では、こうした活動の結果をどのように感じているのでしょうか。継続利用が増加していた内容を見ると、交流人口やリピーターが増えたという回答が最も多く、棚田に関心を寄せる方が増加したということを感じているようです。一方、移住者の方はどうでしょうか。下の真ん中辺りから棚田の新規就農者が確保できたと回答したのは９で、移住者などが棚田を活用した新しいビジネスを開始したというのが７。それからＵターンなどの新しい担い手が確保できたというのが５でした。調査回答してくれたのは７９なので、あんまり多いとは言えません。勿論、棚田保全活動団体さんなので、移住対策までは難しいというのが現状なのかもしれませんが、やはりなかなか次世代を作るっていうのは難しいことじゃないかなということが分かります。次に活動を続けていく為の課題は何ですかという質問です。やはり皆さん活動団体を継続していくことが難しいという回答が一番多く挙がりました。その理由は何ですか、その活動を継続していくのが難しい理由は何ですかってお聞きしたところ、回答は会員が高齢化しているというのが９４％になっていました。でも、これは結構、もうまさにこの理由っていうのが分かるような回答の数かと思います。次点では、参加者の確保も大変ということなんですけども、私もイベントの時は心のどこかで人が集まるか心配していますので、そういう意味ではお気持ちはよく分かるなというところです。先程どなたかも話していましたが、やはり全国で同じような活動が実施されていますの

で、活動の内容とか立地条件とか、そういったものが色々比較されて選ばれているっていうこともあるだろうということもあるのかなと思います。しかし、活動を行っている団体さんが、その存続の危機っていうのは棚田保全活動にとっても非常に大きな課題であるということは間違いありません。では、今後に向けてどうしていくのが良いのかをちょっと考えてみました。まず、先程ご紹介した調査結果は、地域内の状況としては耕作者が高齢化になってきて、後継者もいなくてという状況で、活動の団体も難しいっていう状況なんですけど、その棚田を保全していくとか、自分事の周りの環境をよく保つっていう為にはやっぱり耕作してくれる人が必要っていうのはもう大前提ですよね。ニーズに対する回答としては、こう一時的に来てくれる人と移住してくれる人ってちょっと点線引いているんですけど、大まかにその2つに分かれると思うんですけども、さすがに移住者の確保を棚田の活動している団体がするっていうのは非常に難しいと思います。先程からもありますが、参加者以上で移住者未満ていうのが最適解っていうのが、これはもう理想の話ですよ。理想の話なんですが、考えられるとそうなってくると、この地域の状況と外へのニーズを単純にミックスすると、理想的な人は棚田で米は作ってくれるけど、移住は考えてない人っていう単純なミックスでいくとこうなりますので、これは先ほどからの大浦先生も話してくれた通り、まさに関係人口と言える立ち位置にいるんじゃないかなと考えます。でも、ここで一つ問題なのがじゃあその人達はお米の作り方を知っているのかなっていうところが一番大きな点かと思います。この人達を耕作者にしていく、そのプロセスが必要というのが今回、この内容として定義できることかなと考えています。そこで先程大浦先生と私達とで行った調査の中で、そういうことをしている地域があるかっていうので、２つご紹介したいと思います。まず１つ目が静岡県浜松市の久留女木の棚田です。こちらでは、まず耕作希望者に米作りを指導して自立した耕作者を育成するということを目的に活動されている団体です。そのため、図の枠を見ていただいたら３つの段階が設定されていて、例えば稲作体験会、それから棚田塾。それから耕作会この3つのステップがあって、棚田や米作りとのかかわり方をその深さで選ぶことができるという仕組みを作っておられます。この画像は、その団体さんのホームページに掲載されているものなんですが、それぞれの立場の意味と役割が、きちんと明記されています。明記できるということは、その活動の指針が自分達の中で明確であるっていうことの表れかと思います。ちなみに２０２３年には地域の団体さんと一緒にその棚田法の団体、新しい団体を組織されたそうで、また活動が拡大しているような気配がしています。私達が調査に入ったのは、それより前の年だったので、ご報告はここまでになりますが、そういうふうになっています。また、稲作体験会は参加して棚田とか棚田の現状っていうのを自分ごとにしていくステップで、棚田塾と耕作会員になると、棚田の耕作者になるっていうステップが３つあって２段階に設定されています。棚田塾と耕作会員さんを地域内の耕作者さんと意見交換する機会が設けられているのがちょっと区別されている点です。もう一つは、こちらも古くから有名なところかと思うんですが、埼玉県の横瀬町での寺坂棚田です。こちらでは、その名前の通り横瀬町寺坂棚田学校という団体名になっておるんですけども、その名前の通り、稲作を学べる学校と言えます。活動当初からこのスタイルだそうなんですが、独り立ちを希望する参加者さんが出てきて、その為にオーナー制度ができていたということをお聞きしています。お聞きした際には、オーナー制度はほぼ満員ということでしたが、オーナーの会が別に存在しますので、学校を卒業していくっていう感じということをお話ししました。２０２０年度では年間１５回の活動日があって、これは一般的な農業体験でと考えると多い方かなと思います。注目するのは、参加者さんが自分達でリーダーと副リーダーの二人を決め、活動の運営を任せるという点かと思います。何年も参加されている方から選ばれる傾向にあるそうです。しかし、学校の会員自体も高齢化とのことで、新たな関与を探す必要があるっていうことなんですが、米作り自体をしたことがあるっていう方が減っているということが課題であるというお話をしてくれました。すごく短くご紹介したんですが、こうした2つの耕作者を作るプログラムの運用から分かることは、目的が明確で関わりの段階が設計されている、活動に参加することで主体性が高まる、地域の地元との交流がある、その田の耕作する技術と経験が積める。これは多分田んぼをするということにとっては非常に重要な点になるのかなと思います。こうした取り組み、こうした要素があって、棚田の環境を把握した耕作者を輩出していくのではないかなと考えられます。そして、一時的な参加者ではなくて、例えば継続的な参加者がそのうち耕作者になって指導者になり、次の継続的な参加者を指導していくという風に技術や情報を、そして耕作しつつ、耕作者としての地位を承継していく。もうやっとここでこうして継承されるというちょっと長期的な話になって、もうそういったプロセスが必要になるのではと考えられます。しかし、これを現場の団体の方が追加で取り組めるかっていうそういうことがある訳なんですけども、その色んな人と何かをする際には、やはりその団体さん、棚田保全活動団体とその間に立って、やはり交通整理をしてくれる存在というのは非常に重要かと考えています。都市農村交流活動を行う上では、こういう組織の必要性っていうのはずっと言われている訳なんですけども、棚田保全活動においても、従来やっぱり農業からちょっと進んだ活動っていうところで止まっていたのが、この法律で地域活動の一種になってきましたので、そういった内容の充実っていうのがこれからも進んでいけばいいなと思っています。以上です。ありがとうございました。

【八島氏】

どうもありがとうございました。ここまで、すごく色々豊富な情報が提供されたかなと思います。予定より少し押していますので、この後のプログラムをちょっと変えて最初に藤本さんのパートを１５分ぐらいして、最後に皆さんとトークと言うか議論して１５分ぐらいできたらなと思っております。ちょっと長めに休み取りまして、4時から次スタートしたいと思いますので、この間、フロアーの方と名刺交換なり、色々また10分ぐらいでしていただければと思いますので、4時スタートでお願いいたします。

【八島氏】

皆様、それでは4時になりましたので、再開したいと思います。後３０分になりますので、お付き合いいただければと思います。最初の１５分ぐらいで藤本さんからこれまで関係人口として、彼は大学１年に入った時から、私と千葉さんで運営というか、窓口になってやっている学生を地域に連れて行って学ばせるという取り組みになります。前はローカルインターンシッププログラムと言ってＬＩＰ（リップ）と呼んでいましたけども、今はローカルパートナーシッププログラムで、そういう形でＬＰＰと呼んで進めております。では藤本君よろしくお願いします。途中で千葉さんと私と何かフォローする形でいければと思います。

【藤本氏】

皆さんこんにちは、色川クラフトビールプロジェクトの共同代表で和歌山大学観光学部を今年の３月に卒業しました、藤本と申します。私は本当に皆さん、今日のあの皆さんと違って、ただ単に色川のファンでただ色川に通っているだけの本当に何もないような人なので、本当に話すことも中身もないことかなとは思いますが、こういったことを

私はやってきた、関係人口としてこういうことを皆さんに知っていただければなというふうに思っております。今日お話しする３点ですと、最初に自己紹介ということで、私は今２４歳になりまして、和歌山県和歌山市出身で、今も和歌山市に在住しております。現在は一応図書館の方で働いておりまして、経歴としましては２０１８年に和歌山大観光学部に入学しまして、色川に通う中で２０２１年に色川クラフトビールプロジェクトというのを発足いたしました。そして、１年間の休学期間とかも含めまして、２０２３年３月に大学を卒業して現在に至るところです。一応、大学を卒業した後も棚田のイベントに参加するなどして、色川との関わりは継続しています。私と色川のこれまでの関わりということで、今年で色川の関わり６年目になるんですけど、この６年間どういったことをしてきたのかっていうことを写真と一緒に紹介できればなというふうに思います。もうざっくりなんで、気軽に聞いていただければなと思います。最初に訪れたきっかけは、今、八島先生からお話がありましたように、ＬＩＰ（リップ）、和歌山大学観光学部のローカルインターンシッププログラムっていう、地域に行って学ぼうっていうプログラムに参加したことがきっかけでした。この写真が初めて行った時に撮った写真なんですけど、第１印象。やっぱりこの風景が一番感動しました。こんな風景がおんなじ和歌山県にあるのかっていうところにすごく感動して鳥肌立ったことが今でも印象に残っております。この感動が関係性を継続していくきっかけになっているんじゃないかなというふうには思っています。これが2回目の訪問の時なんですけど、初めて棚田の作業脱穀に参加しました。この時、正直めちゃくちゃきつくて、しんどくて疲れました。でも、それが棚田のリアルなんだっていうところで認識した機会でもありました。これがその棚田の景観確保のための伐採作業ということで、木を倒す作業とかにも参加したりとか、これあの色川にある紀伊半島大水害の爪痕なんですけど、こういったのを目の当たりにして、当時自分が大学で入っていた防災研究会というのがあるんですけど、そこのメンバーを連れて色川にフィールドワークに行ったりもしていました。こういったことで色川に魅了されて、そして色川に何度も大学のプログラムの関係で通うことで、地域住民と関係性を少しずつ構築していった。そして自分の興味関心のポイント、防災にですね。これをきっかけに、さらに深く関わるようになってきた。こういったのが１年目でした。次に２年目に２０１９年度としましてはこの年から棚田にさらに深く関わるようになりまして、初めて田植えにも参加しました。色川の棚田は、全て手作業ということで、私結構背が高いんですけど、腰痛とか背中が痛くなりながら頑張ったりとかしています。これさっき棚田の小屋のお話だったと思うんですけど、これが棚田小屋でして、ここの中でいつも夜に皆さんと一緒にご飯を食べたり、このような時がめちゃくちゃ自分も楽しいなというふうに思っています。さっき話した防災の取り組みに関しては、大学の先生。これが今日、第三の分科会に出ている此松先生なんですけど、その此松先生を呼んで地域防災を考えるっていう講演会を主催したり、こういった活動も行っていました。これはもう大学の関わりとは一切別なんですけど、色川をみんなに知ってほしいなという風に思って、友人達を誘って色川の体験ツアーを主催したりとかもしておりました。ということで、その棚田に関わることになって、人とのつながりが深くなった。そして私にとって棚田に関わる理由っていうのが、今までは棚田を手伝いに行くっていうところでやっていたんですけど、そこからだんだんと棚田に集まる人に会いに行くっていうところに少しずつシフトしていった。それが楽しみになってきたなっていう風に思っています。３年目。２０２０年度、この年何があったか皆さん御存じだと思います。コロナがありました。この年、私が和歌山市に住んでいて那智勝浦色川っていうと、本当に田舎なのでコロナを持ち込まないっていう観点でも、なかなかちょっと現地には行けない時期になってしまいました。でも、そういった中でもやっぱり関わりたいという欲望はすごく強くて、皆さんに色川を連れていくことはできないけど、色川を知ってほしいという思いからオンライン色川キャンプっていうのを主催したりしていました。あと、この年初めて棚田のオーナーになりまして、２つ田んぼを今も継続して持っているんですけど、こういった現地に行かなくとも色川に関われるポイントになっている。これがそのコロナ禍で現地に行けなくてもうまく関係性を築くことができた大事なポイントだったんじゃないかなと思っております。４年目。２０２１年度ということで、コロナ禍で積極的に関わることはできなかったんですけど、稲刈りとかまずイベントごとには継続的に参加しました。この年他にあったこととしては私の肩書き通り色川ビールですね。これを発足しました。この発足した理由としましては、元々大学がきっかけというところもあったんですけど、色川の棚田でのイベントとかの時に、何か飲めるビールがあったらいいよねみたいなそういった話にふとなりまして、じゃあ、実際にやってみようっていうところで地域の方と共同してビールを作ったという経緯でございます。一応、試験的な取り組みでもあったので、計４回醸造して活動は一旦ストップしております。その醸造所を造ったとかではなくて、ＯＥＭで委託したっていう形でもあります。そして、その色川ビールっていうのは、酒税法とかの関係で、一般流通で販売せず、取り組みに賛同して出資した色川地ビールを育てる会っていう会員にのみ配布したという形で行っておりました。そのプロジェクトを運営していたのが地域住民と関係人口等から形成される色川クラフトビールプロジェクトっていう風な形でございました。プロジェクトメンバーは最終的に２０人程集まりまして、その２０人の殆どが現在も色川と何らかの形で関わりを続けてくださっています。こういった感じで、色川のお茶とか柚子とか、そういった地域産品を使ったビールをみんなで協力して作ったっていう流れでございます。４年目、コロナ禍であったけれど、プロジェクトとかでのオンライン会議とかも活用しながら色川に訪れなくても関わりを継続することができましたということでした。５年目になりますと、これがそのプロジェクトメンバーなんですけど、これ田植えの時の写真なんですけど、元々プロジェクトメンバーはビールが好きでプロジェクトに入ったという人も結構いるんですけど、更に色川のことを知らなかったという方も結構いるんですけど、こういう田植えとかの機会に初めて色川に入って、この時に初めて対面するメンバーもいたり、そういった関係で、ビールがきっかけで地域を知るっていう流れを作ることができました。この年、私が大学を卒業した年なんですけど、一応卒業論文も八島先生に指導いただきながら地域風土を反映させた関係の創出プロセスっていう感じで、卒論の方も書かせていただきました。ちょっと内容については長くなるので、これは省略させていただければと思います。大学生活の締めくくりとして、色川ビールと色川がテーマの卒業論文執筆に熱中した１年でした。そして次が今年度６年目となります。大学を卒業して社会人になった年ってことになるんですけど、大学を卒業しても色川に関わりたい欲望っていうのは変わらず、現在も引き続き関わりは継続させていただいていまして、オーナーに関しては３年目になります。こういった形で、普段現地に行くことはできないんですけど、色川に自分の場所、田んぼがあるっていうことが自分にとって凄く大事な要素になっているんじゃないかなと思っています。ざっくりとこれまでの関わりについてお話しさせていただきました。最後になぜ私は色川に関わり続けるのかっていうポイントについてお話しできればと思います。単純にこの3つだなって私は思っていまして、まず一つが色川で

はリフレッシュができるからっていうことでして、色川は山に囲まれている、本当に自然豊かな場所です。私が住んでいるのが、和歌山市っていう和歌山県の県庁所在地なんで、本当にあのビルに囲まれた人ごみの中でいつも生活しています。そういった日常から離れて自分を休めることができる環境、それを求めて私は色川に行っているんだなという風に思っています。２つ目が色川では自分なりの関わり方ができるからということで、大学の時から防災であったりとか、ビールであったりとか、自分のやりたいこと、自分なりの好きなことができる環境があるから、自分のやりたいことができる関わり方ができるということが一つの大きなことかなと思っています。もう一つが、何かよその地域に関わるとなると、移住ありきで見られることって結構あるなと思っていまして、私自身、色川はとても素敵だなと思うんですけど、自分のライフスタイルを考えると移住は結構難しいなと思っていまして、そういった中である意味関係人口として関わり続けてもいいよ、歓迎しますっていう感じで、いつも受け入れられているっていうところが本当に素敵だなと思っているところです。最後自分の居場所があるからということで、これも今の話にも繋がるんですけど、色川に行ったらいつもようこそ、また来てくれたねっていう感じで歓迎していただいたり、棚田のイベントには関係人口の方達同士がいつも集まっています。そういった人たちとの再会ができる。そういったもろもろを含めて、自分の居場所があるなと感じています。この３つが、自分が継続して色川に関わり続けているポイントになるんじゃないかなと思いました。ちょっと駆け足になってしまいましたが、私の発表は以上でございます。ありがとうございます。

【八島氏】

ありがとうございます。そしたら、さっき写真に出てきて、千葉さんも僕も若い方みたいなことなんですけど、何か彼の成長を見てきていかがですか。千葉さん、いかがでしょうか。

【千葉氏】

僕はビールプロジェクトは特に何もしてなかったですし、あの初期のインターンシップだけの受け入れの窓口をやっていたので、藤本君がどうこうってことじゃないんですけど、やっぱり学生が単年で何回か通ってくれるっていうのは結構ありがたいなと思っているのと、結構ハマった人は藤本君みたいに２年３年と学生の頃でも通ってくれる人がいて、何かそれは先程の僕の話じゃないですけど、時間を積み重ねるってことは結構大事だなと思っているので、その関係性を築いていってくれるっていうのが、やり方としてはありがたいなと思って見ていました。ただ一方で１個だけ加えると、さっきの事務局地域側に必要だよねって話に戻っちゃうんですけど、ビールプロジェクト自体も色川の中の人から見ると、一部の人がやっている。何か分からないっていうような声も何個か聞こえてきていて、地域の中でそれを浸透させる。その情報共有だったり、どういうふうにすれば、例えば報告会をするみたいな時も知り合いとかプロジェクトのメンバーだけじゃなくて、もっと広く呼びかけるみたいなこととかができると、よりその地域の活動として一緒にやれたのかなっていうのは、率直な感想で、何かその辺をこうね。関係人口できた先の話なんだと思いますけど、地域側に突き付けられている話なのかなというのも同時に感じています。

【八島氏】

ありがとうございます。まあ、私の指導する側からすると、積極的に関わってくれたので、放っておいても育ってくれたなっていうことではあります。それを受け入れてくれた地域側が一番大事だったなというところです。そういう意味では感謝を申し上げます。本当に。では皆さんあと15分ぐらいありますんで、ここから質疑応答だったり、いろいろご意見コメントをいただけたりしたらいいかなと思います。まあ、せっかくの機会なんで発言いただければと思うんですが、いかがでしょうか。ご所属やお名前もいただければと思います。

【質問者】

私、島根県の益田市から来ました。島根県は東西に長い間で私のところが一番西に当たります。すぐ近くが山口県の萩市になっております。私は一反ほど田んぼを作っていますが、そこが棚田になっているんですね。どこも同じかと思うんですけど、イノシシ対策で電気柵があってイノシシが入らないようにしておりますけど、まず色川地区はそういう鳥獣対策どのようにされておりますでしょうか。

【松木氏】

守ろう会では前はね、最初の頃は何もしてなかったんですよ。簡単な網メッシュでぐるぐるだけやっていんけども、僕の家から棚田が見えるでしょう。そうするとね、夕方になってくるとね、そのイノシシの子が入ってきてね。３匹ぐらいやったかな。慌てて車で走ってね叩きに行ったんですよ。ただ、殺せませんでした。最後の１匹だけあれらもね。やっぱり慌てていくと、さっとように逃げよんのよね。そのメッシュの間から逃げるんですけどね。１匹だけ叩き殺しました。それから電柵もやりました。すると猿も来るしね。猪も、鹿も出ますしね。もう猿も降りてきてね。僕、自分個人でやっている田んぼにも入られたことあるんですよ。お猿なんですけどね。もうそれから補助なんですけど、電柵は今もやっています。もう絶対にやってないと無理ですね。野菜作ってもどこでも、そういう感じですね。

【質問者】

はいわかりました。ありがとうございました。ちなみにうちの所に鹿は出ませんので、いるのは猪だけです。はいどうもすみません。

【八島氏】

はい、ありがとうございます。じゃあ次の方お願いします。お名前とご所属、来られた場所でもよろしいです。

【質問者】

田辺市本宮町から来ました、地域の企業に勤めているＵと申します。私は藤本君と一緒に色川ビールプロジェクトも参加させてもらっていたんですけれども、藤本君がローカルパートナーインターンシップでの関わりと、地域防災でも関わっていたっておっしゃってたんですけれども、和歌山大学の後輩の方で継続して参加されている方はおられるのかっていうのが一つ知りたいのと、そのＬＩＰ（ローカルパートナーインターンシップ）と私が住んでいる本宮町との新たな関わり方とか、そんなのは窓口というかそうがあるのかっていうこの２点を教えてほしいなと思いました。

【藤本氏】

では、２つ目の質問ＬＩＰとそのどう繋げるかというところは、もうまさに今、観光学部の学部長が隣にいらっしゃるので、大浦先生から聞いてもらう方がいいかなと思うんですけど、１つ目。私の後輩で色川に継続して関わっている人がいるかっていうところで言うと、結論から言うとあんまりほぼいないところかなと思います。まず、どうしても皆さん、大学４年間の中でいろんなことをしたい方、それは当たり前のことかなと思っていて、その中で１年だけ色川の活動に参加して、それ以外は他のところで活動するとか、そういった方も多いと思っています。なので長くて２年３年、多分私みたいな６年社会人になっても継続して関わっているっていうのは本当に正直稀なことかなと思っています。八島先生何か今の近況とかありましたら。

【八島氏】

今日、実は小阪の方で出されていたブースで２名、手伝いに来てくれていたんですが、１年生と２年生です。実際のところいうとコロナで

活動が全然できなかったので、２年ぐらいですかね。その時はちょっと千葉さんのスライドにもあったんですけど、オンラインで地域暮らしとはどんなことかみたいなのをちょっと勉強してたりとかっていうことはしていたんですけれども、ようやく今年からですね、色々なとこに学生が行くようになりました。うまく喋れればよかったですが宣伝しておきます。

【大浦氏】

はい、この観光学部のローカルパートナーシッププログラムですけども、大体１月中旬頃から各地域に何かご要望があればっていうような形で、そういうテーマを募集をいたしますので、そのタイミングで大学の方にお問い合わせいただけると、その後、そのプロジェクトをヒアリングしてこんな感じだったらできるんじゃないですかっていうふうな形に整えて、担当してくれる教員と希望者がいれば実施できる。そういう仕組みになっております。あとは教員から直接申請するタイプもありますので、大学教員の方に先にお話しいただいて、その教員が何か一緒にやれますかっていう風になれば、それでまた作ることもできます。

【八島氏】

詳しいことはまたこちらに聞いていただければと思います。

【千葉氏】

地域側からと言うか補足なんですけど、インターンシップを始めてから何年になるか忘れちゃいましたけど、もう藤本君みたいに卒業されて会社員になる方もいらっしゃるんですけど、そこからまた関係性が始まる場合もあるなと思っていて、要は何が言いたいかっていうと、大学生に対してそこそこの何かを求めるのではなくて、もしかしたら１０年後、花開くかもしれない種をまくみたいな感じでやれたらいいのかなと思っていて、例えばその最初に入ってきた子は今ちょっとどうなっているか分からないですけど、モンベルに就職していつか熊野に帰ってきて、熊野で何かしたいっていうようなことを考えている子だったりするので、いつ、どこで何が起こるか分からないけど、とりあえずいろんな若い子に種をまいていくっていう姿勢は結構重要かなと思うし、特に関係人口みたいな話でいうと、どうしても即効性を求めてしまうと効果が得られないからもうやめようってなるんですけど、そこではない。長い目で見た効果とか、いわゆる効果ではないんだけれども、じわじわ効いてくる何かみたいなものっていうのもあると思うので、そのあたりもその評価基準というか評価指標にしながら関われると、お互いにミスマッチが少ないのかなと思ったので、そこだけ補足させていただきました。

【八島氏】

ありがとうございます。１名大浦先生のゼミ生ですけど、最初の色川のＬＩＰに関わった子が就農はしております。徳島でみかん作ったり、修業しに行っていましたね。そういう子も実はいたりします。観光部なんですけど、大浦先生がいたりするので農業関係に進む子もいるんですね。そういうこともあります。はいじゃ次いかがでしょうか。はい後の方ですかね。はいお願いします。もう一回手を挙げてもらっても大丈夫ですか。一番後ろの方からしようか、次前の方にしますんでちょっとお待ちください。

【質問者】

はい。ＮＰＯ法人棚田ＬＯＶＥＲＳのNと申しまして、兵庫県から来させてもらっております。春に松木さんに祭に来ていただいて、改めて本当に感謝申し上げます。千葉さんにお伺いしたいんですが、この素晴らしいワークショップのお話をまとめられていると思うんですけれども、自然文化経済とこれからの展望は書いてあるんですが、特に協議会として個人として棚田を守ろう会としてそれぞれあるとは思うんですけれども、特に力を入れて、今後の夢というかビジョンというか取り組みたいこと等があれば学ばせていただきたいんですけども。

【千葉氏】

個人的には特にないです。というのは、皆さんのやりたいことが何なのかが一番重要だと思っていて、僕がどうこうしたいっていうのはないんですよね。ただ、それをある種の可視化するためにこの分類をしただけで、そこからこう住んでいる人たちそれぞれがやっぱりここを頑張りたいなって思ってくれるといいなと思っています。そういう意味では、文化なのかもしれないなと今話しながら思いました。

【八島氏】

はいじゃ前の方で手を挙げられていた方がおられたかと思うんですけど、もう一度上げていただいてよろしいですか。はいお願いします。

【質問者】

高島市の畑の棚田。去年来られた方もおられるかもしれませんけど、そっちの方から来たHと申します。よろしくお願いします。元々私じゃなくて、京都市内に住んでおってまあＩターンみたいな感じで高島市の方に移住したもんなんです。その時はもちろん農業をやってないんで、ただ単に景色がきれいだなという単純な感じで過ごしていたわけなんですけど、ちょうど４年前、コロナが発生した年にすぐ近くの田んぼの持ち主さんの棚田オーナー制でずっと２０年間ぐらいやっていたんですけど、コロナの都合でオーナー制が廃止というか中止になったんですね。それでその年にもともとオーナーさんの来られていた方が行くとこがなくなったということで、その時に農家さんから田んぼやってみてくれへんかというお話が来たんで、何とかしようかと思い、勢いで田んぼをやることになってしまったんですけど、今まで全く経験がないので、畔塗りから一番困ったのは代掻きですね。あの辺もやったことのないんで、どうしていいか分からんということで、近くの農家さんにお願いして助けてもらったんですけど、その時にお手伝いをする人を知り合いとか、オーナー制度で行くところがなくなった人とかたまたま集まってもらってできるようになって、１年目はなんとか行ったんですけど、一番問題なのは人手の確保を皆さんのところはどういうふうにして集めておられるのかなと。ただ単にやるから来てねって誰かに言ったところで集まるわけじゃないんで、そういう情報の発信方法が知りたいなと思います。うちの方は事務局とかそういうのが全くないんで、情報の発信方法も今のところは何もないということで、結構困っているんで、アイデアがあれば共有をお願いしたいなと思ってお話しさせてもらいました。よろしくお願いします。

【八島氏】

ありがとうございます。何人かから答えれるかなと思うんすけど、現場からだと中西さんがいいかな。

【中西氏】

私が紀美野町の中田の棚田ではどのようにしているかをお伝えできればと思います。ただ、とても大きく違うのは、中田の棚田には協力隊が二人いて、役場の私が一人っていうものすごく強力な事務局体制を敷いているんですね。なので、とても参考になるかどうか私、不安なところではあるんですけれども、まずそのやるから来てねでは集まらないっていうようなお言葉があったかと思うのと事務局もないから情報発信をどうしていいか分からないっていうところなんですが、その中田の方では先程紹介したとおり、棚田サポーターズっていうのを募集しているんですけども、これも例えば個々人に来てくれよっていうので、最初はもうそれで登録してもらったんです。人づてで近所の人とか知り合いの人とか登録してもらったんですけど、結局その人と人

の付き合いで登録してくれたんで、大半がなかなか活動には来てくれないっていうこともあって、２，３年たった頃に一斉に整理したんです。それで７０ぐらい行ったのが２０ぐらいになって、そっからまたＳＮＳ使ったり、そういうのが好きそうな人に声を掛けたり、農家民泊さんとかで宣伝してもらったり、外から人が来るところにこういっぱい色々置いてもらって、ちょっとずつ増やしていったっていうのが現状です。今はまあ１００人ぐらいいらっしゃるんですけど、やっぱり来る方も都合があって楽しみに来るっていうさっきの藤本君の話じゃないですけど、楽しみに来るのがメインっていうのも結構あるので、普段からじゃあの作業をしに来ようかと言って来てくれる人は本当にごく少数です。主な戦力となっているのは、やっぱり５人いたらいいところかなっていうのが、もう関の山かなと思います。ですので、やっぱり環境が大きく違ったとしても、そんなに１００人も２００人も強力な戦力が得られているかっていうとそうでもないのかなと思いました。ただ、やっぱり距離的な問題もあるし、後はどれだけその棚田に愛着を持っているかっていう点が、その足を運ばせる回数つながっているとは思いますので、取り組みの中でそういう仕掛けをいかに作っていくかっていうところかなと思います。そういう人はやっぱりどんな発信をしても必ずキャッチはすると思いますので、ちょっと全然参考にならないかと思いますけども、紀美野の例でした。

【八島氏】

色川からもいかがですか特にない。

【千葉氏】

強いて言えば事務局の方が学校とかにチラシを撒いてくれているんですよね。小学校とか中学校とかその辺とかまあ実際そんなにそういう若い子は来ているわけではないんですけれども、チラシを近くの人たちに配るみたいな地道な作業も結構大事なのかなと思いますし、その事務局の労力に対してすごい頭が下がるなと思って見ているので、何かこうどこかに発信すると人が集まるというのはなかなか難しいような気もするので、一つずつ、ちょっとずつ広げていくっていうのが一番確実な方法なのかなと個人的には思います。

【八島氏】

ありがとうございます。今２分ぐらい過ぎているんですけども、もう１方ぐらいと思います。はい、よろしくよろしくお願いします。

【質問者】

私は岐阜県恵那市中野方町坂折棚田があるところから参りました、Tと申します。今日は大変貴重な意見、色々とお話を聞かせていただきましてありがとうございました。ちょっと私は中西さんにお聞きしたいです。先ほど説明の中で、棚田振興協議会は町外の人を中心に組織されたというお話をされましたが、その理由と今その方達がどんな活動をされているのかなと思いました。実は私の地域も令和２年にして指定棚田地域に認定されまして、令和３年にはつなぐ棚田遺産に中野方町棚田群として認定されておりますが、棚田振興協議会を立ち上げましたがなかなか十分にそこには直接の補助金も入ってきませんし、活動がなかなかできないんですが、そういう町外の方を入れてどんな活動されているのか、ちょっと聞きたかったです。よろしくお願いします。

【中西氏】

協議会の方では、その棚田の地権者さんとか耕作者さんじゃなくて、町内に住んでいる地権者さんでもなく、耕作者さんでもないっていう方が参加しているんですよ。皆さん、大体がその棚田の耕作者さんだったり、地権者さんだったりっていう団体さんかと思うんですが、中田の棚田ではもう既にお一人しかお米作っている人がいなくて、地権者さんも周囲に３、４人住んでいるぐらいで、残りの方はもう後継者も息子さんやお娘さんたちがもう近隣の市町村に引っ越してきて、別にもうお米作る予定もないっていうような方ばかりの状況だったんです。なので、その人達で何か保全活動をしようっていう気すら起こらないっていうような状況だったんですね。紀美野町のまちづくり推進協議会という別組織がありまして、そちらの方で何か紀美野町で新しく入っていくところないかなというような話し合いをしていたらしいんですが、その時にちょうど棚田の景色がすごく綺麗なとこがあるよっていう話になって、みんなで見に行ったらまさかこんなとこがあったんかっていうことで、あそこを開発していく価値があるっていう話になって、そのとき最終的に小川地域棚田振興協議会っていうのができるんです。ですので、従来の耕作者さんたちが地域を守るためとか、農業的な部分を守っていかなあかんって言って立ち上がったのではなく、町内に住んでいる別の地域のその棚田の価値をいかにして残すかっていうことで、組織されたっていうような組織になっています。その人達は何をしているかっていうと、自分達がどういう活動をしたら、それがそういうふうにつながるかっていうアイデアとか計画を考えるとか、実際にその月に何回か活動日っていうのが設定されているんで、その日に農作業もするし、それ以外にも必要な農作業は参加しているっていうこと。体も動かし、頭も動かしっていうのはかなり積極的にしてくれておりますので、本日もあの青い法被の人に聞いてねって、私に言って今そこに二人しかいってないんですけど、その辺の分科会に５、６人来ていますので、また明日ほとんどの人が色川の棚田の見学会に行きますので、良かったら声かけて色々とお話いただけたらと思います。

【八島氏】

ありがとうございます。時間がちょっと過ぎておりますので、最後に大浦先生に１分２分ぐらいでまとめていただいて終わりたいと思っております。それではお願いします。

【大浦氏】

皆様、本当にありがとうございました。私自身も今日、実はこの４人のお話を聞くの初めてだったので、非常に学びになりました。やはり今日でてきたことで非常に印象的だった話で、松本さんのお話にあったように、この棚田のお守りをする人をどう確保するかというのが最大の課題だなと思いました。もちろんこれが最大の課題であることは間違いないんですけども、もう一つ千葉さんがおっしゃってくださった活動のお守りをする人ですね。もうこの重要性も本当にすごい発見だったなと思うわけです。この活動のお守りっていうのは内に対してもそうですけど外に対してもそうだと思うわけなんです。なので活動の中を、いろいろとこうアイデアを出したり、まとめていったり、外に見えるようにしたりというふうなこと。それから外から来られた方をうまく先程の階段に乗っけて、主体にこう引っ張ってくるというような、そういうことも含めて非常に重要だなと思いました。それから特に田んぼという農業は、単にこう畑とか、田んぼの土地があればいいのではなくて、必然的に絶対に共同作業が必要な水を引くというところがありますので、そこでやっぱり多くの人と関わることになるわけです。そういうことを考えますと、やっぱり多様な人と外から来られた人が関係を築いていく場として本当に棚田の保全活動というのは非常に一つの重要な場になり得るんだということもあります。これを承継していくことはとても重要かなと思いまして、その中でやっぱりこの見える化の重要性も今日指摘していただいたかなと思います。新しく地域に入った人には、こういった見える化をしておくことが、この地域がどういう地域であって、どういう誇りを持っていてというそういう歴史がよく分かりますし、恐らくもともとの住民の方も、自分たちのここまで来た道をですね、もう一度振り返ることによって価値

をさらにこう思いを深くするといいますか、プライドを形成することにもなるんだなと思います。そして、あともう一つ印象的だったのは、耕作者にしていくということはやっぱりこう明確に位置づけてプロセスとして戦略的に進めていかないと、なかなか難しいと感じている地域も多いのかなと思います。私も一緒に中西さんと調査に行かせていただいたときに、ちゃんと確保しているところは今日２つの事例でしたけれども、もう一つきちっとそれを自覚して、ここでちゃんとしてないとまずいなっていうことを先程のような見える化をして自覚した上で、来る人を見るようになっているんですね。だからここも本当に大事なことかなと思いました。それから、中西さんの活動継続への課題はっていうグラフがあったかと思うんですけど、この中で実は地域内での保全活動意識の醸成というところも多くの地域が課題だと挙げています。特に今日の田んぼを守りする人たちですね。それから活動を守りする人たち。こういった方々をもう一度改めて、例えば、那智勝浦町というのは海の那智勝浦と山の那智勝浦がございまして、必ずしも接点が十分にあるわけではない地域もあったりするんで、そういった中でもっと近くからもしかしたら仲間になってくれる方を見つけていくとそういう働きかけも非常に重要ではないかと思いますし、現にそんな形でで新たな協力者を獲得したような地域もあるように思います。このようなことも含めて、また、今後考えていければいいのかな。その辺が、今日私がこの分科会を通じて学んだことかと思いました。以上です。

【八島氏】

ありがとうございます。では、分科会の方はこれで閉じたいと思いますけれども、棚田サミットとしては今晩もありますし、棚田の見学もありますし、最後の宣言までありますんで、皆さん、また引き続きいろいろ学んでいただていたり、交流していただければと思います。拙い進行でしたけれども、そこは御勘弁いただければと思います。それでは、分科会としてはこれで閉じたいと思います。

和歌山県PRキャラクター「きいちゃん」

《資料：第１分科会／大浦 由美氏》

第1分科会　関係人口の承継

2023.11.18 全国棚田（千枚田）サミット in 那智勝浦町
大浦 由美（和歌山大学）

和歌山の棚田，段々畑

これまでの取組
- 1990年代～ 棚田の景観が「再発見」される
  - 1995年：全国棚田（千枚田）連絡協議会設立
  - 1999年：日本の棚田百選，棚田学会
  - 県内でもいくつかの地域で保全活動が始動（あらぎ島，色川etc）
- 2010年代～ 全国棚田サミットを契機とした棚田保全活動促進
  - 2013年：全国棚田サミット in 和歌山・「残したい棚田・段々畑」（市町による選定）
  - 2014年～ わかやまの美しい棚田・段々畑（県による認定）
    - 和歌山県版「棚田・段々畑サミット」
- 2019（R1）：棚田地域振興法
  - 棚田を「国民的財産」として位置づける
  - 棚田が存在する地域の振興を通じて棚田を保全
  - 棚田地域における定住・国内外の地域との交流
  - 多様な主体の連携・協力の促進
    - 指定棚田地域／指定棚田地域振興協議会
    - 指定棚田地域振興活動計画の策定

＊多様な主体の連携・協力

棚田地域振興法の制定

- 趣旨
  - 多面的機能を有する棚田＝国民共有の財産であり宝
  - 棚田が存在する地域の振興を通じて棚田の保全を図る
- 基本理念（要約）
  - 棚田地域の振興は，棚田地域の有する多面的な機能が維持されるように，棚田等の保全を図るとともに，棚田地域における定住等および国内外の地域との交流を促進をすることを旨として，行われなければならない。
  - 棚田地域の振興に関する施策は，農業者，地域住民等による自主的努力の助長及び多様な主体の連携・協力の促進を旨として，講じられなければならない。
- 国等の責務
  - 国の責務：棚田地域の振興に関する施策を総合的に策定・実施
  - 地方公共団体：国との連携を図りつつ，自主的・主体的に地域の特性に応じた施策を策定・実施

棚田地域振興法（つづき）

- 具体的施策
  - 指定棚田地域の指定，指定棚田地域振興活動計画の認定等
    - 都道府県の申請に基づき「**指定棚田地域**」を指定
    - 市町村は，指定棚田地域振興活動の参加者からなる「**指定棚田地域振興協議会**」を組織
    - 国による協議会の構成員に対する情報提供，助言
    - 協議会が作成した「**指定棚田地域振興活動計画**」を認定

棚田地域振興
コンシェルジェ

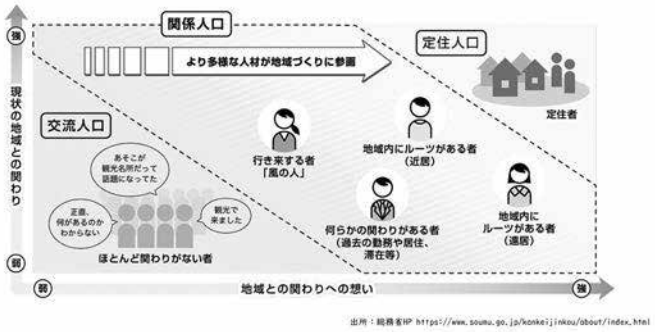
  - 支援措置
    - 「活動計画」が認定された地域は，財政上・税制上の措置や人材の育成確保に必要な措置が受けられる
- 特徴
  - 省庁横断による対応
    - 農水省，内閣府，総務省，文部科学省，国土交通省，環境省

棚田地域の振興により実現すべき目標

1. 棚田等の保全
2. 棚田等の保全を通じた多面にわたる機能の維持・発揮
   - 農産物の供給の促進（棚田米のブランド化・販売促進）
   - 国土の保全，水源の涵養
   - 自然な環境の保全
   - 良好な景観の形成
   - 伝統文化の継承
3. 棚田を核とした棚田地域の振興
   - 都市農村交流を通じた「関係人口」の創出・拡大による地域振興
     - 棚田オーナー制，フィールドワークと連携した交流促進，企業のCSRや社員の福利厚生活動の一環としての活動
   - 棚田を観光資源とした地域振興
     - ライトアップイベント，棚田に由来する伝統行事や祭りの観光資源化
   - 棚田米等を活用した6次産業化の推進
   - 棚田を舞台とした芸術文化活動

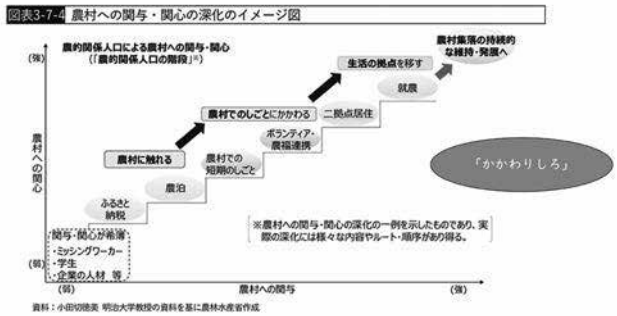
関係人口とは

「特定の地域に継続的に関心を持ち，関わるよそ者」（田中，2021）



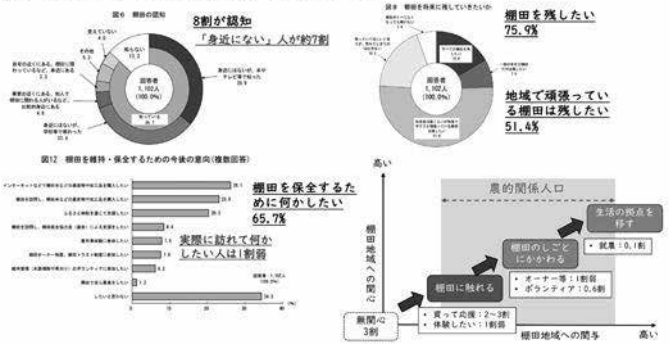
出所：総務省HP https://www.soumu.go.jp/konkeijinkou/about/index.html

関わりの階段



資料：小田切徳美 明治大学教授の資料を基に農林水産省作成

棚田に関する意向調査（2019年）



《資料：第１分科会／大浦 由美氏》

関係人口～「主体」の「質」の転換

（田中輝美、2021）

地域外の主体（関係人口）

地域内の主体（住民）

→ 棚田地域 再生主体へ

背景 ①

棚田保全活動の危機

容赦なく進む高齢化・人口減少
- 保全活動自体が困難に

岩手県一関市・金山棚田
- 2013年から保存会による保全活動
  - 展望台，看板を設置
  - 修学旅行生受け入れ，農業体験
- 後継者みつからず，作付け断念

宮城県丸森町・大張沢尻棚田
- 1999年「棚田100選」
  - 稲刈り体験，地元食材を使った料理提供
- 2012年に保全委員会解散
  - 高齢化，人数減少
  - 地域住民3名でなんとか棚田を維持している状況（面積を半分に縮小）

出所：日本農業新聞2019年6月16日

背景②：COVID-19の世界的流行

人流がストップ
- 観光や交流活動に大きな影響

近場の観光地，アウトドアに注目
- 密にならないレクリエーションの場
- 棚田空間の活用（棚田キャンプ，星空…）

「生き方」を見直す機運
- テレワークなど，働き方の変化
- 深刻な不況
  - 都会では暮らせない…

日本農業新聞 2021年10月1日

棚田保全をめぐる動き

背景③：家族農業と農村の国際的な再評価
- 国連「小農の権利宣言」
- 2019～「家族農業の10年」
- 地域コミュニティを支える農業

日本農業新聞2019年1月4日

日本農業新聞2019年1月18日

棚田保全とは？

農の価値（＝百姓仕事の価値）の深さに気付き，それをいかにして存続させようかという取り組み（宇根豊）

また観光は，地域の文化や自然を観光開発によって変容させ，ときに衰退させてしまうこともある。観光は，観光者を地域の文化・自然などを受動的に享受する＜単なる消費者＞に変え，自然・文化などが変容・衰退していくことさえわからないようにさせる負の力をもつのである。（遠藤，2019）

農の暮らし（＝自給）の再評価

- 「食料自給率を上げよう！」「安全・安心な食を！」
  - 「大規模な農家が大量生産」←それでいいの？
- 農業の自給≠食料の自給
  - 食料の自給だけでは多くのものが失われる
    - 「仕事，会話，愛情，思い出の自給が放棄」（宇根，2010）
    - 「百姓仕事は，自然も風景も情愛も生産している」（同上）
- 自給の再評価（1990年代～）
  - 市民農園の増加（都会）
  - 農産物直売所（農山村）
  - Iターン者の増加（都市から山村）

→ 百姓仕事の発見・再評価

自給の見直しの意味（宇根，2010）

- ささやかな田畑を守ることによって，家族や村の暮らしをこれ以上，外部の経済に依存させないようにする気概のあらわれ
- 自然とのつきあいを土台とする百姓仕事にこそ，**おカネになる生産性を超えていく希望**を見出した人たちの生き方のあらわれ
  - 必ずしもおカネが十分でなくても，豊かに暮らすことができるのではないかという夢の再生
- 人間中心の社会ではなく，自然と一体になったリズムの中で生きていく人生へのあこがれの表出

農業のありかた
“食べ物は自然からのめぐみ”

百姓の役割
私たちと自然との関係を守る

第1分科会の見取り図

【2018年「県版サミット」より】
- ■山村文化の象徴
- ■交流拠点（関係人口の入口）
- ■アイデア発想の場
- ■「米作り体験農場」（関係人口が育つ場）
  →一方で，常に「存続の危機」

松木繁明さん（棚田を守ろう会 農場長）

千葉智史さん（らくだ舎）

- ■「色川の未来アイデアブック2023」・ワークショップの経験から
- ■小阪の暮らしと棚田

中西円香さん（紀美野町役場職員）

- ■全国的な棚田保全活動の状況
- ■関係人口創出の取り組み
  ・事例紹介（関係人口→耕作者をつくりだす）

藤本多敬さん（和大観光学部08/色川地ビールプロジェクト代表）

- ■学生から関係人口へ
- ■地域にかかわるということ
- ■若者が暮らせる条件

1

和歌山県紀美野町
中田の棚田 活動概況
全国的な棚田保全活動の状況

和歌山県 紀美野町役場 まちづくり課 中西 円香

本日の内容

1、和歌山県 紀美野町
　中田の棚田の活動概況
2、全国的な棚田保全活動の状況
2-1、全国調査とその結果
2-2、関係人口を作り出す取組
　-事例調査-
3、まとめ

3

1、和歌山県紀美野町 中田の棚田の活動概況

中田の棚田
小川地域棚田振興協議会
面積：10ha(うち棚田9ha)
認定：つなぐ棚田遺産
　わかやまの美しい
　棚田・段々畑
　棚田地域振興法
　指定棚田

棚田の状況
・1名の農家が米作りを継続しているのみ
・約3/4が耕作放棄地

協議会
・2020年 設立
・棚田地権者が3名程度存在するも、棚田地域外の会員が多数

4

1、和歌山県紀美野町 中田の棚田の活動概況

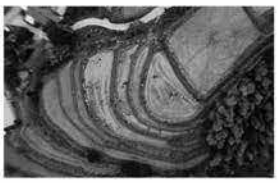
活動ヴィジョン
「棚田が人をつなげる　棚田が時代（とき）をつなぐ」

・2020年 地域おこし協力隊 2名着任
・2021年「棚田サポーターズ」設立
　→ 毎月活動日を設定し、会員とサポーターズ等が参加して作業を行う
・2022年 田植えイベントに約100名近くが参加
　約3,000㎡で約1トンの米を収穫
・2023年 「計画的な再水田化と人材確保」を目標に掲げ、3年間の計画を策定

■和歌山大学観光学部LPP、小中学校の体験活動、生き物調査、棚田deCAMPなどのイベントを随時実施中。

5

1、和歌山県紀美野町 中田の棚田の活動概況



6

1、和歌山県紀美野町 中田の棚田の活動概況

✓収穫祭 /　棚サポさんとの活動日

7

2、全国的な棚田保全活動の状況

2-1、全国調査とその結果

全国の棚田地域の活動実態を知るために、アンケート調査を実施。特に、都市農村交流を取り入れた棚田地域を対象に、全国の活動状況と運営状況を調査。
（和歌山県 里地・里山振興室からの受託研究として、和歌山大学と和歌山県が実施）

画像：NPO法人棚田ネットワーク

期　間：2020/10/6～
　　2020/12/27
対象数：212棚田地域

対象数	212
回答数	150 (70.8%)
都市農村交流実施	**79 (52.6%)**
都市農村交流未実施	71 (47.3%)

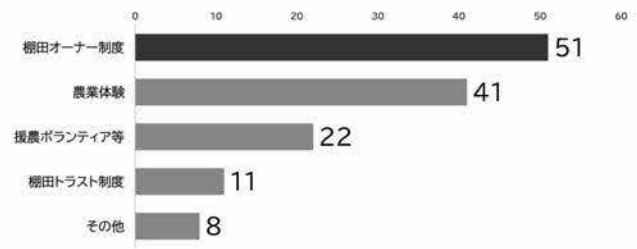
全国の活動状況
活動内容・なぜしているのか・その効果・課題を整理

運営状況
誰が・どんな役割をしながら活動を運営しているのか

8

2、全国的な棚田保全活動の状況

Q1：どんな活動をしているのか？（複数回答）



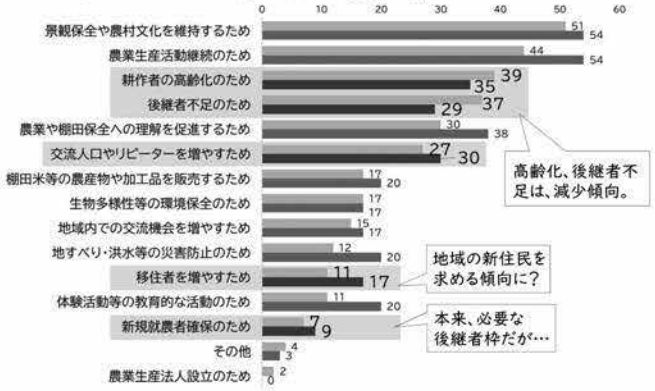
・2000年～2004年の間に活動を開始した棚田地域が多いが、2015年以降は活動を終了する地域が出始める。
・活動内容は複合的。

《資料：第１分科会／中西 円香氏》

9

2、全国的な棚田保全活動の状況

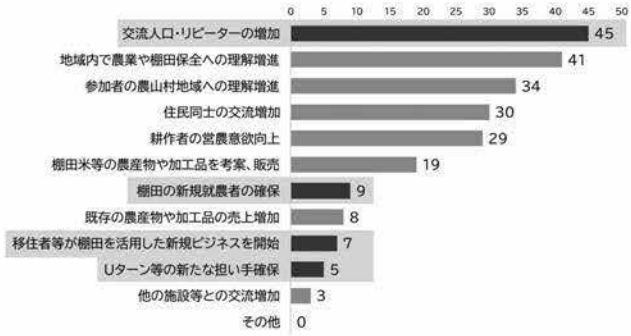
Q2:なぜ始めたのか?これからも続ける理由は?(複数回答)



10

2、全国的な棚田保全活動の状況

Q3:どんな変化があったか?(複数回答)

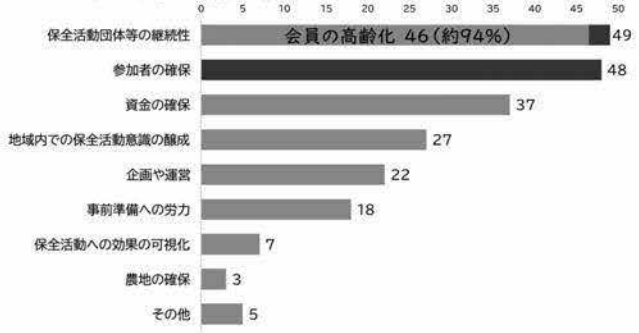


・交流人口は増加したが、肝心の新規就農者や移住者の確保は限られた地域。

11

2、全国的な棚田保全活動の状況

Q4:活動継続への課題は?(複数回答)



・都市農村交流を対象にした棚田保全活動研究では、2000年代前後から活動自体を続けていけるのか、危惧する指摘も多い。

12

2、全国的な棚田保全活動の状況

2-1、全国調査とその結果-「人」に焦点を当てたまとめ-

地域内の状況	耕作者の高齢化 後継者不足 団体の存続	・「耕作者の高齢化」「後継者不足」への対処は既に諦め感か? ・団体の存続は、このままでは困難な状況。	耕作者は必要
地域外へのニーズ	交流人口 リピーター 移住者 新規就農	・「移住者」などを明確に求める意向は、全体的には少ないものの増加傾向。 ・「交流人口やリピーター」の増加は、強く実感。	参加者以上、移住者未満

理想的な人:棚田で米作りはするが、移住は考えていない人(関係人口)

↓

耕作者を作るプログラムが必要?

13

2、全国的な棚田保全活動の状況

2-2、関係人口を作り出す取組-静岡県 浜松市 久留女木の棚田-

画像:久留女木 竜宮小僧の会HP

面積	7.7ha
枚数	800枚
保全組織	久留女木里山の会 久留女木竜宮小僧の会

稲作体験会 → 棚田塾 → 耕作会員

自分事にするステップ / 棚田の耕作者になるステップ

・耕作希望者に米作りを指導し、自立した耕作者を育成することが目的。
・地域外からの人々が所属する「久留女木竜宮小僧の会」が、地域との仲立ちを行う。
・「棚田塾」と「耕作会員」は地域内の耕作者と意見交換する機会がある。

14

2、全国的な棚田保全活動の状況

2-2、関係人口を作り出す取組-埼玉県 横瀬町 寺坂の棚田-

画像:寺坂棚田学校HPより

面積	5.2ha
枚数	250枚
保全組織	横瀬町寺坂棚田学校

寺坂棚田学校 → 棚田オーナー制度

・体験活動でありながら、「学校」。稲作を学べる設計。
・学校の生徒がオーナーになり、自給的農家として独り立ちしていった。
・年間15回程度の作業日(2022年度)。
・参加者の中からリーダー1名、副リーダー2名を選出し、活動の運営を任せる。
リーダー:全体のマネジメント
副リーダー:任された田での作業管理

15

3、まとめ

耕作者を作るプログラムの運用から分かること

・明確な目的の設定(久留女木)
・関わりの段階を設定したプログラム設計(久留女木)
・主体性が高まる設計(久留女木・寺坂)
・地域との交流機会(久留女木・寺坂)
・"その"田を耕作する技術と経験(久留女木・寺坂)

→ 棚田の環境を把握した耕作者の誕生を支援

一時的な参加者 → 継続的な参加者 → 耕作者指導者

技術・情報・耕作者としての地位などを承継

課題

・棚田保全活動団体だけでなく、他の組織(事業)との連携
・関係人口の受け入れなどをコーディネートする組織

16

ご清聴ありがとうございました

第❷分科会 集落空間の継承 コーディネーター 佐久間 康富 氏 和歌山大学システム工学部准教授

【佐久間氏】
はい、みなさんよろしくお願いします。第2分科会コーディネーターを務めます和歌山大学佐久間と申します。第2分科会集落空間の継承というタイトルにさせていただきました。今日午前中、外山さんと有田さんの話がありましたけれども、棚田のこれからを考えるにあたって、やっぱり担い手不足問題が深刻というようなことで、外山さんからもお話があったかと思います。
担い手がいないという時に、まず関係人口ですとか、そういった話が頭に浮かぶとは思うんですけれども、第1分科会の方でそちらを中心に扱います。第2分科会の方では、むしろ移住定住といいますか暮らしを立てて、その場で暮らしを立てられる方をどうお迎えするのか、あるいは次の世代の暮らしの場をどう作っていくのかということについて議論したいと思いまして、集落空間の継承ということでテーマとしました。棚田のことも入り口にしますけれども、特に移住定住の最初のきっかけになる住まいの話ですかね。空き家の話なんかもちょっと取り上げて議論していきたいと思います。ちょっと私の方で簡単に今日の主題解説というか趣旨説明ということで、少しお時間をいただいてお話しさせていただければと思います。今日、外山さんから棚田の写真いっぱいあったかと思うんですけど、私の方でも、明日、足を運ばれる方もいらっしゃると思うんですが、地域の状況をイメージ持っていただければと思いまして、同僚の原先生のドローンの写真をちょっと幾つか持ってまいりましたので、ご紹介するところから、ちょっと皆さんと共有するような雰囲気を作っていきたいと思います。これ最初のスライドタイトルにしてるのは、小阪の棚田というところで、棚田を守ろう会の外山さんの紹介の中でもあったかと思います。こんな感じの棚田になってございます。少し山を下りていくと、円満地公園というのがちょっと下の方に見えますかね。この辺にありまして、泊まられる方もいらっしゃるんですかね。この辺だったかと思います。あと田垣内ですとか大野ですとかっていうのが見えております。少し右に角度を振ると、こちらが大野というところと口色川地区であります。今日は大野の定住世話人ということで大東さん、口色川の定住者世話人で新宅さんが今日来ていただいています。集落が地区１０でした、９ぐらいですかね。9あるそうですけども、大野と口色川は人口世帯数が多い地区になっております。大野を拡大しますと、こういった感じでして、ここに赤い大きな屋根が見えていますが、これが2016ですかね。5、6年前ですか、6、7年前かな。ちょっと見切れていますけど、旧中学校と小学校を小中学校という形でまとめて建て替えた小学校があります。こちらが保育園で支所、出張所がこれですかね。郵便局もちょっとこの先にありまして、地区の中でいろんな施設が集まっている中心地の一つです。これ私も改めて、この写真見ながら棚田ではないんですけど、斜面地に少しでも平場といいますか、建物が建てられるように工夫をしながら、暮らしの場を作られているなというのをちょっと改めて感じました。これは同じ大野なんですけど、ちょっと県道のバイパス沿いから見た朝の景色で、ちょっと朝もやがかってる感じの小学校がこの辺ですかね。見えていて私、自分で撮った写真ですけど、お気に入りの写真の一つです。こちら口色川地区のところで会館がちょうど、駐車場が見えていますけど、昔、あの大きな紀伊半島大水害ですかね。被害があったところですけども、今はもう砂防ダムができていて、ちょうどお寺のところから見た風景ですけど、こういう景観、景色になっています。少し後で御紹介もあるかもしれませんけど、周辺の木を切って少しでも明るく暮らしを立てられるようにといった取り組みもされてございます。今日、司会の方にご紹介いただきましたけれども、色川地域振興推進委員会、役員の方、ほぼフルキャストって言っていいですかね。主要な方に今日はご登壇いただいています。有田さんから地域運営組織の話がありましたけども、地域運営組織という言葉ができる前から区長さん区長会と連携して地域づくりに取り組んでおられる。特に移住定住中心となって進めていらした皆さんが今日ご登壇いただいていますので、そういったお話も伺ってまいりたいと思っております。こちらが今日の趣旨を1枚でまとめたものでございます。棚田に代表される集落空間で担い手の課題を抱えているということは冒頭お話ししたとおりです。交流人口、関係人口、あるいは最近ですと子世帯、意外と近くに住んでいたりしますので、そういうエリアを拡大して担い手を考えるという議論も進んでおります。また一方で、やはり移住定住、Uターン、Iターンみたいなことは、もう20年30年、皆さん関心を持って取り組まれておりますけれども、今日はこの移住定住のことを切り口に考えていきたいと思っております。といいますのも、ご存じの方も先ほど外山さんからもお話ありましたけれども、色川地区70年代から、その移住定住の受け入れをされてきて、外山さんから本の紹介ありましたけども、あの本でも先発地域という形で色川のことが紹介されています。あの外山さんから人口ピラミッドの話しがありましたけども、大西さん、事務局でまとめてくださっている人口の推移のグラフを持ってまいりましたけれども、1990年で600人ぐらいが今309ですか。ちょっと、もうさらに進んでいるのかもしれません。そういった状況に対してIターンの人口、後で、大西さんから詳しくお話があると思いますので、2020年頃で過半を超えて今6割に行くか行かないかぐらいですかね。というような状況でございますので、40年50年、移住者、定住者の受け入れの取り組みをされてきた色川の今というのを今日は皆さんと共有して、今後に向けて課題を共有できたらというふうに思っています。空き家の話に着目しますということを申し上げました。有田さんの資料にも出てまいりましたけども、田園回帰、移住定住に対して3つのハードルがあると言われていまして、移住希望者はいるんだけども、住める家がない。住まい、なりわい、コミュニティというんですけど、家がない。それから移住希望者はいるけども、暮らしを立てる上での仕事がない、雇用の場がない、なりわいがなかなか難しい。そのなりわいという課題。それから最後に移住したはいいけれども、なかなかコミュニティといい関係を作れなくて、短期で転出してしまうっていうような。最近、SNSとかニュースでいろんな地域の方と移住者の方のボタンの掛け違いのようなことがよく耳にするようになりましたけれども、丁寧に関係を作っていくっていうことが大事かなというふうに思っておりますが、今日はその空き家の話に少し着目してお話を後半伺っていきたいと思っております。空き家の課題。これ皆さんも棚田のこと取り組んでおられるのと同時に、空き家のことに皆さん関心を持たれているかなというふうに思っておりますが、空き家のなんとなく、これ図で表したもので、住まいの空き家を真ん中におきまして、当初の住み手の方がこの紫色の丸のイメージです。ずっと住まわれていたんですけれども、病気であったり、施設に入られたり、残念ながら亡くなったりということで、所有権が子世帯に移ると、なかなかその空き家との住まいとのかかわりというのが途切れがちになってしまうということと、こちらの子世帯の空き家所有者の方というと、もう都市部、あるいは下の町場で暮らしを立てておられる場合がほとんどですので、なかなか農山村の空き家を利活用する理由がないという言い方をよく聞きますけれども、居住の実態は既にないんだけれども、それをそのまますぐ賃貸物件として貸せるかというと、盆暮れに通ってみたりですとか、お墓があったりですとか、思い出のあるものがたくさん置いてあったりということで、なかなか移住希望者に渡らないという空いてない空き家の課題という

のがよく議論になりつつあります。今日後半、少しお話しいただければと思うんですけれども、空き家所有者さんにとっては活用の理由はないんですけれども、移住を希望されている移住希望者の方だったり、それから、その移住希望者を迎え入れたい地域側としては、その利活用の理由があるので、空き家所有者に対して声かけをするといいますか、そろそろ貸してくれんかみたいなことで、声かけをするような役割というのが期待されているところであります。色川の皆さん、そうした取り組みも実はされておりまして、これは行政でやろうとすると私有財産への働きかけですので、なかなか難しいんですけれども、地域の方と昔住まわれていた方との信頼関係の中で働きかけが行われていくというところが一つポイントになるかなと思ってございます。少し自己紹介兼ねてですけれども、大学でちょっとコロナ前後もありましたので、空き家の調査を学生としておりました。コロナ頃は外からたまに様子、感染状況の低いときにお邪魔してあんまり人と触れないように、外から写真を写したりという調査をしたところと落ちついた時に今日、新宅さんと大西さん真ん中に写っていますけども、その空き家の方の状況のお話を伺うということで、大学の研究を通じてお世話になっていたというのが、私の色川とのご縁でもありまして、今日こういうテーマをご用意いたしました。今日の進行のイメージ、これ最後の私のパートの最後のスライドになりますけれども、この後、色川地区の取り組みということで、取り組みの概要について事務局を務めておられる大西さんからお話しいただきたいと思います。話題を大きく前半後半2つに分けまして、前半の方を移住、定住受け入れの実際ということで原さん、浦さん、大久保さんからそれぞれのトピックでお話をいただく予定にしております。後半の方は今お話しいたしました移住定住の受け入れと連携した空き家のマネジメントって横文字ですけど、先程申し上げた声かけであったり、働きかけということで定住世話人をしていただいています大東さんと新宅さんに後半をお話しいただく予定にしております。その6人の方のお話を受けて、岸上さんにコメントをいただいてパネルディスカッションという形で前の登壇者で少し議論をしてまいりたいと思います。少し時間を見ながらです。なるべく皆さんにそういう機会をと思って進めたいと思ってございますけれども、会場の皆さんにも質疑の場を用意したいと思っておりますので、その折にはご協力いただければと思います。4時半閉会を目指してあと2時間のプログラムでございますけれども進めてまいりたいと思います。今日はよろしくお願いいたします。では、早速、大西さんにバトンを移したいと思います。大西さんですけれども、2011年ですかね。大阪から色川に移住されて、集落支援員として位置づけされながら、委員会の事務局をずっと長く担われております。先ほど研究で入るときの写真なんかもご紹介しましたけども、あの地域の方との調整ですとか、間に立って何から何までお世話になっております。恐らく移住されて見える方も、最初に連絡をとるのは大西さんで、その後、大久保さんとか必要な方にというような形で窓口を務めていただいております。はい、じゃあ、大西さんよろしくお願いします。

【大西氏】

大西です。よろしくお願いします。委員会の事務局としてスライドで映していますが、色川地区の活性化と移住交流の促進の取り組みということで、まず冒頭説明させていただきますので、お聞きいただければと思います。よろしくお願いします。色川地区の概要について、まず説明をさせていただきます。こちらは、明日行っていただくので、また現地見られてないんですが、いろいろスライド写真とか午前中も見ていただいたかと思うので、少しイメージ付いているかなとは思うんですけど、現在は人口が307人の地区になっています。9つの集落から成り立っておりまして、世帯数でいくと182世帯ということになっています。うち移住者が174名ですので、59%が移住者という地域になっております。元々は色川村でさらに前に戻りますと、9つの集落が村であった時代が1000年ぐらいありまして、明治の大合併の際に色川村で、そして昭和の合併の際に那智勝浦町になった範囲であります。なので旧の色川村の範囲は現在、色川地区として地域活性化、移住定住の取り組みをしているという地区になっております。次に人口の推移のグラフですが、かつて人口が一番多かった時は3000人ほど人口がありました。鉱山が栄えていたのと、林業が栄えていたところで、人口3000人を超えていましたが、その後、昭和の30年代後半ごろから鉱山の閉山、林業の衰退っていうのがあいまって、人口が減っていく過疎地になっていったという、全国的にそういう時代かなとは思うんですが、色川もグラフにあるとおり、急激に人口が減っていきました。先ほどもありましたが移住者の受け入れの先進地とよく言われることがあるんですが、始めの流れのところを少し説明させていただくと、1975年になるんですが、今からもう48年、５０年程近く前になるんですが、移住希望する方のグループの訪問がありました。地域としては、地域社会の崩壊であったりとか、村の消滅していくんじゃないかっていうような危機感が高まる中でありまして、その時に耕人舎と名乗る有機農業の普及を志すご家族ですね、移住の希望をされる方が色川に訪れたっていうのが始めのきっかけです。その当時、色川保育所があったんですが、その時で子供の数が保育所で10人ぐらいを下回ってくる状況だったので、このまま行けば保育所がなくなり、そのうち小学校、中学校もいずれは消滅するんじゃないかというところで、そうすると地域、それこそ衰退、消滅していくような危機感もありまして、その耕人舎の方々の中にもちょうど保育所世代の子供を抱えてる家族の方がいたようなので、それも一つ話し合いを持つきっかけになったとも聞いていますが、そういう時代に75年に耕人舎の方達が来まして、地域の人も何とか話し合い、対応していこうっていうところで2年間、耕人舎の方達が関東に住まわれてる、拠点にされている方達だったんですが、お互いに行き来をする中で信頼関係、相互の信頼関係を築くようなことでの話し合いを重ねまして、1977年に空き家を斡旋するという形で、1977年に移住者の受け入れが実現し、そこから、いざ受け入れの歴史が始まったということになっております。その後は耕人舎の人達が自分達が暮らせば良いというだけではなくて、広く情報発信であったりとか、普及っていうところにも力を注がれましたので、耕人舎が農業実習生を受け入れるという形で、少しずつ耕人舎の情報をたどって色川に来て農業を始められて、その中から色川に住むっていう方が増えていったっていうのが当初の流れになります。その後1991年になりますが、地域を窓口に受け入れをシフトしようということに変わっていきます。その当時人口が600人を下回ってきた状況でして、地域活性化に取り組む、強化する為に色川地区の区長連合会が色川地域振興推進委員会を設立しておりました。区長連合会、区長さんの集まりなので、どうしても役割としては1年、2年で交代していくっていう組織でしたので、継続的な色んな取り組みとか授業であったり、活性化の取り組みをしていく中では、ちょっと別組織を作る必要があるかなというところで先程ありましたが、地域運営組織、今で言うと、それに近いものかなと思うんですけど、その当時、色川地域復興推進委員会を設立しておりました。その組織の委員会の中になんですが、定住促進班っていうのを設けて組織的な移住者の受け入れをしていこうということにシフトしていくんですが、その当時、数でいくと15世帯50人ぐらいに移住者の数が増えていたようなんですけど、それまでは先ほど申し上げたように耕人舎を通じ

て人が入ってくるっていう流れでしたので、地域全体として了承を得ながら合意しながら受け入れたっていうよりも、だんだんと耕人舎の人たちが増えていくという人の増え方なので、中で当時話を聞くと、少し地域の揉め事や、あつれきが広がっていたりと地域と溝が広がっていくようなことがあったと聞いておりまして、そうではなくて、これからは地域を窓口にしてきちんと組織として組織的に受け入れていく必要があるということで、その委員会の中に定住促進班を設けてっていう形に1981年にシフトしてまいりました。その後、移住者の受け入れが促進されていくんですが、このグラフを午前中に、もしかしたら見られたかもしれないですが、黒塗りが移住者で、白くしているところは地元の数なので、ざっと言うともう60歳以下ぐらいはもう殆どが移住者です。これを見てよく色川が、若い移住者が来て学校も存続して活性化に成功しているようなことで、外部からはよく取り上げられるんですが、委員会だったり、内々の課題感としてはやはり地元の方が本当に高齢化して年々減っていってという状況で、どうすれば地域らしさとか、今まで1000年つながってきた地域を移住者が増えていく中でも繋いでいけるのかっていうところが日々課題というか、そこを何とか移住者が増えていく中でも繋いでいきたいねっていうような思いを持ちながら、色んな課題に取り組んでいるという状況かなと思います。そして次ですが、色川地区の移住定住促進とさまざまなサポート活動ということで説明をさせていただきます。委員会という組織の説明をさせていただくと、目的としては地域振興のための取り組みを推進しております。委員メンバーはですね。構成については9つ集落があるんですが、各地区から選任をいただいた委員で構成をしています。人口比で委員さんが一人のところもあれば、もう少し多い地区もあるんですが、各地区から選任いただいています。会長、副会長、区長連合会の会長、副会長、定住促進班、外部代表は会計事務局などの組織を設け、役員を設けて運営をしております。会合は現在、役員会を毎月行っておりまして、各月、2か月に一回総会を開催しておりますので、会合の頻度としては多い会になるのかなと思います。その会の中では活動の状況、活動状況課題とか、事務活動報告、情報、意見交換などを行なうとともに、グループ会議も会議の後半部分できればっていうところで段取りをしておりまして、最近の話題として色川らしさっていうのをどう繋いでいくか伝えていくかっていうところのグループ会議に取り入れたりしております。具体的活動としては、先ほど申し上げた組織的な新規定住者の受け入れのところをメインの活動としておりまして、それができますと体験交流の活動の促進であったりとか、地域活性化のための活動の促進支援などを行なっております。定住促進のところでいきますと、また後ほど定住促進班長大久保さんから話があるかと思うんですけど、定住体験希望者の受け入れしておりまして、15軒訪問というプログラムを組んでいます。色川の場合は、空き家を紹介して人が入るとか、仕事を紹介して人を受け入れっていう形ではなくて、まずは地域を知ってもらうというところで、地域を知るために色んなお宅訪問していただいて、お互いに意思の確認であったりとか、相互理解っていうのを深めることを優先としておりまして、そういった中から地域の担い手であったりとか、仲間づくりに繋がるような受け入れの仕組みをさせていただいております。それ以外にも様々な体験の受け入れもさせていただいております。次に定住体験の為の拠点の整備もさせていただいていまして、平成7年には旧の籠小学校を改修して籠ふるさと塾を開設しまして、短期滞在施設として活用しています。移住希望者については、1年間の入居の期限を設けまして、空き家とか農地の確保をできる施設となっております。お試し住宅の整備も昨年度ですが、総務省の過疎地域等集落ネットワーク形成事業、支援事業というのを地区で、国の事業を取りに行きまして、南平野地区、口色川地区で空き家の修繕っていう活動をさせていただいて、お試し住宅を整備しました。なので、ふるさと塾と合わせまして、各地区、東部、中部、西部と言う形で拠点の整備を現在進んでいまして、移住交流の受け入れ体制の充実を図っています。それ以外にもさまざまな活動が展開をしておりまして、色川の広報、情報発信のところでは、広報通信班というものを組織しまして、地域新聞の発行、それ以外にもホームページの活用や、色川だより、色川出身の方へお届けする冊子の発行などもしております。情報発信を地域住民主体でしておりまして、そういった取り組みの結果として移住定住の問い合わせや取材、視察へも繋がっておりまして、地域側としても地域のこれまでの再確認ができるような色んな情報発信になっておりますので、地域内外に共にいろいろな波及効果がある取り組みかなと思います。また政府の人的支援制度も活用しておりまして、地区主導で集落支援、私、委員会の事務局を集落支援の制度を使って今させていただいているんですけど、制度自体は2009年からで地域おこし協力隊については2010年から地区で活用をしております。特に協力隊に関しては地域活動の円滑化であったり、地域のこれまでの記録保存の実現化みたいなところに業務の重きを置いていただいてますので、3年間の任期なんですけども、任期が終わった後は地域のことをよく知った人材として定住していただくことが多いので、確かな担い手となっていただいているのかなと思います。活動の特色ですが、明日行っていただけば分かるかと思うんですけど、本当に山を切り開いて時間をかけて築かれた棚田で、そこに農地があり、家がありっていう地域なので、そういった1000年の歴史に築かれた文化もありますし、自然が豊かな中での山里の暮らしもあるかなと思います。また、周囲から隔絶された山間地域になっているので、人の繋がり、お互いさまとかっていうのがよく色川でも聞かれるんですが、そういった人の繋がりっていうのがエネルギー源で地域の活動をしているっていうところかなと思います。住民主体で地域づくりを進めておりまして、色川の特徴である暮らしの場、誇るべき暮らしの場を守り、どうやったら次に次の世代に繋げていけるかっていうところを住民一体となって課題に取り組んでおります。繰り返しになるかもしれないんですが、移住者の受け入れっていうのが仲間探し、地域の課題が色々ある中で移住者を受け入れて、地元も移住者も一緒になって色々な課題に取り組んでいて、それを共に仲間として取り組むことで色川らしさを守り受け継いでいく。それが仲間探しだと捉えておりますので、人が増えればいいとかっていうだけではなくて、しっかりと地域に溶け込んでほしいっていうのが、移住者受け入れの地域の思いなのかなと思います。活動の成果ですが、移住者が182人で人口の59%を超えております。もう若い世代の移住者が多く、区長、委員会、消防団、青年会などにも移住者が担っているところが多いです。保育所、小中学校も存続しておりまして、先ほどありましたが、合同の校舎が新築をされており、棚田の保全であったりとか、伝統文化の継承であったりとか、有機農業される方が多いですので、有機農業農産加工品であったりというところで産業の振興もしている状況です。活動の成果と広がりとしては、移住者、移住される方が一緒に仲間となって、地域の課題にこう前向きに取り組むっていうところが広がっていくと、棚田を守ろう会、今回のサミットのこともそうですが、棚田を復元してという活動をされたりとか、色川山里文化クラブで文化的な催しを企画する団体活動が広がったりであったりとか、語り継ぐ会、色川のある歴史を繋いでいこうという活動をするなど、仲間が増えることで様々な活動が多く展開されていくというのも広がっていくというのも特徴であって、それ自体

が地域全体の活性化、地域力の向上につながっていると思います。最後に活動と今後の方向性について説明させていただきます。住宅、農地の確保、この辺今日のテーマに近いかなと思うんですけど、やはり先祖代々の家を提供するという抵抗感や、管理がなかなか行き届かない空き家、農地っていうのが増えていっている状況です。それこそ優良な宅地や、農地の確保が困難となってきております。これについては後ほど話あるかと思いますが、定住世話人いう形で定期的に持ち主の方と交渉や連絡をしていただく方が色川で数名いらっしゃいますので、そのそういった地元の色んな交渉とか繋がりの中で、空き家が何とか見つかって移住者が入ってきているという状況かなと思います。2つ目、産業振興雇用の確保のところでは、有機農産物の高付加価値化などブランドの確立などをしております。都市準備との交流促進のところも棚田を守ろう会で色んなイベントで交流もしているかなと思うんですが、全国的に色々なイベント、田舎暮らしのそういった交流が増えてきていますので、色川自体はちょっと新規定住者の問い合わせ自体が減ってきているという状況なので、またそれについても色々対策というかどうしていくかっていうところがこれからの課題になってくるかなと思います。地域としては町とか県とかも積極的に連携をしまして、またホームページとかSNSとかを活用して地域主体でもう少し情報発信に力を入れたいと思っております。鳥獣害対策も猪、鹿、猿が深刻な山間地で深刻になっておりまして、資金や人手不足というのも他の地域も同じかなと思うんですけど、そういう状況です。色川の場合は中山間の直接支払制度を活用したりしながらではありますが、地域住民主体、主導で色川鳥獣害対策協議会を組織したり、明るくする会などを組織して山林防止であったりとか、集落周りの山林を切って明るくして暮らしやすい地域を作っていこうというのを住民主体でしている対策をしているところです。そして、今後の方向性についてですが、村の暮らしを繋げていくと本当に村の暮らしというのが年々ですが、様変わりしてきているのかなと思っています。特に色川の場合は、本当に地元の方が高齢化と人口減少で、先祖代々守ってきた人たちがどんどん減っていっている状況です。それに伴って、伝統や慣習や知識、技術、人のつながりっていうものが失われようとしているのかなと思います。なので、ただ移住者を受け入れて人口を増やすのではなくて、色川らしさ、地域らしさを次の世代へ繋げていく為、その担い手づくりだと捉えて活動をしております。これも繰り返しですが、地域の仲間探しと捉えています。自給自足や自然環境に憧れて田舎暮らしを目指す人が増えているのかなと思います。それはそれで大事なことかなとは思うんですが、それと伝統、風習、地域の思いを大事にして、地域の課題に一緒になって取り組む仲間を増やしていくことがより大事ではないかなと思っています。なので移住者の受け入れは地域の仲間探しだと捉えております。そして、実力の向上と書かせていただいていますが、移住者の受け入れっていうのは村の消滅を防ぐ一次的な方策ではないかなと思います。自信と誇りを持ってふるさとで生きていく。かつての農村社会にあったような流れに戻すことが必要ではないかなと思います。住民が協力して自ら地域の課題に取り組む活気ある住みよい村づくりをしていく力、自治力というものが不可欠だと思います。そして、最後、村の応援団、情報発信とか、今回も色々な地域から来ていただいているかと思うんですけど、地域間連携なかなか難しいんですけど、地域同士がしっかりつながってその繋がりを強化して、それぞれの村に足を運ぶ人とか、村に留まる若者を増やして色川に移住するんじゃないかもしれないけど、自分のふるさとに目を向ける村の応援団っていうものを増やしていく必要があると思っています。そして、村と村、村と町が協力し合って、色々な多様なつながりによって、全国の村が再生して活性化の取り組みへとつながればいいと捉えて委員会としては活動をしている次第でございます。以上でちょっと足早になりましたが、事務局から色川の委員会の取り組みの説明をさせていただきます。以上です。

【佐久間氏】

はい。大西さんありがとうございました。どういう経緯で移住定住の受け入れが始まったのかということと、特に仲間探しとしてずっと活動されてきたっていう、お話をいただけたかなというふうに思います。前半戦この後、お三方お話を聞いてまいりたいと思いますけれども、移住定住の受け入れについてということで、最初のトピック考えてございます。最初はあの耕人舎さんから物語が始まったというところでお話しいただきました。最初に委員会の副会長の原さんにお話をいただきたいと思っています。原さんはあの初期の頃、81年の頃と聞いておりますけれども、移住をされて見えました。その後、午前中のお話もありましたけども、棚田を守ろう会ですとか、地域再生ネットワークというNPOや色んな地域づくりの活動に取り組んでこられました。今ではお子さんお二人が鳥獣害の対策ですとか卵の生産ですとか、きちんと暮らしを立てていらっしゃいます。ですので原さんにはその最初の頃といいますか、耕人舎さんから委員会設立ぐらいまでのお話、概要は今、大西さんからあったんですけども、特にその当時の様子ですとか、エピソードなどあればお聞かせいただきたいと思います。じゃあ、原さんお願いします。

【原氏】

原と言います。よろしくお願いします。私、ちょうど43年前に移住してきて、その当時26でして、今も70近くになってもう早いもんやなと思っています。その当時、私、兵庫県明石出身なんですけど、結構耕して暮らしたいなというのがまずもってあったので、探して回ったんですけど、ほぼ農協、行政、役場ですね。農協とか役場とか回っても完全な門前払いの時代でした。農業っていうのは農家が代々受け継いでやっていくもんだというのが決まり文句で、ほぼ諦めかけとったんですけど、たまたま、この色川の地を知って、もう既に移住されている方がおられるっていうことで訪ねたのがきっかけなんですけど、ほぼ田舎暮らしという言葉がまだなかったですから、かなり受け入れている地域としては、もうほぼ日本で指折り数えても少ない時代でした。今、話の出た耕人舎っていう組織が最初に入られて、そこの実習生のような格好でしばらく居たらええよと言ってくれたので、本当に嬉しくて、それから暮らし始めたんですけども。その当時、地域の移住者って言っても、まだ耕人舎の方5、6名と俺らぐらいでしたんで数名ですよね。地域の人たちともちょこちょこ関わりは持たせてもらう中で話もしていると、何でこんなとこきたん、お婆ちゃんに言われて、いえいえもう最高ですよって、夢があって、こう色々と話したんですけど、何かこう怪訝な顔をされて。最後にあんた町で何か悪いことしたんかって言われたんですよ。色々、特に年配の方と話すと、それに類する何でこんなとこっていう言い方をされたんで、正直自分は耕して暮らしたいというのがあったので、非常にちょっとショックやったですね。色々、村の中でも行事があるんですけど、そういうとこで集まりをされていると、もう、うちの子は町行ってええ会社入って偉いさんになってねって、そういうのがちょっと自慢な話になって、それで地元で山仕事をして俺らにすると、山道も全部分かってるし、これまでのことも知ってあるし、非常に頼りになる人達なんですけど、その親御さんはうちの子、間に合わんからここに居るんやっていう言い方をされて、本当にこう段々と田舎の、それは恐らく日本中そうやったと思うんですけど、田舎の現実っていうのを非常に感じ出しましたね。やっぱり正直住めば住むほどいいなと

思って、でもフタあけると、小学校がその当時さっきの話もありましたけども、保育所がもう本当に人数がどんどん減る。その内、小学校、中学校も当然減ってくる、学校消えてくという状況が分かってきて、入って5年目に結婚して子供がポコポコとできたんですけども、よく考えると同級生がほぼいないんですよね。これ先々どうなるのかなっていうようなことを考えたんが、地域のことに目を向けたのがきっかけやったんですけども、本当にそれからいろいろ話をさせてもらって、今、話のあった耕人舎さんを経由して、私のような移住希望者はやってくるという流れだったんですね。だけども、受け入れた方達、移住者を受け入れるっていうことを決断して動かれた方達っていうのは地域のごくごく一部の方達だったんですよ。その方達のおかげで俺達も入れたんですけども、少しずつ俺のような人が訪ねてきては入るようになって、ちょうど10数年たった頃に10数軒移住者が増えてで子供を入れると50人ぐらいになった頃にあちらこちらでこれはもう酒飲みながらやりとりしていると出てくる本音みたいなのあるんですけど、お前らみたいなよそもん村になっていくのはちょっと我慢ならん、という話がちょこちょこ聞こえるようになって、これ人が増えれば増えるほど、地域の人らとの軋轢が増すなというのはすごく感じたんです。そうなると、これ大変なことになるなということで、さっきの話のあった委員会の中で定住促進班っていう組織を作って受け皿を、移住希望者に対する対応を地域としてやると、もし、いややったらもう断ったらいいし、地域が最初に対応して答えを出していく。そういう仕組みに変えた方がという提案をさせていただいて、その中で取り掛かろうかという話にはなったんですけど、実際にその猛烈に反対をされいてる移住者受け入れには横を向いている人たちと直で話をさせていただくと、よそもん村になってしまうっていうことも。意見としては表面的にぽっと出るんですけど、本音のとこ聞くとやっぱり色川が色川でなくなってしまう、それはやっぱり我慢ならんという風な雰囲気がもう共通項だったんですね。だとしたら入ってくる人たちにやっぱり色川が大切にしてきたこと、大切にしているものを先ほどの色川らしさっていう話がありましたけど、そういうものを大事にする人たちに入っていただいて、それで仲間として受け入れていく、やり取りをしっかり重ねながら受け入れていく。そういう流れだったらどうですかといって、何とか首を縦に振っていただけるような雰囲気に徐々になってやっとこさ、地域で受け入れるという話になったんですけども、やっぱりその時に反対していたけども、やっぱり受け入れていこうかという気持ちになっていただいた方々に、もうとてつもなく俺は感謝しています。逆に言うたら、その方達もみんな死んでしまったんですけど、今思うのはやっぱりそういう思い、地域らしさ、その地域が持っている大切なことをしっかり大事に思ってほしい。それを次に繋いでほしいっていう思いをやっぱり自分も受けて今いるので、だから何とかそれをこれからも入ってくる人達に対してうまく伝えられないかなというのが今一番自分が思っていることです。そういう経緯ですけども思うのは、たった一人でも恐らくその移住者を受け入れようという決断を当初されたのはごく一人二人なんですね。たった一人でもやる気のある人が本気で何とかしようと思う人がいれば、その地域はやっぱり何か動きが出てくると、もうつくづくそう思っています。ぜひとも棚田を守るっていうのは、結局そこを耕し、耕しながら暮らす人というのを何とか確保していかないと遺跡になりますからね。繋ぐ棚田遺産というのも繋いでいくのには、その遺産を現実、自分が耕して暮らすんだっていう人はしっかりと得ていく事をしないともう意味ないと思うんですよ。本当に地域を守るっていうのはどういうことかというのは僕つくづくいつも考えているんですけど、人を増やしたら守れるって絶対違いますから。その地域が本当に守られるってのはどういうことか。その為に自分は何できるのかということを、やっぱり一番は地元の人。先祖代々抱えた人達。その人たちがしっかり一歩踏み出していただけるかどうか。それで棚田も含めて地域が大事にしているものはきっと守られていく流れに繋がると思いますので、その辺共有いただける方が一人でもあればありがたいなと思っております。以上です。

【佐久間氏】

はい。ありがとうございました。あの移住の初期の頃からずっと今お話いただきましたけども、思いを持って受け入れてくださった地域の方のお話と、恐らくそういう方々とまっすぐ向き合ってこられた原さんのお話だったかなというふうに思います。では、次にですね。じっくりもっと伺いたいんですが、全体の尺がありますので進めてまいりたいと思いますが、次に副会長の浦さんにお話を聞きたいと思います。浦さんは地元のご出身なんですけれども、東京の大学を出られて町役場の消防職としてお勤めでした。その後、色川の出張所の所長さんになるんですかね。今、南平野というところで農家民泊を営まれております。浦さんにはですね。その出張所時代の地域の受け入れのことですとか、大西さんからもありましたけれども、籠ふるさと塾の受け入れ状況のことですとか、地元での受け入れ状況ですとかをお話しいただければと思っております。じゃあ、浦さんお願いいたします。

【浦氏】

浦です。どうぞよろしくお願いします。私はこの色川で生まれ育ちました。しかし、生まれ育ったのは子供時代にありますね。ですから、色川の昔からの暮らしとか文化とか、そういうのは子供心で知っている程度ということで、色川は広い地域ですから、色川全体を把握するってことはできていませんでしたし、ごく一部の私が生まれ育った大野区とか、その隣の口色川区とか、そういう小学校校区の範囲内での暮らしが私は色川での暮らしという風な形になっておりました。そして、私が仕事を消防職という仕事に就いたわけなんですけれども、私は色川でやはり暮らしていきたいという風な思いがありましたけれど、消防職という職業柄、やはり町場の消防署に近いところで居を構えなければいけないという風なこともありましたので、私、消防職に２６年勤めたんですけれども、町場の方で暮らしておりまして、色川については親が農業をしている関係上、休みの日には手伝いをするという風な形の中で、色川との行き来をしておりました。そういう中で色川がその移住定住に向けての取り組みを昭和52年の最初の移住者から始まって継続して移住者を受け入れてきたと。そういう流れの中で色川の住民も少し高齢化し、そしてやはり活動する範囲も少なくなってきた中で移住してきてくれた若い人たちが地元民に変わって色川を良くしていこうという風なことで色々こう地域活性化に取り組んでおるという風なことが日々感じておるような状況で、私は町場の方からのこう色川地域をこう見ておりました。そういう中で私も色川で生まれ育った身でありますから、やはり色川のために何かやっぱりかかわりを持ちたいという風な思いがこう少しずつこう強くなってきました。それから私が50歳の時に消防職から役場の一般職の方に勤務を変わることができまして、そして51歳から59歳までの8年間、色川の出張所に勤務をすることになりました。その8年間というのが私にとっては、今までのかけがえのない財産となっております。やはり色川地域の中で地域住民、元々の地域住民と移住してきた人たちとの共同作業というんですかね、色川を良くしていこう、そういう風な気運が醸成されている中で、移住者の受け入れという風なことの事務局を役場の出張所が担うことになりまし

た。これは当初はなかなか移住者が来ていただいても住むところがなかったという風な中で地元からの要望で旧籠小学校を改築して、そこで籠ふるさと塾というような一時的に滞在できる施設ですね。これを建設していただいて、そこで1年間の期間の中で住んでいただいて、そして色川を理解していただく。そして自分に合った地域にこう農地と住宅をという風な形の中で住んでいると。住む施設として活用していたんですけれども、それでもなおかつ空き家がないというようなことの中で、これも地域からの要望ですけれども、ふるさと定住住宅という風な住宅を町の方に要望しまして、全部で9棟ですかね。9棟の住宅を建設していただくという風なことで、徐々に移住者を受け入れる体制が整ったという風なことになります。そういう中で私も移住者の受け入れの窓口として、移住者の対応をさせていただくという風な形の中で8年間務めさせていただきました。そして、私も色川で生まれ育ったけれども、やはり色川地域全体を知るという風なことはなかったので、やはりこう常に外に出向いて地域の人たちと関わりを持って、そして地域の人たちと定住者、定住希望者との架け橋に少しでもなれればなという風な思いの中で8年間務めさせてもらいました。そういう中で移住者が徐々に徐々に増えてきまして、籠ふるさと塾という施設の活用も、そしてふるさと定住住宅の活用も結構利用していただけるような状況になり、さらに一般の住宅の空き家活用にも繋がっておるという風なことで、私から大西さんの方にバトンタッチをしていただくような形の中で、大西さんの方で移住定住を頑張っていただいております。そのことによって、荒廃している農地の活用や、そういうことも含めて色川が少しでも元気な地域になるという風なことを一個人としても感じておりますし、これから入ってくる人たちに色川をまた今後の色川の活性化につなげて頑張っていってもらいたいなという風な思いで現在いるところでございます。どうぞよろしくお願いいたします。

【佐久間氏】

はい。浦さん、ありがとうございました。ちょうど出張所にお勤めの時の定住希望者との架け橋というのがキーワードでいただけたかなというふうに思います。次に定住促進班の大久保さん、現在委員会で、その受け入れの窓口をされているところの大久保さんにお話を伺っていきたいと思います。広島のご出身で東京の勤めを経て移住されております。何度かお話が出ておりますけれども、定住希望者と地域の方をつなぐ役割を務めておられます。途中、あの15軒訪問ですとか、地域としての受け入れという話は幾つか出てまいりましたので、その辺りの実際のところ、あるいは何か課題等を含めてお話しいただければと思います。

じゃあ、大久保さんよろしくお願いします。

【大久保氏】

大久保です。よろしくお願いいたします。定住を促進していく今、受け入れをやっている窓口と言うかそういう担当になるんですけれども、なぜ定住促進というのをこれだけ頑張ってやっているかというと、先ほどからもお話がありますように、我々仲間探しをする担い手を入れたいということと、そのただ入れるだけではなくて、やはりその地域の色川らしさを繋いでいく、そういう人を確保するためにやっているところです。という中で、定住促進のやり方の恐らくちょっと特徴になるんじゃないかと思うんですが、一つは定住受け入れ活動を我々住民自身がやっているということです。恐らく多くの地域で今やもう受け入れをしているところはたくさんあると思うんですが、恐らくその行政の方が中心になってやられているんじゃないかと思うんですが、その辺は我々のところは先ほどのような頃、地域を守っていきたいという中での担い手づくり、それの為に受け入れをしているということで、我々自身が受け入れていきたいということを今受け入れ活動をやっている一つの大きなやり方になるだろうなと思います。それと、もう一つ15軒のもう何度かこう色川の紹介の中で聴かれたと思うんですが、その15軒というのは、今こちらに色川に住んでいる地元の方を中心に最初はやっていたんです。だんだん軒数も減ってきたんで、新規で入ってきた移住者のところにもかなり行くようになりましたけども、地域の中のメンバーが受け入れ活動をしていると、そういう意味で15軒の訪問を移住希望者の方にはしていただいてます。15軒も回るって大変なんですけども、実は何で15軒かと言われるとあれなんですが、ちょっと前までは10軒ぐらいだったんですけど、今15軒になっています。実はその定住促進班の今班長という形でやっていますけども、私、実は1991年に定住班ができて地域で受け入れるという中で5代目になるんですけれども、隣にいる原さんが2代目ですかねということで、もう91年だからもう30数年たっているんですけども、そういうちょっと受け入れ自体ももう歴史があって、実はその受け入れ仕方も少しずつ変わってはいます。そんな中でやっているということで、近年はちょっとコロナがあったので、実はその15軒回ったりとか、あるいはその前に定住班との面談をしてもらったりしているんですけども、どうしてもその人とのふれあいと言うか密着した対応をしたりすることが多いので、なかなかやりにくくて受け入れ対応が難しかったのが少しこの2、3年前からありました。問い合わせ自体はそれなりにあってですね。難しいながらも入る前に2週間、ちょっとどこかで待機してもらったり、そんなこともしながら、しかも15軒もある訳ですけど、非常に大変なあれもあったんですけども、その中でも入居してくれた人が何人もいます。ちょっと最近の傾向という中で言うと、やっぱり全国的にその受け入れが非常に多くなっているので、その分以前の色川は、かなり先進でしたから問い合わせが非常に多かったんですけれども、最近、件数は実は減っています。かなり減っています。今、色川の人口307人のうちの59%、6割が移住者で占めるということになっていますけども、必ずしもガンガン入ってきているという訳ではなくて、維持していく人口もちょっと厳しいぐらいまでになってるんですけども。そういうところで今後でもどんどん受け入れるかと、どんどん優遇策を出していくかということではなくて、基本的にはやはり地域の担い手になってほしい、その中で色川らしさを引き継いでやってくれる、そういう人たちを受け入れていくということでは、ある意味単なる担い手を増やしていくということだけではないやり方を取っているのは現状です。先ほどの定住してもらう為のプロセスとして15軒訪問してもらうという、その狙いなんですけども、これはその移住希望のある人っていうのは移住したいという思いを持っている。我々側はその移住者を受け入れたいと思っている訳ですね。だからうまく行けばすぐにそのようになるんですけども。ただ入りたい人も果たしてここでやっていけるかどうかが、この地域で自分が本当に思い描いている暮らしができるかどうかという不安を持っていたり、受け入れる側も受け入れたいんだけども、こう果たして受け入れられるかどうか受け入れるというのは地域が受け入れるわけですから、その受け入れられるかどうかっていうのをこうある意味、その15軒の訪問をしてもらって色々話をしてもらう。その中で判断をして、だからどんどん受け入れればいい条件をどんどん出せばいいというようなやり方は取っていません。そういう意味でそのうち移住者の方が15軒訪問をしてもらう時に気を付けてもらっていることもあるんですよね。地域を知ってもらう、人を通じて色んな話を通じてあるいは見て体験して農業体験的なこともやりながら話をしたりすることもあります。そういうよう

なことをしながら知ってもらう。そういう意味で今その移住者の人にとっての関心の一つというのは、どこに住むかというようなことで物件がいいか悪いかが結構頭の中にあるんですね。それを、この15軒回る中では、いわば物件探しをしてもらうことはないようにしないようにお願いをして回ってもらっています。勿論、もうここに入りたいということで決まってくれば、その後程、その先ほどの籠ふるさと塾に最大1年間借り定住をしてもらって物件探ししてもらうんですけども、この15軒のプログラムをやる時は物件探しをしないようにというようなことは、ちょっとお願いをしながらやっています。とは言え、その対応する側があそこいい物件あるよっていうのをちょっと紹介したりすることもなくはないので、そんなに堅いことは言えないとこあるんですけども、地域をとにかく知ってもらう。結局、私も20数年前に入りましたけども、その当時東京にいたんですけども、こっちに入る時にどんな家がまあ景色がいいとか、目の前に川があるとか、農地が広いとか、そんなのもありましたけども。でも入ってみたらそういう問題じゃなくなるというのが分かりますので、是非その人と人とのやり取りなんかも大事にしてもらうこと。そんなことも含めて色々お願いして受け入れの段階で最初定住訪問の面談をやって、色んなことも話をして、特にやっぱりいざ入居するとなると入った時は、その地域の人とうまくやってもらう。仲良くしてもらうことのお願いをしたり、あるいは最近、移住希望者の人にこの地域に入ったら出役っていうのがあるという話をして聞いたことのない人が結構多いですね。だから地域に入ったら必ずそういう地域を守っていくための一つの活動でありで、その出役を通じている人との交流が深まることもあるし、非常に大事な部分なんですけども、そんなことがあるのかという話も含めてするようにしています。その中でかなり面倒といえば面倒なんですけども、その移住希望者の人とのやり取りで、その15軒訪問する前の定住班とのやり取りの中で一旦帰ってもらって、ちょっと考えてもらって、もうそれで、もうやめるという人もいます。15軒回って、やっぱり私もこういうところには住めませんという人もいれば、是非入りたいという人もいれば、そういう色々判断してもらう場面も作って、ある意味丁寧と言えば丁寧だと思うんですけども、時間を掛けてその辺は受け入れ側で実現できるような形にはしたいなと思ってます。以上です。

【佐久間氏】

はい。ありがとうございます。はい、15軒訪問の勘所といいますか物件探しではないというところが今日いただいたキーワードかなというふうに思います。15軒訪問を経て、いよいよ定住を決められたっていう時に今日冒頭お話ししたような住まいの話になっていくわけですけれども、定住世話人というこれもあの大西さんからお話がありましたが、出て行かれた所有者の方と地域の間に立っておられる役のお二人に順番に話を聞いていきたいと思います。まず、最初に大野地区の定住世話人である大東さんにお話を伺えればと思います。大東さんは大野のご出身で、一時期東京でお勤めされたんですけども、大野に戻ってきておられます。何かやりとりしながらの方がいいですかね。はい、じゃあ、まずお伺いします。大野の空き家の状況って言うか。まただんだん増えている感じというか、どんな状況か。

【大東氏】

これ4年前に調べた時には30軒ぐらいありましたけど、現在は25軒ぐらいかなと思っております。

【佐久間氏】

大野の世帯数ってどれぐらいですかね。

【大東氏】

もう40切れているのかな。38世帯ぐらいだと。

【佐久間氏】

38あって、じゃあ、もう同じ数よりちょっと少ないぐらい空き家があるっていう感じですね。

【大東氏】

そうですね。このうち13軒ほどはかなり修理しないと入れないという状態ですね。

【佐久間氏】

その件数、今、数字が出てきたっていうことは、やっぱり大野では何て言いますか、空き家の状況を把握されているというか、地域の皆さんで1軒ずつ見て回っておられるっていうことですかね。

【大東氏】

そうですね。これ僕、若い頃は僕の先輩達が空き家の紹介をしていたんですが、先輩達も、もう亡くなった方もおられますし、地元でここの所有者はどこに聞いたらわかるかっていうのは、やっぱり地元の人でないと分かりにくいところがあります。結局、私があちこち調べて所有者と話し合いをしているという状態で都会なので、その空き家の状況を今後どうしますかというアンケートを調べて出させていただきましたけど、回答があったのは8件ぐらいしかありませんでしたね。それ以降、連絡を取ってないので、今改めて今後所有者の人に今後の空き家をどうしますかという働きかけを今やっているところです。今、そういう感じですよね。

【佐久間氏】

分かりました。大体、その20軒とか30軒ぐらいの空き家の方にアンケートを配られて8件ぐらいの回答。

大体どんな感じなんですか。8件の回答は。

【大東氏】

まあいろいろありますけど、まあ家が片づけていないんで、そのままにしておくとか、もう、そのまま放っておくというのもありましたし、まあ親が、体が悪くて、まだ悪いんですけど、元気なので親が生きているうちにはちょっと売れないとか、そういう形でなかなか売ったり、今売るとか貸すとかって言うのはちょっと難しいということもありますし、もう全部売却したいというところもあるんですが、ちょっといい建物だと金額が張っていきますので、その移住者が家を購入する場合の金額の査定が難しいんですよね。だから、そういったところが非常に問題ですね。

【佐久間氏】

なるほど。これは貸してくださる場合っていうのもあるわけですか。

【大東氏】

個人的には、もう貸すというのは僕はどっちかというと、もう売却をした方がいいというように所有者には勧めてはいるんですけどね。

【佐久間氏】

なるほど。

【大東氏】

なかなか空いているし売りたいと言いながら、では、いくらですかって言ったらなかなか返事がないとかね、非常にその辺が売りたいのか、売りたいとは言ってるんですけど、なかなか金額を出さないとか、そういうところもありますのでね。だから粘り強くしていかないといけないなとは思っています。ただ、タイミングもありまして、今までは、もう絶対売らんよというような話をしていても、急にパッと売りたいという、そういうところも出てきますので、その辺、常時こう連絡を取り合いしていれば、物件が動く可能性はあるのかなとは思ってはおりますけどね。

【佐久間氏】

じゃあ、日頃そうやって所有者さんと連絡を絶えず取りながら、片方

で15軒訪問で回ってこられた定住者の方とタイミングが合えば、引き渡す。
【大東氏】
そういうことですね。ちょっと全国的に移住を求めているところがたくさんありますし、色川地域よりも環境もいいので、現在、色川地域も先ほども言われていましたけども、希望者がちょっと少なくなってきております。そういうのをいかに増やしていくかというのが今後の問題ですし、また、そういう人が来た時に2、3軒は必ず所有者の意向を得て、この家は貸したり売ったり、そういう2、3軒は常に持っておかないと、せっかく移住者が来た時も家がないんじゃ住めないんですねと言って帰られるということもあるかと思うので、その両方をうまくやっていく必要が今後あるかなとは思っております。
【佐久間氏】
はい。ありがとうございました。
はい。お待たせしました。新宅さんにマイクをお願いしたいと思います。あの委員会の会長もお務めであるのと同時に、口色川の定住世話人でもいらっしゃいます。口色川ご出身で大阪でお勤めのあとUターンされて林業に従事されているということと冒頭少しお話ししましたけども、集落の周りの林業をお勤めだということもありまして、木を切って集落を明るくするような活動も誰に頼まれるわけでもなく、地域に思いを持って取り組まれております。じゃあ、新宅さんにも同じようにお話を伺っていきたいと思います。今のみたいな感じでいいですかね。じゃあ、口色川の空き家の状況とかいかがですかね。
【新宅氏】
はい、空き家は今20軒ぐらいかな、世帯でいうと44、5軒、今住んでおられますし、20軒ぐらいが空き家です。
【佐久間氏】
じゃあ、全数60世帯って、60ぐらいの家の3分の1ぐらいが今空いているってことですかね。わかりました。じゃあ所有者さんとのやりとりの状況というのはどんな感じですか。
【新宅氏】
やりとりは今、向こうの方から若い時は連絡なかったんだけども、もうお墓も持っていくんやよ、もう処分したいっていうのが多いですね。処分したいっていう中で、一番困るのは家だけじゃないんです。農地、そして畑、農地やね。山林、山ももう全部処分したいということで持ち主さんにその山の境界分かりますか言うたらわからんね。それが問題になっているけども、こちらで調べて買い上げるっていう方向が今多いです。
【佐久間氏】
そうすると新宅さんから連絡するというよりも、向こうから相談をするというか、逆に言うと新宅さんがその定住世話人として活動されてきて、新宅さんに連絡すれば何とかなるやろうっていう言い方がいいか悪いかですけど、そういう関係で向こうからご連絡いただくことが多くなっている。
【新宅氏】
はいそうです。
【佐久間氏】
大体どんなもんですか。20件あるとすると、年間でいくと何件ぐらいご相談があるんですか。
【新宅氏】
相談は多い時は2、3件あるけども、帰ってきた時に、あれ売りたいんやけど、どうやろうとかっていうことがある。年間どんな場合もあります。
【佐久間氏】
分かりました。大東さんから売りたい時の値段が難しいみたいなことの課題の御指摘ありましたけど、新宅さんはそういう時どうされているかというのは。
【新宅氏】
そこのおじいちゃん、おばあちゃんの場合は長男も呼んでくださいと息子さんもいれて三人で話しましょう、言うてまあ大体あそこの家いくらやったんやよとか、いろんな話し合いの中で思い切ってこちらから値段を提示します。まあ、林業の方、山の場合は僕プロやから、すぐ分かります。
【佐久間氏】
その値段を提示してどうですかね。移住者さん移住希望者さんが買われる場合とそうじゃない場合というか、新宅さんが買われる場合もあるっていうふうに聞いているんですけど。
【新宅氏】
殆ど、もうこちらが買い上げて。それで貸すっていう。賃貸で貸すというのが多い。殆どです。
【佐久間氏】
この場で聞いていいかあれですけど、どれぐらいの件数ですかね。新宅さんが買われている件数というのは。
【新宅氏】
ざっと20軒近くかな。
【佐久間氏】
それはじゃあ買われた後、移住希望者というか定住者の方に貸されているっていうことですか。
【新宅氏】
はいそうです。今、入ってない家も3、4軒あります。
【佐久間氏】
それはちょっと私は何度かというか、何度となくお話を伺っているんですけれども、どんな思いで、なかなか簡単にできることではないかなと思うんですけれども。
【新宅氏】
僕は、その生まれ育ったとこなんで、そして新規の人達が来て田舎を守ろうというのがすごい、肌身に感じるので、とにかく僕も地元なんで生まれ育ったとこを残したい。まして子供も跡継いで地元に残ってくれたので、何とかふるさとを残したいっていう、ええかっこう言うんやないけども、その思いでやっております。
【佐久間氏】
もう一つお伺いしたいのは、その想いの中でもいろいろ難しいこととか日々のことですとか、なかなか大変なことも多いんじゃないかと思うんですけど、何かその辺のご苦労ですとか、何か課題といいますか。
【新宅氏】
いや、いっぱいあります。
だから、その問題を解いて前へ進むのが役目なんで。言うたらキリがありませんので。
【佐久間氏】
わかりました。はい。ありがとうございます。なかなかその空き家の問題って全国いろいろ空き家だけじゃなくて私有財産というか農地も含めてだと思うんですけれども、先ほどの有田さんのところでも所有権が出ていってしまうことの課題ってお話があったと思いますが、一度出ていったとしても、あの大東さんや新宅さんのような定住世話人の方が定期的に連絡を取りながら、地域のために使えるよう

に日々連絡を取っていたり、お声かけしたり、場合によっては身銭を切って次の担い手のためにということをされているということでの色川のお話を伺ってまいりました。ここで少し岸上先生にコメントをいただきたいと思います。農業経済のご専門ですので、私よりも本来はあっている気もしてまいりますけども、食品の流通ですとか、都市農村交流ですとか、地域づくりの戦略と、ご専門にされておりますし、大学で地域連携の取り組みも引っ張っていただいています。はい。じゃあ、岸上先生お願いいたします。

【岸上氏】

はい。色川の人たちが色々とお話していただけますので、決して私はサボっているわけではありませんが、佐久間さんの進行の妨げにならないように、もしくはあのフロアの皆さん、今聞いていておわかりのように登壇していただいている6人のお話をまだ聞きたいというとこがありますので、非常に簡単にだけコメントをさせていただきます。まず一つはですね。私も今、佐久間さんからあったように、学生を色川に派遣したり、あと色川だけではなくて県なり、いろいろと派遣しております。それは棚田も含めて学生を送り出しております。午前中のお話でもありました交流人口であったり、関係人口であったりというのは恐らく増えているはずなんです。増えているはずなんですけども、多分フロアの皆さんもそうですけれども、結局、その交流人口だったり、関係人口がどんどん増えたとて本当に棚田だったり、中山間地域が維持できるのかというようなところは私も常々思っております。

その辺がですね。冒頭、原さんのところであったのかなと思うんですけれども、色川っていうのはやっぱりきっちり定住人口を増やしている。この辺フロアの皆さんもどう交流人口、関係人口を増やしていくのは比較的取り組みやすいっていうところもあるんですけれども、それを定住につなげていくポイントがどこにあるのかなと。やっぱりこう定住して棚田をきっちり耕す。今回のサミットのポイントですけども、耕す人がいないと外野ばっかり増えても仕方ないじゃないか。いや、もちろん外野が増えるということは重要なんですけども、その辺どう考えたらいいのかなっていうふうなことは思いました。それと、もう 1 点、色川の場合は、これも午前中も午後の大西さんのお話の中でもありましたけど、結局、色川でいうと移住者の方が半分を超えているという状態で、色川っていうのは多分、移住者は色川の暮らしがいいから色川に移住してきたと思うんですけども、移住してきた人が過半数を超えた時に色川ってどうなんだろうというところが非常にちょっと棚田とは関係なくなってしまうのかもしれないですけども、その辺どう考えたらいいのかなっていうあたりのお話をお聞きしていて思いました。本当はいっぱいコメントあるんですよ。あるんですけども、これ以上しても時間の関係上もありますので、これは空き家の話とかもいろいろ言いたいんですけども、ちょっともう時間の関係もありますんで、サボっているわけではないですよ。進行のために佐久間さんにお戻しします。

【佐久間氏】

ありがとうございます。じゃあバトンを受け継いで。皆さんに伺ってまいりたいと思います。岸上先生から2つポイントをいただきました。1つ目は定住につなげるポイントはどこかということと、2つ目は色川らしさをどう考えるのかっていうことでいただきました。ここから先、特にシナリオもないんですけども、どなたにお願いしようかなと思っているんすけど、どうですか大久保さん、その定住につなげるポイントでお話しいただけますかね。

【大久保氏】

関係人口を増やしても、果たして移住につながるのかどうかっていうような御質問だと思うんですが。実は、我々もその移住者の問い合わせ、先ほど減っているという話もしましたけども、いろんな形で基本的にはこう発信をしていかなきゃいけないなと思ってんですね。発信していく中身は何をしたらいいか暮らしぶりを言ったりとか、あるいはこんな仕事をやっているんだというような仕事を紹介したりとか、そんなこともやりましたけども、今までの中で移住者の人たちに何で入ろうというふうに思ったのかというのを聞いた中で、全てとは言わないんですけども、やはりその地域をつくっていく。こういう活動をいろいろやっているということに対して、非常に共感を覚えたし、自分もそういうのにかかわりたいというようなある意味、移住動機になっている人がいるんですね。そういう意味合いでもそういう意味での発信をしていく必要があるだろうなと。今回の棚田のこういう活動にしても、この棚田の活動の中である意味で関係人口が増えています。その関わりの中で色川のことを知って移住したいと思う可能性のある人は今までもあったと思うんですけども、そういうことも含めて関係人口というのが増えるというのは、それ自体が目的ではないかもしれないですけれども、そういう意味で移住に結びついているとは言えると思います。

【佐久間氏】

はい。ありがとうございました。関係人口から移住されている方もいらっしゃるってことですか。分かりました。どうしようかなちょっとじゃあ大西さんと原さんに色川らしさの話をちょっと振ってみたいと思っています。あとは最後にもう一巡回る中で、それぞれお答えいただくような形でお願いしようと思いますので、ちょっとこの場ではまず先に大西さんでいいですか。その色川らしさの課題というか、地域での議論の様子ですとか、教えていただければと思います。

【大西氏】

はい。そうですね。先ほどは言ったように、やっぱり移住者受け入れている数ではなくて、仲間探し、仲間づくりというところで地域の担い手を作っていきたいっていうところで受け入れをしているかなと思うんですけど、どうやったらその地域の仲間、課題に対して一緒になって共通意識とか共通課題とか、それを持っていけるかっていうところが課題かなと思うんですけども、元々は村での歴史が長かったので、そういう難しいことをやらんでも、みんな田んぼやるにはみんな助け合って水をお互いに融通きかせて共同作業でやって自然とその共同体で共通の認識、意識で、みんな仲間っていうところでお互いさま、おかげさまっていうのが村にはずっとあったと思うんですけど、そういった中で移住者が入っていくことで、多様な価値観があって、いわゆるこの個の時代といいますか、そういう社会全体としてはどこかに帰属する、どこかに所属してっていう帰属意識よりも個々で成り立つのが、今、都会では特にそういう価値観かなと思うので、そういった個の意識を持っている方たちを地域としては受け入れていくっていう中で、そういう村からもっと変わる帰属意識、自分はどこの地区の誰々みたいなところを持って背負って課題に取り組む。一方で、個々で入った方がそれぞれにいろんな活動とかそれぞれの課題で活動展開されるので、それはそれで大事なことかなと思うんですけど、そこがどういったら、どうしたら一緒になってっていうところのこう育てていくというか、育む、醸成していくかというところの一つが地域らしさ、地域がどうやって今まで歩んできたかとか、どういう思いでそれこそ移住者受け入れてきたかっていうところの色川の歴史から始まり、思いのところの色川らしさっていうのをやっぱり再度みんなが目を向け、寄り添いながら、自分だったらとかっていうところの多分、これから移住者が半数どころか、もう本当に10年たったらもう移住者ばかりの地域になっていく中で、自分た

ちが物事、これから地域はどうやって進んでいくかっていうことを決める時代が来ると思うので、その時に個々それぞれにああでもない、こうでもないと言っていても決められないと思うんですね。そこの共通認識っていうところをやっぱりどうするかっていうところがやっぱ地域らしさ、地域のこれまでっていうところを再認識して、みんなでそこに目を向けるっていうところから、色川ってこういう感じで物事を決めていきたいんだな、こういう時こうしてたよねとかいっていうようなところから、移住者であっても何とか地域のこれからを決めるというか考える素地ができるかなと思います。そういう意味でもやっぱ地域のこれまでらしさっていうのを今、本当に最後の時代というか、ここいらっしゃる浦さん、新宅さん、大東さんとか地元の方が本当にふるさとを残したいとか、何とかせなあかんていう人が本当にいるうちに、移住者もやっぱりそこにぽっと寄り添って目を向けていく必要があるかなというところを委員会でも会議ごとにとか、そうテーマに挙げて取り組んでっていう状況かなと思います。

【佐久間氏】

ありがとうございました。じゃあ、ちょっと原さんに。今の流れで色川らしさについてお願いします。

【原氏】

みんなそうやと思うんですけども、実際に耕して田畑を作ってとやると、自分でできたものは自給自足を実現できたみたいな感じにすぐなっちゃって、俺もそうやったんですけども、何年もやっていると感動はだんだん薄らいできて、普通の日常になるんですが、ある時、ふと考えると耕している農地は誰が作ったんやろうと。通っている道は一体誰が作ったんだろうっていう風な感覚になって、結局その里があるお陰で自分は暮らせているんですよね。だからそれをしっかり見ようとすると、やっぱり色んなことを知りたくなって、年寄りに聞きたくなってくるもんなんですよ。だから自分がやりたいことを持って田舎に入るんですけども、そればかり考えてやっていたとしても、案外薄っぺらい暮らしになるっていうのが、振り返ると思う事で、あくまで多くの人の想いとか汗とかが詰まった、いろいろなうねりの中で自分は暮らせているっていう感覚。それを自然と芽生えるような流れにみんなっていかないと面白くないだろうという風につくづく思います。そう思うと知りたくなるし、聞きたくなるし触れたくなるし、それをやるような人たちがどんどん増えれば自然と色川らしさは項目立てて感じ取るものではなくて、直で色々感じて受け止めて、自分の中へ入ってくるものなので、それでやり取りがどんどん増える。そういうような日常が地域の中で生まれてくると色川らしさっていうのが細い糸ででも確実に繋がっていくんではないかなと。そんな感じで終わります。

【佐久間氏】

はい。ありがとうございました。岸上先生から定住につなげるポイントと、色川らしさについてということで投げかけがありましたが、大久保さんからはきちんと発信をするということと、共感する、してもらうということのお話がありました。大西さんと原さんからは発信をした上で共通理解をしてもらう人にきちんと入ってもらう。それからさらに、きちんとこれまでの暮らしの蓄積をきちんとこう振り返るというか、確認していく中で共通認識が生まれるという2つのポイントでした。私の理解では皆さん同じことをおっしゃっていたというか、繋がって一つの方向性のお話がいただけたのではないかなという風に思っております。もう少し掘り下げたいところではありますが、会場の皆さんに向けてちょっとご質問あれば、お一人お二人ぐらいの時間かとは思うんですけれども、お伺いしたいと思います。いかがですか。はい。最初に手を挙げていただいたそちらの方お願いします。

【質問者1】

２点ばかり聞きたいのですが、１点目は収入面ですね。金額が出なくて、生活がそのままで、８割減とか、５割減になるとか、１０割になるとか聞きたいです。それともう１点は、皆さんに貴重な意見をいただいて参考になりました。特に移住者の方々ご苦労していただいたんですが、次の世代のお子さんたちですね。もう恐らく成人以上になっているかと思いますが、私、後を継いでいきたいとか。棚田はよそ行って、後は、じいちゃん、ばあちゃんのお手伝いをしにくるとか。いろんな意見があるかと思いますが、その辺ちょっとお聞きしたいんですが、せっかく移住者の皆さんが来ていただいてですね、何年後に寂れて行った。私どももそうですけど寂しいもので、ちょっとご参考にお願いをしたいと思います。以上です。

【佐久間氏】

はい。ありがとうございます。収入の点と次世代の話をいただきました。収入はどうしましょう。どなたに振ればいいのかな。じゃあ、すみません、原さんお願いします。

【原氏】

みんなそれぞればらばらです。あくまでも入ってくる時によくここで食っていけますかって聞かれるんですけど、食って行けたら過疎にならへん。もう過疎地域というのは本当は痛い、痛いけれども仕事がない。いろいろない。ないない尽くめと思う人は出て行くわけで、その中でも日常こんなとこおったらあかん、町行けよって、食って行かれへんで、結婚もできへんでって、そういうマイナスな雰囲気の中で育っていくとどうしたって、それは町行きますよ。だけど町からこっちへ来たいという人たちっていうのは、そういう田舎の中の良さ、ええもんを感じる人が来るわけで、その代わりに来る場合は当然、そのマイナスの食って行けへんとか、いろいろなマイナスの部分は自分で積極的に何とかする方法を見い出していく。そういうエネルギーあるもんが来ないと僕は駄目だと思っています。そこに一生懸命飴玉をぶら下げて取り合いしているのが今の現実ですわね。そんなことしてええんかなと。だから汗かいて必死で自分の居場所をこさえていく、自分で築いていく。そういう人間がもっともっと増えていかないと田舎は続かない。あくまでも家庭の中でこんなとこおったらアカンて言っているような地域は絶対跡取りなんか生まれません。だけど、ここおったらおもろいで、ここ結構充実できるぜ。前向きな雰囲気の中で、子供が過ごせば絶対にその選択肢、その田舎で暮らすというのも選択肢に絶対なります。だから、跡取りはどんどんどんどん出てくるはずです。だから、もうみんなの誇り感、私はここで堂々と生きとんやと。お前もここでおったらどうやと。そういううねりが地域の中に出てこないと絶対ダメだとそう思います。

【佐久間氏】

じゃあ、その流れで原さんのお子さんの様子というか、あのお二人のこともちょっと簡単にご紹介いただけたらと思います。

【原氏】

簡単にというか、ここに居たらおもろいぞというのは俺口癖やったんです。なんせ居て本当に面白いし、やりたいこと山ほどあるし、失敗も糧です。だからそんな風に考えたら、田舎なんて最高に面白い。安定が欲しいっていう人があまりにも多い。でも安心な暮らしがあるからほっとして暮らせます。でも、安定は自分で勝ち取ったらええんですよ。誰かから与えられるものだと思っている人が多すぎますわ。だからそういう意味でそんな雰囲気で日常を暮らしていたら、なんとなく二人居残っているというだけで。でも、彼らも自分の好きな

ことを自分で見いだしてやっているので、親としては嬉しいですね。
【佐久間氏】
はい。ありがとうございます。新宅さんもお子さんのこと聞いてもいいですか。どんな感じのコミュニケーションか、お聞かせください。
【新宅氏】
お父さんがいいから。お父さんとお母さんの姿を見て。中学校の時やったかな。もうお父さんとやるんやよと、友達に言うとったらしいんです。やっぱり親を見とんです。以上です。
【佐久間氏】
はい。ありがとうございました。今のでちょっとお答えしたということにさせていただいて。はい、じゃあ、前の方。
【質問者2】
議題というか、テーマは移住定住ということですけども、棚田サミットというのは当然ことながら棚田の保全、活性化をどうするかということで、いろいろなところで活動されているわけなんですけども、移住定住が増えたからといって、必ず100%棚田が保全されるということではないかと思うんですけどね。特にこの色川地区は先ほど最初にご説明されましたが、非常にたくさんの方が移住されているということですが。移住されている方はですね、どれぐらいの割合がいわゆる棚田の保全、農業、田んぼをされているのかということをお聞きしたいのと、されている方は、例えばたくさんおられるとすると、一反以内をやるんでしたら、お二人の家族やったら必死にやれば何とかできるかもしれないけれども、数反とかそういうふうな規模になってくると、とても手作業ではできないので、機械化が必要だということ。そうすると、田植え機買ってコンバイン買ってとすると相当なお金をつぎ込んでと。その辺はどうされているのかというのをお聞きしたいのがまず1点目です。それからですね。移住者がたくさんおられるということで、色川の良さというか。カラーがなくなるかもしれないという懸念されている。今までの地元の方はおられると思うんですけれども、実際に今たくさんの方がこられたときに、その色川地区の自治会というんですかね。自治会の会長というのは、もはやもうほとんどもともとの方じゃなくて移住された方がずっとやってこられているのかどうか。その移住者の方というのを明日香村は空き家バンクがものすごく人気高くてほぼ大体埋まっている形になっているんですけどね。きちっとしたルールをつくっておかないと、ちょっとまずいということがあるんですけどね。今入られた方々は自治会費か何かはきちっと払われているのかどうかということですね。自治会での活動というのがありますよね。やはり草刈りやったり、それも積極的に参加されているのか、あるいは伝統行事あると思うんですけど、そういうのも積極的に参加れているのかどうか。その辺が非常に関心ありますので、もしよろしければお答えください。以上です。
【佐久間氏】
はい。ありがとうございました。大きく２点ですかね。そのままの移住されてきた方が農業をしているのか。どんな風な農業をされているのか、機械はどうしているのかという話と自治会との関係ですかね。浦さんの推薦がありましたので、どんな様子かをちょっと教えていただければと思います。
【浦氏】
移住者がどれぐらいの割合で農業に関わっているかということについては、ちょっと私、把握できてないんで、事務局の方からちょっと返答していただきたいと思うんですけども、色川は9つの集落で成り立っております。その9つの集落の中、各地区に区長がおりますね。その区長は現在9区長のうち、地元の出身の区長は2地区だけです。あとの7地区は移住してきてくれた方々が区長を務めております。
【佐久間氏】
会費を払っているかっていうのはどうです。
【浦氏】
会費は皆さん払ってくれております。各地区によって年会費は異なりますけれども、真面目に払っていただいております。そして出役につきましてもそうですね。今の状況では、集落ごとの出役については出てくれています。高齢者とか病弱とか、そういうふうな世帯については免除というふうなことになりますけれども、通常、お仕事でというふうなことの免除はありません。出られなかったら出不足料というふうなことでいただいております。
【佐久間氏】
はい。ありがとうございます。じゃあ、農業の移住者の方の農業のお話をお願いします。
【大西氏】
正確な数の把握はあれなんですけど、基本的には色川は農業不利地というか、農業で食っていくに適した場所ではないので、農的な暮らしで生計を立てている方は、恐らく3割ぐらいにはなってまして、そういう方たちは有機農産物を多品種作っていまして、宅配をしているのとあとは卵、養鶏をしているのと、あとはお茶が特産なので、お茶と野菜と卵を併用して何とか蓄えとかで工夫しながら販路を確保してやっているという方が多いです。でも、それ以外でも移住される方が農的な暮らしというか、自給自足を目指された方が多いので、ウチもそうですけど、畑もやっていますし、田んぼもやっていますし、ただ一つ一つの面積が狭いので、大型の機械に乗って入れるような機械はほとんど色川では活用してないので、機械の購入といっても初期費用的にはだいぶ低いというのもあるので、面積も小さく初期費用もそこまでかからず、自給自足に近いような形で、それを農業としてされている方もいると、棚田の保全ということでいくとやっぱ耕す人が少ない、農業者じゃない方も多いので草刈りだけを中山間の制度を入れて最低管理をしている場所も多いので、耕して耕作をして農地を保全というところまではなかなかできてない面積が広いのかなと思います。
【佐久間氏】
はい。ありがとうございました。今、ほぼお約束の時間なんです。私、学生時代、恩師に終了時間は参加者との契約ですってのを教わってきたんですけど、ちょっと破りたいと思って。すみませんが10分ぐらい時間をいただきたいと思います。最初に手が挙がっていた方、もう一方いらっしゃいますので、その方最後にお受けしたいと思います。
【質問者3】
原様からございましたようにこの色川らしさ、地域らしさを大事にして取り組まれているということで大変感銘を受けたところでございます。そこで2点ご質問させていただきたいと思います。1点目、その佐久間先生に対してご質問させていただきたいんですが、午前中の島根県からのご報告で地域運営組織RMOの話が出たところでございます。また、大西様からも、この色川の取り組みもRMOの1種ではないかというようなコメントがあったところでございますが、中国地方などで大変色んなの取り組み事例も出てきているところでございますけれども、他地域の取り組みと比較して、この色川の取り組みの特徴なり、違いなり、そういったところを先生のお立場から見てコメントを頂戴できればと思います。それから2点目は、私どもの金融関係の機関だということで、その観点からの御質問でございますけれども。やはり中山間地域も非常に厳しい状況の中で、どういっ

た資金需要があるのかというところが大変気になるところでございます。浦様からは、ふるさと定住住宅の建設っていうお話もございました。また、空き家の改修とかいろいろな資金需要があろうか思います。これは移住定住に限らずで結構でございますので、どなたかパネリストの皆様から今後そのどういう資金需要が重要なのかとか、あるいはこういう資金の調達に困っているかというようなお話があれば頂戴できればと思います。

【佐久間氏】

はい。ありがとうございました。私の方から1点目ですけども、色川の皆さんの取り組みの特徴としてはRMOですとか、そういう言葉ができる前から自治会と連携しながら、自分たちで今日も住民主体とか、そういうキーワードがたくさんありましたけども、那智勝浦の行政との距離感みたいなのも、マグロと温泉の町の中にある山奥の集落の色川っていう位置関係もあると思うんですけども、自分たちでやらざるを得なかった面もあるとは思うんです。自分たちでこうきちんと自治を立てているということと、今日も有田先生の中で幾つかテーマ型にもありましたけど、特に移住、定住っていう点に力を置いてというか、地域としての受け入れをする経緯は聞いていただいたとおりだと思うんですけども、地域としての受け入れをするというところで皆さんが工夫されて、今の到達点にあるっていうところが色川の皆さんの特徴じゃないかなというふうには思っております。ただ他地域と比べてみまして、例えば産業づくりみたいなところでどんどん産品の開発、他のグループはそういうのをされているので、委員会としてやらなければと思っているとこがあるんですけども、他の団体との比較っていう意味ではそういうこともあるでしょうし、ちょっと後の資金の話もあると思うんですけど、空き家の再生改修みたいなこととかも、今日はすごく新宅さんの思いからの取り組みの話も御紹介もあったんですけども、ちょっとここ半年ぐらいそういう議論を皆さんともしているんですが、それをもう少し委員会なのか、委員会にかわる組織といいますか、そういう可能性もあると思います。空き家の再生みたいなところを地域としてやるような可能性みたいなところも、あくまでも他地域との比較の中でですけども、やるっていう可能性はあるんじゃないかなというふうには思っておりますっていうところの1つ目の質問を答えましたので、2つ目の資金需要ということで、これも誰に聞いたらいいかなって思うんですけど、じゃあ、大西さんよろしくお願いします。

【大西氏】

資金需要そうですね。今、委員会の流れでいくと、今、紹介があったように空き家の修繕管理の仕組み作りっていうのを地域でも委員会でも話し合っていて、空き家が悪くなる前に何とかできんかなというので、ちょっと委員会で基金を設けて、そういう活用してどうしようかっていう話をしています。その元手となるお金をどうするとかっていうところが今、やっぱり国も県もそうだと思うんですけど、移住交流、そこの関係人口とかっていう人が増えるとかっていうところに割りと、政策とかお金がつきやすいっていうのがあるのかなと。何となく思うんですけど、ただ色川としてはやっぱり移住促進もそうなんですけど、それ以前に過疎対策、地域を何とか守りたい残したいというところで、その選択肢の一つの手段として、移住者の受け入れをしているっていう面が大きいので、今、県もいろいろ移住交流の補助金とか制度はあるんですけど、ただ色川が空き家はこうしたいとか農地こうしたいとか、いわゆる人の受け入れだけじゃない側面でいろんな主体的に物事を考えて提案とか要望をする中で、なかなかそれに合致するような補助の仕組みとかなかったりするので、今一度もう少し中山間地、人の受け入れだけじゃないところの過疎対策っていうところが今日、課題として、あると思うので、そういったとこにも、もう少し融通がきいたりとか、例えば地域でこう組織を設けて集落支援とか協力隊入れながら自分たちで絵を描けて、それでこういうのでやりたいってこう出た時に、それが割と実現できるような資金の政策とかがあると地域のやりたい思いというのがもっと醸成されていくと思うので、何かあらかじめ絵を描かれたところに地域が目を合わせていくよりも、地域でやっぱり絵を描く。まず組織づくり、地盤づくりっていうところを第一に考えていただいて、そこは出てきた、やりたいっていう思いに、融通が利くお金があるとそれぞれ地域らしさ。いろんな地域があると思うので、その課題に取り組む地域が一歩前に進みやすくなると思うので、その辺はちょっと何か政策的には考えていただければいいのかなと事務局としては思っています。

【佐久間氏】

ありがとうございました。では、ちょっともうお約束の時間を超えておりますので、閉会に向けて進めたいと思いますけれども。少し最後にパネラーの皆さんから一言ずついただいて、その流れで岸上先生にお願いして、閉会に向けて進めたいと思います。今日いただいた話題ですとか、その途中の岸上先生からの振りで定住につなげるポイントですとか、色川らしさっていうお話もいただきましたし、今御質問の中で聞いていただいいてる皆さんの関心事も聞いていただきました。その上でご発言あった方もあれば、ない方もいらっしゃいましたので、その中でのご回答を含めて、今日のご感想でも結構ですので、一言ずつ閉会の前にいただくような形にしたいと思います。どうしましょうか。じゃあ、大西さんからずっといって新宅さんからこちらに戻ってくるみたいな感じで行きたいと思います。じゃあ、お願いします。だいたい30秒か1分ずつぐらいがいいなという希望を申しておきます。お願いします。

【大西氏】

はい、関係人口とかRMOとか結構いろんな言葉があると思うんですけど、あんまり言葉に引っ張られずにやっぱりらしさ、色川らしさ、色川らしいやり方があると思うので、他の地域もその地域ごとのらしさ、どうしたいかっていうのがあると思うんで、まずはそこを醸成するっていうのが、やはり本当に地元の方が何とかしようという思いがあるので、それと地域らしさを発揮できるような。それが連携とかつながりかなというところがあると思うので、また明日、色川に行っていただくと思うんですが、いろんな繋がりが持てるといいかなと思っていますので、よろしくお願いします。

【佐久間氏】

はい、ありがとうございます。大東さんお願いします。

【大東氏】

色川らしさということで話もあったように思うんですけど、移住者の方によく言うんですけど、見えているんじゃなくて見るという聞こえているんじゃなくて聞くということを大事にせえよと移住者の方には言うんですけど、色川の地域の人がどういうことをどういう生き方をしてきたか、それを見たりたり聞いたり、そういうことが一つの田舎の文化になるんじゃないかなと常に思ってますので、僕も親やその先輩の行動を見て育ってきていますので。定住者にもそういう気持ちで、色川でやっていただきたいなと常々言っております。以上です。

【佐久間氏】

はい。ありがとうございます。大久保さんお願いします。

【大久保氏】

私自身、20数年前、色川に入った時に思ったことでもあるんですが。

都会に住んでいるというか、普通の人がと言ってもいいかもしれないけれども、どんなところに自分の居場所があるかと。普通会社に勤めていれば会社、家族がいれば家族で、自分の趣味や何らかの団体に属していれば、そこでの仲間たちというようなところが基本的に居場所だと思うんですけども。こういう田舎に入ると、その地域という居場所ができるんですね。これって非常に自分にとっても素晴らしいなとも思うし、その地域の中で車を運転していても、すれ違いざまに挨拶をしないことはない。全ての人を知っているみたいな感じで、家族ほどではないかもしれないですけども、非常に多くの人との関わりができる。そういうところに田舎暮らしの良さがあり、それを求める人に来ていただきたい、それを進めていきたいなと思っています。

【佐久間氏】

はい。ありがとうございます。じゃあ、原さんお願いします。

【原氏】

昔は男が夢に向かって、嫁さんが嫌々付いてくるっていう時代だったんですけど、今は女の人の方が積極的に訪ねてくるという時代になっているような気がします。女性はやっぱり暮らしっていうものに対して非常に敏感に捉えていると思うので、きっと暮らしのありようを見つめる先に田舎がますます注目される時代になると思うので、誇りを持って生きあいましょう。

【佐久間氏】

ありがとうございます。浦さん、じゃあ、お願いします。

【浦氏】

地域を守っていこうという地域の思い。これがやっぱり地域が主体となって動いて頑張っていくということ、地域を守る根源になると思います。行政というところは、やはりそれをバックアップすると、あまり表には出ないバックアップで地域を支えていくと、そういう思いの中で、その地域と行政との関係をやっていくという風なことが必要ではないかなと思います。やっぱり地域は移住、定住、入ってくる場所は地域なんですね。ですから地域がそれなりの思いを持って受け入れる、それが色川地域の移住定住の根幹がそこなんですね。そういうところを参考にしていただければありがたいかなと思います。

【佐久間氏】

ありがとうございます。新宅さんお願いします。

【新宅氏】

色んなことがあります。でも、そういう色んなことをやらせてもらうことに、本当に僕は感謝しています。また、明日から頑張ります。よろしくお願いします。

【佐久間氏】

はい、ありがとうございます。じゃあ、岸上先生もお願いします。

【岸上氏】

時間の関係上、コンパクトに私がコメントしようと思ったことは、全てフロアの皆さんから意見を出していただいて、どうもありがとうございました。明日、色川に行くということですので、行かれる方は明日行ってください。そして明日行かれない方もぜひ色川に一度行ってみてください。今日の話がより深まるのではないかなという風に思いますで、今日の議論。もうちょっと深めたいっていう場合は、これから懇親会がありますので、懇親会はエンドレスでやっていただいて結構かなと思っておりますので、懇親会の場で意見交換ちょっと時間が足りなかった分については行ってくださいというところで最後、佐久間先生にお渡しします。

【佐久間氏】

はい、ありがとうございました。少しちょっと進行不手際で時間超過してしまいましたけど、皆さんと一緒に色川の皆さんの取り組みを聞いてまいったのとその今後に向けてということで、特にその定住につなげるポイントと色川らしさっていうことですか。色川らしさっていうことは地域らしさでありますし、今日の午前中の話ですけど、耕作する人たちの場を守り続ける意味って何だろうということで、外山さんから投げ掛けがありましたけど、現時点の色川の皆さんからの一つの答えがやっぱり色川らしさっていう色、あるいは色川らしさの模索っていうんですかね。色川らしさって何だろうって考えること自体がもう色川の皆さんの特徴がすごく出ているのかなというふうに思って伺っておりました。お役に立てたかどうかっていうことでもありますけれども、私としては本当に色川の皆さんが胸を張って地域の暮らしを立てておられる状況。背筋を伸ばす思いで伺ってまいりましたけれど、私としては皆さんと共有できて本当に良かったなというふうに思っております。最後に閉会にあたってパネラーの皆さんに拍手頂いて閉会としたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

色川地区の活性化と移住・交流促進の取り組み

令和５年
色川地域振興推進委員会

TEL：0735-56-0101（役場色川出張所）
ホームページ「ふるさと色川」：http://wakayama-irokawa.com

1

1. 色川地区の概要

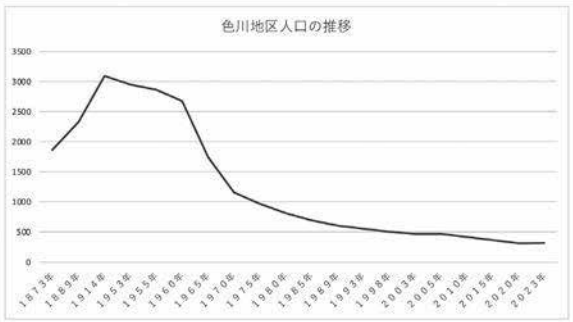
2

色川地区の概要

	色川地区	那智勝浦町
面積	76.23㎢	183.45㎢
林野率	98.7%	87.79%
人口	307人（9集落182世帯） 内174人が移住者	13,822人
高齢化率	45%	43.9%
主産業	有機農業、林業、茶業	観光（世界遺産、温泉）、漁業
標高	200m～400m	
アクセス	町中心部から車で約30分、1日3便の町営バスで約1時間	

3

人口の推移



4

移住者受け入れの経緯

1976年 『移住希望者の訪問』

「地域社会の崩壊・むらの消滅」への危機感が高まる中で、「耕人舎」を名乗る有機農業普及を志す5家族が移住を希望。

1977年 『移住者の受入』

相互に行き来するなど2年にわたる話し合いを経て、1977年に受入。その後耕人舎が農業実習生の受け入れを行い、定住者が増加していく。

1991年 『地域を窓口に受け入れへ』

人口が600人を下回り、地域活性化の取り組みを強化するために、色川地区区長連合会が「色川地域振興推進委員会」を設立。その後「定住促進班」を設け組織的な移住者の受け入れへとシフトしていく。

5

年齢別人口における移住者

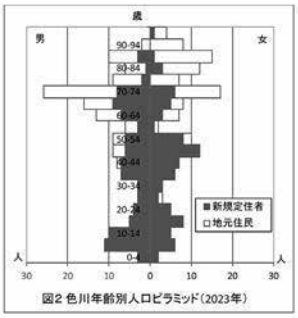


図2 色川年齢別人口ピラミッド（2023年）

6

2．色川地区の移住・定住促進と様々なサポート活動

7

2.1 色川地域振興推進委員会

目的

地域振興のための取り組みを推進する

委員

会長、副会長（2名）、区長連合会長・副会長、定住促進班班長、外部対応班、会計、事務局、ほか**各地区から選任**の委員、計27名

会合

毎月の役員会と隔月での総会を開催。委員会の活動状況、課題、住民活動の報告、情報・意見交換など。現在はグループ会議も実施。

活動

・組織的な新規定住者の受け入れ
・体験交流活動の促進
・地域活性化のための活動の促進支援

8

《資料：第２分科会／佐久間 康富 氏》

2.2　定住促進・体験交流活動

新規定住促進班

・定住・体験希望者の受け入れ、各集落への紹介
・15軒訪問の**定住体験機会**を提供し、定住意思の確認、
　相互理解の深化、地域文化の担い手づくり

様々な体験等の受け入れ

・農林業を基盤とする山村生活・文化を理解する機会の提供
・地域づくり、地域活性化などの取り組みに関する受け入れ

9

定住・体験のための拠点

町立籠ふるさと塾

・平成7年に開設（旧籠小学校の校舎を改修）、定住や体験希望者の短期滞在施設として活用
・定住希望者については原則1年以内の入所の中で、色川の生活や文化を理解、住民とのコミュニケーションを図り、農地や住宅を確保する。

お試し住宅整備

・令和4年度、過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業（総務省）を活用し、南平野地区・口色川地区にて空き家修繕によるお試し住宅整備を実施。
・ふるさと塾と合わせ、各地区（東部・中部・西部）に拠点整備がなされ、移住交流の受入体制の充実を図る。

10

2 .3　様々な地域活動が展開

色川の広報・情報発信

・　広報通信班を組織し、地域新聞「ほっと色川」の制作と地域全戸配布
・　ホームページ「ふるさと色川」の運用、SNSでの情報発信
・　地域情報誌「色川だより」の制作、全国の色川出身者へ届ける

→移住・定住の問い合わせ、取材や視察への繋がる。
→地域の「これまで」の再確認に寄与する。

政府の人的支援制度の活用

・地区主導で集落支援員（2009年～）・地域おこし協力隊（2010年～）を活用
・移住交流の対応窓口、区長連合会・委員会の事務局を担う（集落支援員）
・地域活動のサポート、情報発信、地域の「これまで」の聞き取り活動など

→地域活動の円滑化、地域の「これまで」の記録・保存の実現化
→任期終了後、地域の**確かな担い手**となり得る

11

2.4　活動の特色

色川の特徴

・千年の歴史に裏打ちされた固有の文化
・山を切り開き、時間をかけて築かれた棚田
・豊かな自然にはぐくまれた山里の暮らし
・周囲から隔絶された山間地域では、「人のつながり」がエネルギー源

住民主体の地域づくり

これらの誇るべき「暮らしの場」を守り、次世代につなげていくため、
住民一体となり課題に取り組む。

移住者の受け入れは地域の仲間探し

移住者の受け入れも、地域の「これまで」と「これから」を見据えて、
「色川らしさ」を守り受け継いでいく**仲間探し**。

12

2.5　活動の成果

・新規定住者182人（82世帯）、人口の59%を超える
・区長、委員会、消防団、青年会など地域組織・活動への参加・協力
・保育所、小中学校の存続、小中合同校舎新築
・棚田など伝統的な農山村の景観保全
・盆踊りや宮祭りなど伝統文化の継承
・有機農業、農産加工品で、産業振興

13

2.5　活動の成果と広がり

地域活動への広がり

棚田を守ろう会
休耕していた棚田を復元し、無農薬での米作り、稲作文化の継承、山村の景観保全に取り組む
色川山里文化クラブ
山里文化を振興し、老若男女みんなが楽しめる催しを企画して、暮らしに花を添える など
色川を語り継ぐ会
色川の歴史・文化の記録・保存に取り組む活動　　など

→地域全体の活性化・地域力の向上につながっている。

14

3. 課題と今後の方向性

15

3.1　課題と取り組み

①住宅・農地の確保

先祖代々の家を提供する抵抗感、管理が行き届かな空き家・農地、
優良な宅地・農地の確保が困難

地元住民が「**定住世話人**」として、持ち主と定期的に連絡・交渉。

②産業振興・雇用の確保

有機農産物の高付加価値化、色川産品のブランド確立・　販路拡大

新製品開発、イベントでの出展、ホームページなどでの広報促進。

16

《資料：第２分科会／佐久間 康富 氏》

3.1 課題と取り組み

③都市住民との交流促進

全国での移住受け入れ増加に伴い、新規定住者の問い合わせが減少傾向

⇩

町や県の交流事業の活用。HPやSNSでの情報発信による交流促進を図る。

④鳥獣害対策

猿・猪・鹿などが急増し、農産物に被害。対策への資金・人手不足。

⇩

「中山間地域等直接支払制度」などを活用し、「色川鳥獣害対策協議会」や「明るくする会」を組織。農地保全、獣害対策、山林化防止などに取り組む。

17

3.2 今後の方向性

むらの暮らしをつなげていく

・「むらの暮らし」が様変わりし、守ってきた人々がどんどん減っていく。伝統や慣習、知識や技術、人の繋がりが失われようとしている。
・ただ人口を増やすのではなく、「色川らしさ」「地域らしさ」を次代へ繋ぐため、**その担い手づくり**。

地域の仲間探し

・自給自足や自然環境に憧れて田舎暮らしを目指す人の増加。
・伝統や風習、地域の思いを大事にし、地域の課題に一緒になって取り組む仲間を増やす。移住者の受け入れは地域の仲間探し。

18

3.2 今後の方向性

自治力の向上

・移住者の受け入れは、むらの消滅を防ぐ一時的な方策。自信と誇りを持ってふるさとで生きていく、かつての農村社会にあった流れに戻すこと。
・住民が協力して自ら地域の課題解決に取り組む。活気ある住みよいむらづくりの力「**自治力**」が不可欠。

むらの応援団

・情報発信、地域間連携を強化し、「むらに足を運ぶ人」「むらに留まる若者」を増やし、自分のふるさとに目を向ける「むらの応援団」を増やす。
・「むらとむら」「むらとまち」が協力し合い、多様な繋がりによる全国のむらの再生、活性化の取り組みへと。

19

和歌山県PRキャラクター「きいちゃん」

第❸分科会 災害教訓の承継と継承

コーディネーター 此松 昌彦 氏 和歌山大学教育学部教授

【此松氏】
はい紹介いただきました和歌山大学の此松です。地元大学の教員として、またこの和歌山県に多くの皆さん、遠くから来ていただいた方もたくさんいるかと思いますが、本当に、こちらまで来ていただきましてありがとうございます。今日は特に防災のことを話すということでありまして、ちょっと簡単に、この趣旨説明を、10分ぐらいで話をさせていただきたいと思います。紹介ありましたように、和歌山大学ではこういう防災の関係の教育研究をしているんですが、そういう中で、特にこの棚田について、やっぱりいろんな風水害が増えてきているっていうまず背景があります。これは和歌山市の気温上昇。これ約100年なんですね。もう古くからずっとこれ計測してですね、これ和歌山地方気象台さんからのデータなんですけども、年平均気温っていうのがやっぱり少しずつ上がってきているということですね。地球の温暖化とかは言われますが、やっぱりこういうのも言われてきています。気温の上昇っていうのは、これ100年で1.26度ということで、若干ちょっと年の関係があるんじゃないかという話もあるんですが、各地域でもこういう温暖化っていうのがまず出てきています。今じゃ温暖化してどういうことが起きているのかということなんですね。これも気象台の方の話を聞くと、実は年間降水量が増えているわけではなくて、こういう風に1時間降水量50ミリ以上の発生回数というのが増えているということなんですね。だから言ってみれば、この温暖化によって激しい雨がだんだん増えてきているよということであります。だから、大雨の増加で、最近、線状降水帯とかが、こういうのが今だんだん増えてきているということです。だから言ってみれば、災害が発生しやすくなっているということなんですね。それが一つ気象的な背景があります。この那智勝浦は2011年の9月4日に紀伊半島大水害っていうのが発生しています。那智勝浦町でもこういう冊子が出ています。これ、赤い線のところ。要するに、土石流っていうのがこの時多く発生したんですね。これちょっと上の方に那智大社があって、那智の滝っていうのが更に上の方にあるんですが、こういう上の方から土石流というのがたくさん発生したということがありました。こういう災害があって、ここらへんがこういう地形であるんですね。大体約400から600メーターぐらいありますが、これ見ていただくと、那智の滝なんですが、この辺この年、ちょっと地図の見方というのでは、白っぽいところが割と平坦がずっとこれね。ちょっと山のその斜面の中にあるんですけども、要するに後で出てきますが、これが実は白っぽくなっているのが今緩やかな斜面なんですが、そこが実は棚田に使われていたようなんですね。それがこの山のへりの方にずっとこういう風に後に広がっていたということがわかっていますので、これもうちょっと拡大したところですが、これ那智谷のところです。那智大社があって、この辺のちょっと緑の色が白っぽく見えますが、これが棚田地形って言うか、棚田のようなところです。このように色川の小阪とか、非常に広い棚田がこうやっていろいろと見えています。実は、また後で詳しく話があるかと思うんですが、こういう県道の道路があるんですが、こういうところがやっぱり紀伊半島水害での、土石流で寸断されたりしたようなんですね。だから、棚田の地形は奇麗にあるんですけども、実はその那智谷のところでも岩がこういう風にあって、これがいわゆる土石流の堆積物なんですね。この辺がずっとこの黄色いのが、これは災害史からなんですが、たくさん土石流がこうやって回りから来てしまったというようなのがあります。これ見ていただくと、これ、那智谷の当時の水害の時の写真を私が発災直後に撮影したんですが、こんな状態になっていました。実はこれね。江戸時代の那智谷だと思われるところがあって、見ていただくと下の方、下流側に大きい石がごろごろあります。これがいわゆる土石流の堆積物があって、その上は集落があるようなとこには実は昔棚田であったようだということがあります。集落はその当時どういうとこにあったかというと、こういうへり側ですよね。谷の真ん中だと、土石流とか何かが来るかもしれないというところで、ヘリの方だとか、高台の方なんかにあったかもしれませんよね。これなんかは後、また話が出てくるかもしれませんが、口色川の方での土石流がこんな風にあったりしています。災害記録史からです。やっぱりこれも同じように、土石流発生しているところなんかは緑の写真でなっていますが、棚田地形がこう分布してるところになります。こんな風に、広くありました先程家のヘリ、家屋っていうのは、棚田のこれ、小阪のところなんですが、やっぱりこういうヘリの方に集落があったりしています。こういう風にもう昔から、あったのかなと。棚田自身はこう、大きい最近では龍門岩なんていう言い方をしているんですが、そういう岩の上にですね。こういう棚田地形って言うかな。そんなに厚い土壌ではないようなんですが、こんな風にしてできているということであります。やっぱりこういう災害が何で起きるのか、そういうとこでどういうリスクがあるのかということなんですが、調べてみると、熊本地震の時にも土砂災害。これ阿蘇の方でね。南阿蘇村なんかでもあったようです。だから、風水害だけではなくて、やっぱりこういう地震の時なんかでも棚田の固有崩壊っていうのがあるかもしれないということであります。こういう棚田っていうのは基本、地すべりや土石流など崩積土の上に作られているということでありますが、棚田が地滑りを防ぐということも、国土交通省さんなんかも言っていて、これ大事だよねというのがあります。後、よくこういう棚田があることである種のダムの効果。要するにすぐに本流の方に流れていかないでしょうというようなダムの効果もあるんじゃないか。なんて言われていたりします。一番の問題って言うか、それで今日のテーマの承継と継承ということなんですが、この承継ということで、これはね、基本的にはこの地位や精神、身分、仕事、事業を受け継ぐということなんですが、むしろそういう抽象的なもの。精神的な意味を持つっていうことなので、今私達はこの災害における棚田の意味で先程防災機能があるんじゃないかということで本当、最近はダムの役割、土砂災害の防止にも繋がっているのではないかというような。こういうこともちょっと今日は議論していくし、継承ということでは、先代から義務や財産権利を受け継ぐということで、具体的なものを受け継ぐ意味合いということで、私達は今日、特に紀伊半島大水害での色んな体験を、お話をお聞きすることによって、災害をイメージ化して、それを後世に伝達をすることで、道路の寸断による孤立ということもあったようです。どういう課題があったのか、どういう備えをしていかないといけないのか、こういう継承していかないといけないような議論もしていければと思っております。今日来られている峯さんや鳥羽山さんの体験的な話。土砂災害啓発センターの稲田所長さん。また、和歌山大学の中島先生の話題提供があって、それで後半話をした後に10分間ちょっと休憩を取って、また皆さんとディスカッションをしていく予定であります。またそのディスカッションの時にはフロアーの皆さんからも質問があれば、お受けしていきたいなと思っております。早速なんですが、紀伊半島大水害のですね。まず、体験談ということで、峯さんと鳥羽山さんの方から話題提供していただくということでよろしいでしょうか。

【峯氏】
すみません、棚田を守ろう会の峯と申します。よろしくお願いします。私と横の鳥羽山さんで、2011年の当時の状況を話してくれというお話なんですけれども、私は小阪地区、鳥羽山さんは田垣内地区、まあ被害は出たんですけどもそう大きな被害ではなかったんです。だから一番大きな被害を受けたのは、色川地区の中では口色川地区が一番大き

な被害を受けました。だから、私どもの体験とあと口色川地区の状況を、色川地区ではこういう色川だよりという冊子を毎年一回発行しているんです。もう30年近くの発行になると思うんですけども、これの災害2011年の翌年の2012年の8月に出された28号で主に被害の大きかった口色川地区を中心に50何ページの特集座談会とか被害に遭った人の聞き取りを載せてますんで、これを主に使わせてもらいながら報告させていただきたいと思います。

【此松氏】

はい、ちょっとついでに言うと、今こちら写真が出ているところが、口色川の周辺ですかね。この辺の土石流とか何かですかね。だから場所的にはこういう裏山にこういう火成岩の岩体の山があって、その麓ということであります。はい。またじゃよろしくお願いいたします。

【峯氏】

まず、私の当時の体験なんですけども、まずあの色川地区の集落関係をちょっと理解していただいた方がいいと思うんです。色川地区に上がる場合、勝浦から那智の滝方面に行って、途中から左に橋を渡って折れてずーっと上がっていっていただきます。そうすると、ゴルフ場があって、その次あたりがまず1番目の集落の南平野地区になります。その次が2番目の集落で、私の住んでいる小阪地区。3番目の集落が口色川地区。今回、一番大きな被害があった、大きな土石流に見舞われた地区です。それで4番目の地区が大野地区、そして5番目の地区が鳥羽山さんのおられる田垣内地区、その奥がまた坂足地区ってあるんですけども、ここは1世帯だけの住民だったんですが、そこも完全に孤立したという状態です。だからまず私の集落小阪地区は2番目、下から上がってきて、2番目の集落です。当時は2日ぐらいから雨がずっと降り続いて3日の夜ですかね、結構きつくなってきたなという感じはあったんですけども、台風が近づいている加減ということで自分のとこの小阪地区に住んでいる私としては危機感はなかったです。ただ、1番目の集落南平野地区に私の叔母が住んでますんで、雨台風ということで私の家に避難してきていました。それで3日の夜ですね。10時かそのぐらいから停電が始まりました。停電したなと思って様子を見ているとまた電気がついた。ああついたやんかという感じ。また停電して点いて停電して1日に3回ぐらいあったと思うんですけども、それで最後が2時か3時かよく分かりませんけれども、そこでパシッと消えてもうそのままだったということです。それで翌日ですね。さっき言いました。私の叔母、1番目の集落の平野地区の住民がわざわざ私の家へ来て「しげよ」と言うんですけども、シゲちゃん家がえらいことになっているでという話で通報してきてくれました。それで私と叔母と様子を1番目の集落、様子を見に行こうと思ったんですけども、当然車は全く通れません。それで徒歩で様子を見に行ったんですけども、その家は谷筋にありまして、すぐ横に川が流れているんです。だから洗い物なんかも川でできて便利やなとずっと喜んでいたんですけども、そこの川の上の部分で石の関係で川の流れが変わってしまって、ずっとその家の裏側から水がどんどんどんどん落ちていて床下は浸水している川寄りの漬物小屋がふっ飛んでいるみたいな感じで、しかも私らは一旦9時か10時ぐらいと思いますが相変わらず水が裏の方から流れて行く。床下を通って庭にどんどんどんどん流れていっているというそういう状況でした。その1番目の南平野地区ですね。それでここでは不幸なことにその上に一軒家があるんですけども、そこは土石流の直撃に遭いまして、お亡くなりになりました。色川地区でお亡くなりになられたのはその方だけだったんです。けれども、まあ南平野地区はそういう状況で、私の住んでいる小阪地区は大したことないやんって思っていたんですけども。お宮ですね。お宮がちょっと上の方から那智高原へ行く道があるんです。県道がありまして、その上を那智高原に上がって行く道があるんです。林道ですね。それでそこからお宮に向かって土石流でお宮を直撃されて、それで社務所が完全に吹っ飛んでもう駄目になっていました。7、6年ぐらい前かな。それはまた新しい社務所を建てかえたんですけど、社務所がもう吹っ飛んだ。それと上の本殿も一部土石流に引っかかって修理せなあかんような状況やったということですね。それと今言った土石流が来た横の川筋、棚田のある川筋なんですけども、そこもその上からの土石流が流れてきて、以前は場所によってはまたいで渡れるような川だったんですけども、その災害で完全に埋まってしまって、その後役場関係で復旧していただいたんですけれども、今はその復旧工事で4メートルぐらいの両面をコンクリで固めてもらって、深さも5、6メートルもないけども、4メートルぐらいの深さのコンクリートで固めた川になっているんです。そういう状況で僕たちも非常に棚田の作業をする時に落ちたら、これは落ちたら死ぬか首の骨を折って半身不随になるでみたいな言いながら非常にそこは気を付けて通るようにしているんですけども、幸い12年程になりますけども、まだ1件もその転落による事故というのは起こっていません。それが私の小阪地区での状況です。

【鳥羽山氏】

僕が暮らしているのは、田垣内地区と言って大きい災害が起こった口色川地区より下は奥と言えばわかりやすいのかもと思うんですけども、その日というか、前日の夜、僕は雨だったんですけど、普通に12時ぐらいまで隣の人とお酒飲んでいまして、起きたら、もう台風一過で結構いい天気だった訳です。明くる日5日になるんですかね。それで例のごとく簡易水道で谷から水を取っている簡易水道なので、水だけが止まっていて水だけ水道担当の人が直してくれるのを待ってようかなぐらいに思っていたら、近所の子が停電もしているし、冷蔵庫止まっているから朝マックしてくるわって言って出かけていきました。で、5分もせんうちに帰ってきて、えらいことになっているわっていう話になって、どうなっているんやろうと思ったら、どうやら我が地区は孤立しているぞと。どこにも出て行かれないっていう風になっていたので、取り急ぎ、どこがどうなっているかうろうろパトロールしてから消防団の屯所に現役の消防団員が集まってどのように復旧していくかっていうことを話し合って、とりあえず那智谷とは別の太田川沿いに道路があるんですけど、そちらの道を手作業で、とりあえず道路を車が通れるようには当日しました。その次の日に南平野で、行方不明になっているっていう人を、消防団として探しに行こうという話になって、幸いにも早い段階で見つけられて掘り出して御家族の元に連れてくることができたので、良かったんではないかと思っています。災害当初1日目2日目はこういった動きを僕はしていました。

【峯氏】

まぁ、二人が実際に体験したのは、今の状況。色川の中では比較的ましな方な地区だったんで、そういう状況です。それで、これからちょっとこの冊子「色川だより」を参考にさせていただいて報告させていただきたいと思います。まず、この色川だよりで9月の2日3日4日、実際に土石流が起こったのは4日の未明です。深夜ですね。だから2日3日4日の、気象庁の1時間当たり降水量のグラフがあるんですけども、だんだんだんだん1時間あたりが90分なっていて、ここ、最後の4日未明には1時間に50ミリぐらいピークですね。ここのあたりでもう色川全体、あっちでもこっちでも土石流が起こったというような状況だと思います。これで最後1時間50ミリぐらいですけども、実は2、3年前に色川の中で1時間に100ミリというただそれは幸い、短時間で1時間も降ったかどうかなという感じだったんですけど1時間やっぱり100ミリが来ると、もう車で走っていても上からずっと滝のようにザッとこう。そういう状況。やっぱり1時間に100ミリというのは非常に怖

い。それで、先ほど叔母の話をしましたけども、その１時間に100ミリ降った時も、たまたま僕が叔母の家に居たんですよ。そうすると、叔母の家で居るとだんだん雨は降って川の音がだんだん変わってきたんですよね。最初は特に気にならなかったんだけども、そのうちころころゴロゴロという大きな石が転がるような音がしてきたんで、もう以前のこともあるんで、すぐこらまた避難所かということで、私の家に３年前ですね。それは短時間の集中豪雨だったんですけども、連れ帰った覚えがあります。だから、やっぱり一度酷い目に遭うと敏感になると言うか避難行動に結びつくのかなという。それとやっぱり１時間に100ミリというのは非常に怖いなというのをしみじみ感じました。それが今ちょっと紹介したい当時の雨の状況です。それで、色川全体の被害状況をここにまとめてあるんですけども、人的被害としては１名、先程南平野区の１名の方が亡くなられています。それで住宅被害、全壊が９戸、大規模半壊が４戸、半壊が３戸ということですね。全部で16戸ぐらいが被害を受けていると、当時世帯が227世帯です。同じそのうちの16戸ですから、まあ、1割にもいかないんですけれども、そういう数字が出ています。それで、こちらが地区の状況をこの冊子で時系列である程度並べてくれてますんで、ちょっと紹介させていただきたいと思います。９月４日はですね。口色川地区には３本の川筋があります。一番上の川筋が瀬田谷というとこを流れている下地川、横から２番目に入ってくる県川、そして３番目が大野の方の福地谷というとこから来る清の川この３本ですね。最初の下地谷の下地川に、この後の２本、県川と清の川が合流する形になっています。これがずーっと下へ行くと太田川という形になるんですけども、まず最初、一番上の下地谷、瀬田谷で停電が０時半に起こりましたと。次に１時福地谷で地鳴り、これは1、2、3の一番下、下の福地谷で地鳴りがあったと、こちら口色川地区に清の川が注いできています。1時地鳴り、2時瀬田谷で地鳴り。一番上ですね。瀬田谷で地鳴りが聞こえた。それが午前２時です。それであと２時15分瀬田谷で１回目の土石流が発生したと、2時に地鳴りを確認して２時15分に瀬田谷で１回目の土石流が起こったということですね。そして、固定電話はこの時、切断されたとこういう感じです。そして７時、瀬田谷で２回目の土石流が発生したと。口色川地区は土石流３回ほど起こっているのね。瀬田谷で２回、そして清の川の方でも土石流が起こったような状況です。これから個別の話。今回は報告しなさいということで、私と鳥羽山さんでこれから主に紹介させていただく、2軒の家に聞き取りにちょっと行ってきたんですよ。その時の状況をちょっとお話しさせていただきたいと思うんですけども、まずＮさんの状況はどうだったかということですけども。

【鳥羽山氏】

ご夫婦で暮らしていたんですけど、Ｎさんは奥さん自身が仕事の帰り道に山から家に帰ってくる最中に、もうこんなに雨降るのはあんまりないということで、その時点で何やら嫌な予感がしていたらしくて、通帳とかをちゃんとリュックに詰めて枕元に置いて寝たらしいんです。そこがすごいなと思うんですけど、その後明け方でも真っ暗なうちにいよいよ家の中に土砂が入ってきて、いよいよ逃げなあかんてなった時に一緒に逃げたら、もう道路が川の状態になっていたので、足をすくわれて転んでしまってごろごろゴロゴロ転がりながら何とかそこへ逃げた段階で、もう奥さんは諦めていて、もう完全に死んだと思っていたようです。もう真っ暗なんで、何にも分からないんですけど、隣の家を見ると、屋根に誰かが乗っているというのが分かったらしくて、その隣の家というのが妊婦さんもいるようなお宅だったんですけど、子供３人とお腹の大きい奥さんとその旦那さんが屋根の上に登って、あのブルーシートに包まれて１晩過ごしているのが明るくなってから確認できたらしいんですけど、暗い間は何にもわからへんので、その奥さんは懐中電灯だけ。ここに人がいるよというてました。寂しくないようにだけしてあげたと言っていました。

【峯氏】

今の屋根の上に取り残されたご一家の話ですけども、ちょうど県道がありまして、県道から１段下がったとこにその家があるんです。だから県道の高さよりもまだ低いとこに家の屋根があるんですよね。それで、そのもうちょっと東に行くと、さっき言いました。下地川という一番大きな口色川の川が流れているんです。だから、下地川にもいけないし、もう県道の方から滝のように水がだんだん流れてきている。これがもうどこにも行かれないから、たまたま三脚か脚立とか何か以前使ったやつを立てかけていたんで、まず妊娠している奥さんを上げて、それから子供さん二人をあげて、それから自分も上げて、だから屋根の上で３時間ぐらいずっともうじっとしていたという話。それと今言われました、Ｎさんの奥さんがそれに気づいて時々懐中電灯を照らしてくれたのが非常に助かったというお話でした。それと、次にＳさんのお話をしますと、Ｓさんのお宅は先程言いましたけども、上から1、2、3の３番目の清の川がちょうどその下地川に合流するところにあるんですよね。それで上の方福地谷で地鳴りが聞こえて物凄い音がしているのはおかしいなと思って外を見たら家の前は、庭はもう水浸し。すぐ前は県道が走っているので、県道までずっと水浸し、裏へ回ったら裏の方ももう水びたし、完全にもう膝上ぐらいの水に囲まれた状態で、畳はもう上がってくるわ。何やということで。ああ、ちょっと順番が悪かったですけども、そのＳさんご夫婦は70代ぐらいのご夫婦です。そして近所に奥さんのお姉さんがおられるんです。そのお姉さんもそこに避難していました。だから、高齢者３人、家に居たんですけども、完全に水に囲まれてしまった状態で、これどうしようかということで、とりあえず洗面所、裏の方に洗面所があるらしいんですけども、洗面所のサッシを外して、しかし裏から水がドボドボ来ています。しかし、その石垣があるんですね。裏の隙間と向こう山の石垣の間が１メートル以上あるんですけども、そこにまず旦那さんが飛び移った。暗いですけどね。1時2時3時の話で暗いんですけども、飛び移った後、二人をどうしてこっちへ移そうかと、さっき移った旦那さんが思案している時にたまたま畑で使うこの辺では「なる」って言うんですけども。まあ畑にネットを掛けたり、その畑に野菜のつるを這わすような道具としての木の棒があるんですけども、1.5mからそのくらい。それがたまたまそこ裏へ流れてきたと、それを掴んで洗面所とその裏山に渡して二人を何とか。しかし、高齢者女性二人です。洗面所はもうもちろん、床上水来ているんで、もう足がツルツル滑って洗面所にも乗るのに非常に苦労したらしいんやけども、とにかく生きやなあかんと、奥さんの方はもうあかんと思ったっていうことなんです。お姉さんの方が生きやなあかん、何言うてんのやみたいな感じで励まして、何とか先に渡った旦那さんがタオルをこちら家の方に投げまして、そのタオルを手探りにただ、棒つってもほんま細いですよ。10センチもないような棒やと思うんです。上を深夜に高齢者の人が何とか渡ったという話です。とりあえず裏山に渡ってその夜、近所の多分被害を受けてない家に避難しようということで山伝いに歩いたんですけども、もう一度。家の中から洗面所から出たぐらいですから、履物も何にもないと、女性の方は奥さんとそのお姉さんはまだ靴下履いておったんですけども、その旦那さんは素足です。

素足で山の中ね。この辺の山の、小枝やら何やらといっぱいあるとこをずっと夜中に歩いたという。ただ、その時に足、えー、裸足でつったら全然痛いとか、そういうことは全然思わんかったという話ですね。やっぱり緊急時はなかなかねぇそう。ただ、やっぱり逃げるとこに靴でもぶらくっとく（ぶらさげておく）のは一つかなと思ったりもしま

したけど、拙い話で失礼します。
【此松氏】
峯さん、鳥羽山さん。凄いリアルな話でありました。ありがとうございました。土砂災害啓発センターの稲田さん。紀伊半島大水害のおはなしをお願いします。
【稲田氏】
土砂災害啓発センターの稲田です。紀伊半島大水害です。私からあのキーワードの大水害の概要ということでお話しさせていただきます。私は土砂災害啓発センターというところから参ったんですけれども、この土砂災害啓発センターは、この紀伊半島大水害が契機となって最も被害の大きかった、この那智勝浦町に設立されました。今年で8年目になります。今から12年前に起こった紀伊半島大水害なんですが、この年は忘れることができない。東日本大震災が3月にあって、その半年後にこのような大水害が紀伊半島でも起こりまして、その時の代表的な写真です。ちょっと分かりにくいんですけども、赤い点線で囲っているのがこの那智勝浦町で起きた災害の写真です。簡単に説明しますと、左側が田辺市のあの本宮大社の旧社地のところですね。大きな鳥居が見えていますけど、そのあたり、熊野川が流れているんですけども、そういったとこは浸水しました。あと、特徴的な写真が右下ですけども、これも新宮市という那智勝浦町の隣の町なんですが、斜面に軽トラがひっかかっています。なぜこんなことになったかっていうと、この道の下、だいぶ低いところに熊野川という川が流れているんですけど、それがその時、ここまで増水して流された軽トラが引っかかったということだと思われます。当時の降水状況です。降り始めからの累積雨量ということで。この時の台風12号っていうのは、実は紀伊半島を上陸していなくて、四国の方を通ったんですね。で四国の方を通ると、台風の進行方向に対し、右側っていうのは南の方から湿った雨雲がやってきます。紀伊半島の斜面に当たって大量の雨を降らせたということです。非常に台風も大型で動きも遅かったので、長時間記録的な大雨を紀伊半島にもたらしました。広い範囲で1000ミリを超えるような大雨が降ったんですけれども、この被害にあった那智勝浦町の市野々というところでは3時間で341ミリという長い間降って土の中が大量の雨を、水分を含んだところに最終的に大きな雨が短期間に豪雨が降ったってことで、土石流が発生したということであります。この時の和歌山県での代表的な写真特徴的な土砂災害として深層崩壊と土石流っていうものがあります。この時山が深いところから崩れるような深層崩壊というのが、お隣の田辺市とこれを中心に起きまして、この土石流っていうのがこの那智勝浦町とか新宮市の方で多数発生しております。その時のですね。紀伊半島大水害のどういうことが起こったのかっていうのをちょっと映像にしていますので、ちょっと3分ぐらいですけど、ご覧いただきたいなと思います。
～映像鑑賞～
映像を見ていただきました。今見ていただいた映像があった地域を上空から撮影したものです。画面の奥の方が那智の滝があって、色川の地域がこう左上の方の地域になりまして、見えているのはその那智川流域の地域になります。この那智川を見てもらったら分かるんですけど、両側にですね。こう山が迫っていて那智谷に……なんていう言い方しましょう。もうこの集落自体が谷地形の中にあるようなところなんですね。狭い流域にですね。大量の雨が一気に降りましたので、この深夜2時頃なんですけども、黄色で示した8つの渓流が那智川にあるんですが、ここで同時多発的に土石流が発生しました。それでその土石流が那智川に流れ込んで、その川の水が増えているところに、更に水が流れにくくなったということで、洪水氾濫を起こしてしまったということでありまして、この時に起きた土石流の写真ですね。これは平野川っていう先程の那智川の支川の一つなんですけれども、非常に大量の土砂が長浜から流れ落ちてきています。ちょっと見えづらいんですが、真ん中ぐらいにちょっと米粒みたいに黒い点があるんですけども、これが捜索をしている自衛隊の方々ですね。もう人の姿がこれぐらい、ちょっと分からないぐらい小さく見えるぐらい大量の土砂が流れたということであります。洪水の発生ということでその中でも特に大きな被害が出たのが、那智勝浦町の井関地区という同じ川沿いの集落なんですけども、この那智川に土砂が堆積したということで、洪水が発生して地区全体が浸水しました。この那智川に橋が架かっていますけども、その真下まで土砂が来ているっていうのが御確認いただけるかなというふうに思います。これが那智勝浦町全体の被害状況であります。土石流とか河川の氾濫で家屋の損壊とか浸水が発生したりしまして、住民の生命財産とライフライン道路網ですね。そういったものにも甚大な被害が出ましたので被災写真も幾つかご覧いただきたいと思います。これが那智川に架かるJR紀勢本線の今の鉄道橋なんですけど、当時こんな感じで鉄道橋も流されてしまいました。同じく那智川に架かるのが県道橋なんですけども、当時上流からですね。大量の木が流れてきて、そこにも引っ掛かって大きな被害が出ております。この時の復旧は3年かかっておりまして、土砂とともに大きな岩も襲ってきています。これが当時の写真なんですけど、道路上に車と同じような大きさの直径2、3mぐらいの巨大な岩がコアストーンていう風に言うんですけども、これが流れてきています。水が引いた後もこの場所に残るので、復旧の大きな妨げになったと言われています。これは当時避難場所だった市野々小学校です。これは同じ災害の時はこんな感じですね。1階の教室の部分に流れてきた流木が、大木が突っ込んでいるということで、まず当時のその増水時の川の水の勢いっていうものを物語っているのかなという風に思います。ちなみに2階の方に避難されていたんで、案外ケガ人とか出てないということです。そして、これが那智川の先程見ていただいた平野川です。もう一つ内の川で、それよりちょっと上流側にある那智川の支川なんですけど、そこですね。ちょうどその土石流の様子なんですけど、左上に砂防の堰堤映っているのがちょっと御確認いただけるかなと思います。コンクリートの壁みたいな矢印のところで、当時この砂防堰堤災害が起こる10年ぐらい前に完成しておりました。この砂防堰堤が整備されたお陰で、まあ大部分の土砂は止めることができたんですけれども、それでも木とかは軽いんで水に浮いちゃうんですよね。そういうのが下流に流れて人家の方にも被害を及ぼしたということですけども、まあ、大量の土砂止めることができたので、大きな被害は出なかったということであります。世界遺産であります那智大社も裏山の土砂崩れで境内、本殿の傾斜が、この土砂に半ば埋まってしまったというような被害もございました。先程峯会長さんの方からお話がありました。色川地区の瀬田谷の土石流の様子ですね。別名赤畑谷でございます。これは太田川の上流の谷なんですけども、ここで土石流が発生したということで、下流に点線の所、県道があるんですけど、もう県道も飛んでしまって長期間通行止めになりましたね。下流の方からちょっとそれを撮影した写真なんですけども、本来水色の点線で流れているのは太田川なんですけども、この時のもう土石流によりまして200メートルほど川が埋まってしまいました。その為にこの黄色の点線に流れを変えて人家に土石流が流れ込んだということで、建物全壊が5棟、半壊が6棟という大変大きな被害が出てしまったということであります。災害からもう4年後のその瀬田谷の様子です。高さ145メートル幅120メートルを超えるダムが完成しております。まだ上流の方に災害でちょっと不安定になったら土砂が上がります。そのおおよそ3万立方メートルという風に言われていますけど、その土砂は食い止めること

のできるダムができているということであります。これがあの当時災害から10日後に地元の熊野新聞というところに出たのを抜粋させていただきました。色川地区の被害状況の写真でございます。記事にこの写真はその色川地区の住民さんから提供された写真だそうです。記事を読みますと、色川地区の町道とか県道の至るところで、山の崩壊とかですね。土砂災害とか後、道路の崩壊とかが起こって通行止めになっているということとか、先程の峯さんのお話がありましたけれども、住民自ら水を確保されているというような記事もなされておりました。私から紀伊半島大水害の説明を終わりたいと思います。

【此松氏】

稲田様ありがとうございました。では、次に、中島先生お願いいたします。

【中島氏】

皆さん、おつかれさまです。何か棚田サミットというより防災サミットみたいになっていますけども。棚田に話をちゃんと戻したいと思います。ちょっと象徴的な写真の中で紹介させていただくんですけれども、先ほど紹介したこの那智谷っていうところが実は今回のお話の中心になるんですけども、こういうところ全部土石流が発生した後なんですね。で、その土石流発生したところを役所が公開しているデータであるとか、さらに、航空写真等です。もう最近災害があるとすぐに航空会社がドローンを飛ばしたり、飛行機飛ばしたりしてその写真を公開します。その直後でこういう風な形で見て、それを点で打ってこう地形図の上に表現してみた訳なんです。そしたらちょっとえっという風に気が付きまして、実はこの青い点何かというと、あ、土石流止まっているやん途中でと。つまり土石流は一旦発生したら下まで落ちるとは限らないということが分かったんです。考えてみると実は土石流って皆さんどういうイメージをお持ちか分かりませんけども、大きな土砂災害土砂崩れがあって、それが一気に落ちるパターンが一つ。もう一つのパターンが石ころ1個はコロコロっと転がってやわらかい土を押す。大きな力になって押す、雪だるま式にどーんと大きくなってしまう土石流っていうのもあります。ですから、最初から大きな土砂の塊が落ちるとは限らないですね。最初から大きな土砂が動いてしまったら、なかなかとまりませんけども、小さなやつはある時途中で止まってくれることがある、止まるんだっていう事に気が付きました。それともう一つのポイント、土砂災害の発生ポイントっていうのは分かんないんです。例えば、先程のこれはあたかも土砂災害の発生ポイントに見えますけど、これ違うんです。これは後からここまで崩れたよっていうのがわかるポイントなんです。ここから崩れたことがあるか分かんないけど、実際に崩れたのはこの下、二次崩落でぽろぽろぽろぽろ崩れていって最後に確認できたのが、ここだってことなんです。つまり、このことからすると土砂災害の発生要因って特定するの極めて難しいんです。なぜかっていうとスタートがわからないからです。これに対して止まった位置というのは目の前にあるわけです。はっきりと分かるので、これポイントにものを考えていくと充分できるなっていう風に考えて、研究に着手しました。こういう感じで止まるんですね。傾斜角度を見ると、分かりますでしょうか。緩やかになっているんです。非常に単純な理屈でした。球を転がしても、傾斜が緩やかになったら速度落ちますよね。落ちてくる量とこの緩やかになるバランスが合ったら、その土砂は意外に止まってくれるって事がわかったんです。これ実は那智谷のですね。谷地形があるんです。これ学生と一緒に必死になって、もう可能な限り一個一個の形で全部はいずり上りました。もう大変でした。3か月ぐらいかかりましたね。そういうことを通じて、ある時にこういう風景に出くわしたんです。分かりますかね、そうなんです。上で発生した土石流が棚田の畔で止まったんです。これも同じです。すみません。私目が曇っていて、その横を素通りして行きましたけど、インド人の留学生が「先生。そこはおかしいです」って、とても日本語の流暢な留学生でしたけど、彼が見つけてくれました。それからこの視点に立って色々調べてみると、もうめちゃくちゃ色んなことが分かってきた訳なんです。山崩れは皆さん山の地形とよくこうなっていますよね。段々に、これ実はですね。以前崩れたのが、堆積した跡なんです。山っていうのが見ているとこうなっていますよね。あれだったら崩れたやつが堆積したから、こういう地形なのです。で、この角度が変わるという遷急遷緩ってこうなっているんですけれども、これがかつての山の斜面ですから、ここに水が入ると、ズルッとこいつは落ちます。しかもこいつ柔らかいですから、水はしみ込み大きく崩れる。こういう原理がある訳なんですけれども、昔の人は最初此松さんが言ったように、ここに棚田を造ったんです。これは棚田作る理由っていうことで、いろいろ言われていて定説はないんですけども、やっぱり一般的に言われるのはこれが柔らかくて扱いやすい。しかも上流から降ってきた土砂を含めた、いわゆる樹木を含めた養分も含めている。だから棚田として好都合だったんだっていうことを言うんですけども片側では、川ではこいつは水が入ったら崩れやすい。ほっといたらこれで自身が崩れてここの下に。また2次被害が起こります。もう明らかに崩れた後の扇状地跡です。そういうところを棚田にしていくんですけども、これ考えてみると、今でいう、土木でよく使うテラス構造なんです。段々にすると崩れにくい。これは山を切る時の鉄則なんです。今、切土森土の話がありますよね。切土も森土も段々にするのは鉄則なんです。そうすることによって、崩れるパーツをちっちゃくしておくんです。全体が落ちるようなことをせずに、パーツごとに崩れたりするようなことをして、いわゆる強度を保つっていう構図をとっているんです。けれども棚田自身はテラス構造とおんなじだと言ったら崩れにくいように、もともと崩れやすくなってしまったところを崩れにくく、結果的になったということなんです。じゃどうなんだろうというようなことで、実験してみました。これですね。棚田模型ですね。学生と一生懸命作りました。こんな感じで上から土石流です。止まりますね。で上からどんどん降らしてもですね。止まってくれるんです。簡単です。平らだからです。止まるんです。つまりこのテラス構造が棚田にあることによって上から降ってきた土砂を、落下後の速度を落とすから完全に止まるかどうかは別だけども、少なくとも速度は落としてくれる。うまくいけば止めてくれるねってことなんです。例えば、これなんかですね。ちょっと先程の平野川のビデオについては、ちょっとこれかなりクレームもあります。後で説明しますけれども、これ見たらこれ棚田とこれ先程ビデオの映った平野川なんですけども、見たらわかりますけど止まっているんです。ここで上から降ってきた土石流はここで止まっているんです。これ緑ですよね。埋まってないですよね。つまり、棚田は止めてくれたんです。あるとこの砂防ダムで、上から降ってきます。これ、止まっているんです。皆さん砂防堰堤ってすごく誤解があるんですけども、こうやって壁を作って耐えるんだと思っている人多いんですけど、厳密には平らの地形を作ることで速度を下げる装置なんです。だから丈夫な壁が作れない場面では、もう最初から埋めてしまうんです、谷を。そして平らな距離をなるべく長く取ることによって上から降ってきたやつ。このように、なるべくそこの場所で下に流さないように速度下げるっていう装置なんですね。そういうふうに考えていくとこのテラス構造があると棚田を作ってくれたおかげで、上から降った奴が止まることがあるってことなんです。うちの学生が測量して一生懸命測ったら傾斜角度で37度ぐらいまでの上から降ってきたやつは止めてくれました。かなり止めてくれるって効果があることがわかったんです。ただ、これ

テラス構造があるだけでは、水が入ったらこいつ軟らかいです。ずるんと行きます。さあどうしましょう。田んぼってすごいよね。ちょっと見てみましょうか。単に段があるだけですね。そうして水を流します。このセクションは水流します。どんどん染み込んでいきます。染み込んでいて、全然こう土地の表面出てこないんすよね。柔らかい土のなかどんと落ちる、染み込んじゃえば当然落ちるわけなんです。で、またまた落ちると思いますよ。そのうちただ水やったけどもう下に入っちゃうから崩れるんですね。ああ落ちてくれたってことなんですけど、じゃあね田んぼっていうのは普通床を作りますよね。水が漏れないようにプールにしますよね。そうするとそこは水だめになりますから、地面の中に水が入りにくい構造ができるんです。見てみましょうか。耕盤中に粘土で層を作りました。降った雨は表面に流れてくるんです。土の中に入らないんです。土の中に入らないから崩れないんですね。だから皆さん田んぼはね。地形があればいいんだけれども、水田をやればもっと効果があるっちゅうことが分かるんです。つまりですね。この耕盤があることで床があることによって遮水機能を持つわけです。テラスを作って遮水をするこれ、最先端の土木技術と全く同じことですね。色川なんか、1200年も前からやっていたんですよ。昔、技術が低いととんでもないもう今でも理にかなった技術をもう使っていたって見なすこともできるわけなんです。

ただですね。こういう食料田んぼは食料生産のために作られたから、意図せざるつまり偶然だっていうようなそういうことになっているのが定説です。実は棚田学会さんですね。もう勉強させていただいたんですけども、棚田学会さんはもう意図せざる防災機能であると食料生産のために棚田が作られたのであって、防災機能を期待して作るっていうようなことはあったかもしれないけれども、ほぼないというような見解を断言されている。まあ、それはそうだろうなって思いながら、考えていたんです。先程の、平野川で被災された方とですね。被災された方のご遺族と後でお話伺ったんです。そしたら先生おって言うんですね。あの奥様は行方不明で娘さんがお亡くなりになられる状態で、昔なじいさまがなって谷の田は捨ててもいいけど、上の田んぼ、つまり谷の田は絶対捨てるな作り続けろと言ったと。で、俺、これ守らなかったんだな。その罰が当たったんだろうなというようなこと。言われたんですね。で僕ね。そんなことないだろうって思い、お気持ちは分かるけどと思ったんですけども、調べれば調べるほどですね。じいさまはすごかったわけです。田んぼが、しっかり機能していれば、ひょっとしたらもう少し被害は小さくて済んだかも分からないっていう風に考える証拠がいろいろ見つかってきたっていうことなんです。意図せざる防災機能ではなくて、意図した防災機能ではなかったのかってことで、いろんな古文書探しまくって、そういうふうな目的で棚田が作られていなかったのかってことについて必死になって探しましたけどすみません。まだ見つけられていません。ただ、いくつかそれに類した話があるんですね。例えば、横浜のちょっと北に町田っていうところがあるんですけども、そこにバラ園をやっておいでのすごい名字の方です。田極さんとお見えです。田を極めるね。田をきわめですが、バラを作っているんですけども、彼が言ったんですね。彼が言ったんですけども、向こうで谷津田って言いますよね。谷津田だなんてのは寝ていて日陰で取れが悪いんだからつって適当に切り上げて第1の日当たりのいいとこで畑作するんだよと。では何でそんなとこでやるんだって。これはね洪水防止でよって、その洪水の意味が親水の方なのか。土石流のあの方なのか分からないって言っていましたけどで谷津田なんてやつね。谷津田なんていうのは洪水緩和のためにやんだよっていうようなことを。だから証拠に、日当たりのいい下から造成せずに一番てっぺんから作るんだよと一番てっぺんから日当たりの悪いとこから作るんだよというようなことで、水源のこともあるので、一番上から作ったら理にかなっているんですけど、そういうことで新潟の秋代って話もありますよね。収穫が終わった秋でいっぺん代かきするんです。もうこれから生産なんかするつもりないんです。だけど、代かきするこの理由っていうのは、圧雪がどんどんどんどん積もります。それで田んぼ押しますから、雪解けの水が下に入ったら田んぼ崩れるんです。だから雪解けの水がずっと地面に入らずに表面を流れてくれるために、代かきっていうのは秋代が必要なプロセスだとそういうようなことを聞いています。なるほどなっていうようなこと。いろんな証拠は集めているんですけれども、意図した防災機能っていうだけの証拠。まだ私、つかめていません。誰かご存知だったら教えてください。そういうことを皆さんの扱われている棚田のとこで聞いたことあるよってのが来たら是非お話を聞かせていただきたいと思っています。航空写真に戻ります。これが先ほどお話しになったような焦点になった田んぼなんですけれども、実はさきほど此松さんから説明されますけどね。木の下の昔の地形見えるっていうすごい技術が出てきたんですね。面白い、貸してとお借りしまして、研究させてもらいました。その結果、重ねるとこんな感じで木の下みんな田んぼ棚田があったこと見えるんです。こういうのを見ると、みんなすぐにね。隠し田だって言うんですけれども、隠し田なんか絶対作れないよっていうのが僕の見立てなんですけれどもね。実は先程の図面を使って、どのエリアが棚田だったんだろうっていうことを図示したのがこれです。この黄色のところ棚田の地形です。この前、谷底も棚田の地形がありましたので、それをやってこれだけありましたところがね。皆さん、棚田やっておいでの皆さんわかると思うんですけども、こんなところですね。いわゆる開いている場所は北向きです。谷が開いている場所です。めちゃくちゃ狭いとこ。しかもかなり深い谷です。田んぼにするっておかしくないですか。食料生産を主目的にすると考えた時に、ものすごく条件の悪いとこまで棚田にしているっていうのことが、僕はすごく不思議に映っていて。もちろんなんで棚田で作ったんだったら食料生産のためなんだろう。だけどね。何もここまで無理してやる必要が本当にあったんだろうか、なかろうかっていうようなことで、ちょっと思いながら見ていたんです。実はこの開田時期の話もちょっとかかってくるんですけども、これが1960年代の航空写真で棚田の地形がずっと残っています。当時、地元のある小学校の卒業写真を借りてきました。後に見えているんですね。ちゃんと今、これは森の中ですね。そういうことなんですけども、実は谷這いずり回って崩れた後の棚田跡を見たらですね。黄土こんなに薄いんですよ。これぐらいです。本当にこれって田んぼとして期待して作ったんだろうか。下もガラガラですよね。たまたまここをえぐられて削られたんで見えたんですね。すごく何て言うか。食料生産は農業生産だって考えたら矛盾しているように映る情報がいっぱいあったっていうなことが答えなんですね。

これで先程出ましたね1800年代の写真で見ると、ここに那智の滝がありまして、ここに鳥居があるんです。ここに土石流があったなというようなことなんですけども、実はね。この図絵、特に紀伊半島の図絵は極めて地形が正しいんです。こう写生したなっていうぐらいのが分かるぐらいなんです。実はこれ今でもあるんです。ここはずっと井関って言われるとこなんです。井関から市野々と言われる辺りに向けてこれはあるんですね。位置関係非常に正しいってことがあると、これ多分写生したなってことが想像できるんですけど、斜面地に田んぼないんです。描かれてないんです。先程航空写真では見えていましたよねっていうことは写生したんだったら見えているはずです。なのにないっていうことは、開田時期は比較的新しいかも分からないと考え

ると、新しい色川は1200年だって言ったけど、ここは実は古文書調べると那智大社に向う、いわゆる門前町で市が立つとこで、商業の町で農業生産のとこではなかったとで、農業生産の話で田んぼの交換があったとかそういう文献は出てくるんです。しかしながら、田んぼが一生懸命やられたって記録もまたないわけなんです。けれどもちょっといろんなことがあるなというようなことを思いながら。証拠分かんないよなってことなんです。ところがですね。これを見ていたんですけども、土石流ここで止まっていますよね。でも、これでとんでもない被害があったわけです。横から見るとこんな感じです。拡大するとこんな感じです。分かります。土石流はここを通ったんです。端っこ通ったんです。上越えてないんですよ。残念ながら先程のビデオは上を越えていましたね。そういう誤解があるんですよ。あの皆さんね。こういう中で観察に基づくデータを取らないと色んなこと間違っていくんです。土石流は端を通って人を何人も殺したんです。棚田は止めてくれたんですよ。一部をこれ見てはっきりと止まっていますね。落ちたのはここだけなんです。ここで広がったんです。こういうことなんですね。昔っていうのは谷っていう部で大体閉じましたよね。田越かんがいでしたよね。田越かんがいは上、互いに落とすようなことでしたから、上から押し付けても止められたんです。ところが、効率が悪いので、こういう風に変えました。水路式にそうすると、そこを土砂が滑るんです。そういう構造、つまり、昔の人の知恵っていうのは非効率だったかも分からないけども、水が少なかったこともあるんだけど、すごく理にかなっている防災上でそれを利用した例えば愛媛の西条市の取り組みなんですけども、源流部にこういう小規模な砂防ダムを作るこれ。あの上流部で木を切って、そのまんまでもう手作業であるって言っていました。安く簡単にできて、石ころ１個の土石流はもうここで食い止めちゃう。何段にも置いておくと、それで土石流は大きくなるのを防ぐことができる。一気に大きな土砂が来て発生したやつは止められない。だけれどもちっちゃなやつは止られるっていうそういうポリシーです。これは何段にも置くってことです。長大な砂防ダムを作らなくてもできますよね。これで緩和できる。防げるとまでは言えないんです。ちっちゃいですから。でも緩和できる、そういうふうな考えもあるんです。この先程勾配にペンで穴をあけてみました。同じように雨を降らしました。水入ってくんですね。穴空いていますから耕盤突き抜けて入ってくる訳なんです、上越えて来ませんよね。下から水きますよね。くぐって潜ってきますよね。となると、せっかくの耕盤に穴があいちゃうと崩れるっていう話になってくる訳なんです。なかなか崩れてくれませんね。耕盤粘度ありますからで、粘着性もあるので、上から本来は耕盤がしっかりしている上からオーバフローしてくるはずなのに、中に入ってやっぱり崩れていくっていうなことでね。あ崩れ始めました。つまり先程の絵でも分かりましたように、棚田で放棄した後に木を植えることすごく多いです。そうすると、当然穴を開けちゃうんすよ。せっかくの水が入らないっていう機能を植樹によって失ってしまうリスクがある訳なんです。こういう感じで耕盤壊れてしまっているんですね。これそうすると、災害リスクが高まる。棚田の機能がね、下がってしまう。ただし、植樹したんだったら、めちゃくちゃもっとマット上の根にするといわゆる浸透調整能っていうのが、根に働くんです。これもよく誤解があるんですけど、根っこがしっかりしていると土を抱えてくれて崩れないって言うんですけど、それは間違えてないんですけども、根っこって意外に浅いんですよ。みんなが思っているほど深くないんです。例えば、紀伊半島は雨が多いですから、大体ですね。杉の人工林中いくと根っこ大体50センチなくて30センチぐらいです。それで土砂災害を防げるわけがないです。だけれども根がびっしり生えていると、びっしり張った根は多くの雨ははね飛ばして表面流し、少ない雨は中に入れるっていうそういうのをね調整機能が働く。これが浸透調整性能っていうんです。それが働くとびっしり張ってあったら大雨の水を可能な限りで正面に排除してくれて、雨が早く止んでくれれば土の中に水が入る。入る前に雨がおさまってくれれば崩れずに済むっていうことが考えられる。つまり、根っこの力を使うとね。棚田の跡に植林をしても、びっしりと根が生えると、雨は結局表面を流れるから崩れにくくなるというようなそういうことが考えられるわけなんです。今日は、皆さんに持ってきたのは観察と実験に基づいて棚田がいかに我々にとって有益なものだということについて。そういうメカニズムっていう、理屈について皆さんにご理解いただきたくて現地調査の結果を持ってまいりました。こういうことで私の発表を終わります。ありがとうございました。

【此松氏】

中島先生ありがとうございました。はい。ちょっと休憩したいと思います。その休憩の後に皆さんにディスカッションしたいと思いますので、トイレ休憩とかしていただければと思います。4時ぐらいに再開したいと思います。あと30分しか時間ありませんけれども、こちらのパネリストの皆さんとね。色々と討論して行きたいと思うんですが。先程紀伊半島大水害の話をしていただきましたけども、実はその紀伊半島大水害を元にこの啓発センターってのが作られましたね。そういうことで、それで今色んな教訓のところで学校とか何かで防災教育のことも色々と活動をされていますのでそういう活動の話を、これからの備えにも繋がってくると思いますので、まず話していただければと思います。

【稲田氏】

はい、すいません。ちょっと駆け足でご紹介したいと思います。私ども土砂災害啓発センター、この災害の記憶をですね。後世にも伝承していくってこと非常に大事だと思っています。あと、土砂災害についての調査研究なども行っているところでございます。その取り組みを、簡単に結果でご紹介したいなと思います。啓発活動なんですけども、一般の団体さんですね。自治会さんとか自主防災組織さんとか、公共機関とか、そういったところにも研修等を行っておるんですけども、特に、小中学校を対象とした防災学習に力を入れております。というのは、子供たちって将来、その地域の防災の担い手になっていただきたい。そういう存在であります、子供達を通じてね。両親とか地域に防災意識の高まりが波及、そういったことが期待できるということで、センターとしても大変力を入れているところでございます。防災教育の目標というのを立てておりまして、まず第１段階として当面の目標ですけども、我々センターが先生方と一緒に共同して、県下の全ての小中学校で防災学習をしたいということで、今現在この段階になっています。将来的には、我々センターがお手伝いしなくても、学校の先生さんだけで防災教育ができたら一番いいなという風に思っています。で、こちら啓発センターで行っている防災学習の実施状況ですけども、コロナの始まりました、令和２年度ぐらいから数が急激に増えております。色々やり方を研究していて、それから本格的にやりだしたのがこの年ということで出前授業とかコロナ禍でしたので、なかなかセンターに来ていただけないってこともあって、リモートでやったりとか、そういったことで増えて来ております。今年度この那智勝浦町で行ないました、防災学習の事例を紹介したいと思います。まず、下里小学校というところです。ここの小学校６年生ですね。総合学習の時間で土砂災害とか海に近いところですので、地震津波についての防災学習をしております。それでその学んだ知識をもとに、地域の防災マップを作ろうということで、今、子供さん達頑張っているところです。我々土砂災害啓発センターですので、地震防災は専門が外れてくるという

ことで、国の研究所国総研というところから、地震防災の専門家さんをお呼びして助言をいただく学習をしました。今後、このできたマップを地域の皆さんにも配るということを目標に、今現在取り組んでいるところです。右側が市野々小学校、先程大きな被害のあった小学校ということで、教職員さんが主導して防災学習を進めていただいております。啓発センターも協力させていただいておるんですけども、この小学校では毎年秋の1日を防災の日と定めまして、防災学習で学んだ内容とかを地元の保護者でありますとか、地域住民に集まっていただいて、そこで子供達が発表するってこともやっているということです。そして、色川小学校でも防災学習を行ないました。色川小学校で、まず土砂災害の基本的な説明させていただいて、理科の授業で流れる水のはたらきってあります。侵食して運搬して堆積する力があるとか大地の作りですね。そういったものを土砂災害とどう関係しているのかっていうことを学習してもらう為に、実際に実験道具を通じて実験をしたり、現地をフィールドワークして実際の地層を見て回ったりとか、そんな学習をいたしました。その他の取り組みということで特徴的なものを簡単に申しますと、ギガスクール構想ということで、子供さんたち一人ひとりタブレットとかパソコンとか端末1個1個持っていますので、そういった端末を使ってですね、防災教育をできないかということで色々取り組んでいます。例えば、左側防災情報をタブレットで読み込んで表示したりとか、あと和歌山工業高等専門学校と一緒に共同開発じゃなんですけども、防災ロールプレイングゲームといって子供達がゲームをしながら楽しく防災を学べる。そんなことができないかなということで、ソフトを作ったりとか、右側ですけども、自分でハザードマップを手作りできるようなハザードマップ作成アプリっていうものを作ったりしております。これはオンラインの対応ってことで、コロナ禍ということでオンラインでも防災学習ができる。そういった実証実験なんかもしました。そして、あと最近の取り組みということで、この防災学習砂場の開発とありますけども、これ何かといいますと、例えば地図を見てその地図が立体的に、どんなような形になっているかっていうのを頭の中で想像するってなかなか大人でも難しいと思うんですが、子供だとなおさらだと思います。その地形と土砂災害非常に関係が深いので、地形を学んでもらう為にですね、子供達が慣れ親しんでいる砂場を用いて砂場の形を変えると、リアルタイムでそこに等高線が出たりとか、色分けして高いところが薄くなったり、黄色くなったりとか低いとこは青くなったりとか増えたかとか、そういったことがリアルタイムでできるシステムを開発しました。これは防災学習ですけども、やっぱりセンターと各学校でそれぞれ個別にやっていてもなかなか広まらないということで、防災教育の発展には、自治体の防災部局でありますとか、教育委員会さんと一緒に連携してやっていく、これは非常に効果的だということで、和歌山県内では日高川町というところで共同ですべての小中学校で防災教育をするという取り組み。枠組みの構築なども行いました。最後です。紀伊半島大水害から12年が経ちます。その後、生まれた子供さんたちももう中学生になるということで、その災害の記憶、そういったものを伝承していくというのはなかなか難しいものがあると思います。大規模な土砂災害を経験することっていうのは一生のうちに何度もあるもんでもないかなとは思います。それと、やはりこの和歌山県過疎地域等ではその子供たちが都会へ行ってしまうということで、世代交代とか移住などでその記憶も失われていくということで、なかなかそういうのも難しいっていうところはあるんです。けれども我々センターとしてもこの土砂災害の啓発教育を通じて、土砂災害に興味を持っていただいて、あと大事なのはただその地域にそんな危険な箇所があるよとか伝えるばかりではなくてですね。やっぱり災害が多いということは、それだけ自然が豊かで、自然が豊かっていうことはきれいな水があったりとか、食べ物が美味しかったりとか、あと川で遊べたり、歴史な文化があったりとかいうことをあわせて教えています。そういうことで地元を危険の多いんやなというので、ネガティブになってもらうんではなくて、そういうところだからこそ、普段から気をつけていざという時には避難するとか、そういった意識をね。自分事として災害を受け止めてもらうようなそういうつもりで災害啓発センターでは防災学習をしておりました。

引き続き防災教育に取り組んでまいりたいと思いますので、またよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

【此松氏】

稲田所長ありがとうございました。今、こうやって見ていただいてですね、話出ていますけども、こういう災害の経験や記憶ってのは薄れていくっていうのが当たり前というか、これが自然なんですね。ただ、それを忘れていいこととやっぱり忘れてはいけないっていうことあるのかなと思います。それがいわゆる災害の教訓とかそういうものに繋がっていくのかなと思うわけですよね。そういうことで啓発という意味では先程峯さん、鳥羽山さんのところでいろんな経験談の話をしていただきましたけども、今あったようなこういう伝えていく、備えるというところで、また皆さんと議論したいのですが、鳥羽山さんなんかどうでしょう。その地区で大変災害を経験したわけだけども、それに対していろんな訓練のことだとか。例えば孤立だとか。また停電なんていう話がありましたけども、そういうことに対してどう備えていこうとしているかお話しいただけますか。

【鳥羽山氏】

僕は那智勝浦町の自主防災組織の色川地区の担当をさせてもらっているんですけど、那智勝浦町としては自主防災組織として、例えば非常食だとか発電機だとかを買った場合は75%程度の補助が出るので、各地区でそれを備えていくように毎年少しずつ購入していっています。それと別に最も恐れているのがやっぱり地震。水害はある程度予測できるかもしれないんですけど、地震と津波は予測できないので、もし本当に津波が来た時は長期の停電とか食料がないっていうことが想定されるので、それに対する備えは日常的にやっています。ただ、みんなねお米作っていたりだとかをするのと、色川の人達って基本的に買い物に行くことがあまりないので、スーパーまで40分ぐらいかかるんでわりと買いだめしているので、そこら辺の食料を分け合ったりすることと、最も大事な共助っていうのは常日頃から培われていると思うんで。そもそもみんな農業だったり、林業だったりしている人達も一人で誰とも関わらず生きている人はいないので、色川の人達こそそういう時は共助が最も頼りになるので、それが最大の備えかなとは思っています。

【此松氏】

なるほど。だからそういう意味ではむしろ都会より意外と色川の方が孤立しても、わりと耐久性がある。

【鳥羽山氏】

自信あります。孤立するなんてことはわかっているんで。それと12年前の災害の時もそうだったんですけど、下の方が大変だろうっていうことはわかっているんで。行政だとかにあんまり頼る気がなくて、自分達でしばらくはどうにかっていう覚悟は大体の人が持っています。それと地震に対して消防団として最近買ってもらったのが、家屋の倒壊を少し懸念していて、それのために大きめのエアージャッキだとかっていうのをこないだ買ってもらいました。そういうので、どうせ上がってきてもらえないと思うので消防だとかレスキューだとかっていう人達には。自分達で何とかできるようにそれは購入しました。

【此松氏】
はい峯さんの方からも。
【峯氏】
色川地区では、南海地震が来たとしても、前回の水害の時で孤立は前提として色々考えていますので、だから食料にしてもそこそこ各家庭で備蓄はあるんですけども。ただ、その災害の起こった1日目ぐらいはとりあえず動き取れない状況の中で避難所に1日2日分あれば態勢を整える余裕ができるんじゃないかなっていう程度の各集落で食料と水ですね。水も山水を使っていますので、地震来た場合、水害でも当面はその水が濁るだろうということで、やはり1日2日分ぐらいの水も入るんじゃないかって考えて各集落で備えています。
【此松氏】
うんわかりました。例えば、発電機なんかはお持ちなんですかね。
【鳥羽山氏】
ガソリンが手に入らなくなることも十分想定しているんで、ガソリンで発電できるやつとソーラーで発電できるやつとプロパンガスで発電できるやつとうち地区は3種類。リスク分散する為に分けています。
【此松氏】
はい素晴らしい、いいですね。そういう多様化するっていうことはとても大事だなと思います。
【鳥羽山氏】
それと12年前の時もそうだったんですけど、どうしても電気が必要だった人が酸素呼吸器使っている人が集落にいまして、その人のところに発電機を優先的に持っていくっていうことは、今でも頭の中に入れています。
【此松氏】
なるほど。だからそういう意味では、いわゆる要配慮者っていいますけども、そういう方が自主防災組織としては、どこにどういう人がいるかっていうのは、大体把握されているという感じなんですかね。あとこういう備えの状況が分かってきたんですが、あとはそういう備えるというところで、いろんな訓練とかあるかと思うんですが、いわゆる防災訓練的なことはあるんでしょうか。プログラムとかのは。
【鳥羽山氏】
大掛かりではないんですけど、色川には現状5地区ぐらいの集落があってか、その各区長さんが町から支給されたトランシーバーを持っているんですけど、それの通信訓練は年に一回程度します。どこからどこまでその電波が飛ぶのかだとかっていうことの確認はしています。
【此松氏】
その地域で地区で、いわゆる避難所とか、そういうところに行く訓練なんかもされて。
【鳥羽山氏】
それはないです。現状の大雨でも、避難所に避難する人より安全な知人の所に避難される人達の方が多くて、今年のお盆の頃に来た。台風でも学校が避難所として開けてくれてはいるんですけど、誰も行かなくて、その隣にある家にみんな集まっていましたね。
【此松氏】
必ずしも避難所へ行かないといけないっていうわけではなくて、やっぱり今はね。そういう知人の宅というのもありますよね。はい、ありがとうございます。またそういう中で防災のその棚田っていうのが先程中島先生なんかでもやっぱりいろんな防災での機能はあるんじゃないかっていう話なんかありましたけども、棚田やられている方からするとある意味。とても元気になるような大事だなというの位置づけされたのではないかなと思うんですが、そういう中でどうだろう。中島先生。
【中島氏】
此松さん防災の専門だから棚田からすぐに防災の方に離れてしまって聞いている人はねものすごくご不満がフラストレーションがたまっておいでかと思うんですけど、こういうふうに聞いてください。棚田をお持ちの地域はですね、この色川であったりとかですね。そういうところと同じように、災害の時に孤立する可能性がある集落だっていう風に位置づけてですね、そういう意味で災害の多発地域の情報がですね。皆さんがお住まいのその棚田地域の集落に参考になる情報だっていうふうに位置づけていただければ、御不満も随分解消されるのではないかという風に思いますが、ということなんです。実はですね。棚田のあるような、山村地域には、エネルギー備蓄しておくっていうことですね、先ほど色川でも持っているよというような話があったみたいに、これもとても重要なポイントですけれども、もっと大事なことは普段から使っているといいんですね。というのは使ってない道具って忘れるんですよ。どうやってこれ電気を起こすんやったっけってことが。それを訓練でっていうようなことはそうなんだけど、日常から使っているとなおよくてそういうことからすると、例えば、小さな水力発電であるとか、太陽光であるとか、そういったものですね、上手に自分たちの生活に組み入れる。そうすることによってですね、棚田をやっているような素晴らしいエリアが自然のエネルギーで運営しているとなるとですね、さらに価値が上がるわけですね。都会の人から見たらすごいと。棚田はあるけれども、あとの生活は全部現代社会の生活だって言うとですね、何かちょっと説得力を欠く、そういうことからすると、格好いい自然エネルギーとかそういうことを組合わせてやるとですね、自分たちも技術が蓄積されるし、周りから見たときには説得力は格段に上がるかつ、いざという時に使えるっていうのは1石5鳥ぐらいのことがあるので、なるべく自給するというプロセスっていうのは、棚田があるってことはいろいろできる要素があるわけですので、そんなふうに考えていただくといいのかなということは常々思っています。今日も午前中の分科会で棚田を全部復活するってことは到底無理な話であると、いろんな社会要素があって困難であるって、皆さんやっておいででもう痛いほど感じておいでだと思うんですけども、その中で実は棚田があることによって、他の人ができない有利な点もまたあるわけで、それを上手に使われることがみんなのモチベーションにもつながるし、かつ強い棚田ができていくようなことにもつながっていくのかなと。もう色川なんかでも、主力のメンバーがどんどん減っていくっていうのはすごく問題ですよね。
【峯氏】
うちの集落でも停電は必ずするだろうということで、ポータブル電源、10万前後のやつを町の補助を受けて備えているんですけども、それで常時100%近い充電状態には100ボルトのところで採取するんですけども、いざ停電になった時、あの程度の機械がどの程度実用的な効果があるのかなと。
【中島氏】
スマホ充電するぐらいだと1週間ぐらいもちますけど、違うものに使っているとあっという間になくなります。
【峯氏】
スマホ1台を。
【中島氏】
あれぐらいあればスマホ10台ぐらいはだいぶもちます
【峯氏】
ただ一応、ポータブル太陽光のパネルも付いているんですけども、どの程度の天気が良くて充電できるのかなっていう不安も持っている

んですけどね。
【中島氏】
僕も持っていますけど8時間充電してフル充電ぐらいですね。
【此松氏】
はいありがとうございます。うまくエネルギーの話までしていただきまして、ありがとうございますで。最近は集落って言うかな。そういうところでEVって言うかな。いわゆる電気自動車またハイブリッド車なんかで、バッテリーをためるなんていう方もいたりしますよね。はい、時間もだんだん近付いてきたので、皆さんの中で今までのパネリストの皆さんももし質問とか、これはちょっと聞いてみたいなっていうことがもしありましたら。
【質問者1】
中島さんにぜひ伺いたいんですけどね。その被災者の家族から聞かれたということで。谷底の田んぼは捨ててもええがどこそこは守り続けると言われたそのどこそこが聞き取れなくて。
【中島氏】
あのいわゆるですね。あの那智谷でいきましたら、その支流に当たる。細い谷にですね。点々とある小さな田んぼは作り続けろって言われたとで、それは大変なことなので、あの本人にやめてしまったと、そのバチが当たったのかなとようなことを言われて、最初は違うかなと思ったけど、どうもそうやなと思ったら爺ちゃんすげえと思った訳です。
【質問者1】
はいわかりました。後、もう一つ。凄い山の上の北向きの斜面で、狭いとこに棚田が昔あったということですけども。私は熊本県水俣市のSといいますが、うちの辺でもそういうのありますが、1カ所だけですけどね。地元爺ちゃんに聞いたところ、昭和20年に戦争に負けた後、人が増えて、その頃は人手もあったし、食料も不足していたからその頃作ったという話は聞きました。
何かその頃だったら。捨てられてもしょうがないかなと思ったんですけど、いつごろ作ったとかまで分かりますかね。
【中島氏】
開田時期凄く調べたんです。分かんないです。あのエリアがですね。実は那智の滝がありますので、いわゆる門前町でそれは農業生産を中心にできていなかった町だっていうことはずっと古文書に書いてあってただ谷底に田んぼがあったことは分かっていて、その土地の売買に対する記録はですね。どこどこの誰々の田んぼを何丁買ったとか、そんなような話の記録が残っているんですけども、その明確な位置が分からないので本当ね。支川にある小さな田んぼの開田時期っていうのがわかれてないんです。一応、航空写真で遡ると、あの戦後にはあった。戦後直後に多分あったかなっていうような感じで、その前の状態がちょっと分かんないです。はい申し訳ないです。
【此松氏】
はいじゃもう一つ。
【質問者2】
中島先生にご質問なんですけどね稲田センター長さんにも質問なんですけど、田んぼに水溜めますよね。その時にですね、今溜まっている水の水位より１０センチぐらい田んぼに余裕をもたせようと、その為には排水のところ１０センチほど高いあぜシートをやったら、わずか10センチで棚田だとかなりの貯水量を田んぼが保つから防災に役立つ。それは全国的な傾向が学者というか、先生方には一致した認識があるわけですか。
【中島氏】
数字はまちまちですけども、その方向で考え方一致です。今私達がすごく心配しているのが、きょう午前中の基調講演の方では外山麻子さんの方からでもあんだけ水抜けてくのにダム本当に水ためかいっていうようなこともありましたけども、10センチって100ミリなんですよ。累計になりますけども、その中身を一時的に貯留してくれるってことは、やはり下流に対するダメージはちっちゃいと。ただ田んぼに対するダメージがあるかないかって言ったら、あんまりたくさん溜めると畦弱りますから、その辺の兼ね合いってのがあるんですけども、逆にですね。今、都市部では田んぼがどんどん埋められていて、都市の貯水機能がすごく下がっていて、田んぼを見直そうっていうようなことの動きは確かにあります。そういうことですので頑張って田んぼ残そうぜっていうなことは、日本の防災のためにもすごく必要なプロセスだと思いますので、棚田は上流部で守り、平地は平地の田んぼで守りっていうなことを国土全体でやることはすごく大事かなっていうふうに思っていますし、そういうふうに考えている研究者は圧倒的に多いです。
【質問者2】
それともう1点ですね。中島先生言われましたね。ちょうど横にご質問されたのだとも言われたんですけど、実は2018年に、宇和島の方でみかん山が崩落したんです。その時に、ある地域はみかん山の上のところは木は残せと、やっぱり崩落したとこは、残さずに山全体もう頂上までみかんの木を植えとったんです。
【中島氏】
なるほど。実はですね。紀伊半島には、和歌山県ではないんですけど、三重県の方に大きな林業屋さんがあります。大きな林業さんは何100年という歴史の中でやっておいてですから、ちゃんと決まりがあるんです。山のてっぺん使うことはまかりならんと。山の下を使うこともまかりならんていう。使っていいのは真ん中だけで、これちゃんと科学的に理論があるんです。上に降った雨がいきなり下に滑り落ちることがあっては、下がダメージを受けますから山のてっぺんはそうやって雨の緩衝帯として残さなければいけない。特に降水量が紀伊半島めちゃくちゃ多いんですね。下は上からもし何か落ち着いたときに止める防御として置いておかなきゃいけないんです。例えば、私の友人たちが調べたことで言うと、土石流が降ってきたとする、その時にで、直径30センチの杉木ならば、大体止めると言うんです。それより細いとやられちゃいます。となると大きな木をしっかりと下流に置いておく。それはあのスギ林ってのはまっすぐですから間すり抜けちゃうんですけど、自然林だと複雑ですから、どっかで引っかかってで全部は止まらないけど、一部は残るっていうようなそういうルールがあるんです。和歌山って大きな林業屋さんいないんです。そうすると、ある林業屋さんは山のてっぺんまで使っちゃうんです。そのようなことがですね。やっぱりその経験と、その伝承っていうことについて今日のテーマ伝承っていうことは重要なんですけども、昔からこれは良かったよっていうような技術はやはり伝承していった方が絶対いいっていうことはですね。今、おっしゃられた話でみかん山でもそうなんだみんな一緒なんだというようなことで、棚田が伝わっている伝承もこれは後世に残していくことが、我々が安全に暮らす上で重要なポイントでないかということを逆に教わりました。ありがとうございます。
【質問者2】
どうもありがとうございました。
【此松氏】
最後になりますが、色々と今までの話を聞いてですね。この棚田っていうのは、皆さん一生懸命作られて保持されているかと思うんですが、そういう防災としての機能は本当にありそうだなというのは分かります。そういうのは是非残していってほしいです。また、峯さん、鳥羽山さん達にはやっぱりこういう災害だって、だからどういう災害が

棚田周辺で起きる可能性があるのかそれをどれだけイメージして災害時こうなるだろうなっていうイメージをどれだけ考えられるかどうかっていうのが身を守ることになるかと思います。事前に棚田の機能も、防災の機能も知りつつ、また自分達はそういう場所、いわゆる土石流や地すべりの上にで住んでいる、その上で耕作をされているっていう意識をしていただいて。僕も調査で東日本に行った時、自分達が土石流の上に住んでいるってのは全然意識してなかったという人もそれなりにいました。だけど、もし知ってれば、こういうリスクがあるよねということにも繋がって、意識していただくことになるかなと思います。一番の防災っていうのはやっぱりリスクを知って自分の住んでいるとこはどういう風にしてできているのか。また、それに対してどう備えていくの行こうかということをどれだけ描けるか、想像できるかっていうところで、身を守ることができるのかなと思います。だから、それがまさに承継と継承なのかなという風に繋がっていきます。それで終わりたいと思います。多少無理矢理だったかもしれませんけども。また私の不手際でちょっと時間が超過してしまったところは大変すいません。お許しいただければと思います。それでこちらの第3分科会。災害教訓の承継と継承ですが、これで終わりたいと思います。どうも皆さん長い時間ですが、お疲れ様でした。

和歌山県PRキャラクター「きいちゃん」

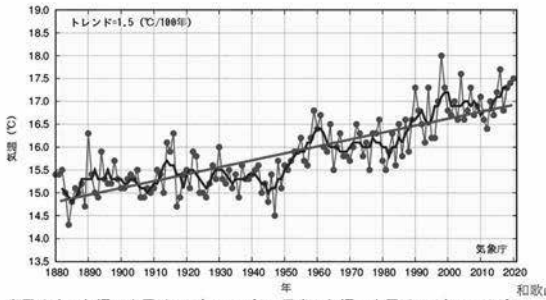
第３分科会

災害教訓の承継と継承

趣旨説明

和歌山大学
此松昌彦

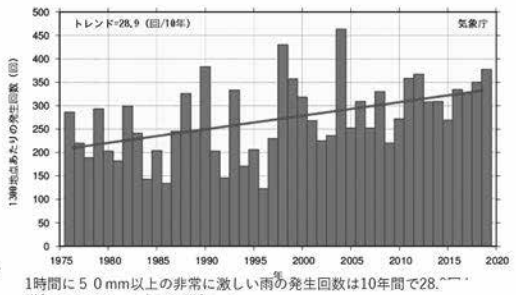
和歌山市の年平均気温（1880～2020）



和歌山地方気象台より

和歌山市の気温の上昇は100年で1.5℃、日本の気温の上昇は100年で1.26℃。
日本より和歌山市の気温の上昇が大きいのは、都市化の影響が考えられる。

全国アメダス１時間降水量50mm以上の発生回数（1976～2019）



和歌山地方気象台

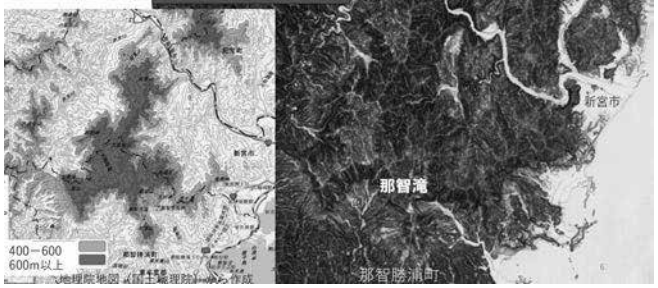
1時間に５０mm以上の非常に激しい雨の発生回数は10年間で28.[illegible]
増加している。→大雨の増加

2011年9月4日に土石流が発生し、多くの被害

災害記録誌　那智勝浦町　2014年

和歌山県南東部の地形（陰陽図）

調査地域の陰陽図（５m、10m DEM使用）と各地域の調査位置図



地理院地図「陰影起伏」から作成

那智周辺の陰陽図（１m DEM）と棚田地形の分布　　此松　作成

１mDEMを使用

此松・秋山（2020）に崩壊、棚田地形に区分
火成岩体の山裾に棚田地形が多い

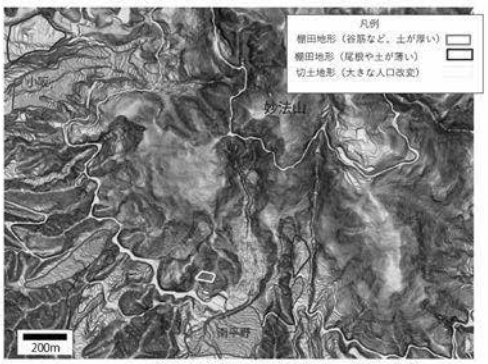


図２　那智勝浦町の小阪、妙法山地域の陰陽図　　此松　作成

《資料：第３分科会／此松 昌彦氏》

なだらかな棚田地形にはイネ
土石流跡地

山斜面に棚田状地形に植林
尾根・切土の棚田状地形

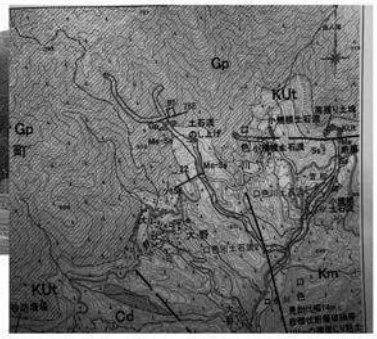
急な斜面の棚田には茶畑
急な土石流跡地や尾根・切土の棚田

撮影：此松

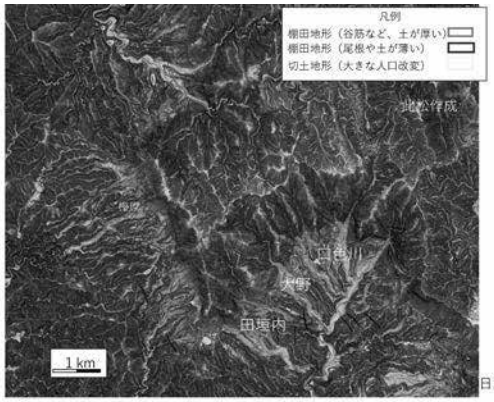
災害記録誌　那智勝浦町　2014年

江戸時代の那智谷　　江戸時代は棚田になっていました　　熊野名所図会

撮影：此松



災害記録誌　那智勝浦町　2014年



日本地質学会で発表

大雲取山周辺山体の南西部の陰陽図（１m DEM)と棚田地形分布

イネを作っている棚田は自然の土石流礫が多い。

家屋のある近くの棚田の石は、人工的に加工した石積みが多い。

家屋は丘陵部や棚田の脇に多く存在する。

土石流で流れてきた流紋岩（花崗斑岩）の円礫の上に棚田が形成されている

《資料：第３分科会／此松 昌彦氏》

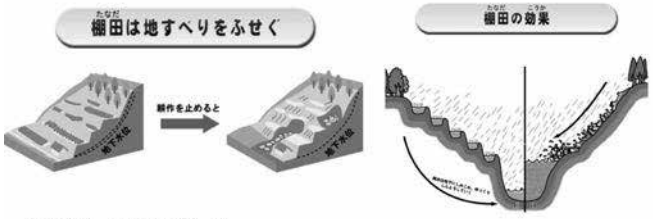
熊本地震による土砂災害

- 西日本新聞
- 2020.4.14

2016年の本震直後、大量の土砂に覆われた南阿蘇村乙ケ瀬地区の棚田（県提供）

https://www.nishinippon.co.jp/item/n/600261/

棚田は地すべりや土石流などの崩積土の上に作られている。



国土交通省　川のちえぶくろ　より

https://www.cgr.mlit.go.jp/ootagawa/chiebukuro/

承継と継承

承継　先代から「地位や精神、身分、仕事、事業」を受け継ぐ

先代が守ってきた形のない抽象的なもの・精神的な意味をもつものを受け継ぐ意味合いが強い

継承　先代から「義務や財産、権利」を受け継ぐ

先代や先任者が所有していた形あるもの・具体的なものを受け継ぐ意味合いが強い

災害における棚田の意味

防災機能がある？

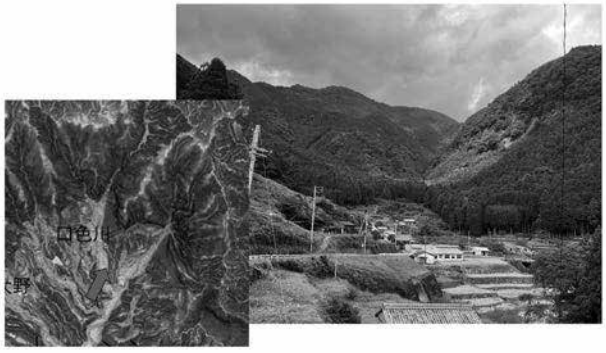
ダムの役割・土砂災害防止

住んでいる場所の成因を意識する。
災害をイメージして伝達する。
道路寸断による孤立化

棚田ならではの防災訓練

孤立化

- 孤立対策
- ガスや太陽光による発電機
- 南海トラフ地震での市街地の支援
- 老老介護
- 見守り　　一人暮らしの世帯



丸い土石流の礫はどこから？

熊野酸性岩の流紋岩（花崗斑岩）は
風化して、コアストーンになっている。

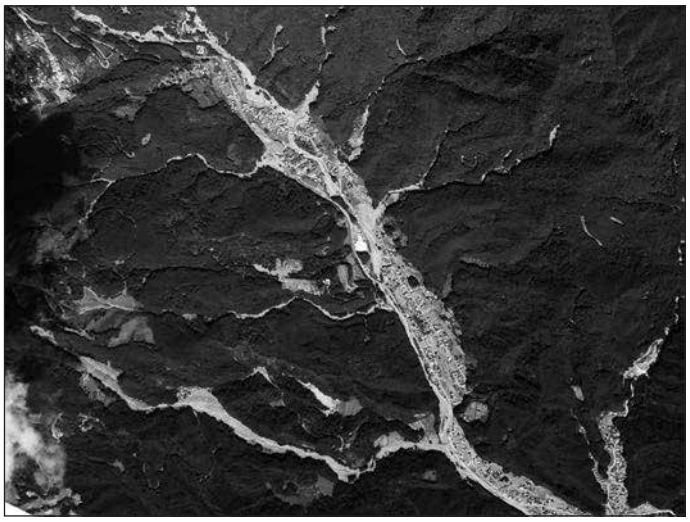
コアストーンが大雨で流れて土石流につながる。川に多くの転石

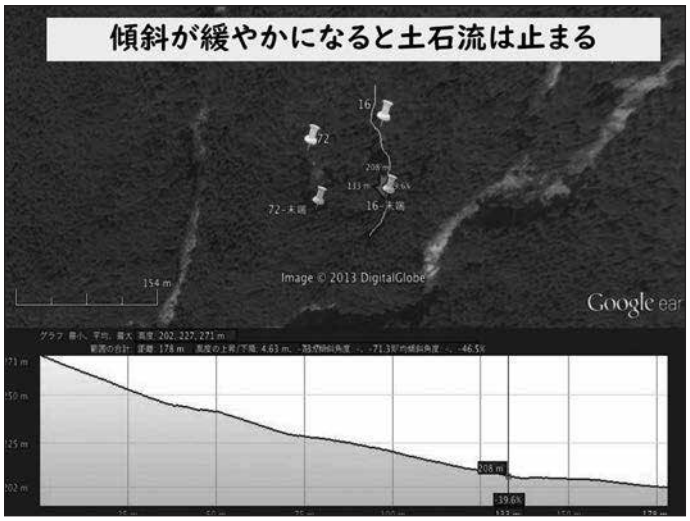
2011年9月4日　紀伊半島大水害が発生

那智川での土石流

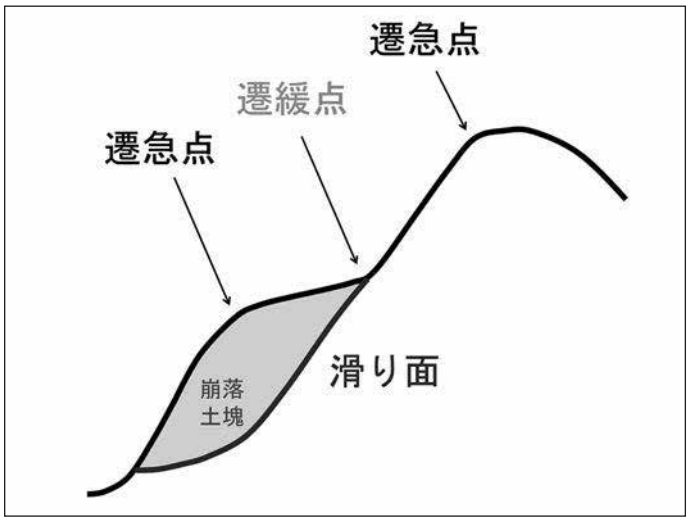
23

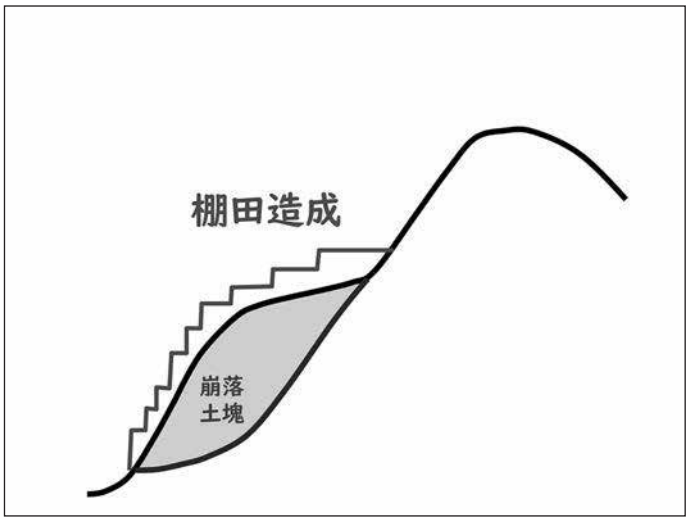
《資料：第３分科会／中島　敦司氏》

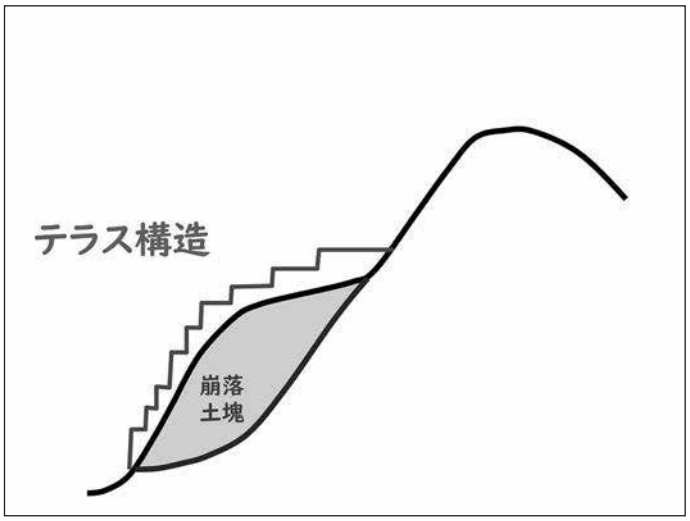


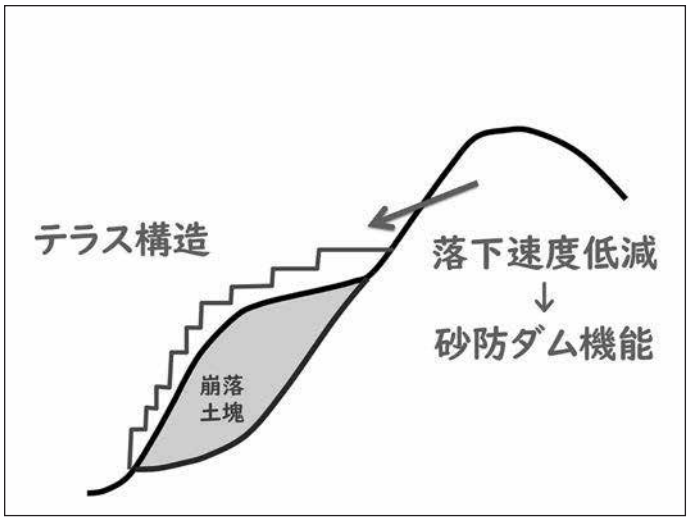


《資料：第３分科会／中島　敦司氏》

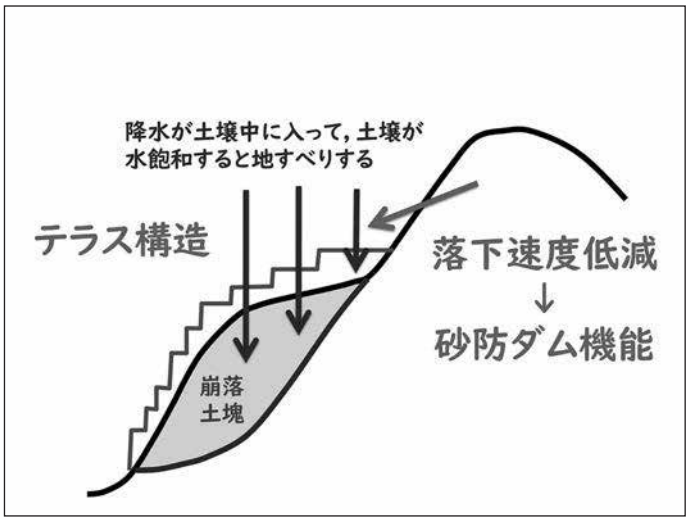


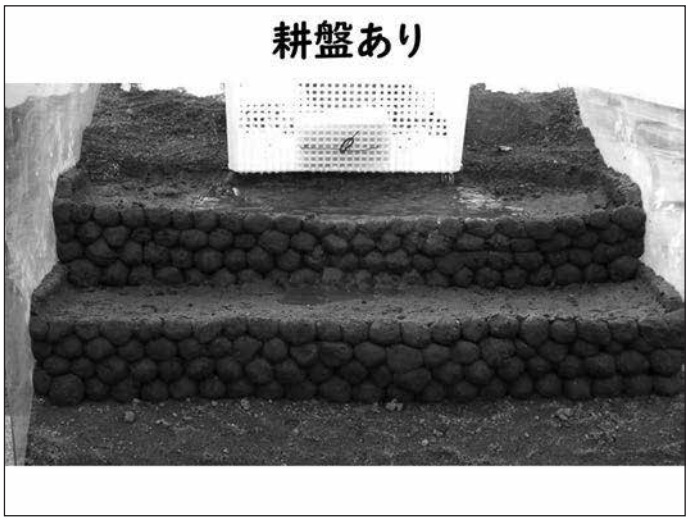


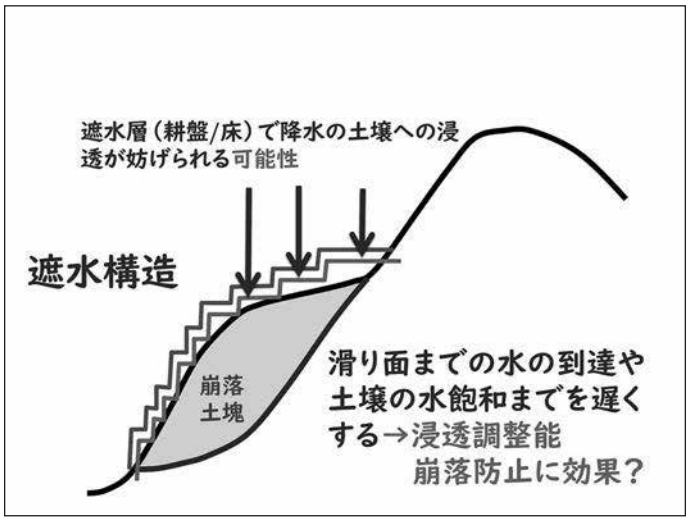




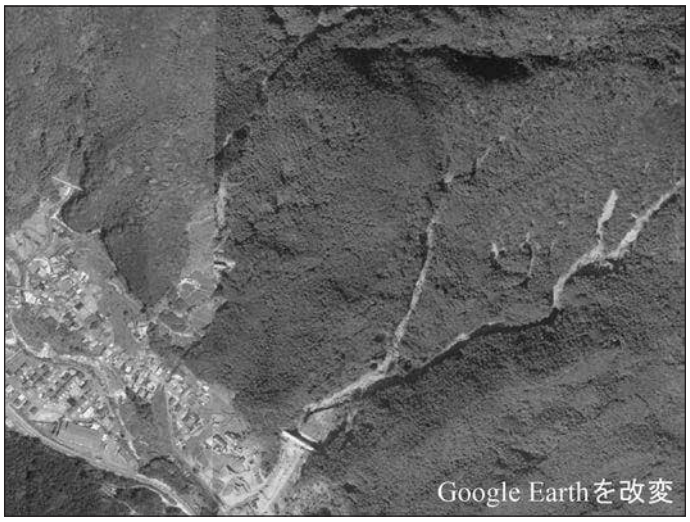
《資料：第３分科会／中島　敦司氏》

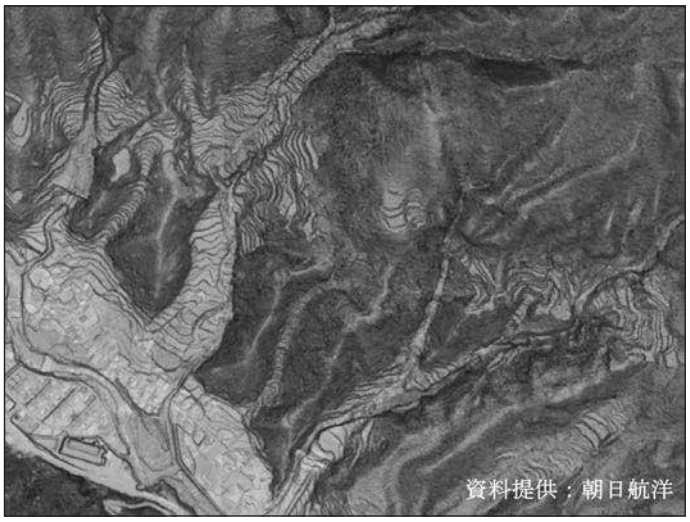


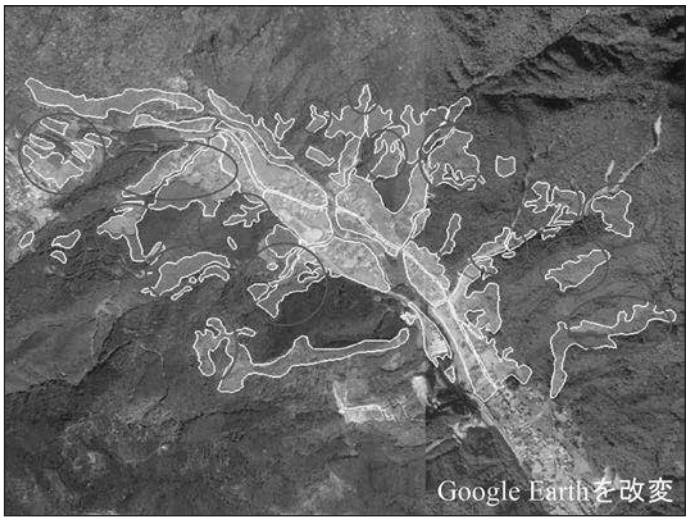


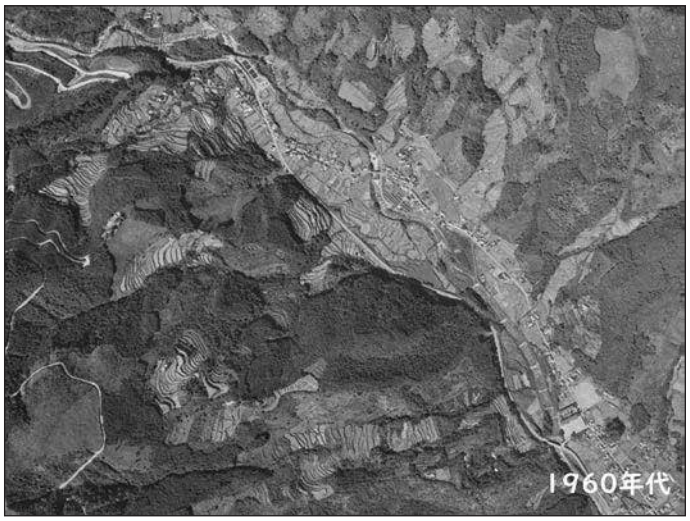


《資料：第３分科会／中島　敦司氏》

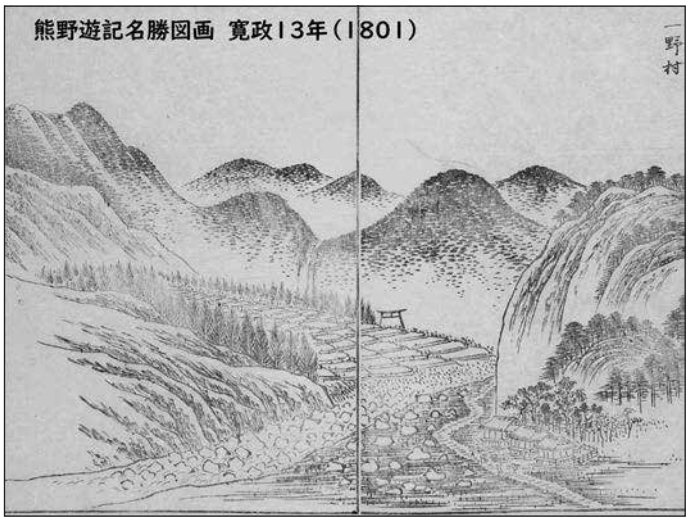


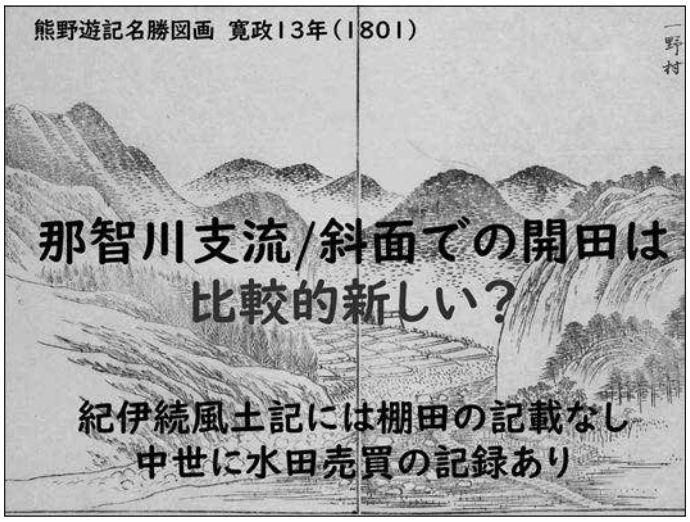


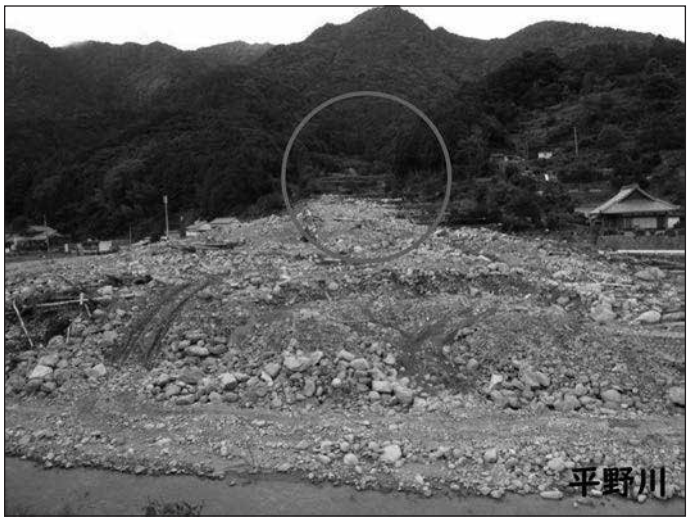


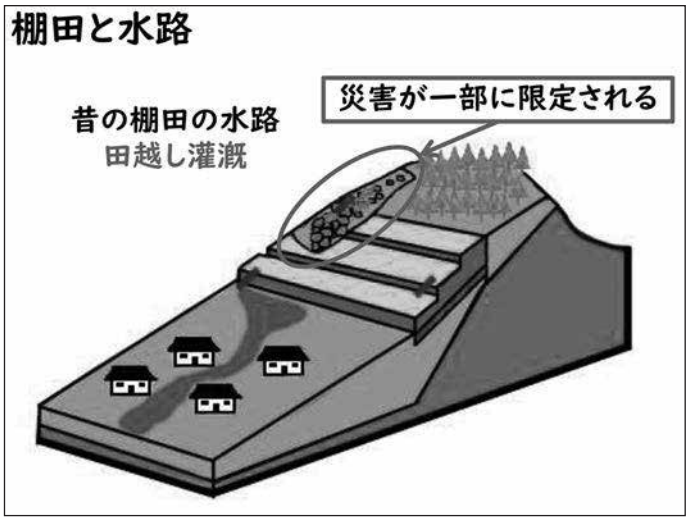


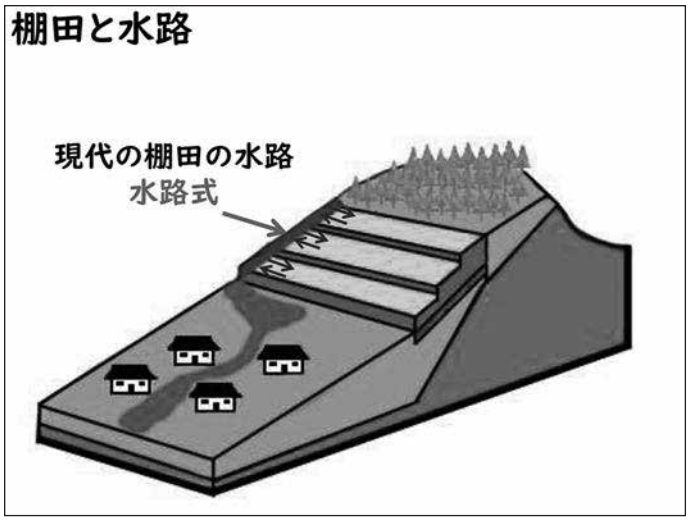
《資料：第３分科会／中島　敦司氏》





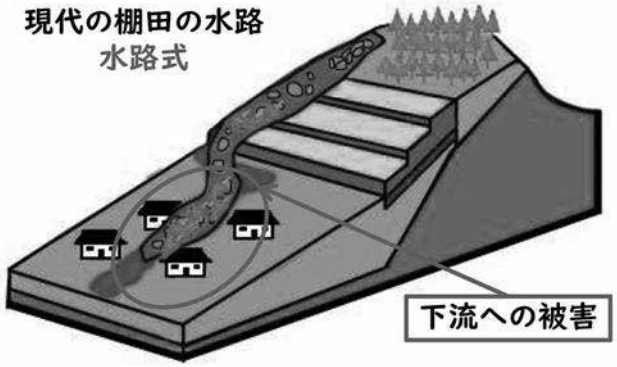


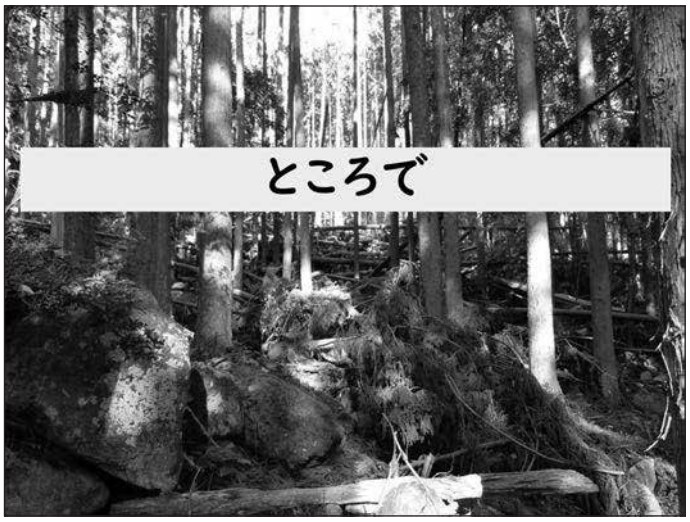




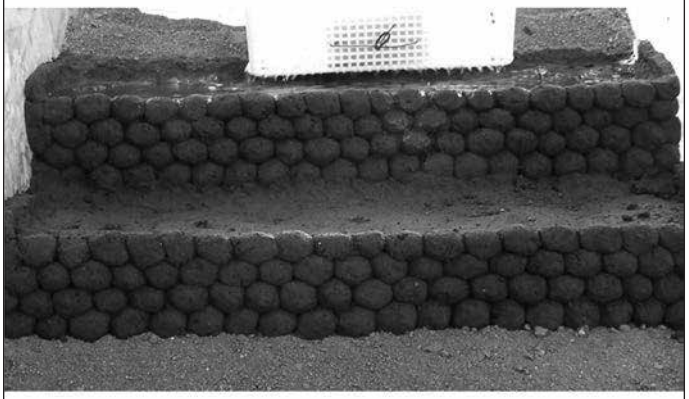
《資料：第３分科会／中島　敦司氏》

棚田と水路

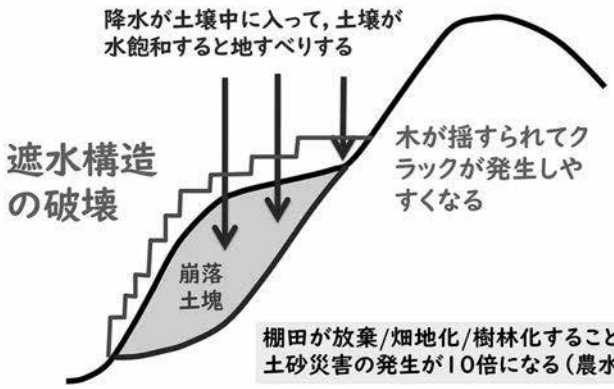




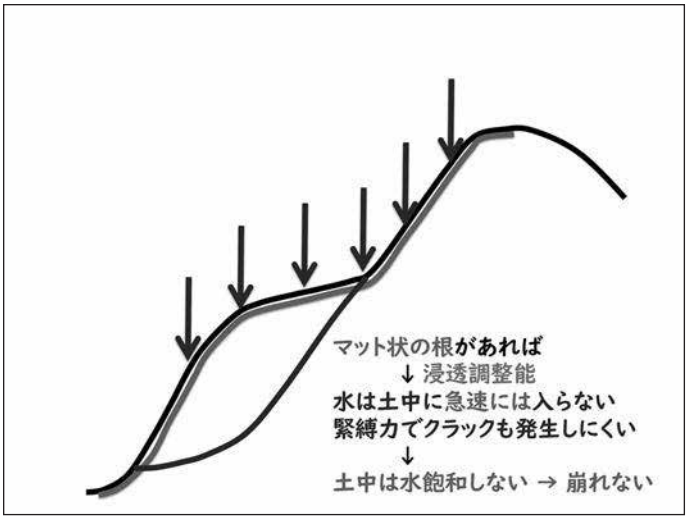
耕盤＋穴あり



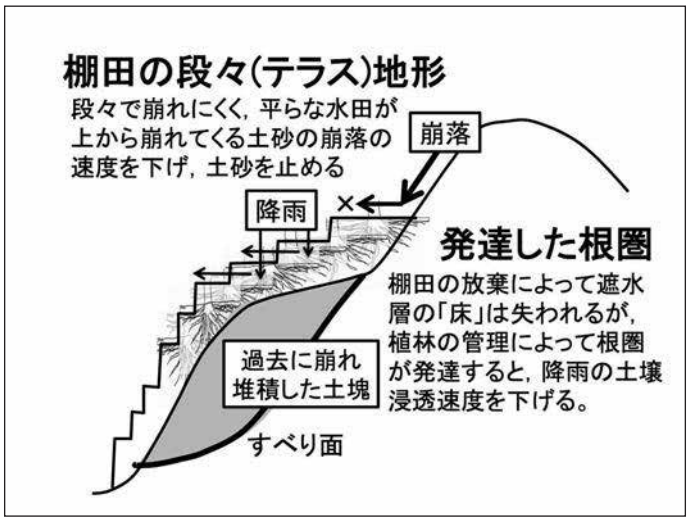
棚田の放棄や植樹が進むと・・



棚田が放棄/畑地化/樹林化することで
土砂災害の発生が10倍になる（農水）

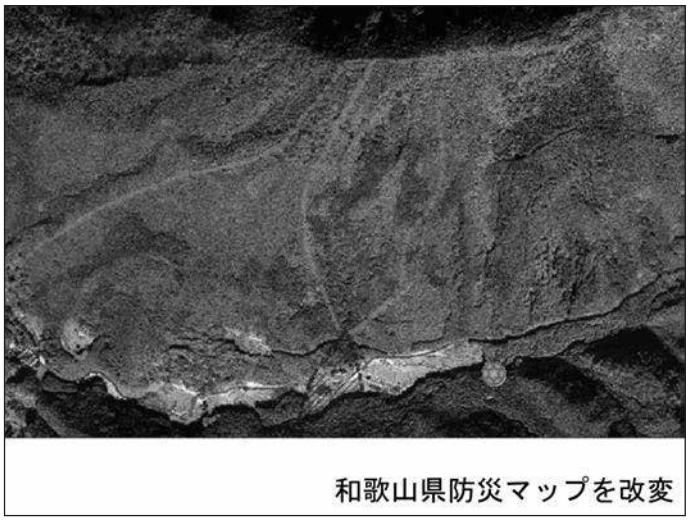


《資料：第３分科会／中島　敦司氏》



和歌山県防災マップを改変

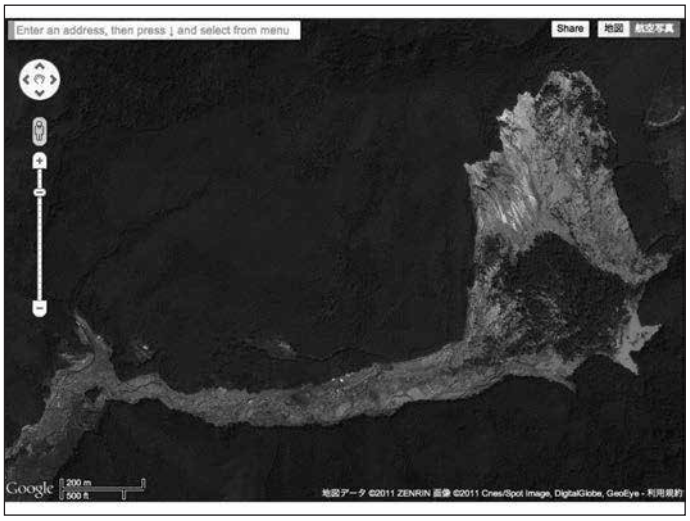
和歌山県防災マップを改変

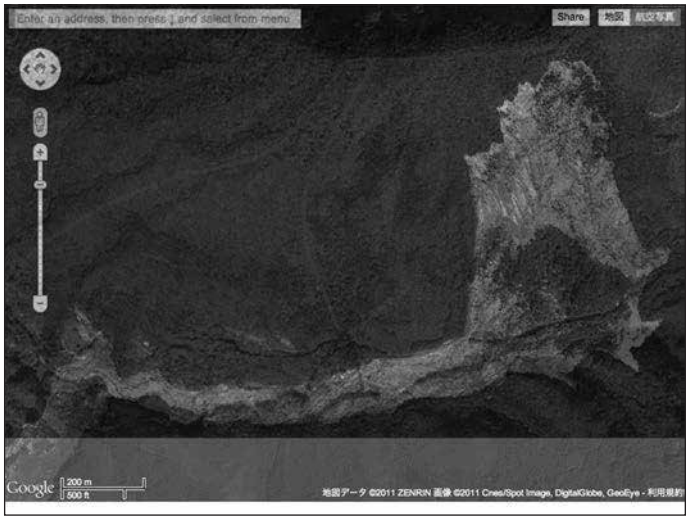


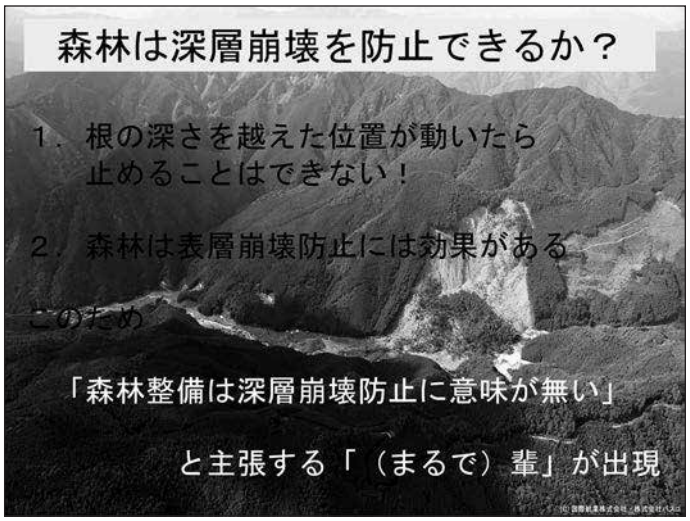
和歌山県防災マップを改変

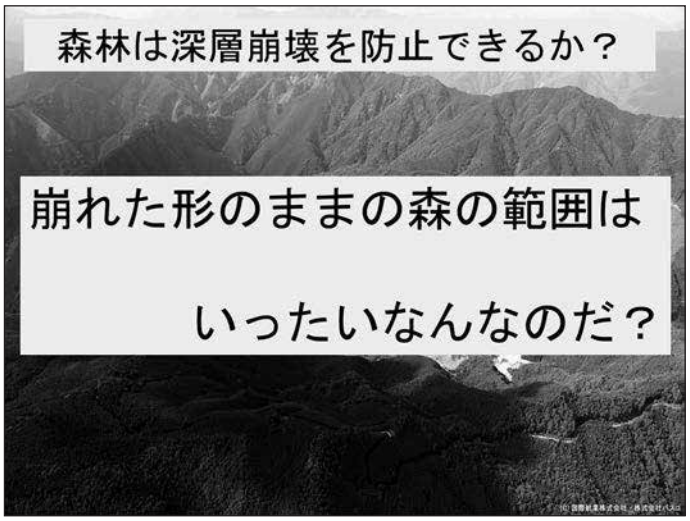
和歌山県防災マップを改変

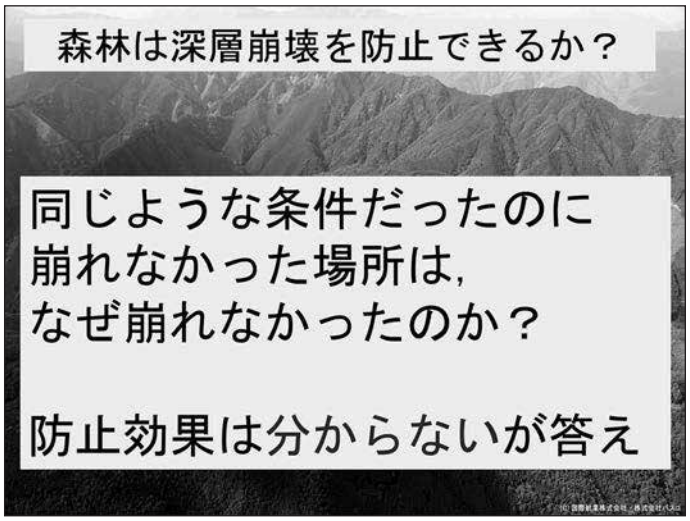
《資料：第３分科会／中島　敦司氏》

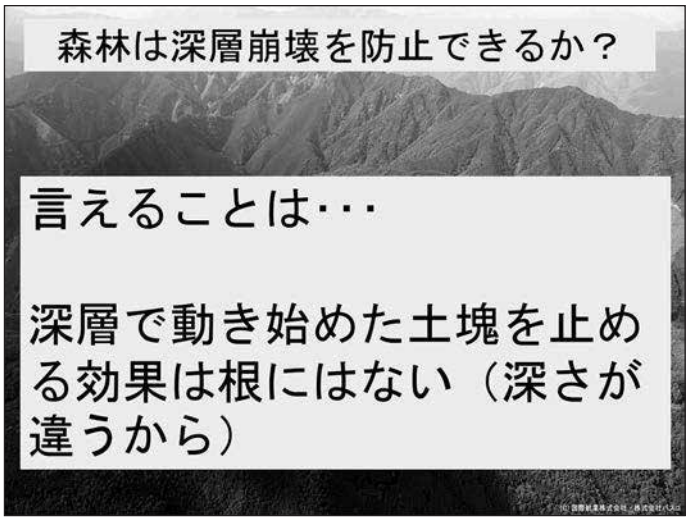


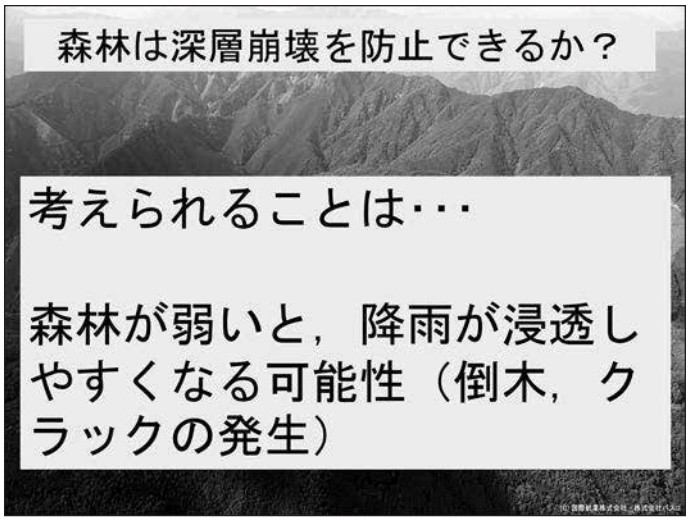




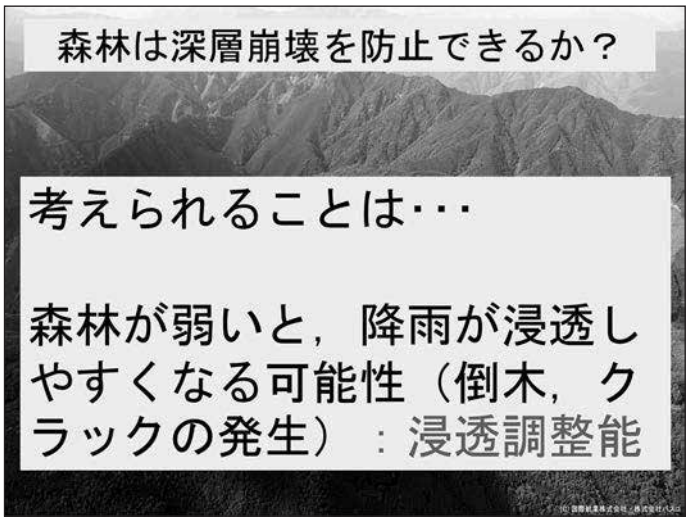


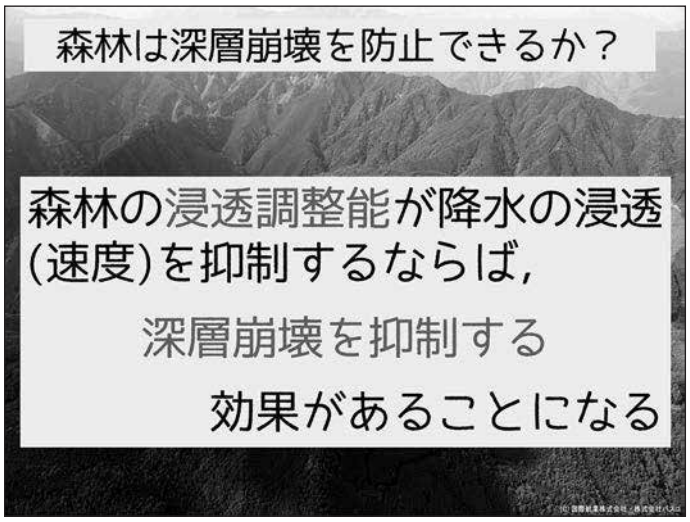






《資料：第３分科会／中島　敦司氏》





和歌山県PRキャラクター「きいちゃん」

特別分科会 地域振興下の棚田保全

コーディネーター 中島 峰広 氏 早稲田大学名誉教授・棚田ネットワーク名誉代表

【中島氏】
十日町市の地域おこし協力隊、そして鴨川市は大山千枚田がすぐ名前が出てきます。もう一つ忘れちゃいけないのが、ここの川代の棚田。私ども棚田ネットワークと深い付き合いがあります。ここの集落は、実に農家の方たちがたくさん集まってくるんですよ。今時こんなとこはあるのかなと思うぐらいに盛んなところですから、そんな様子をお話していただいて、そして農水省からお二方、課長と課長補佐さんが来ておりますので、農水省の方からのアナウンスをしてもらって、そして皆さん方といわゆる棚田を、これからどうしようかというような話し合いをやってまいりたいと思います。まあ、そう堅苦しくならずに、みんな和気あいあいと、みんな棚田を守る「守り人」みたいだと思ってですね。一つお話をしてくだされば、結構だと思います。それでは松本さん始めますか。

【松本氏】
皆さんこんにちは。松本と申します。中島先生からのお願いもいただきまして、今日こうして話させていただきます。私の資料は、紙の形で皆様方の中に配ってあります。多分ここは遠くてスクリーンが見にくいところもあろうかと思いますので、それぞれお手元にこの棚田地域振興法を活用した棚田保全というスライド2つが一つになった紙を役場の方で用意してくださっています。ぜひ、そちらも見ながら話を聞いていただければありがたいです。棚田地域振興法って、令和元年にできたんですけども、これは衆議院も参議院も全会一致で可決成立しておりますので、これは誰も反対する人がいなかったという法律でございます。この法律の仕組みが幾つかあるんですけど、そこをまずサラっとおさらいしたいと思います。まず対象とする棚田を決めなきゃいけないんですけども、棚田を守るためには、やはり農業だけじゃなかなか地域で棚田を守る地域振興をやらなきゃいけないんだろうということで区域を99市町村といいますけども、昭和の大合併の前、ちょうど昭和25年の当時の99市町村の範囲。これを一つの単位として20分の1以上の勾配の棚田が1ヘクタール以上あったら、この棚田地域としていいよと、県が申請をして国が指定をするという流れでございます。また後で言いますけれども、都道府県が申請しないときは、実際に棚田を守る活動していらっしゃる皆さんが県に対してちゃんと申請して提案をできる仕組みをつくってございます。実際、もう皆さん活動されているわけですけども、法律でこういうふうに仕組みをいたしますと誰かこう協議会という形で、既存の協議会の看板を書いても構いませんけれども、協議会というのをつくっていただいて、協議会が何をするかというと、棚田の振興の活動計画をつくってもらうと。この活動計画っていうのがまた後で役割を果たすんですけども、とりあえず農業者の方だけじゃなくて、地域住民とか、あるいはその棚田のNPOとか、地域おこし協力隊とか、あるいは大学の先生とか、いろんな人が入ってこの話し合う場をつくりましょう。これは後で話しますけど、都道府県も協議会のメンバーになれるというふうに法律上、そういうふうにしています。この法律上、都道府県も協議会のメンバーになれるようにしたっていうのは理由がありまして、都道府県に棚田基金というのがあります。この棚田基金が委託じゃないと使えないんですけど、これは都道府県自身がメンバーになることで、もっともっと棚田基金が使えるんじゃないか。今最近ニュースで河野大臣が基金を見直すぞと。これまでにも何回もあったんですけど、もう長くたっている基金でもう役割を終えたんじゃないかということで、もう国にお金を返せっていうことになる瀬戸際でございまして、ぜひぜひ後でもいいますけど、この棚田基金というのはですね。全然使ってもらいたいと思っております。次のページをお願いします。協議会ができましたら、さっき言った活動計画というのをつくっていただくわけです。ステップ3と書いています。協議会で話し合って計画を。計画ばかりで大変だよっておっしゃる場合もあるんですけども、ここの計画をつくって国が認定する。何で国が認定するのかというのがありまして、それは棚田を守るためのいろんな事業を関係省庁いろんな役所が用意しているんですけど、国がちゃんと計画を認定するという手続を最初にとっておくことで、補助金を使いたいなというときに、もう知らないとは言わせないということでございます。なので、こういうのも使いたいなというときにはこの活動計画の中に入れて、市町村と一緒になって計画の中に入れていくのは少し意味があるということでございます。それから、この中に実際にどんなこと書くかっていろんなことがあるんですけど、中山間直接支払、もう利用されている方も多いと思われますが、棚田地域振興活動加算、棚田の加算があります。たまった1万円を加算します。これもこの活動計画に書いておいていただくことが前提条件になっておりますのでよろしくお願いいたします。その他、いろんな役所がいろんな支援をしているんですけど、それは次のスライドになりますけども、いろんな支援を受けながら活動をしていただくということで、ちょっと字が小さいんですけど、お手元の紙を見ていただいて、国による支援とそれから県による支援と大きく2つございます。この国による支援の方がですね。まず中山間直接支払、これが棚田地域振興活動加算で、もともと中山間直接支払で2万1000円一反あたりですね、それに棚田地域振興活動加算の1万円、合計一反あたり3万1000円、ヘクタールあたり31万円は今、棚田地域活動の支援ということになっております。2番目がこれ行政の人じゃないとわかりにくいんですけど、中山間地域っていうふうに農林省の方でくくっていまして、その中山間地域でやる事業は補助率が50%から55%に国の補助率が5%上がります。それがこれまでは棚田法ができるまでは過疎とか山村振興とか離島とか半島とか、そういった地域振興立法のところだったんですけど、この棚田法でも他の今まで過疎でも山村でもなかったところでも、棚田法の地域振興、地域指定がかかれば、この中山間地域の行政的な範囲がとして扱われて、補助率も50%から55%になる。実際多くの指定棚田だった地域がこれまで法定の中山間地域じゃなかったところが、この棚田指定地域として中山間地域の扱いを受けると、それだけ財政支援が手厚くなるという効果もございます。それが地域おこし協力隊ですね。これも前からあるんですけど、このさっき言った活動計画、この活動計画の中で協議会としてこんなことやりたいぞと、こんないろんな棚田の保全とか観光とか地域間交流とかいろんなことやりたいぞっていうミッションを活動計画に書いてもらって、それを見て地域おこし協力隊の人が来ることによって、地域おこし協力隊でミスマッチといいますか、来た人のやりたいことと地元がしてもらいたいことがこうずれて半年でやめちゃうとか、いろいろとあったと思うんですけど、この棚田地域振興法を使って活動計画の中で、後で星さんからプレゼンしてもらいますけど、こんなことしてもらいたいっていうのを明確にした上で赴任していただくというメリットも実はございます。それから大事なポイントとして下に書いてある県による支援。これはあんまりまとまった情報は世の中に出てないと思うんですけど、この県による棚田基金ですね。さっき申し上げたように、それぞれの県に棚田基金というのが積んであります。もう20年ぐらいある。これで棚田振興に使いましょうということで、皆さんの地域でも県が使ってらっしゃる例あると思うんですけど、例としては山形では棚田カレーを開発し、あるいは新潟ではインフルエンサーですね。いろいろなYouTubeとかSNSでそういった人によって棚田を紹介に使ったり、あるいは愛知で企業研修の受け入れ、それから福岡では棚田の石積みのライトアップ。それから熊本ではつなぐ棚田遺産の情報発信。そういったことに使ったり。こ

ういったウオーキングイベント。だからいろいろ地域で工夫して、この棚田基金を使っていただいている。使わないともう召し上げられちゃうおそれがあるので、もうどんどん県としても「いいですね、使いましょう」と言っていただければと思っております。次のページをお願いします。こういったお金の補助金とかだけじゃなくて、棚田を応援する施策というのもいろいろとやっていまして。つなぐ棚田遺産、皆さんにつなぐ棚田遺産になっていらっしゃるとこもいっぱいあると思うんですけども、これが。令和4年3月に271の指定棚田。それから棚田カードっていうのがありまして、今、第3弾まで来ているんですね。この棚田カードは棚田1枚につき一つのカードなんですけど、若い人にもっと棚田に来てもらいたいということで、「棚田に恋」っていうキャッチフレーズでこういったパンフレットを今第3弾まで来ているんですけど、この第1弾のときはですね。若い男女がですね、まだ棚田に来て初めてデートできたということで、背中合わせにこうなっているらしいですね。まだ二人の間に距離があるんですけど、棚田に訪れて田植えとか稲刈りとか、活動をやっているうちに仲が良くなって第2弾のときには一緒に前を向いて、第3弾ではもう二人でですね。座って棚田米のおにぎりを食べていると。どんどんどんどん二人の距離が縮まっております。多分第4弾ではかなりこう更なる二人の仲の進展があるんじゃないかと思っておりますが、そこは担当者がいらっしゃいますので、また、さらに二人の距離を縮めていただければありがたいなと思っております。その次のページをお願いします。この指定棚田も法律をつくったときには300ぐらいいけばいいかなという話を内部ではしておりました。棚田100選が百何十地域だったので300いけばいいかなと思っていたんですけど、おかげさまで今指定された地域723の地域が指定棚田地域になっておられます。その下の活動計画。これも191なんですけど指定棚田地域で数えると431。だから大体指定棚田地域に700あって、そのうちの7分の4、400地域はもう活動計画もつくって活動していただいているという風に聞いているところでございます。次のページへ。ただ、いろんな法律ができても人が高齢化していなくなるっていう問題もあり、財政的にやっぱり大変だというお声もよく聞くところでございます。これは多分、本邦初公開なんですけど、アンケートなので、どこまで本当なのかわからないんですけど、我々が全国の棚田にアンケートをとってつくった資料です。結局公表しなかったんですけど、今日は棚田サミットなので持ってきました。縦軸が1ヘクタール当たりの維持保全費用年間です。右が耕作面積棚田の耕作面ですから、面積が小さければ小さいほど1ヘクタール当たりの保全費用は高い。面積が大きくなればなるほど単位面積当たりの保全費用は低い。当たり前って当たり前なんですけど、データとしてプロットしてみたと。この青い点線がありますね。お手元の紙では白黒なんですけど、これが直払いと棚田加算2万1000円と1万円の3万1000円。つまりヘクタールだと31万枚のラインがこのブルーのところなんですね。当然、直払いだけで棚田を支えるわけではないんですけど、このブルーのラインが中山間直払いを受けて棚田加算をもらっているのがこれぐらいのお金の年間の費用。ここから先はお米を売ったり、いろんな工夫でオーナー制とか、あるいは指定管理を受けたりとか、いろんな形でお金をこう集めて保全をしてらっしゃるというふうに理解をしております。やはりその規模の経済を出すわけじゃないですけど、できるだけ広域で一緒にやるとかいうふうにすることが一つのやり方。もう一つは、お金をやっぱり稼ぐやり方をこれが簡単じゃないんだねって皆さんおっしゃっていると思いますけど、工夫をしていく必要があるという図でございます。次のページをお願いします。実は棚田法が5年間の現地法、いわゆる時限立法でして、来年の末に期限が切れます。棚田法ができてももういらないじゃないかというお考えもあるかもしれないんですけど、一つの例としては、これある地区の話なんですけど、豪雨災害を機に棚田が全部やられちゃって、そこで外からIターンの方が現地の人たちと一緒になってNPO法人化して棚田米を売って棚田を復興させたという、頑張られたと非常に頑張っていらっしゃる棚田があります今は地元の農家さんと一緒になって活動していらっしゃるんですけど指定棚田地域の指定を受けてない。聞くと市役所さんがあんまりそこは積極的に動いていらっしゃらないという。本当にいい棚田ですよね、中嶋先生あそこなんですね。だから頑張っている棚田なんですけど、やっぱり市役所がですね、いや、県なのかちとわかんないんですけど、行政とやっぱりうまくタッグが組めてないとこういった恩恵がまだまだ受けてない、頑張っている棚田なんだけど、棚田方の恩恵をまだ受けてないところもある。ですから、棚田法ではですね。そういう市とか、特に市町村合併して何か棚田は市としてはもうあんまり棚田のことは関心がないと、もうそれはもう山の方でやっている話じゃないかとで、市長が関心ないとか、そういったこともあり得るだろうということで、棚田法では県とか市が動かないときに都道府県に対して棚田で保全活動を頑張っている人たちが申請してくださいと提案ができる仕組みを法律に書いてあります。県はそれをもらって無視することができないように、これも法律の中にどのような対応するのか、ちゃんと通知しなさいと義務づけています。なので県や市がうまく動いてくれないっていうときは提案をして地域の考えを無視できないボトムアップの仕組みも入れてあります。これもなかなかまだまだ十分に活用されてないのかなと、現場に今年の7月に行ったときに、まだ棚田法のことが動いていない頑張っている棚田っていうのもあるなということがわかりましたので、一つ例として書かせていただいています。結局、その棚田保全を担っている方々と、やはりその市町村の方々がですね。信頼できる市町村の人がいるとか、信頼できる担当者の方がいる、応援してくださる県庁の方もいらっしゃいますけど、そういった関係がですね、しっかりとつくられるということが大事なのかなと思っております。棚田法自体が来年、令和7年の3月31日で期限が切れますので、その後どうされるのか農水本省からもお越しですけれども、これから議論がされていくということでございます。私の発表は以上でございます。先程申し上げましたように、棚田法ができて棚田活動計画の中で地域おこし協力隊にこんなことやってもらいたいっていうのも入れてっていう例が出てきていますので、その例として次のページに十日町の地域おこし協力隊の星さんが東京から移住されて皆様方の中では一番棚田歴の浅いチャレンジャーなんですけど、やっぱり若い世代がまたどんどん入っていくことも大事だと思っておりますので、ちょっと星さんから現場から見たいろんな話をしていただければと思っております。私から以上です。ありがとうございました。

【中島氏】

じゃあ星くん。よろしくお願いします。

【星氏】

よろしくお願いします。皆さん初めまして、新潟県十日町市から参りました星裕方と申します。私は29歳。東京生まれ。東京育ちなんですけれども、ここで皆さんにお伺いしたくて、今日会場にいらっしゃる方の中で20代の方ってどれぐらいいらっしゃいますか。ありがとうございます。ちなみに東京生まれ、もしくは都市部で生まれて移住をされて、今棚田地域にいらっしゃる方、その20代の中でどれぐらいいらっしゃいますか。ありがとうございます。それぐらい自分でもどうして東京生まれで農業経験0の僕が今この場に立たせていただいているのか不思議でなりません。ですが、自分が感じたことを今日はありのままにお話ししたいと思いますので、どうかお手柔らかによろしくお願

いします。はい、松本さんのご紹介にもありました通り、十日町市は11の指定棚田地域があります。市や行政側からの制度活用の働きかけが非常に積極的な自治体かなと思います。私が住んでいるこの蒲生の棚田、今出ている写真がある蒲生区にも集落協定が一つ、そして儀明、蒲生の棚田両方耕作するトロノキファームという1者協議会も実は存在します。このトロノキ協議会は活動計画に沿ってミッション型地域おこし協力隊の募集がありました。私は前職が東京のPR会社におりまして、そこでの企業広報の経験とか、地域のNPOでのコミュニティーづくりの経験、これを生かした形で提案をしまして、この春に着任しました。十日町市はつなぐ棚田遺産271の認定棚田のうち1市町村として最多の14棚田が認定されています。その中でも越後松代三大棚田群と呼ばれる星峠、像明、蒲生、この3つの棚田には、やはり非常に多くの写真家の方ですとか、観光客の方もすごく来ていただいていまして、棚田がこの地域にとってのシビックプライドになっているんじゃないかなと思います。これらの棚田、以前から有名であったんですけれども、平成11年に認定された棚田100選。これには実は十日町市から一つも認定はありませんでした。何でだろうと思って、地元の方に聞いてみると、地域の方々にとってこれまで棚田っていうのは暮らしの場、生活の場なので、人様に自慢するようなものではないんだという認識が根づいていた。なので恐らくこういったところに申請を出すところがなかったんじゃないかなと思うんですけれども、平成20年に十日町市で棚田サミットが開催されまして、令和4年に繋ぐ棚田遺産、この認定があった中で、20年のうちに十日町にとっての棚田が自慢できるものに変化していったんじゃないかなと思います。これはすごくポジティブな流れだと思うんですが、一方で僕が現場で聞く話は実はですね、これ15年前に十日町市の棚田サミットが行われた際の市報をPDFであったので、僕も読むことができたんですけれども、ここで書かれている内容、「集落が高齢化し、地元だけでは維持管理ができない手がない。」この内容って今、この状態で出されても、ああ、なるほどなと、そうだよねと非常に全く違和感がないなと思いました、これが15年前ということですね。この冊子の中でも書かれているんですけれども、この頃から田舎体験ですとか、工業人口拡大といった動きの歴史っていうのは、僕が想像したよりも、ずっとずっと長くやっていて、棚田地域での高齢化の課題との闘いというのはずっと続いてきたということがここから分かりました。しかし、やはりタイムリミットは迫っていると僕は感じます。令和7年は中山間地域と直接支払制度の更新年です。同じように5年間これから続けていくかどうかの岐路に立ったときに70代80代の耕作者の方々は皆さんやめどきと考えている方が非常に多いようです。地元の方の言葉を紹介させてください。「私たちは米作りに誇りを持っている。でも、自分の子らには継がせたくない。棚田の米作りは手間がかかる分儲からない。正直言って年金頼みだ。自分も体力の限界を感じている。」そろそろ辞めたいこの儲からない継がせたくないという状況を打破するためには、やっぱりこれまでの慣習とか常識をどんどんはみ出してあらゆる手段を講じていかないといけないと思っています。ちょっと今日は僕が20代で、今年から棚田地域に入ったということで、皆さんの地域でももし来年から全く農業経験のない20代の若者が来たときに、どういうふうな役割を期待するかなとか、逆に彼らがどういうマインドを持ってその地域にやってくるかなっていうことも、ぜひちょっと想像していただきたいなと思うんです。まさしく私はこの4月からの移住者、いわゆるよそ者ですね。よそ者だからこそ、棚田に入ったときに全身でその棚田のこれからの価値というのを感じることができました。棚田地域振興法の第3条基本理念の部分に棚田の多面的機能としての農作物の供給から伝統文化の継承等というところまで、さまざまな棚田の多面的価値が定義されています。2年前に初めて私は十日町を訪れました。そのときに初めて棚田に入りました。どんな価値を感じたか、例えば私は東京のベンチャーにおりました。法人や企業、こういった法人単位で棚田は研修することの価値がすごく高いなと感じました。私がいた会社は結構ブラックな会社だったので社長のワンマン経営でなかなかこう若手が活発に発言することができない。でも棚田に入ると、みんな泥の中に足を埋めて、そこには心理的安全性があります。社長であっても、泥まみれになってやっていると、「何か言えそうかな。普段言えなかったことが言えそうだな。」そんな気がしました。例えば、都市コミュニティー、こういったところが棚田と継続的に関わることで、今、都会は本当に緑がなくなっています。子供を公園で遊ばせていると近くから苦情が来ます。「ボールを使うなバットを振るな。」でも、こういった人たちが棚田に継続的に関われれば、みんなが広い景色のいい土地で自分たちの心の澱を流すきっかけにもなる。子供がいれば、お米ってこういう風に出来ているんだよって食育の機会にもなる。場合によっては、ジムに1カ月1万円かけているお金を棚田に来ることで、同じだけのカロリーを消費してエクササイズすることができる。そんなことも考えておりました。まさに感じたことは、棚田のポテンシャルには人生を賭ける価値があるなと。幸いなことに、私の周辺には同じように思ってくださっている方がたくさんいらっしゃいます。そういった方々と一緒に今年の田植え、草取り、稲刈りをご一緒させていただきまして、例えば埼玉のベンチャーによる田植え研修。これを実施しました。同じように都市コミュニティー。これは私の地元なんですけれども、チーム用賀というコミュニティーを招きまして、無農薬の田んぼなので、雑草がいっぱい入ってくる。これを草取りイベント「ジョソササイズ」ということで、みんなでエクササイズだと言いながらやったところ、かなり筋トレも意識するといいトレーニングになるよねとか、それと同時に、やはり農家さんのありがたみを感じたという感想もいただきました。やはり、棚田の価値はより多面的であり、そこに棚田を未来につないでいくヒントがあるのかなと思っています。しかし、タイムリミットはやはり迫っています。焦ってはいけないと思いつつも、今日は多くの棚田関係者の皆さんいらっしゃいますので、いろんなことを勉強して十日町に持って帰りたいと思います。よろしくお願いします。

【中島氏】

ありがとうございました。星君は貴方、慶応で何をやった。

【星氏】

経済学部で、遊んでおりました。

【中島氏】

シティーボーイが十日町の棚田の田舎に行く。木村さん、木村さんはそこにいる3人と一緒で私の棚田ネットワークの仲間です。今日一緒にお手伝いしてもらいました。木村さんの故郷なんですね。ええ木村さんとも仲良くしてください。では庄司さんお願いします。

【庄司氏】

改めてこんにちは。私は先ほど先生からもご紹介ありましたように、千葉県の鴨川市というとこから参りました。鴨川市、私たちのふるさとは、農業と漁業と観光と医療の町、そういうふうな感じです。観光面では、皆さんも関東では相当有名なんですけども、せんだって九州へ行きましたら、九州もああ知っているよって言われたんですけども、鴨川シーワールドってところがありまして、結構皆さんが観光面で来てもらっております。その中で私たちは川代集落の柿ノ木代棚田というところで、中山間の直払いをいただきながら頑張っているつもりでおります。鴨川市は3万1000人足らずの人口ですけれども、その中で農業的には約6割強。皆さんと一緒に農業をやっていますけれども、ど

うしても中山間がほとんどです。ですから、私達の柿ノ木代棚田もその一つとして、平成13年から中山間の直払いを習いまして、その当時私自身は53歳ということで、あれから24～25年経っています、ですから、その当時は「直払いをもらった。これで地元の活性化のために頑張るんだ」ということで、意気揚々で今までやってきたんですけども、もう20数年たつと、もうみんなだんだん70代半ばから先輩の人はもう80歳近くになっています。ですから、これからどうしようかということなんですけれども、昨年3月に中島先生のいろんな働きによってつなぐ棚田遺産ということで認定を受けました。そのつなぐということをすごく地元でも深く考えて次世代にどういうふうにつないでいくかなということで、自分たちも今頑張ってやっております。以前、その中山間の直払いを受けて3年後にその当時の小泉総理の特区制度で、鴨川市が農業特区第1号と紹介を受けまして、NHKのおはよう日本で朝7時50分の放送で川代集落が出ました。それもあり、みんなが「ああ、やっぱり頑張ってやっていかなくちゃいけないな」ってことで、一層力が入ったと思います。これからのオーナー制度もどれだけ続けていけるかわかりませんけど。コロナ前は全国的にお米だけじゃなくて、リンゴとか普通の野菜とかいろいろなオーナー制度ができまして、ニーズがあったんですよね。その後、昨年あたりからまたオーナーさんが増えまして、若い人また子供たち非常に友達等々もみんな来て誘い合って相当の人数になっております。うちの方の川代集落の柿ノ木代棚田は規模が小さいんですけども、一応みんなでひと声掛けるともう20人以上の人が集まってワイワイやっていて活性化になっているってことは自分も実感しています。そこで、うちの川代集落ですけども、普通の棚田と違いまして、大きい棚田で新潟だとか輪島だとか、そういうとこですと結構海が見えてとありますけども、うちの方の棚田は前が開けておりまして、農村景観の見える丘ってことで、ちょっと高台になっているんですよ。だから前も開けているし、鴨川の市街も一応このように見えます。ですから、同じ棚田でもみんなオーナーさんもすごく気持ちがいいってことで、人気があります。規模的には本当に5反5畝ぐらいで、約40組から50組ぐらいの棚田なんですけども、色んな目でそういう取り組みをさしてもらっています。そして、オーナーさんは種まきから始めまして、自分のまいた種を植えるということで、そのそういう喜びもあるんじゃないかなと思っています。それで田植えをして秋に稲刈りをやるということです。中島先生も実は毎年春も秋も来ていただいて、凄く力になってくれてね。頑張ってやらせてもらっています。お米は大体100㎡40キロ前後でオーナーさんに分けています。それでその後に10月に入りますと収穫祭、イノシシが結構出るんです。イノシシだとかキョンだとか鳥獣被害がありますけども、その肉で収穫祭をやってみんなで1年の締めくくりをやらせてもらっています。それで、田植えの前に地元の人たちと大人も子供も種まきを「どろりんぴっく」っていう名目でやっています。地元では喜んでもらえるほど結構話題性があって、今年で3回目でしたけど、だんだん人数が増えて特別なイベントってことで注目を集めさせていただいています。泥んこサッカーとか泥んこバレーとか、そういうのを地元のNPOと共同して、こういう取り組みもやらせていただきます。また、その地元のウェルネススポーツ鴨川の協力で「草刈りサミット」っていうのを今年で6年目ですけど、やらせてもらっています。草刈サミットっていうのは国際武道大学っていう大学があるんですけども、そこのスポーツの関係の教授が草刈はスポーツなんだと、肉体的にもそういう風な効果があるんだということで草刈サミットを6年前に始めました。昨年から山口県の長門市と共催しまして、昨年は私達が山口県に行って草刈サミットをやって、今年は山口県から鴨川に来てもらって草刈サミットをやりました。何か鹿児島の方とか、そのインターネットか何かを見てああ、これはいいなってことで参加したいっていう噂もあるんですよ。ですから、皆さんと全国的にこういうものをやっていったら。草刈りはもう本当に農家にとっては苦痛って言いますか大変な作業なんですよね。そういう部分を捉えて全国的に展開できたらなって個人的に思っています。賛同したいなというところがありましたら、是非鴨川の農産課長も来ていますけども、市役所の方へ連絡していただければ、大体11月の初め頃にいつもやっています。今年は11月10日にやりました。山口県から4名ですけども、来て、機械はこっちでも用意していますけども、飛行機の中に草刈り機持っていけませんのでね。そういうものも合わせてやっています。他にも中学生、子供達の農業体験。これは市内だけではなくて、市外の東京とか松戸とか浦安とか船橋とか、そういったところの中学生が農業体験ということで、5月6月7月、そして10月ごろ年に5回ぐらい来ています。ちょうど食べ時に来てもらえれば食べ物体験ができるんですけども、それ以外でも来ますので、何を体験させようかとか、ちょっと悩むとかはあるんですけども、野菜を植えたり、そいでミカンを収穫させたり、秋になれば栗拾いをしたり、タケノコ堀りをしたり、棚田の周辺で農業体験という取り組みをやらせていただいております。今年に入って学校の先生がちょっと興味を示しまして、地元の小学校で地元のこと知らなければダメだということで、小学校4年生の子供たちが川代集落―の柿ノ木代棚田をPRしたいと、それでかかしを作りたい、それでいろんなチラシを作ってみたい、それで今年中に形にして協力したいってこと言っていますので、どんどんやってくれとお願いしております。最後に棚田のお米でお酒作りということで、地元の亀田酒造というところから話があって、お酒作らないかって言われたもんですから、じゃあやってみようってことです。そしたら、だんだんこうヒートアップしてパテントを取ったりして12月の下旬に完成したんですけども、もう4月に完売しちゃいまして、すごい人気だったなっていうことで、周りもみんな驚いています。色々とびとびで話しましたけども、地元として見れば一緒になってやっていこうということで、今までは取り組んできました。ですけれども、次世代につなぐっていうことで、若い人たちも何人かいますけれども、どうしたらつながっていくかってことで、今地元の人たちと考えながら住んでいます。今までは私はこういう取り組みしかできなかったけども、次の人は自分の考えで次の取り組みをやればいいんだよということで、若い人達の話をしていますけど、ここ1年2年、どういう風に向かっていくか、乞うご期待ってことで今頑張っております。簡単ではございますが以上です。ありがとうございます。

【中島氏】

ありがとうございました。私も田植えや稲刈りにちょっとお邪魔しているんですけれど、20名ぐらいですか地元の方。有志25人の川代集落の方が出てこられている訳ですが、これはいつも私感心しているところです。ということで、お三方のお話ありがとうございました。最後に付け加えておきますと、松本さんは先程棚田基金の話をされておりました。何回かこの会でお話ししていただいたんですが、何年か前にその話をして県は必ず棚田基金を持っているから、これを使うように皆さん考えてくださいって話をしてくださいました。私もそのことは早くから知っていたので、前回棚田サミットの高島市、今日はおられないようですけど、最初に高島市に私がサミットやりませんかと言ったら何か冷たい返事だったんです。全然相手にしてくれないから、帰り際にですね。課長に耳打ちしたんです。県は必ず棚田基金ってのを持っているから、その基金を引き出してサミットをやったらどうですかっていう話をして帰ったんです。そしたら1カ月後、その課長から電話が掛かってきて、「先生、うちで引き受けます」って。これはきっと県

から棚田基金を引き出したんだと思います。それから、新しくオーナー制を始めた愛媛県の大洲市の樫谷の棚田。ここも今日は来ていませんけど、正嗣さんにその基金の話をしっかりと聞いたもんですから、県に基金があるだろうと。だから、それで我々を応援してくれと言ったら最初何を言っても県は知らんぷりして、そんなものはありませんと答えたんだそうです。だけど、しっかりした情報を持っていますから、次の年に行って、まあ3年目にはとうとう隠しきれなくなって、いや、ありました。出してあげますと。今年からって言ったから毎年50万ずつ補助をいたしますということですから、皆さん、各県に戻ったら、県には必ず棚田基金を持っているはずですから、引き出して大いに保全活動を盛んにしていただきたいと思います。今日はですね。農水省から棚田基金を振興してくださる地域振興課があるんですが、その中から課長さんの山本さん。

【山本氏】

農水省で地域振興課長しております山本です。先ほどもお話ありましたけども、棚田地域振興法と中山間の直払いも担当しております。法律の方は令和7年の3月31日ですから、あと1年半後ぐらいに期限を迎えるので、延長が必要かどうかっていうのを今後検討してまいりたいというふうに思っております。また中山間の直払いも、令和7年度から次の対策に移ります。地域の声としてはあと5年、もう高齢化が進んで5年後のことを考えるのは難しいとかいろいろ御意見をいただいておりますので、そういうところも取り組みやすいようなちょっと仕組みをあと1年ちょっとしかないですけども考えてまいりたいと思いますので、またいろんな場で皆様のご意見を聞かせていただければというふうに考えてはおりますのでよろしくお願いします。

【篠崎氏】

篠崎と申します。よろしくお願いします。私も中島先生が代表を務めていらっしゃいます、棚田ネットワークの個人会員でもありまして、実家は愛媛県の農家でございまして、ミカンとお米なんかをつくっているとこで育っております。棚田ではないんですけれども、昔からおやじが手押しの田植え機でですね、今、乗っているやつに変わっていますけども、手押しの田植え機でこう隅っこを手で植えていたり、草刈りしたりとか、そういう環境で育ったのもあって、農水省に入省して今年から棚田をちょうど担当することになりまして、今日いらっしゃっている方の中の幾つかの棚田にも何かお邪魔させていただいたことはあるんですけども、また今後棚田地域振興法の改正が必要かどうかとか新たな棚田地域振興に向けた制度の何か仕組みをつくっていくとき、皆さんのお声がどういうのが困っていて、どんなものが必要なのかっていうのを東京に机に座っているだけではわからないことがあるので、今日ももちろん時間を見つけて現場に伺いたいと思っておりますので、ぜひその時はいろんなお声を聞かせていただければ。今日、お手元にお配りしている資料は、既にもう中島先生とか、松本さんがお話しいただいているようなものばかりですので、改めて御説明するようなものでもないんですけども、一つはつなぐ棚田遺産の271の全名称が載ったものと位置関係が載ったもののパンフレットでございます。それからもう一つ、先ほど棚田カードで「棚田に恋」と、もう二人でおにぎりを食べているので、これ以上どう関係性を近づけていったらいいのかちょっと迷っているところではあるんですけども、第4弾の作成も考えています。また、ごらんになっていただければと思います。それから棚田オフィシャルサポーター、オンラインマッチングイベントっていうチラシを配っています。もう日付は終わっているんですけども、棚田地域を農水省と一緒に応援するよって言ってくださっている企業さんが今40社ぐらいあるんです。それをオフィシャルサポーターと呼んでおります。毎年その企業さんの方からネットでこんなことができますってプレゼンをしていただいたものがあります。そのプレゼンしていただいた動画が農水省のホームページにまだ載っております。もしご関心ありましたら、その棚田のためにこんな活動ができるよって、企業さんのプレゼン動画が載っておりますので、その動画をごらんいただいて、この企業さんと一緒に何かやりたいなというようなことがありましたら私どもでもいいですし、お住まいの市町村都道府県の方にご連絡いただければと思います。もう1枚はつなぐ棚田遺産の感謝状っていうのがありまして、こちらもそういう棚田地域振興にご協力いただいている企業さんに何かしら我々が日の光を浴びていただこうと思った感謝状を贈呈するということで、皆さんの目に触れるように紹介していくものです。先生にも審査員をしていただいているんですけれども、そういう取り組みもしておりますので、またこれをもう少し感謝状の贈呈とかが始まる頃になりましたら、プレスリリースとかで紹介していきたいと思っておりますので、またホームページとかご覧いただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【中島氏】

地域振興課本庁の5階にあります。私、棚田ネットワークの長く代表をしていたんですけど、90歳ですからね、いつまでも何もできなくて。でも今は杉山さんに今概要を調べさせている。この二人のお嬢さんは、第1回の棚田から今回まで全会出席です。こういう人はいません。これからの振興にも手伝ってもらいますんで、よろしくお願いしたいなと。それでは自由討論ということで、皆さん方からのご意見を、小山さんって言うんですかね。しゃべりたいでしょう。喋ってくださいね。

【小山氏】

おしゃべり小山です。先ほど千枚田だよりを配付させていただきました。私、平成3年から、年間700件ぐらいの棚田活動をしております。棚田地域振興法ですね、そういう立法化にもちょっと関わらせていただいたわけですけども、これ時限立法、令和7年の3月31日、それから中山間直接支払いもそうですね。これも時限立法と同じように5年サイクルでそれで今までの大体の棚田サミットというのは過去に5年の更新を何とか継続してくれ、頑張ろうというのがテーマだったわけです。そうやってこうやって持ちこたえてきたのがね。今、ちょっと危うくなってくる、それがこの令和7年3月31日で切れるということになると、もう既にね、そろそろうちの四谷の千枚田も考える時期であると。だから早いうちに中山間直接支払制度、今お聞きすると、国、県は非常に好意的に思ってきておりますが、市へおろしたらとたんに厳しくて邪魔者扱い。どこもそうじゃないですか。何か変なプレミアをつけたり、罰金じゃないけども。そんなようなことでなるべくなら抑えると、逃げ口上のとこが多いじゃないかなと思っております。だから、おいしい話を最後まで、なんで直接支払制度という名をつけたのか中島先生が悪いんだよね。行政を抜きにして直接皆さんにお支払いするお金なんだとそういうことで始まったと思います。どうですか、そんなこんなで自分ばかり話しちゃいかんから早いとこお願いします。

【中島氏】

自慢話とか困ったことですとか、そういう話があったらどうぞ一つ手を挙げてください。こういう場ですから、もう打ち解けていますから、どうぞどうぞ、大津市仰木の上坂さん。

【上坂氏】

去年、棚田サミットをさせてもらった高島市のお隣にあります。滋賀県大津市の比叡山にへばりついているところの上仰木棚田から来ました。上坂と申します。今までおっしゃっていただきました。棚田地域振興法ができまして、それを棚田サミットの長門でしたっけ、聞いた時に県の職員に言いまして、ぜひとも仰木村を指定してくれとお願い

して指定をしていただきました。そのおかげで中山間の直払い、今まで都心部に近いという理由で上仰木の棚田は県の特認地域やったんですけど、棚田地域に指定していただいたおかげで、もう普通にすんなりと通していただきました。しかもその棚田加算がもらえるということで、協議会を立ち上げなあかんということで、もうエイヤッで地元のうるさいじいさま方を退きまして、総会を開いて設立。その中山間のこの5期目の1年度目に棚田加算のお金がもらえるようにということで、もう6月に協議会設立してその締めの段階で、その中山間直払いで申請をさせていただいて、そのおかげで我々がやっています、この八王子組という保全団体の方で、ようやくいろんな活動で我々の日当がつけてもらえるようになりまして、そのおかげで何とか僕らのところも潤っていまして、その上仰木・辻ケ下第3集落協定推進会というところが約40ヘクありますので1万円だけでかなり大きなお金を頂戴しています。それを何とか有効利用してやっていきたいなと思っています。

令和7年の3月、結局、その令和6年度末で終了しないで何とか延長していただいて、我々にも安心して棚田保全活動ができるようにしていただきたいな。中山間の直払いも6期も同じような形で続けていただければ非常にありがたいので、よろしくお願いしたいなと思っています。そこでなんですけど、その棚田加算のお金を頂戴しまして、10年ぶりに生き物調査というのをさせてもらいました。我々が管理している田んぼの中で、害虫が4種類で、益虫が27種類で、その他何かの分類学的で、ただの虫っていうらしいんですけど、それが24種類ありまして、全56種類見つかったということで、調べに来ていただいた。先生方はかなり驚いておられたんで、このままちょっと頑張ってこの棚田を保全していきたいなと思っています。以上です。

【中島氏】

山本さん、静岡県の松崎町の石部の棚田の理事長だっけ、会長か、会長の方はちょっと変わった取り組みをしております。

【山本氏】

皆さん、こんにちは、静岡県の伊豆の西海岸にあります。松崎町から参りました。石部棚田振興協議会の山本と申します。平成22年の時に棚田サミットを開催させていただきまして、多くの皆さん来ていただきまして本当にありがとうございました。今、先生の方から急にふられてしまったもんですから、何を話せばいいのか、うちの棚田は荒廃していたものを平成12年に復田をいたしまして、オーナー制度を導入しました。オーナー制度につきましては、毎年100組ぐらいと資金的な支援トラストの会員80、90ぐらいっていうことで四百何十万とあるわけですけども、そういう支援金をいただいて運営をしております。人もこう少なく、大変な状況で作業しております。静岡県さんの方で、企業の皆さんと農家の皆さんが携えてそういった地域の活性化をしていこうということで、一社一村しずおか運動というのがあります。その中で常磐大学の学生さんが毎回畦切り、畦塗りとか、草刈りの片付けとか、表に出てこないけど一番大変なところのお手伝いをしてくれて、協力していただいています。また、飲料品の会社が作業時の飲み物を提供していただいています。ただ、どこもそうかと思うんですけれども、やはり高齢化と後継者不足というようなことで、実際の作業については地域の保存会っていうところでやっているんですけども、もう20数年たつものですから、当然としていかなくなってくる。そこをどうしようかっていうようなことの中で、新たなオーナーさんの中からその保存会へ入っていただいて、お手伝いをしてくれる方が何人も出てきたり、あるいは有償のボランティアみたいな方も出たりとかやっていますけれども、なかなか大変な状況は変わりません。施設も20年ぐらい経過をして直さなければならないところがいっぱいあります。今回、指定棚田に入って、国のいろんな補助金を活用しながら整備をしていくというところも考えていますし、人が少ないものですから、いかに作業効率を上げていくかっていうようなことが非常に重要かなと思っていまして、水の取り口の問題とか、水が抜けるのがわかるようなシステム、本来は水を張っておかなきゃならないんですけども、水が枯れちゃうみたい、そういうのを見回りで3人ぐらいでやっているんですけど、なかなか大変、そういうものもスマート農業を使いながらこうやっていく方法を県の方とも、今相談をしながらやっているところです。いずれにしても維持管理が非常に大変だというようなことがございます。うちの方も棚田サミットをやった以降、地域おこし協力隊を入れて作業に当たっています。その際には、僕も町の方にいろいろ聞いて導入した経過があります。以上です。

【中島氏】

ありがとうございました。常磐大学のそういう支援がなければ、ここはちょっとやっていけないような気がいたします。非常に致し方ないと思います。丸山千枚田の喜田さん、丸山千枚田は非常に特殊でしてね。あれは条例で守っていこうと、だから行政としては守っていかざるを得ないんです。だからお金を出すんですね。

【喜田氏】

紹介いただきました。丸山千枚田の保存会長の喜田といいます。よろしくお願いします。今の行政から条例で守られているということなんですが、まさに年間2,000万を超えるお金が出ております。この点については僕たち保存会、今は日常的に活動しているのが10名で、月に一回2回とか来てくれる人が5名ぐらいいます。だから15名ぐらいの人の賃金が三重県の最低賃金1時間973円が出るんですね。だけど、田んぼを守る活動っていうのは、ボランティアでは長続きしないんです。せいぜい1週間のボランティアぐらいで継続してできれば本当にいいんですけども、日常的にはやっぱり活動をしようとすると、それなりの賃金を出さないとできないで、これは紀和町の時代の話なんですけど、市が条例を作ってくれたから、今合併して熊野市になってもお金を出してくれている。それはまことにありがたいことだと僕らは思っています。それからもう1つ大阪にある日本エレコムという会社。実はここの会長さんが三重県熊野市の出身の方で、5年計画で1億5,000万を市の方へ補助をくれました。こういうお金があって、我々の活動が日常的に行われている。ただ、丸山地区はその石川県の能登にある白米千枚田に近い傾斜地の中ですから小さな田んぼばかりなんですね。枚数的に公表しているのが1340枚って言うているんですが、高齢化とともにやっぱり休耕田が増えてきています。近代のそのソーラー発電というのもいつの間にか僕らが知らない間にできちゃって、もともと田んぼやったところにそういうのが建ってしまって、もう1,340の枚数が現実的には少なくなっている。ただ我々今保存会がその活動の念頭に置いているのは条例ができた時の初代会長。これは北富士夫さんというんですけども、この方が提唱した1340枚を守っていく。そこに保全活動をして近づけていくという活動に全力を注いでいきたい。そのためには、今、先生がおっしゃった補助金を最大限利用するっていうことも非常に大事かなと思います。やっぱり自然の中で100年後の子どもたちに現状を、原風景を継承していく。これが一番大事かなと思っています。仲間にはあと30年やれって言われてんですけど、僕、実は後期高齢者に入ったところなんです。だから30年っていったら１００歳超えちゃうんです。中島先生よりも上へいっちゃうかもしれませんけど、できる範囲で頑張りたいと思います。

【中島氏】

そういうの非常に特殊ですよね。条例で守っていくという。これはいわゆる行政が言ったから守っていかなきゃいけないから、幾ら金がか

かろうとやっぱりこれは守っていくということで、丸山千枚田は維持されているわけです。姨捨の方はおられますかね。どうですか。今、丸山千枚田の話を聞いて。

【松崎氏】

非常にうらやましいですよ。こんにちは、長野県千曲市の姨捨の棚田で、市役所のサークル活動として放棄されつつある棚田の引き受けをやっている棚田倶楽部というところを代表しています。松崎と申します。うちの棚田は中島先生よくご存じと思いますが、全国で第1号の名勝指定を受けた場所です。名称を姨捨の棚田という第3回のサミットをやらせていただいた場所でもあります。さらに県の重要文化的景観という指定を受けたり、あるいは姨捨駅というので、ご覧になった方もいらっしゃるかと思います、日本の名だたる駅を押しのけて日本の第5位に行ってみたい駅ということで、ほんのちっちゃな無人駅が入っているというような場所なんです。先程の高齢化の問題に直面しておりまして、非常に困っています。お金をどこから出すかというのも、行政側がその景観的な評価をやはりしていただいてないということで、農地を守るだけのためにはなかなか売る物の数が限られるものですから、お米を売っただけではもちろん当然賄えないというのもありますし、もうちょっとオーナー制の単価を上げてもいいのかというようなこともありますが、実はうちの棚田倶楽部の中で新しい組織をつくって、そのオーナー制を含めた全体的に回していく年齢も下がってますんで、自分たちがやっていった方がいいんではないかという議論を今始めています。やはり星さんおっしゃったように時間がないっていうのが共有される危機感ですので、この時間のない中でそれぞれの主体市もそうですし、棚田の団体を巻き込んでみんなで考えていかなきゃいけない時期になっているかなというのを最近感じています、以上です。ありがとうございます。

【中島氏】

今、１００箇所以上で棚田オーナー制度がありますが、第１号の棚田オーナーとなった檮原町から田村さんが来ております。

【田村氏】

改めまして、田村俊夫と申します。こんにちは、今日は高知県椿原町の神在居の千枚田からやってまいりました。今、先生から御紹介いただいたとおり、平成4年に我が国初の千枚田オーナー制度をスタートした町でもあり、皆さん御存じだと思うんですが、28回目になります全国棚田サミットの第1回目の開催地でございます。ちなみに棚田の後ろに（千枚田）と書いてあるのは、実は私たちのところでは棚田は千枚田と呼んでおりまして、いまだにあのように括弧をつけていただいているというのは、檮原町へのリスペクトかなと思っていまして、まあ少し誇らしい感じではあります。あの千枚田のオーナー制度は、今も続けております。細々とさすがに高齢化が進み、なかなか担い手が苦労しているような現場でございますが、一番、最初に千枚田のオーナー制度を始めたところが一番、最初にやめたって言われるのが悔しいので、とにかく続けます。続けると同時に、これはちょっと言葉が過ぎるかもしれませんけど、棚田のオーナー制度では棚田の保全というのはなかなか難しいかなというふうに思っていまして、今日、町の職員の方と一緒に来ているんですけど、今取り組んでいるのはまずハードとソフトの整備に分けまして、ハードの方はですね、安心安全に誰もが営農できる棚田にしようということで、耕作放棄地も含めて、復田も含めてどのようにしていくかっていうのを今プラン練ってます。同時にその棚田をどう運営していくかということで、集落営農という方法を取り入れまして、地域だけではなくて極端な話、全国各地から賛同していただける方に安心して安全に営農していただけるような仕組みをつくっていけないかなということで、今準備を進めております。先ほど資金のお話も出ておりますが、我々も資金については悩ましいところでございまして、12月の中旬からＲｅａｄｙＦｏｒさんのご協力をいただいて、クラウドファンディングをかけることにいたしました。そこの応援メッセージには国立競技場の建築に携われました隈研吾さん、椿原町とも縁の深い方でありますが、その方であるとか千枚田のオーナー制度を最初に仕掛けた当時、農水省から出向で来られた職員の方が林野庁の長官にご就任されましたんので、応援メッセージをいただいております。今日、私がこの分科会に参加したのは、横にいらっしゃる中島先生が応援メッセージを書いていただいたら、鬼に金棒かなというふうに思ってますんで、もうこれでクラウドファンディングはもうほぼほぼ成功したようなものやなというふうに思っておりますんで、今日は直接お願いに上がりますのでよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

【中島氏】

ありがとう。次は、先ほどの喜田さんじゃなくて、こちらは東西南北の北さんです。和歌山県紀美野町だっけ、今から立ち上げて一生懸命やろうというところですから、そういう話をお願いします。

【北氏】

皆さん、こんにちは、私たちは中田の棚田という、今日、初お披露目の法被なんですけれども、これ「中田の棚田」っていう文字ですね。今、紹介いただいた紀美野町という町では、己書（おのれしょ）っていうこの文字。これが結構町内で流行っていましてね。師範とったり、いろいろお教えする人とか、この文字のお勉強するようなとこもあって、そこの紀美野町でトップの人に実は書いていただいた文字となっています。己書をまた見てください。今、中島先生が言っていただいたように、ここに参加されている棚田っていうのは、もう本当に20年前とか、かなり古くから取り組まれている棚田だと思うんですが、私たちは4年前にこの中田の棚田の復田というのか、もうほとんど山に戻りかけていた棚田を再生するというところからスタートしています。ちょうど4年前に中島先生に来ていただいて、この中田の棚田がここに書いていますように、そもそも棚田っていう言葉の発祥が和歌山紀州だっていうこともそのとき教えていただいたんですけれども、その棚田で1425年今から600年前には14町っていうあの広い棚田群があったっていうことが歴史書に書かれているというようなことも教えていただいて。それはなぜかというと高野山という世界遺産がございますので、その高野山文書の中に書かれている。景観の美しいこともそうだったんですが、歴史を勉強すると「いや、これはこのまま山に戻すわけにいかない」と思いましてというのも私は農家なんです。特に和歌山では珍しい栗農家なんですけれども、この棚田は今から4年前に復田というか再生を図らないと本当に山に戻ってしまうという状況だったんです。それで、地権者の人も最後の一人がお米をつくっているような状態でして、地域の人が手を離したものを有志を募って再生をやり出したところです。先ほどから言っている棚田法の中山間直接支払なんですけれども、4年でやっと去年4反で1トンのお米が3年で取れるようになったんです。今年は少し面積を増やしたんですが、気候の絡みとかもありまして、1トン弱なんですが、それでも6反半をやっと4年間で復田できました。さっき言ったその10ヘクタールだったとしたら、まだまだたくさん水田に戻してないんですね。その水田に戻してないんですけれども、来ていただいた方がわかるんですけど、広い道からぱっと見上げると本当にピラミッドのようにわぁっと開ける形をしていますので、その道沿いから見える景観をね、やっぱりきれいよねっていう景観を維持したいっていうみんなにそこを見てもらいたいっていうのがあるので、そのたった6反半ぐらいのお米づくりを、それも自然栽培という無農薬でやっているんですけれど

も、それをやりつつ草刈りでそのぱっと道沿いから見た景観をそっからやっているというようなことをやっています。中山間の加算なんかもまだたった6反とか、そういう程度なんで、まだまだ恩恵など受けておりません。ですので、松本さん、私、山口県でお会いしたの覚えています。あの時の決意はいまだにも変わっていませんと。それで、そんなどうなるかわかりません、なんていう情けないことを言わんでください。あたしも棚田には星くんでしたか。命をかけるようなねポテンシャルがあると思いますけど、今、私たち関わってくれているみんな本当に全員がボランティアなんです。何とかお金を儲けられる仕組みをつくりたいと思って頑張っておりますので、見捨てないでいただきたい。よろしくお願いします。こんなお願いばかりして申し訳ないんですけど、今年くらいになってくると、いよいよ少しでも棚田を知っていただいて、地区小学校150周年の小学校があるんですけれども、その子供たちも体験してくれるようになりました。それから、神戸の女子中学生、そういう教育旅行的なところで参加してくれるようになりましたし、それから地元でいうと、近くの高校の野球部が地域貢献という形で活動に参加してくれつつあります。やっぱり若い人に来ていただけるような、その人達が何らかの形で癒されたり楽しめたりっていうそういう場に必ずしていきたいと思っていますので、そういう人達に私たちの今の思いを伝えて、地権者さんがいらっしゃらなくても、棚田っていうのはこういう形に復活して守っていけるんだって地域にしていきたいと思っております。まだ4年目なんで、いろんなことを教えていただきたい、毎回こんなサミットで言っているんですが、よろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

【中島氏】

北さん、ありがとう。丸山千枚田の喜田さんは喜ぶ田。先ほどお話頂いた、三重県丸山千枚田の初代会長のお嬢さんがここにおられます。喜田さん、丸山千枚田は何枚でしたっけ、１３４０枚。これを復田された方のお嬢さん。お父さんが去年亡くなられたそうです。非常に残念です。

【水野氏（北 富士夫さんのお嬢さん）】

はい、棚田ネットワークで棚田ナビに関わらせていただいております。写真の提供とか、またお願いすることもあると思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【中島氏】

かつてですね。奈良県の明日香村ってのは、棚田オーナーの先進地であったんです。実は私はその先進地のいわゆる中心になっている人を大山千枚田に連れて行って、今日の大山千枚田が世に出たんです。その明日香村で、いわゆる棚田オーナー側としてサポートして頑張っている人がこの人なんですね。

【濱田氏】

初めまして、奈良県明日香村のNPO法人明日香の未来を創る会で理事をしております。大阪在住の濱田と申します。どうぞよろしくお願いします。今、先生からお話があった高内良正という明日香村の名刹巡礼で有名なお寺の橘寺の息子さんが棚田オーナー制度を立ち上げまして、今年で28年目になります。コロナの間も何とか村の人たちだけで田んぼの維持をしてきたおかげで、コロナがあけてからオーナーの数が一気に増えまして、今、お断りをしないといけないぐらいオーナーさんの応募が来ています。たくさんの方に来ていただいて、にぎわいが出ているんですけども一つ、そのオーナー制度の維持、持続的な問題に大きな問題が生じておりますのが獣害でございます。イノシシが数年前に荒らしまして、ほぼオーナーの田んぼ全滅ということがありました。これはタウンミーティングみたいにオーナーさんにみんな集まっていただいてどうしましょうということで、オーナーさんのご意見も聞きながら、オーナーは何とか頑張って続けてくださいというご意見が多かったので、対策をいろいろやって頑張ってきたんですけども。

今度はシカの害が随分出てきていまして、かなり高い柵を設けても、今年は一部の田んぼで2年連続やられると。去年のサミットでもそうですけども、あんまり獣害の話が出ないので皆さんのところへはどうなのかなという風に思ってますんで、またご意見がありましたらお聞かせいただきたいと思います。以上です。あ、その前にもう一つ。オーライ！ニッポン大賞というのを皆さん、御存じだと思いますけれども、去年の暮れに都市と農村の往来をテーマに掲げていただいて、審査委員会長賞というのを頂戴することができまして。この夏、表彰式で東京に呼ばれていた時に、中島先生に東京へ行くんだよって。じゃ、カレーでもご馳走するよっておっしゃっていただいたので、新宿の中村屋のカレーをご馳走していただきました。先生。そのときはどうもありがとうございます。以上でございます。

【中島氏】

今年はこの那智勝浦町でサミットは開かれていますけど、来年は長野県上田市。その次は大分県別府市。その次が決まってないんです。その次が決まっていないところに今働きかけ中なんです。まだウンと言ってくれません。その働きかけ中の浜松市からお見えですから、いやいやってくれとははっきり言いませんよ。鈴木さんいるの？お願いします。

【鈴木氏】

皆さんこんにちは。浜松市の久留女木の棚田で僕、外部耕作者なんですけど、久留女木に竜宮小僧の会という会で事務局をやっております。鈴木と申します。どうぞよろしくお願いします。サミットの件はまた熟考していただけると思います。その話は置いておきましてですね。先程、獣害の話がありましたが、浜松もめちゃくちゃ獣害多いです。もう10年ぐらい前まではシカなんかいなかったですけど、最近もシカ。シカしかいないみたいな感じですね。イノシシは柵でとめられていますけど、もう越えてきちゃうんですね。やっぱり僕らの背丈以上ぐらいの柵を設けないと越えてきてしまいますので、今は非常にそこは苦慮をしております。今日ですね。特にここの会場に見えられている皆さんはもう全国でもですね。もう名だたる有名な棚田の皆さんばかりだと思いますが、手前どもの久留女木の棚田はですね。総面積で7.7ヘクタールで半分強ぐらいが休耕田になっておりますので、実質的には3ヘクタールぐらいの面積しかございません。しかも、地元の農家さんが6件しかいない中で営農しておりますので、なかなかそういったオーナー制度ですとか、イベントとかっていうのがそもそもできないっていうような状態なんですね。でも、そういう中でもやはり棚田はきちんと残していきたいっていうような思いを持っている方も何人かいらっしゃいますので、そういった中でどうやって耕作者、次世代の耕作者をどうやってふやしていこうか、重点的に自分たちは耕作者の育成みたいなのをやっております。おかげさまでですね。今、外から来て田んぼを作っている人が6人かな、2グループあって、その人達は面積とか枚数は違いますけど、もう田植えをするところから稲刈り、脱穀、もみすりまでを全部完結をして、自分のお米を作るっていうような形でお米作りを覚えていっていただいています。そういったのを突然来てですね。お米づくりやりたいとかっていう方もいらっしゃるんですが、突然来て「じゃ田んぼをつくって」って言っても当然作れませんので、棚田塾っていうのを1年間かけて、そこに通っていただいて、やってみた中でできそうだと思ったら、田んぼを何枚かお貸しして自分で作っていただくっていうようなスタイルで、今耕作者を

増やしているところです。そういった活動してまいりましたので、おかげさまで耕作面積とか耕作者の人数は微増ですけど、ちょっとずつ増えているような状態です。ごめんなさい。ちょっと話長くなっちゃって申し訳なかったですが、やっぱり全国を見るとですね。1ヘクタール2ヘクタールとかっていう小さい棚田も沢山あるんじゃないかなと思います。そういう小規模零細な棚田こそ、先程の補助金の話もそうですけど、なかなかそういったものを活用できていないっていうようなのが実情としてあると思いますので、ぜひうまく取り組みをされている棚田があったら、そういうところもちょっと今日は勉強したいなっていうのは思いもあって、仲間と今日来ておりますので、また後ほど。お時間とかありましたら、お声がけ頂けたらと思います。どうもありがとうございます。

【中島氏】

ありがとう。何とか実現するように頑張ってください。お願いします。佐渡島って棚田がたくさんあるとこなんです。その佐渡島の棚田の主みたいな人が来ていますから、大石さん、お話をしてください。もったいつけないで。

【大石氏】

どうもお世話になっております。新潟県佐渡市からたらい船に乗ってえっちらおっちらと半日、1日かな。朝7時に出て、昨日夜10時にやっと着いたという佐渡島から来た大石といいます。何か最近、巷では何かNHKとかいう訳のわからない会社の「Dear にっぽん」とかいうドキュメンタリーで、私のバッシングをたくさん見てもらった人がいるように聞いております。

冗談はさておいて、岩首昇竜棚田と言われている棚田で棚田爺と呼ばれて百姓をやって40年ですか。その前20年近く東京の銀座とか歌舞伎町とかいうヘンなところで、今のホストクラブが騒ぎになっているような町で遊んでおりました。それから帰ってから中島御大にお会いをし、お前は故郷のこの宝を見捨てるのかみたいな何か洗脳を受け、今に至ると。自慢は一回も荒れたことがない棚田です。だから完璧な農地です。中島先生からも教えていただいたように400年続いた文化とか歴史とか、僕らは駅伝ランナーの一人としては僕の代で諦めることだけはしたくないなと思っております。ただ、僕はつなぐ棚田遺産という、遺産というのが、どうもすっきりしなくて遺産じゃなくて、棚田は資産って俺に教えてくれたじゃないって言ったんですけども、資産としてですね。僕は次の子供たちに伝えていきたいと思っております。3年くらい前から佐渡の小学生が来てくれて、話等をさしてもらったら、学校前で作ったお米を売ったお金、5万か6万くらいあるらしいんですけども、社会福祉協議会に寄付していたのを、「あのクソジジイ、あてになんねえけども、あの棚田が見えなくなると俺ら困るから、あのジジイに半分だけ寄付しよう」って言って2万5000円。毎年ほぼ2万5000円送ってくれます。子供は本当に「これ、なくなるんだよ。どうするんだ、お前らは」って言ったら「いや、それは困る」って素直に言ってくれる。僕はやっぱり僕らじゃなくて、次の世代の子供たちに棚田の持つ大切さだとか、日本の稲作の大切さを伝えられればと思っております。長くなりましたが、佐渡島から来た爺でした。ありがとうございます。

【中島氏】

頑張っています。今日、これだけの人数の方がお集まりくださっておりますが、行政の首長さんというのは一人だけなんです。そこで波佐見町の町長がおられます。前川さん。

【前川氏】

皆さんこんにちは、長崎県の波佐見町から来ました、前川と申します。まず、波佐見町ってご存知じゃない方はちょっと手を挙げてみてください。半分以上ですね。場所を言いますと佐世保市のハウステンボスの隣、それから有田焼で有名な有田町の隣、お茶で有名な嬉野市の隣と。そういったところに囲まれております。実は私20年前までずっと役場の職員でございまして、20年前に農林課の担当で中山間やっておりますし、私、実は農家でありまして、地元で鬼木棚田というのがございまして、そこの棚田協議会っていうのをつくりまして、その事務局長を昨年までやっておりましたが、どういった流れか、ちょっと町長になってしまいましたので、事務局長は引き継ぎをしたところです。一つ事業を紹介したいと思います。先ほどからありますように、棚田というのは草刈りが非常に大変なんですよね。特に中山間地でも圃場整備を行われたところは、かなり法面が広くて、耕作地より草刈りをする法面が広いというのは難点がございましたけども、実は愛媛の業者でだるま製紙という業者がございまして、工法が和紙の業者なんで、それをドロドロに溶かしてセンチピードグラスというムカデシバの種子を混ぜ込んで吹きつける法面工法がございます。それを実証いたしました。自分の棚田でですね。当然、誰も手を挙げなかったんで、私の田んぼを含めたところで約3000㎡法面吹きつけして、非常に乾燥が続いて発芽しなかったんですが、翌年にはもう見事に一面覆われまして、草刈りから解放されました。やはり実証をしないと皆さんなかなか納得をしてくれないんで、それを見せたところですね。みんな手を挙げて全部で今度6万、7万㎡で一気にやるように計画をしております。やはりそういった作業を楽にするような条件整備をしてやらないと農作業する人がいないんじゃないかということで行ったところです。町長の保険として、来年度からその事業を町の単独事業として補助事業として設けようということで、今ここにおります、農林課長に指示をしておりますので、来年の1月の新年度の予算の査定の折にはですね、認めていきたいと思いますし、ぜひそういった事業を国の方でも採択をしていただければなということで、ここでちょっとだけお願いしておきたいというふうに思っております。交流会を楽しみにしておりますので、その時でも名刺交換等させていただければというふうに思っております。以上現場からでした。

【中島氏】

どうも前川さんありがとうございました。今日は棚田学会の会長が見えてますんで、何か話してくださるそうですから。

【山路氏】

棚田学会の今会長を預かっております。山路と申します。中島先生は棚田ネットワークをつくり、育てた人で、棚田学会もつくって育てた人なので、私、非常に面はゆい状況です。棚田学会は学会という名前が付いてますんで、学会誌とか通信とか研究会とかやったりしていますが、いわゆる学者の学会じゃありませんので、ぜひいろんな方に来ていただきたい。シンポジウムとかは全部無料で会員以外の方もここ数年出てもらっています。それで、棚田学会ですね。8年間ほど農業系の高校生しか出せないフォトコンテストを8年間やっていました。一緒にやっていたのが農場協会という農業系の高校の大元締めとやっていたんですが、ちょっとそちらの予算が尽きて、やめようって話になって、去年で打ち切りになりました。それであまりにもったいないので棚田学会として、今年からフォトコンテストを始めることにしました。フォトコンテスト自体は世の中にいっぱいあります。ネットワークはフォトコンテストをしてないけど、ネットワークのカレンダーってすごくきれいなカラーカレンダーです。そういうところに攻めていこうというつもりは全くないです。チラシを置いていますが、今日は配ったものもあるんですが、棚田の今ということで今年からやることにしました。今です、きれいな棚田もいいんだけど、苦しんでいる棚田、頑張っている棚田それを写真にするって難しいと思うんです

よね。ただの荒れた、耕作放棄された写真を送ってきても、そんなものはたぶん当選はしませんけども、努力が見える今の棚田があって、そこに棚田の愛が感じられたものは多分審査会でも残るんじゃないかと思っています。ちょっとそんな趣旨で今年始めましたので、是非皆さんご協力ご投稿いただければと思います。棚田学会の紹介でした。ありがとうございます。

【中島氏】

こっち側から顔馴染みは指名しましたけど、ここで一つ、こういう話をしたいと言う方がおられたら、是非、手を挙げて。なかなか手が上がらないんだよね、これが。どなたかいませんか。うん。あ、あそこ手が挙がったような気がする。

【木寺氏】

皆さん、こんにちは。私は佐賀県の伊万里市から来ました。木寺と申します。棚田はですね。前は炭山の棚田ということでありましたけど、先ほどですね。中田の棚田っていう方がお話しされましたとおりですね、私の所も少し、地域が広くて中田棚田ということでつなぐ棚田遺産に認定されております。今、私たちのところで困っておるのがやっぱり鳥獣害の問題とかいろいろありますけど、協力隊の方が1名と佐賀県では企業ボランティアができておりますので、3年間交代ということでボランティアの方がいろんな作業を応援していただいております。そういうことで、私共と中田の棚田の方でお近づきになれたらいいなと思います。よろしくお願いします。

【吉武氏】

先ほど紹介いただきました。炭山棚田の企業ボランティアというか、任意団体を立ち上げてそう盛り上げていこうと活動している「すみやま農らいふ」という団体をしています、吉武といいます。本業は運動施設を自分でやっているんですけど、今日は三方のお話を聞いて大変勉強になりました。ありがとうございました。庄司様と星様のお話で今日、私がここに来た目的が草刈りをどうしていくかという課題を解決するために皆さんのお話を聞きに来ました。色々調べている中で、先程、波佐見の町長様の話も聞いていいなと思って、後でお話を聞きたいなと思いましたし、先程の草刈サミットとジョソササイズでしたっけ。その2つがすごくいいなあと思って、私も運動をもうずっとやっていたので、体を動かすことにつながるんじゃないかなと思ったので、是非。私、ラジコン草刈機とか色々あるので、そういうテクノロジーじゃないですけど、実は病院の先生にこういう話をしたらラジコン好きだからラジコン草刈り機買ってあげるよとか、ちょっと冗談交じりでお酒の席で言っていただいたりとかしたので、そういう何か若い人達も巻き込むようなそういうのも必要かなと思ったんで、草刈りのサミットをしたいですね。ジョソササイズと草刈サミットとラジコン草刈り機、3つ合わせて将来出来ないかなというご提案になります笑。あとラジコン草刈り機を実際使っている方がですね。この中でいらっしゃったら実際どうなのかなという話も聞きたかったので、もしいらっしゃればこの後発言いただければと思います。ありがとうございます。

【中島氏】

ありがとうございました。それでは来年のサミットは長野県上田市です。その上田市の棚田「稲倉の棚田」からお見えの、渡辺さん。

【渡辺氏】

皆さん、こんにちは、長野県上田市から参りました。稲倉の棚田保全委員の渡辺と申します。よろしくお願いいたします。実は私、来年なんですけども開催地ということで勉強させていただくために来させていただいたんですけども、その前に今日、最年少だと思うんですけど、娘が9歳ですが、参加しています。っていうのも「お母さん行かなくてもいい。私一人でも行く」っていう。でも、その前に横にいるこの稲倉の棚田保全委員の皆さんがすごく支えてくださって。私も子育てをしながらいつも農作業をやらせていただいたりしているんですけども、その皆さんの支えもあって、この子もよく農作業を一緒に体験しながら、すごく素晴らしい棚田っていうすごい思いが強いっていうので、もう私よりも棚田愛が強くてサミットに出ているっていうのがすごく楽しみで、今日9時間ぐらいかけて長野から来ました。やっぱり次世代につなぐっていうのが今日もずっと朝から基調講演とか聞いていますけども、一緒に親子で農作業することによって、棚田を好きになったり、地元の小学生でまだちょっとしか参加してないんですけども、例えば授業を一緒にやったりだとか。生物の勉強をしたり、稲刈り田植えをしたり、あとは銀座中学とか、いろんな都市からも中学生とかは稲刈りと田植えを経験していただいています。あとは100人近く来た焼き芋大会をさせていただき、何かイベントもいろいろやっています。

いい事例とかはまた来年、上田に皆さん来てくれた時にたくさん紹介ができるように、こちらもちゃんとまとめておきたいと思いますので、よろしくお願いします。今日は是非、9歳の娘に棚田愛をちょっと語ってもらいたくて、マイクを渡します。

【渡辺さやねちゃん】

私の棚田の大好きなところは、棚田のみんなが毎日私に思いやりがあって優しくしてくれたり、あと天皇杯を取ったり、5年生はお田植えや稲刈りをしたり、3年生は生き物をもっと知ったり学習しています。来年のサミット、楽しみです。

【中島氏】

もう一度お名前を、さやねさん、渡辺さやねさん、ありがとう。どうぞもう一度大きな拍手をお願いします。もうそろそろ、4時半で終わらせなきゃいけないんですね。はい、どうぞ。

【池田氏】

佐賀県から来ました、池田と申します。私は蕨野の棚田に関わってきたんですけども、蕨野の農家出身ではないんですけど、関わってきた中で蕨野の棚田を含めて棚田を振興したいという思いで、ちょっと農水省の方に質問していきたいと思うんですけども。私どもは棚田に関わっていくという中でできるところで行くと、棚田ツアーをことしの6月に個人ですけども開催いたしまして。旅行業者もまだ私の熱意を汲み入れてですね。6月に50名の参加をいただいて実施できたところです。これを来年もやっていこうと計画をしていますけど、その中で旅行業者の方にオフィシャルサポーターになっていただこうと思っているんですね。私の趣旨を説明して、私が原稿書いて農水省にアピールしてくださいと、その時にちょっと私なりに思うのが、旅行業者がオフィシャルサポーターに申請する時に振興法に基づいた振興計画とちょっとずれるところがあるかなと思ったもので、そういう振興計画になくても棚田愛で私のような個人がアピールして棚田を振興するためにオフィシャルサポートになってくださいと申請したら農水省もぜひ認定していただきたいと思いまして、今日の場で質問とアピールでございます。

【篠崎氏】

オフィシャルサポーターも担当しておりますので、御回答申し上げます。先程町長からお話のあっただるま製紙さんもそうですし、ラジコンの草刈機を持ってオフィシャルサポーターになっていただいている会社さんもあります。先程少しお話しさせていただいた農水省のホームページで、オフィシャルサポーターさんの動画の中にも、実際の草刈ラジコンで動いているような動画もアップしています。必ずしもですね、棚田地域振興法の法律に基づいた制度という厳密なもので

はなくて、農水省の方で棚田地域振興に関する理念に共感していただいて、うちの会社としてはこんなことができますっていう自社さんなりのPRを1枚書いていただくことで、我々一緒にオフィシャルサポーターさんと一緒に頑張っていこうと思っていますので、ぜひそういう旅行会社さん、既に旅行会社さんも何社かオフィシャルサポーターになっていただいていますので、ぜひご紹介いただければと思います。もしわからなければ、私の方の方にご連絡いただきましたら、直接やりとりさせていただきますので、どうぞお伝えくださいませ。

【中島氏】

岩本さん、この方は、かつて最初の棚田100選を選んだときにですね。100選の地区にアンケートを出して、あなたの棚田の石積みの高さは何メートルですかというアンケートを出して。そしてその結果として蕨野の棚田が8.5メートルで日本一だということを証明した方なんです。

【岩本氏】

その節は、いろいろお世話になりました。本人の岩本です。よろしくお願いします。

【中島氏】

歴史に残りますよ。ということで、時間はあと10分だけど誰が話す？会長？岐阜県恵那市の柘植さん。

【柘植氏】

岐阜県恵那市から参りました。坂折棚田の保存会の実は今年度から理事長を受け取ることになりました、柘植と申します。よろしくお願いします。前理事、ここに田口さんいらっしゃいますけども、もう長いことこの保存会について関わっていただいて、非常に坂折棚田を日本全国に有名にしていただきました。それを受け継いで私は困っている状態なんですけど、正直、さあ、これから何ができるかと、ちょっと悩みながら日々過ごしている状況です。先程獣害の話がちょろっと出まして、一つ事例になるかもしれませんけども、私どもはですね。岐阜県恵那市の山の中、ちょうど盆地地形になります。そこを非常にイノシシ、鹿とか、猿はまだあんまり来てないんですけども、イノシシの害がひどくてですね。そのために町の全部を網で囲いました。総延長は40キロぐらいになりますか。これを4年がかりで毎年10キロ前後ずつ地形を見ながら工事かけまして。その原資は市財約2メートル近くですね、あとその他の材料は県、国も入ったかな。そちら側の補助で全額負担していただきまして。作業員は地元の人達に頼んで、その日当として地域資源保存会の方から、直接支払いの関係ですね、そちらの方から日当は出してもらうっていう形で作業しまして、4年かけて昨年度ですね。ようやく完成したとこです。おかげさまでイノシシの被害は8割ぐらい減ったと思います。ただ、どうしても県道路とかですね。交通の多い、例えば県道、市道、それから川、そこはちょっと網で塞ぐことが出来ないので、そこが今課題です。なかなかそういうとこから賢いやつらは入ってきて、そのたまたま運悪く、その近所に道路のある方の農地なんかはまだまだ入って困っている状況ですけども、それでも8割ぐらい減っています。あと被害のあるのは、今は小動物、ハクビシンとかですね、そういうのが西瓜食べちゃったとか、ナスかじられたとかっていうのが多いんですが、あとそれ以外に困っているのはカモシカです。カモシカって言うと、私が若い頃は乗鞍とかアルプスの山の中でしか会わないやつですけど、もう最近は足元に降りてきて、私の家の前がカモシカの通り道です。もうしょっちゅうやってきまして、今年私のところはこの前、サツマイモ全部食べられちゃいまして、芋は食べられなかったんですけど、上が食べられちゃったので、生育がもう一気に落ちちゃいました。そんな形でカモシカの被害については市に掛け合ってもカモシカ様には手が出せませんということで、10キロ4方に1頭しか駆除ができないというような状況らしいです。ここのところは天然記念物ですけども、町に近いところに出てくるものは、もういくら何でも天然記念物ではないんじゃないかなと何とかしてほしいってのがもう正直なところです。この辺は行政の特に国ですね、そういったところにぜひちょっと伝えていただければありがたいかなと思っています。課題ですけども、やはり後継者ですね。坂折棚田保存会、おかげさまで田口元理事長がいろいろお膳立てをして色々体制を作っていただきました。今、それを引き継いでオーナー制度とかですね。色んな応援隊の受け入れだとか、棚田の石積みの保存とか、そういう活動をやっておりますが、やはり今活動しているメンバーそのものも人数が少ないし、私は数年前までサラリーマンやっていましたけども、退職をきっかけにうちに入って棚田のことに関わるようになったわけですけども、そんな私でも若手で非常に若手です。活動していただいているのは、もう70歳前後の方以上が非常に多いそういう方から頑張って今やっている状況です。ただ、それもどれだけ続くかで、その後をどうするかというのが今私に課せられた課題なんですね。地域そのものもやはり後継者は非常に足りません。私ども坂折棚田っていうのは約4ヘクタールぐらいで400枚ぐらいの田んぼがあるわけですけども、実際にそれを管理しているところは大体20戸ぐらいです。その中でも私は若手です。若い人たちは、もっと自分の仕事を持ってとても田んぼにまでは手が回らないという人だとか、それからもう既に町を出てじいさんばあさんは残っているけど、子供達は町で暮らしている。当然ながら農地管理は残ったじいさんばあさんたちがいるというような状況がやっぱり多いです。それは坂折棚田だけでなく私の住んでいる町全体が同じような状況です。私の住んでいるとこは恵那市中野方町ってとこですけども、そこはつなぐ棚田遺産に昨年認定されまして、殆どが棚田地域なんですね。みんな抱える問題は一緒で、特に急峻なところは坂折棚田ということで色々注目されていますけども、困り具合は坂折棚田であろうとそうでないところであろうと全く変わりません。だから、そこをどうするかが一つの課題だと思っています。保存会ができてですね、変化起きたなと思うのは、やはり非常に有名にしていただいたことが非常に大きいと思うんですけども、移住者の方が増えてきたっていうことで、町に移住されてきて、そこでやっぱり空き家が多いんですね。最近は農地付き空き家が、法律改正によって農地を持ってない方もそういうところが入れるようになったので、移住してくると同時に農地を持って、そこで個人で色々少しずつ始めるという方も増えてきています。中にはちょっと頑張って農園みたいな形で販売まで手を染めるような方も出てきました。そういう人が来ると、やはり人口減少も増加したとは言いませんけども、非常にブレーキがかかってきて、子供達も若干ながら増えてきているというところで、一つはそれが棚田を保存する上での一つの効果なのかなと思っています。ただ、それを全体で坂折棚田だけでなく、町全体のところを何とか活性化してやるためには、イベントだけで済ますのではなくて、そこでイベントからやってくる流れをできるだけ地元につなぎとめる。一つは移住という形でもありますし、それからそういう人の流れを使って、そこで何か地元に産業が起きるみたいなところがあればいいかなと思っています。僕らの世代で色々そういうことを考えて話はしますけども、まだ具体的になかなかいかない。例えば何かの施設を作って、それで経営が成り立つまでに持っていこうとすると、非常にまだまだ課題が多いです。当然、その中には行政なんかの補助金を含めた支援が必要だと思いますけども、いつまでも補助金というわけにはいかないので、できればどこかで独り立ちできるような形に持っていく。それでやっと農地の保存に歯止めが一つはかかるのかなと。私もそうでしたけども、地元に住みながら外に仕

事に出つつ自分とこの農地も管理していくと、御承知のように収益が上がるためには大規模化するしか今のところ手がない状況だと思います。もしくは特別な付加価値のある作物に特化して頑張るか、なかなかそれができる所というのは限られますので、できればそういう環境に何とか持っていきたいと。そのためには、まずは人手が来てもらってできればみんなに住み着いてもらって、そういう人達をも含めて頑張って町が活性化してっていうような形につなげられればいいんだけど具体的に何をやるか私達の課題だと思っています。すみません。とりとめのない話になってしまいました。

【中島氏】

ほぼ時間になりましたけど、最後に松本さん、何か。

【松本氏】

すみませんじゃもうお時間も来ていますが、先生からのご指名なので1点ですね、四谷の方からお話ありましたけど棚田法、どうして5年でやめるんだと。もう現役の課長も来てらっしゃいますけど、なかなか言いづらいと思うので、私の方から言いますとですね。これ日本の法律って2000あるんです。全部で大体約2000あります。棚田法が出来た時に、日本の法制史の歴史って1300年あるんですけど、その日本の法制史の中で初めて棚田という言葉が、日本の法律の中に位置づけられたんです。でも当然、ですね。その時、立法するときに5年でやめようとは思ってないんです。これはもう非常に大切なことなので、当時の意識としてもこれは未来永劫を棚田法で頑張ると。だけどですね。危機意識がすごくあったんです。国会議員の先生方にも、もう棚田は今、支援措置を立ち上げないともう失われてしまうと、もう5年前ですね。その危機意識もあったので、一般には時限立法というんですけども、5年後、もう一度やっぱり必要だよねっていう議論を国政の場でもやって、全会一致、もう全ての政党が賛成したんですけど、もう一度、やはりそのさらにパワーアップした形で棚田法を引き継ぐと。なのでやめるつもりは、もう当時の立法者も行政も全くそう言うつもりはなくて、5年限ったのは、皆さんからやっぱり棚田地域は大変なんでもっと頑張ってくれと。やめるとはとんでもないじゃないかとそういう声をですね、上げていただきたいという思いでやっています。で、当然、農林省も公式には今から検討しますってことしか言えないと思いますけどもそうですね。山本課長。はい、皆さんからぜひそういう応援する声を上げていただければと思います。

【山本氏】

はい、松本さんから今お聞きしました。その通りです。実は自分も行政におりました。法律というものは、一度唾をつければ、なかなかやめることにはいかないわけです。だから、みんなの力で後押しするんだ。ここにおる農林水産省の皆さんにも「よろしくお願いします。続けてください」って言えば、それで続くと思いますということでどうでしょうか。

【中島氏】

何かまとめてもらってありがとうございます。ということで、もっと時間があればもっとお話ししたいんですけど、一応決まりがありますのでこの時間をもって終了させていただきたいと思います。私が、元気な間はこれを続けたいと思います。ありがとうございました。

《資料：特別分科会／庄司 裕輔氏》

つなぐ棚田遺産
～ふるさと誇りを未来へ～

千葉県鴨川市
川代柿ノ木代棚田の取り組み

鴨川市の概要

○人口 30,853人(令和５年４月１日現在)

○面積 19,114ha
(田2,300.1ha、畑630.9ha、宅地875.3ha、山林6,606.1ha、その他8,701.6ha

○棚田オーナー制度　市内４地区で実施
(川代柿ノ木台、大山千枚田、二子、山入)

鴨川の農業は、古くから基幹的な産業として、恵まれた気候風土のもとに稲作、畜産、花き栽培を中心に発展しました。

経営耕地面積の約９割が田であり、水稲が農業の根幹です。市中央部を横断する「長狭平野」は江戸時代から良質な米の産地として知られ、天皇献上米としての歴史もあります。

また、平成３年２月、全国農協中央会により、「日本の米づくり100選」に選定され、千葉県では「長狭米」と多古町の「多古米」が選ばれています。水稲の品種については、コシヒカリを中心に、ふさおとめ、ひとめぼれ、ふさこがね等も作付けられています。

都市との交流 景観守る ＊川代柿の木代棚田「遺産」認定

鴨川市川代地区の「川代柿の木代棚田」が岡市平塚の「大山千枚田」とともに2月、農林水産省から「つなぐ棚田遺産」に認定された。関東で7カ所で、県内では両棚田のみだった。

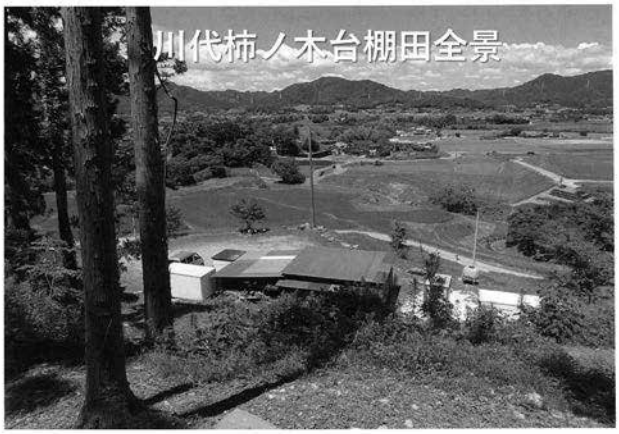
川代地区の山あいに広がる50枚ほどの柿の木代棚田は今の時期、緑のあぜ道に縁取られて鏡のように陽光を反射している。美しい景観が保たれているのは都会の人たちに田植えや稲刈りなどの農業体験を楽しんでもらう棚田オーナー制度のたまもの。都市と農村の交流が高く評価された。

川代地区を含む加茂川沿いの長狭平野は、江戸時代から良質米の産地として知られ、棚田も百時代から続くとされる。嶺岡山系からのミネラル分豊富な水で育てられる「長狭米」はブランド米として有名。

棚田の小山からは、古くから内房と外房を結んできた長狭街道とともに長狭の農村風景を一望できる。今月初めに田植えされた棚田の稲の刈り取りは、9月初旬。オーナーらは新米を楽しみにしている。

「つなぐ棚田遺産」に選定された「柿の木代棚田」（鴨川市で、本社ヘリから）＝守谷遼平撮影

《資料：特別分科会／庄司 裕輔氏》



《資料：特別分科会／庄司 裕輔氏》

《資料：特別分科会／庄司 裕輔氏》

《資料：特別分科会／庄司 裕輔氏》

棚田の米で純米吟醸酒

鴨川の川代地区 亀田酒造で限定630本販売

農林水産省の「つなぐ棚田遺産」の一つ、鴨川市川代地区の「柿ノ木代棚田」のコシヒカリを使った純米吟醸酒「かわしろ」が発売された。地元の「亀田酒造」で醸造、取り扱っている。

同棚田は、地元の川代集落（庄司祐輔代表）が、オーナー制度による都市民との交流をはじめ、田植え前の棚田で泥遊びを楽しむ「どろりんピック」、草刈りをスポーツとして捉えた「草刈サミット」などユニークな取り組みで、地域活性化を図っている。

今回は、同棚田で生産する米の新たな活用で、亀田酒造とタッグを組んだ。

準備したコシヒカリは420㌔。60％まで磨いた252㌔を仕込んだ。仕上がった純米吟醸酒は、やや辛口になっているという。

庄司代表は「初めての酒づくり。集落としても自分たちの米でつくった酒に期待している。これからも棚田を活用した地域活性化の取り組みを継続し、新たな米の活用を考えていきたい」と話している。

かわしろは、720㍉㍑入り（税込み2095円）で、限定630本。購入の問い合わせは、亀田酒造（04－7097－1116）へ。

限定630本の「かわしろ」

《資料：特別分科会／松本 雅夫氏》

棚田地域振興法を活用した棚田保全

第28回全国棚田サミットin 那智勝浦町
特別分科会

2023年11月18日

松本雅夫

棚田地域振興法（令和元年法律第四十二号）について

○ 法律の仕組み

Step 1. 対象とする棚田を決める

⇩

Step 2. 協議会をつくる

⇩

Step 3. 活動計画をつくる

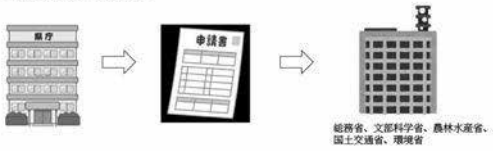
⇩

Step 4. 支援を受けつつ活動を実施

Step 1. 対象とする棚田を決める

○ 要件：旧旧市町村（昭和の大合併前）区域：勾配1/20以上の棚田1ha以上

○ 都道府県が申請→国が指定



○ 都道府県が申請しないとき →棚田保全に関わる人は都道府県に提案できる

Step 2. 協議会をつくる

○ 棚田の保全活動や棚田を活用した地域振興をになう協議会を組織

○ 農業者、住民、NPO法人、地域おこし協力隊員、学生、大学教員、観光協会、棚田オーナー等

○ 都道府県も協議会メンバーになれる → 県棚田基金の活用も視野

○ 協議会は計画をつくることが役割 → 棚田に関わる活動は協議会メンバーが実践

Step 3. 活動計画をつくる

○ 協議会で話し合って活動計画を策定： 市町村が申請 → 国が認定

○ 「棚田等の保全」、「多面的機能の維持・発揮」、「棚田を核とした地域振興」の３つの観点

○ 具体的な目標と目標達成のために実施する活動を定める

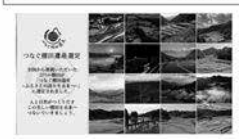
実施する活動：国県の支援制度を活用する場合、具体的に記載
→中山間直接支払：棚田地域振興活動加算
→地域おこし協力隊員の受け入れ 他、関係省庁の支援措置等

Step 4. 支援を受けつつ活動を実施

【国による支援】
○ 中山間地域直接支払［農林水産省］：棚田地域振興活動加算（1万円/10a）
○ 中山間地域（法指定地域）の範囲拡大［農林水産省］：補助率50%→55%
○ 地域おこし協力隊［総務省］：棚田保全活動、棚田米販売促進、都市農村交流
○ 文化的景観保護［文部科学省］：石積修理、古民家修繕、ガイダンス施設、案内板設置
○ 観光地域支援事業［国土交通省］：訪日外国人受入支援、体験ツアー・イベント支援
○ 地方創生推進交付金［総務省］：地域商社設立、商品開発、販路拡大

【県による支援】
○ 棚田基金を活用：棚田カレー開発（山形）、インフルエンサーによる棚田紹介（新潟）、企業研修受け入れ（愛知）、棚田石積ライトアップ（福岡）、「つなぐ棚田」遺産情報の発信（熊本）、ウオーキングイベント実施（大分）

棚田を応援する施策も展開



【つなぐ棚田遺産】
○ 令和4年3月に農林水産省が選定
○ 全国で271の棚田を選定
○ 和歌山県：色川の棚田群を含む８地域

【棚田カード：棚田に恋】
○ 第3弾までに218種類を発行
○ 棚田めぐりマップも作成

棚田地域振興法を活用して棚田保全に取り組む地域

【指定棚田地域】

○ 北海道から鹿児島まで41道府県で723棚田地域が指定済み

○ 那智勝浦町は色川村で指定：令和元年12月で第1回指定のうちの一つ

【指定棚田地域振興活動計画】

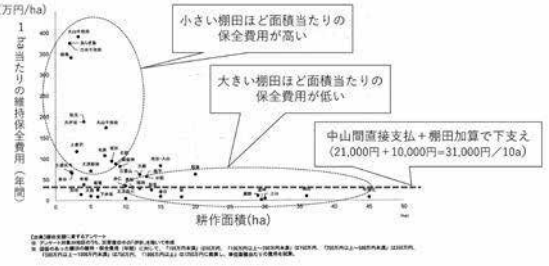
○ 39道府県で191の指定棚田地域振興活動計画が認定：431の指定棚田地域をカバー

○ 那智勝浦町は色川棚田地域振興活動計画が認定：令和2年8月
（口色川、大野、田垣内、小坂、南平野、熊瀬川）

《資料：特別分科会／松本 雅夫氏》

課題：棚田地域振興の財源

・高齢化による担い手不足はもとより、棚田保全費用の財源が課題
・小規模棚田ほど保全費用が高く広域化も有効
・棚田米販売、オーナー制度、その他でお金の流れを作り出すことが必要



課題：棚田地域振興法の恩恵を受けていない

【事例】
・豪雨災害を契機に災害ボランティア活動を経てNPO法人化（事務局長は移住者）
・地元農家と共に棚田の保全、生産、棚田米の販売活動を実践
×「指定棚田地域」の指定を受けていない（つなぐ棚田遺産にも推薦されていない）

※ 棚田法では、棚田地域振興活動に従事する者は、
・都道府県に対して、指定棚田地域の指定を申請するよう提案できる
・都道府県は提案者に対して、どのように対応するか通知する必要
→ 地域の提案を無視できないボトムナップの仕組み

○ 棚田保全を担う人たちと地元から信頼される県・市町村職員の存在が不可欠

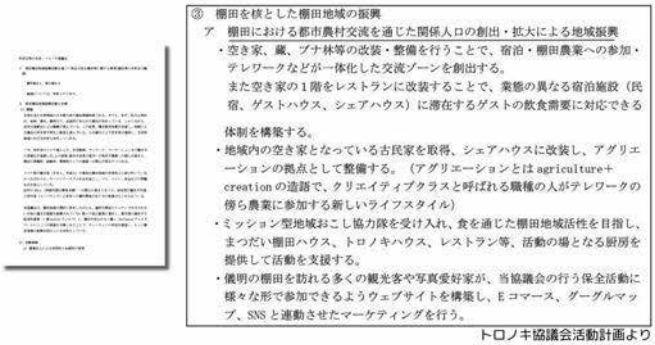
○ 棚田地域振興法は令和7年3月31日までの時限立法
棚田法をどうするか、今後議論が進む

十日町市地域おこし協力隊員　星裕方氏による報告

○ 新潟県十日町市指定棚田地域
中深見村、山平村、下条村、吉田村、松代村、松之山村、浦田村、奴奈川村、中條村、貝野村、水沢村

○ 指定棚田地域振興活動計画における位置づけ
・棚田における都市農村交流を通じた関係人口の創出・拡大による地域振興

《資料：特別分科会／星 裕方氏》



③　棚田を核とした棚田地域の振興

ア　棚田における都市農村交流を通じた関係人口の創出・拡大による地域振興

・空き家、蔵、ブナ林等の改装・整備を行うことで、宿泊・棚田農業への参加・テレワークなどが一体化した交流ゾーンを創出する。
また空き家の１階をレストランに改装することで、業態の異なる宿泊施設（民宿、ゲストハウス、シェアハウス）に滞在するゲストの飲食需要に対応できる体制を構築する。

・地域内の空き家となっている古民家を取得、シェアハウスに改装し、アグリエーションの拠点として整備する。（アグリエーションとは agriculture＋creation の造語で、クリエイティブクラスと呼ばれる職種の人がテレワークの傍ら農業に参加する新しいライフスタイル）

・ミッション型地域おこし協力隊を受け入れ、食を通じた棚田地域活性を目指し、まつだい棚田ハウス、トロノキハウス、レストラン等、活動の場となる厨房を提供して活動を支援する。

・儀明の棚田を訪れる多くの観光客や写真愛好家が、当協議会の行う保全活動に様々な形で参加できるようウェブサイトを構築し、Ｅコマース、グーグルマップ、SNS と連動させたマーケティングを行う。

トロノキ協議会活動計画より

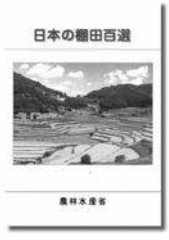
この20年で、
棚田がシビックプライドになった

一市町村として最多

14／271

十日町市HP「選定棚田位置図」
https://www.city.tokamachi.lg.jp/material/files/group/16/ichizu.pdf

越後松代棚田群 棚田マップ
https://www.tokamachishikankou.jp/wp/wp-content/uploads/2022/04/matsudai_tanadamap.2023.pdf



新潟	上船倉の棚田	安塚町
	狐塚の棚田	松之山町
	蓮野の棚田	大島村
	花坂の棚田	高柳町
	梨ノ木田の棚田	高柳町
	大開の棚田	高柳町
	北五百川の棚田	下田村

134地区のうち十日町市は「０」

農林水産省「日本の棚田百選」（平成11年）

それでも、「継がせたくない」

《資料：特別分科会／星 裕方氏》

15年前・・・

私達は米作りに誇りを持っている。
でも、自分の子らには、継がせたくない。
棚田の米作りは、手間がかかる分、儲からない。
正直言って、年金頼み。
自分も体力の限界を感じている。そろそろやめたい。

1.「農業生産+α」の安定的な収益源の創出

2.一定スキルを有する助っ人耕作人の育成

3.半農半X的暮らしをする二拠点生活者の輩出

令和元年法律第四十二号
棚田地域振興法

第三条　棚田地域の振興は、棚田地域の有する**農産物の供給、国土の保全、水源の涵かん養、生物の多様性の確保その他の自然環境の保全、良好な景観の形成、伝統文化の継承等**の多面にわたる機能が維持され、国民が将来にわたってその恵沢を享受することができるよう、棚田等の保全を図るとともに、棚田地域における定住等（棚田地域における定住及び他の地域の住民がその住所のほか棚田地域に居所を有することをいう。）並びに国内及び国外の地域との交流を促進することを旨として、行われなければならない。

e-gov法令検索より
https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=501AC1000000042_20221001_504AC0000000053

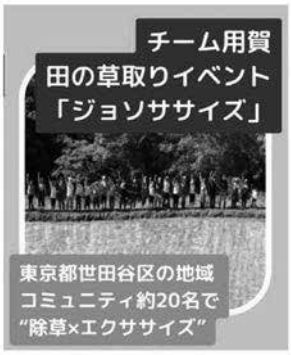
例えば・・・

「法人や企業」が棚田で研修することによる価値
（チームビルディング、従業員エンゲージメント向上、採用マッチング率向上etc...）

「都市コミュニティ」が棚田と継続的に関わることでの価値
（ウェルビーイング向上、食育、エクササイズetc...）

「棚田のポテンシャルには、
人生を賭ける価値がある」

《資料：特別分科会／星 裕方氏》



【分科会振り返り】

第1分科会 関係人口の承継

コーディネーター 八島 雄士 氏 和歌山大学観光学部教授

それでは第1分科会の報告をさせていただきます。テーマは関係人口の承継という形で設定させていただきました。思いとしては目に見える部分だけではなくて、目に見えない精神とか技術。そういったところも受け継いでいくというようなところで、このテーマを設定させていただきました。分科会では5名の方に登壇いただきました。

まず第1に背景などを和歌山大学観光学部の大浦先生から整理していただきました。そこでは前回の全国棚田サミット有田川町の後の和歌山の棚田段々畑サミットなどから受け継いでいたことなども御紹介いただきまして、この今回の棚田サミットの一番大元にもなっているかと思うんですけれども、2019年の棚田振興法の意義、その中に棚田は国民共有の財産であり、宝であると、またその棚田が存在する地域の振興をしていく、こういったことが国の責務であるというところが定められておると、さらに関係人口についても記述されているというところを整理いただきました。特に大浦先生からは、関係人口に関わる主体の質に変容が見られるのではないかといった点、事例紹介にあった、外山さんからもありましたけれども、農の暮らしとしての自給という部分についての再評価も必要になっているのではないかといったところを整理いただきました。

第2に小阪の地区の方から松木さん、実際に作業されている方で千葉さんはIターンで移住されて地域おこし協力隊から移住されている方ですけれども、その中でまず松木さんから棚田を管理されてきた経緯、水の管理、そういった中心となる作業の負担がかなり大きいこと。これはあの外山さんからの事例紹介でもあったかと思います。さらに3名で作業を主体的にされているっていうところ、人手がとにかく足りないといったところを共有いただきました。あと千葉さんからは、ご自身のその地域おこし協力隊から移住された経験を踏まえまして、事務局の業務が結構重要だということを気づいておられるんですけれども、その負担というのが目に見えにくいという特徴などを御指摘いただきました。

第3に紀美野町役場で棚田の業務もされている中西さんから自身の業務である中で、紀美野町の小川地区の棚田の協議会などの取り組みを御紹介いただきました。また中西さんは和歌山大学観光学研究科の博士後期課程の大学院生でもあるので、大浦先生と共同して実施した調査から保全作業に関する調査、あとは耕作する人を増やすような先進的な取り組みの事例を紹介いただきました。

最後に藤本君といって、和歌山大学観光学部をこの3月に卒業した私のゼミ生なんですけれども、彼から色川で大学1年生から関わってきた取り組みなどを紹介いただきました。彼は社会人としてもまだ継続して色川に関わっていると。その動機としては何かというところも紹介いただいて、一つはリフレッシュできることで、また自分なりの関わりができること。この辺は関係人口として大事なことかなと思うんですけれども、更にいつでも受け入れてもらえるような安心感があるとこの点は関係人口の話をする際に、やっぱり受け入れる側のこう状況というのもかなり重要だということが分かったということが言えるかと思います。

以上のことからですね。分科会としましては2つの知見が得られたと考えております。1つ目は今までの価値観では我々の生活というのも生き残れない。ましてや、棚田の生活っていう棚田がある生活というのもなかなか維持していけないと、そういう現状をまずは共有し、これからどうするかというようなことを話し合っていくという場が大事だろうと。その際に千葉さんがおっしゃった事務局の業務というのがかなり重要なんですけれども、これは基調講演の有田さんからも指摘されたところで、事務局業務を有償化するみたいな取り組みとして改善していって、加えて関係人口の階段について大浦先生から共有いただいたんですけれども、そういった関わり合いを整理していくということができると、更にいいのではないかと。まあ、ここから先は私のアイデアですけれども、やっぱり関わり合いのところを世代別とかライフスタイル別とか、そういったセグメントみたいな形で少し整理していくととてもいいんじゃないかなという風に思っております。

2つ目に最後になりますけれども、そもそものところで耕作を続けていけないという現状がありますので、そこをしっかり分析をして、かつ耕作者を増やすようなプログラムをこれから考えていく必要があるのではないかと、そういった意味で中西さんからの発表で先進事例もあるということですので、今回参加していただいた棚田の地区の方達ともこれから協力してそういったプログラムなども開発していけたらいいのではないかということで終了しました。

以上第1分科会からの報告です。

【分科会振り返り】

第❷分科会 集落空間の継承

コーディネーター 佐久間 康富 氏 和歌山大学システム工学部准教授

第２分科会ご報告させていただきます。第２分科会集落空間の継承というタイトルにしました。

棚田を支える担い手の課題、今、第１分科会からもありました。担い手あるいはその集団としての地域をどう継承していくのかっていった時に関係人口も一つの切り口にはなるんですけれども、やはり自らのために耕す人といいますか、きちんと暮らしを立てる担い手をどう受け入れて、その人たちと一緒にどう地域を継承していくのかっていうことが大切なんじゃないかというふうに思いまして、移住定住っていうことと移住定住のための最初のハードルになるだろう住まいの確保。別の言い方をしますと空き家の活用という２つをテーマにさせていただきました。色川は皆さんもご存じかもしれませんけれども、５０年ほど前から移住定住を受け入れてこられた実績がありまして、今では６割に迫る６割弱の方が移住者で構成されている集落です。色川の皆さんはそういうことで、移住定住の受け入れの実績があるということと、空き家の利活用ということで、地域独自の取り組みをされてきています。取り組みをまずは学んでこれからの議論ということに進めてまいりました。まず、色川地域振興推進委員会事務局を務めておられる大西さんから移住定住受け入れの概要をお話しいただきました。一言で言うと仲間探しと思って移住定住の受け入れをしているっていうところがキーワードだったかと思います。その後役員の原さん、それから今日この後、ご登壇いただく浦さん、それから大久保さんと役員の方々にこれまでの経緯について御紹介いただきました。移住受け入れの今から５０年ほど前に日本の農山村まだまだ元気でしたので、都会の若者が訪れても門前払いといいますか、お前らに貸す住む家も農地もないというような状況だったそうです。

その後受け入れていただいて、少しずつ話が広がっていくんですけども、やはり地域の方には受け入れ反対の御意見があったようです。その反対の方のご意見としては色川が色川でなくなってしまう。その色川らしさの危機感みたいなものがあったということで、御紹介がありました。まあ、そういう危機感を受けて、移住者が移住者を呼ぶ形も一つなんですけども、きちんとして地域の受け入れをするということで、ご登壇いただいた皆さんが所属されている色川地域振興推進委員会という組織を作り、あの有田さんのことでいけば、ＲＭＯの前身になるような組織を作り、地域としての受け入れを行ってきたっていうことでご紹介がありました。

受け入れの実際としては１５軒訪問というのが一つ。色川の皆さんのたどり着いたやり方の一つなんですが、移住希望者が見えられた時に１５軒、とにかく回ってもらう。４泊５日で一回でもいいですし、１泊２日を３回４回に分けてもいいんですけれども、１５軒回ってもらうっていうことをなさっている。その段階で必要な区長さんですとか、子育ての方だったら子育ての方で暮らしのイメージをしてもらって、地域のイメージを持ってきちんと選んでもらう。地域の方もこんな人が来るんだっていうことをお迎えする準備をするというようなマッチングの機会になっているっていうことで、御紹介があったことと、その１５軒訪問は物件探しではなくて、あくまでも地域を知ってもらう機会であるっていうことの御紹介がありました。

２つ目のトピックは空き家に関してです。同じくあの委員会の役員である大東さん新宅さんにお話しいただきました。お二人は定住世話人ということで出て行かれた空き家の所有者の方と地域を絶えず、連絡を取りながら活用の意向ですとか、確認しながら、いざ移住希望者が来られた時にきちんとお住まいの提供ができるように、そういう役を担ってくださっている方々なんですけども、大野区では物件台帳を作ってアンケートをしたり、絶えず意向を把握して常時２、３軒移住希望者に貸せるストックを持っておくことが大事ですっていうことのご紹介がありました。口色川地区の方では、最近ではもう殆ど処分、売りたいんだけど、どうしたらいいんやろかみたいな感じで電話の相談があって、賃貸をしたり、いろんなプロセスはあったんですけども、もう最近では定住世話人の方が私財をなげうってというか、購入をされて、その購入された空き家を移住希望者の方に貸しているという取り組みをされているそうです。もう今ではそれが２０軒ぐらいになって、どうしてそういう思いなのかっていうことを伺ったんですけども、やっぱり新規で入ってこられる方の田舎を守りたいっていう思いを、その地元の方としての定住世話人の方も受け止めて、自分としてできることふるさとを守りたいという言葉もありましたが、そういう思いでやられているということでした。

議論に入りまして、岸上先生から２つのポイントを挙げてくださいまして、論点を分けてくださいました。一つは担い手として期待される交流人口、関係人口というのは担い手として期待されるとこですけども、持続可能と言えるんだろうかっていう問いとも一緒に定住につなげるポイントは何ですかっていうことと、もう一つは移住者が過半数を超えている色川で色川らしさってどう考えていったら、どうやって地域の新しい移住希望者に色川らしさを伝えるのか、それをどう継承していくのかっていうことでの投げかけがありました。それぞれお答えはあったんですけども、私としては一つの答えとして理解したんですが、色川らしさ色川って何だろうっていう色川らしさをきちんと問うあるいは考えるんで、地域の古老にお話を聞くあるいはそれをきちんと見る、そういうことを通じて大切なことをきちんと受け止めて、地域で大切にしてきたことを移住希望者の方に色んな機会で伝える。それに共感してくださった方を、新しい仲間として迎え入れるっていうことでマッチングの齟齬がないような定住のポイントであり、色川らしさ地域らしさの継承につながっていくんではないかっていうところが見えてきた結論だったのかなというふうに思います。

地域らしさを問うこと自体が私の所感ですけども、それ自体が何か色川らしさに繋がっていくような、その地域のこれまでの大切なものを大事にしながら、新しい地域づくり、新しい地域のイメージの舞台作りがこう始まっているような色川の現場っていうのをご紹介いただいて、みんなで共有して集落空間が継承されていくポイントイメージっていうのが確認できたのかなというふうに思います。

以上でございます。ありがとうございました。

【分科会振り返り】

第❸分科会 災害教訓の承継と継承

コーディネーター 此松 昌彦 氏 和歌山大学教育学部教授

私どもの第３分科会では、災害教訓の承継と継承というタイトルで行ないました。承継ということで、ちょっと精神的なものというか、棚田の意味合いだとか、また、継承として災害、まさに具体的な災害教訓とはどういうことなのかということについて考える分科会になりました。その中で、最初に御存じのように地球の温暖化ということで、今豪雨災害が非常に増えているという中で近年、やっぱり棚田にも色々と影響が出て災害が発生しているということであります。そういうところで言わば備えが必要なのかということであります。最初に、いわゆる継承というところのお話で継承というのは言ってみれば先代の所有していた形のあるもの、また、具体的なものを受け継ぐということの意味合いが強いわけで、そういうとこで２０１１年の９月に発生しました、紀伊半島大水害での色川の棚田の経験を語っていただきました。

棚田を守ろう会の峯さん、田垣内地域地区の区長、鳥羽山さんに体験談を語っていただきました。口色川、南平野地区では土石流というのが発生しまして、そこでは停電したりだとか、また道路、特に県道など水平に通っている道路が土石流によって寸断を受けて、なかなか横方向に通ることができないとかいうことがあって、それで孤立する場所もあったそうです。そういうことで実は河川下流に向かって太田川というのが流れているんですが、その河川沿いに、道を復旧させて、いわゆる市街地とか海の方に行けるように復旧させた方が早かったという話もありました。分断とかいうところで、今現在どういう備えをしているかというところ、例えば発電機だとか色んな地域の地区としては孤立しても、わりと自分達で備えられると言うかな、そういうことが結構進んでいるという話をされておりました。

その一番大変な時かな、９月４日の未明には、時間雨量は５０ミリを記録するような時に土石流が発生したということですよね、そういうことも経験を話されていました。また、その紀伊半島大水害ということで、土砂災害啓発センターの稲田さんによって、紀伊半島大水害というのは、具体的にどういうことで発生したのかということで概要の説明をしていただいて、特に那智谷を中心に、その支流で多くの土砂災害が発生してしまっているということなんですね。土砂だとか流木なんかで閉塞して、河川氾濫にも繋がっていたということですね。そういうことの話もありました。場所によって砂防堰堤なんかで大量の土砂を止めることができたという話もされていました。

一つの観点で、いわゆる承継というのがあるんですが、そこではいわゆる先代が守ってきた形のないものの抽象的なもの。また、精神的なものを受け継ぐということなんですが、そういうところでは防災、要するに棚田の防災機能がどうあるのか、防災機能があるのかというところでの観点で、和歌山大学の中島先生にお話をいただきました。その棚田の地形ですよね。防災機能が結論から言うとあるんじゃないかということで、どのように調査したのかっていうと、この紀伊半島大水害の調査で、土石流がどこで止まっているかというところの観点で調査されたということなんですね。こちらの那智谷周辺でですね。たくさんそういう調査されていたんですが、それがやっぱり場所によって違うということが分かった。それが棚田の上の方がどうも棚田の上で止まっていることが多かった。やっぱり棚田がないところでは、かなり下流まで流れてしまっているのがあるとで、それはある種、棚田っていうのが現代のいわゆるテラス工法と非常に似たことがあるんじゃないかということですね。流下速度を下げていったのではないかという非常に興味深い話をしていただきました。それをまたいわゆる模型実験を使ってですね、その棚田に水を実際流してみて、棚田の方がいわゆる土砂土石流的なものも前止まり易いようにとか、またちゃんと棚田の構造がある方が特にね、土がちゃんとしっかりして要するに水田をちゃんとやっていると水が下に浸透しなくなって、それで土砂の崩壊をしなくなるって言うか、しにくくするという話もありました。

そういうことによって、棚田っていうのはとても大事な、実は防災機能も備えているようだと。ただそういうのを意図的に作ったかどうかっていうのは文献上ないので分からないけどもそういうのは経験的には見ているのではないかという話でありました。色々と災害というのは、いつでも発生するんですが、最後にそれだけ災害のイメージはできるのか。棚田周辺でどういう災害が発生してどのようなことが起きるのかというのをイメージ、どれだけ取れるかということで、私達はその棚田などの災害に備えることができるのではないかということで、話としては終わってですね。ちゃんと自分達の住んでいる場所なりが、きちんと認識をしてそこでどういうリスクはあるのかと、みんなで考えていければということで、この会は終わりました。ありがとうございました。

【分科会振り返り】

特別分科会 地域振興下の棚田保全

コーディネーター 中島 峰広 氏 早稲田大学名誉教授・棚田ネットワーク名誉代表

それでは、第４とはいえ、特別分科会という名称ですけれど、毎年棚田守り人ミーティングや棚田の守りミーティングというそういう名前で実施しております。今年はまず３人のスピーカーに話題を提供していただきました。

まず、松本さんというのは、今から４期前の農水省本庁の地域振興課長、この松本さんが課長時代には地域振興法の実験があるわけですので、それは実際の実務を担ったのは彼だったということで一番よく知っているだろうというようなこともありまして、話題提供をしていただきました。彼からは地域振興法の現状というか、どこまでいっているかというような話がありました。皆さん、ご存じの方に、いわゆる直接支払い２万１０００円プラス１万円の加算措置が、この振興法の参加費として加えられるというこれが実際の施策でございますが、現在７２３地域でその振興法の下で棚田の保全が図られているという話でした。

もう一つの話題はですね。棚田基金という今、河野大臣が各県に積んでいる基金を使えと、無くしちゃえと言う話をされていますけれど、各県にはそうですね、今から２０数年前に棚田基金を積んだんです。各県はそれぞれ数億の棚田基金を抱え込んでいると思います。皆さん方保存会の方が例えば県に伺って基金があるだろう、出してくれと言われても、どういうわけかとぼけちゃっていやないとか、そのごまかしちゃうが、それで出されないんです。だからこれをもちろん、今、現状を把握している国が何とか出せということで督促をしておりますので。実は裏話をいたしますと去年開催しました高島市、あの棚田サミット開催地検討委員会ですから、毎年全国を回って市町村に棚田サミットやりませんかっていう呼びかけ人なんです。最初に高島市に行ったときは本当にもうけんもほろろというか、先生、うちなんかできませんと、あっさり言われました。ところが、帰り際に私が職員に、県が棚田基金というのを積んでいるはずですから、その金を引き出せばサミットのお金なんていうのはすぐに出来上がると思いますから一つやってみてくださいと書いてあるので、１カ月後に高島市から先生からのお話ですから、私のところで引き受けることにいたしましたと返事が来ました。これはきっと棚田基金の滋賀県からの引き出しが成功したからだろうと思いますから、これからサミットでもやろうとか、あるいは保存会で何かイベントをやろうとかというお考えのところは、ぜひ県に当たってください。あの和歌山県はこれ非常に上手に使っております。今回もサミットありましたし、サミットとしては２回目ですけど、実は和歌山県は第１回のサミットの後に県内版のサミットをやったんです。５回、県内版のサミットを実施しているんです。だからこれらの資金は全部そこから出ていると思いますんで、皆さん方もお帰りになったら、うちの県にそれ聞いてみようというようなことで、それから引き出して保存会の活動資金として画策されればよろしいかと思います。

２番目は星君という新潟県十日町市の地域おこし協力隊に入った人です。最初はどういう経緯で入ったのか、大学を出て何年かどこか一般企業にいたようですけど、今年から地域おこし協力隊に入って頑張っているようですけど、自分としては今その棚田が置かれている現状というのを踏まえましてですね、何とか企業とか実際に農業関係だけじゃなくて、企業の連中を引き入れて、何とか棚田に結びつけていきたいと考えているというような決意表明がありました。

それから３番目は千葉県鴨川市の川代棚田というのは、千葉県鴨川市といいますと大山千枚田というのは有名ですけれど、私はここが保存会としてはトップランナーだと考えております。トップランナーと考えているのはですね。この理事長と専務理事、こういう３０万円近く月給をちゃんと払って保存会できちっと給料を２５万から３０万の給与を払っているというところは全国でそうありません。私が知っている限り、この大山千枚田と、それが新潟県の十日町のいわゆるそこで活動しているうち１団体、それからもう一つはですよ、福岡県の八女市でやっている団体の３カ所だけでしてね、あの大山千枚田方は、保存活動は企業化しなければいけないというのが持論なんですが、まあ、そういう企業化していかないと皆さん方の志だけでは、なかなか棚田の保存というのは難しいと思いまして、これからますますそういう状況になると思いますから、一つそういうことも視野に入れて棚田保存活動というのを展開されればよろしいかと思います。

それから、最後に庄司さんというのは、同じ鴨川市にもう一つほど活動が盛んなところがあって、海岸に寄ったところですが、川代地区っていうここが特筆されるのは３０名近くの地域の兼業農家なんですけどね。鴨川市ですから、この人たちが出てきて、保存活動に関わっていると、地域住民が３０名近くで現役の兼業農家の人たちが実際に保存活動に関わっているという、私は珍しいんじゃないかと思いますけれど、そこで地域を盛り上げているというような話でございました。

これはまあ事例報告として、そういう３つの事例の紹介がありまして、その後大体２０数団体が参加していたと思いました。周り見たそれで自由討議ということで入っていたんですが、全部紹介することができませんから、例えば最初にあれは新城市四谷千枚田というところがあるんですが、これ百選になったところです。彼が最初に言ったのは地域振興法というのは５年間の時限立法をやった後、この後どうなるのかいうような話がありまして、農水省の地域振興課の課長と課長補佐も出ておりましたんで、どうなるんだというような話になりました。松本前課長がいや、それは大丈夫だろうと思った。大体中山間地直接支払いだって５年の時限立法でスタートして、今は第５次ですかね、そこまで来ているわけですから、多分振興法も１次2次とつながっていくだろうから、あれはまあ大丈夫じゃなかろうかというような、希望的観測の意見がございまして、私も大丈夫だろうと思います。あまり、それは心配しなくていいんじゃないかと。

それからそういう報告としてはですね。静岡県の松崎町というところは、これ石部棚田というんですが、その石部の棚田での取り組みとしてですね、あれは富士市にあるのかな常葉大学という大学があるんです。ところが、学生さんは３０から４０かな。毎年あぜぬり田植え稲刈りこの作業にやってくるわけです。あぜぬりっていうのは皆さん方は町は毎年ご苦労なさっているからよくわかっているとは思いますが、なかなか大変な事業で棚田の仕事の最初の仕事とは思いますが、そのあぜぬりをやってくれるんです。学生さん３０から４０人が行きましてですね、ここは１００人近くのオーナーを引き受けておると思いますが、そしたらオーナー田を全部整備してくれると地元としては助かっているわけですけど、皆さん方は地元にもそういう近場にそういう大学があるとは思いますけど、そういうことをやっているとこがあるよあんたとこもやってくれないかというような話をされればい

いかと思います。

それから今、私が把握しているだけで、全国棚田オーナー制は１００箇所近くやっている。私は毎年その１００箇所に電話を入れまして、今年は何組でしたかという統計をずっととっております。その第１号、つまり棚田サミットで棚田オーナー制が最初に始められたのは、第１回の棚田サミットが開かれた、高知県椿原町の神在居の棚田です。スタート時点は華々しく、あの１０数の方から関西地区からオーナーを引き受けて、西日本というのは離れ家、つまり若夫婦ができると年寄りそういう離れ家があるわけ、そこを改造して宿泊施設にして大阪からオーナーを呼ぶというようなことで始めたんです。ところが、年数を数えるに従ってだんだん来なくなって近在の人たちが来る。そのうちに、地元のいわゆる受け入れ農家と言いますが、これが一人減り、二人減りで結局残ったのは第１号の棚田オーナーだった田村さんという方が残って、結局は保存会の会長になって、今は彼と役場のＯＢとあと一人ぐらい３人ぐらいで細々とやっているという中で、でも私は棚田オーナー第１号ですから、とにかく私が元気な限り頑張りますというような話をされておりました。

１０数カ所からの発言がありましたけど、ここで紹介するのは時間がありませんので、省略させていただきますけど、そういった話し合いをいたしました。できれば来年もこの守り人ミーティングは引き続いて開催していきたいと思っておりますので、どうぞ来年度はこれに参加されなかった方、どうぞおいでいただきたいと思っております。

以上、特別分科会の報告とさせていただきます。失礼しました。

和歌山県PRキャラクター「きいちゃん」

【次期開催地挨拶】

長野県上田市
副市長

小相澤　隆幸 様

改めてご挨拶をさせていただきます。来年度開催をいたします、長野県の上田市からやってまいりました、私は副市長の小相澤隆幸と申します。そして今日は本当に力強い将来の未来の担い手まで一緒に来ていただいておりまして、日頃棚田を本当に献身的に支えていただいている仲間の皆さんと共にやってまいりました。まず、今回の第２８回の開催をしていただきました那智勝浦町、そして地域の皆さん、和歌山県の皆さんに本当に感謝を申し上げます。ありがとうございました。ここまで来るには本当に準備の段階から細かな打ち合わせをしていただいて、本当に天気も良かったですし、おもてなしもバッチリで本当にありがとうございました。来年はということで、少し長野県の上田市御存じない方もたくさんおいでになるかと思いますので、少しご紹介をさせていただいてＰＲをさせていただければと思います。長野県の上田市と和歌山県は実はちょっとご縁がありまして、那智勝浦といいますか、和歌山県の実は九度山町っていうのが和歌山県の中にありまして、これ今のＮＨＫの大河ドラマで「どうする家康」やっていまして、つい先日先週ですかあっという間に関ヶ原の戦いが終わってしまいましたが、そこであの真田昌幸、幸村親子ですね、負けてしまいまして、蟄居された場所が和歌山県で九度山に１４年間お世話になりました。以来、上田市の真田町という真田発祥の地と言われておりますところと４２年間の姉妹都市の提携をさせていただいております。先週、九度山のお祭りも行ってまいりました。それから５０年ぐらい前になりますでしょうか。夏の甲子園大会で箕島高校の尾藤監督がいた頃に丸子実業高校と箕島高校が甲子園の１回戦でやっておりまして、そして９対４か９対５で丸子実業が勝ったんですが、その丸子実業のあるところが上田市です。さらに１０数年前に夏の春の選抜高校野球で智弁和歌山と丸子実業高等学校の名前が変わって丸子修学館高校という名前になったんですが、そこと選抜高校で智弁和歌山と当たりまして、智弁強いですから、一時期は満塁ホームランで逆転したんですけれども、負けてしまいましたが、丸子修学館があるのが上田市でございます。

そして上田市は海がありません。東京から、そして今、北陸新幹線が敦賀の方まで延伸しますけれども、大体、東京から金沢から１時間半ぐらいのところで新幹線が止まる真ん中になります。軽井沢は東京から来ると、軽井沢は佐久平上田長野のという順番になりまして、新幹線が通っております。

それから高速道路も走っておりまして、実はこの棚田は高速道路のインターがすぐ近くにあり、日本の棚田百選にも認定されまして、もう２０数年たつんですけれども、その当時の苦労を私も職員の時代から見ておりましたが、担当係長課長もやっておりましたし、今活用できているものは担当者として毎日、耕運機を持って夜暗くなるまでやっていたというような時期がありましたが、その後、本当に地域の皆さん、それから今は地域おこし協力隊員の皆さん、地域を棚田以外の方々から応援団を募りまして、ようやく今ここまで本当に大変な日々を乗り越えてやってまいりました。そして令和４年度の農林水産省の農林まつり村づくり部門で天皇杯を頂戴いたしまして、今非常にいい波に乗っているかなと。来年ぜひ来ていただければわかっていただけるかと思いますけども、いろんな皆さんとパートナーシップ協定を結んだり、いろんな皆さんに来ていただいて応援をしていただいております。

どうか来年の１０月の１７日、１８日、秋であります。その時期には信州はリンゴですね。リンゴそれからマツタケが天の恵みなもんですから、必ず入る出てくるとは言い切れませんけれども、ちょうど紅葉が始まる頃であります。リンゴそれからブドウもありますので、お越しいただきたいと思います。それから、ワイン用ブドウの産地としても、日本の中でも有数な地域になっておりましてメルシャンですとか、大手のワイナリーもございますし、日本酒の蔵元は６蔵ございますので、そういったお酒ですとか、海がない分、保存食文化発酵食文化もお楽しみいただけるのではないかというふうに思っています。

本当に皆さんが来られることを、今から準備をして心待ちにしておりますので、どうぞ来年、信州上田長野県の上田市にお越しいただきたいと思います。長野県の県の皆様方と、長野県中で、そして長野県にはたくさんの棚田がございます、隣には田毎の月の千曲市もございますし、小谷村さん、数年前にやりましたけれども、飯田市もございます。いろんな皆さんと力を合わせながら持続可能な農業農村を一緒につくっていきたいという思いでおりますので、ぜひ来年皆さん上田市にお越しください。心からお待ちをしております。本当にありがとうございました。よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

【お礼の挨拶】

全国棚田(千枚田)サミット
那智勝浦町実行委員会　会長
那智勝浦町長

堀　順一郎 様

皆様改めまして、こんにちは。当サミットの実行委員会長であります、那智勝浦町長の堀でございます。閉会に当たりまして一言御挨拶を申し上げたいと思います。

昨日から始まりました、サミット全てのプログラムを無事終了することができました。本当にありがとうございます。関係者の皆さん方にまずは御礼を申し上げたいのと、そして北は青森県、南は鹿児島県までの本当に多くの参加者の皆さん方の御協力、御尽力の賜物でございます。重ねて御礼を申し上げたいと思います。そして夕べは、棚田サミットにお越しいただいた方々を歓迎するために花火大会を開催しましたが、ちょっと強風で、打ち上げが危ぶまれましたが、やはり参加者の皆様方の日ごろの精進のおかげで無事打ち上げることができました。本当にありがとうございます。

今回、２８回を迎えますサミットでございますが、「棚田を囲む暮らしを共に」ということで、特に色川地域の方々の意見発表とかをご紹介をいたしました。先程各4つの分科会からでさまざまな意見、発表であったり、意見交換のご報告がございました。

そして、今回の２８回目の棚田サミットの共同宣言ということで、皆様方の御承認をいただき、力強い宣言を行っていただきました。サミットは開催するのが目的ではございません。サミットは全国にある７２３以上の棚田をお持ちの個人、団体、あるいは自治体それぞれの皆さん方が年に一回一堂に会して、やはりそれぞれの課題を持ち寄ったり、あるいは先進事例を持ち寄ってさまざまな意見交換をしながら、そこで次の棚田を保存する継承する、そういった運動に各地域で活かすためのサミットがその役割だと私は考えております。そういう意味では、来年２０２４年１０月の１７日１８日、木曜日金曜日、長野県の上田市さんで開催をする予定でございます。先ほど大変美味しそうなお話がございましたので、私はぜひ開催地に出向いて御挨拶をさせていきたいと思います。準備等上田市さんは大変だと思いますけれども、どうか準備の方をよろしくお願い申し上げます。本日ご参会の皆様方も、引き続き来年は長野県の上田市に出向いていただいて、さまざまな意見交換をし、交流も深めていただければというふうに思います。結びに改めて全国各地からお越しをいただいた参加者の皆様方に御礼を申し上げますとともに、本日のサミットの成功にご尽力を賜りました、関係者の方々に御礼を申し上げまして、御礼と閉会のご挨拶をさせていただきました。本日は誠にありがとうございました。

和歌山県PRキャラクター「きいちゃん」

第28回
全国棚田（千枚田）サミットin那智勝浦町

和歌山県PRキャラクター「きいちゃん」

第28回 全国棚田（千枚田）サミット in 那智勝浦町

第28回全国棚田（千枚田）サミット
那智勝浦町実行委員会（那智勝浦町役場農林水産課内）

〒649-5392 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町大字築地7丁目1番地1
TEL.0735-29-4455　FAX.0735-29-7146
E-mail:norin@town.nachikatsuura.lg.jp

和歌山県那智勝浦町役場 公式ホームページ　https://www.town.nachikatsuura.wakayama.jp